徳川埋蔵金の謎

ゆー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
徳川埋蔵金の謎

【Ｎコード】
Ｎ５９７５Ｘ

【作者名】
ゆー

【あらすじ】
子供の頃から霊の見える慎吾は、箱根大学の１年生。そこで出会った、赤い眼鏡の先輩・リナ。ひょんな事から２人は、ＴＶ局での盗難事件を解決。しかし慎吾は、国内最高の霊能力者と言われる江浜に誘拐されてしまった。徳川埋蔵金をめぐって、番組プロデューサーである糸見や、謎の人物が・・・慎吾やリナを狙う。慎吾の霊能力、そしてリナの天才的な数字の感覚で・・・２人は徳川埋蔵金の謎に挑む！

第０話　始まり（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

第０話　始まり

第０話　始まり

１９９２年６月・・・

「糸見さん！　第一子である息子さんのご生誕！　おめでとうございます！」

ＴＶＳのとある一室。ＴＶリポーターや芸能リポーター、新聞記者、ＴＶカメラマン・・・２０数名の報道陣が一人の男を囲んでいる。

糸見「あぁ、ありがとうございます！」

報道陣の中心・・・晴れやかな笑顔でインタビューに応じる男。１９９０年代の日本を代表するコピーライター、そして作家でもある糸見だ。

ＴＶカメラがアップで糸見の顔を捉える。

糸見「おかげさまで昨日の夜。息子を授かりました。
　ついに僕もパパとなりました！　ありがとうございます！」

短髪で端正な顔立ちの糸見。特徴である細目はたれ目になり、終始口元のゴムが緩んだがごとくニヤニヤとしている。

「結婚からちょうど１年。
　産まれたばかりの息子さんのご様子をお聞かせください！」

一人の芸能リポーターが糸見氏のそのニヤけた口元にマイクを近づ

けた。

糸見「えぇっと・・・。そうですね。
妻の陣痛から出産までわずか2時間という超安産でした。
息子は・・・そうですねぇ、口元は妻に似てかわいらしいんですけど。
まぁ、正直顔は・・・猿でした」

報道陣がどっと笑う。

「出産時の息子さんの体重はいくつでしたか?」

今度は別のベテラン女性リポーターが糸見氏にマイクを向けた。

糸見「４２６０gです」

報道陣から「おーっ」という深い歓声が沸き起こる。

「これはもう、産まれた時から元気なお子さんという感じですね」

糸見「えぇ。僕と違って、大物になりそうな予感がしますね～」

その言葉に報道陣はまたしてもどっと笑った。

「息子さんのお名前はもうお決まりになりました?」

3人目のリポーターが糸見氏にマイクを向けた。

糸見「えぇ。産まれる前はね、日本男児らしく太郎にしよう!って

決めてたんですが・・・」

「違うお名前に？」

糸見「息子がね。その名前ではイヤだってはっきり言うんですよ」

3度目の笑いが報道陣を襲う。

「赤ん坊の息子さんが、太郎という名前を拒否した？」

糸見「えぇ。あ、信じてないでしょ！ホントなんですよ！
太郎って呼んだら、すぐ大泣きするんです」

「では、まだお名前は思案中という事ですか？」

糸見「いや。決めました。実は色々な名前で息子を呼んでみたら・・・
1つだけ、息子が笑顔になる名前がありましてね。」

「なるほど。反応したその名前を、息子さんに名付けたわけですね？」

糸見「えぇ、その通りです」

「では・・・　是非、息子さんの名前を！」

今まで以上に多くのリポーターが糸見氏にマイクを近づける。

糸見「えぇっと。ほら、ちょっと大きめに産まれてきた子ですからね。名前は・・・」

カメラを確認した糸見。そしたカメラマンも糸見をアップにしたその瞬間・・・

直後その会見を放映していたＴＶＳのワイドショーがＣＭを流し始めた。

ＴＶではよくある、重大発表前のＣＭである。

１分半ほどのＣＭが明けると、先ほどの会見の続きが放送された。

「是非、息子さんの名前を！」

今まで以上にリポーターがマイクを糸見氏に近づける。

糸見「えぇっと。ほら、ちょっと大きめに産まれてきた子ですからね。名前は・・・」

全ての始まりは・・・

ここからだった・・・。

（第１話へ続く）

第０話　始まり（後書き）

順番が前後しますが、【アマデウスの謎】の前作になります。【アマデウスの謎】を読んだ後で、こちらを読むと・・・色々な接点があり、楽しめるかと思います。ちなみに５０話足らずで終了する予定なので。

第1話　出会い（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

第１話　出会い

第1話　出会い

２０１２年　４月２日・・・。

箱根大学では大きな体育館の中、盛大な入学式を執り行っていた。
その入学式に参列してる新大学生の中に・・・慎吾はいる。

身長は１６２ｃｍと小柄。髪の毛はクセっ毛があり、沖縄出身にしては線が細い。童顔のため、大人びたスーツ姿は、正直着こなしているとはいえなかった。

つい先月、沖縄のとある高校を卒業。大学受験で見事一発合格を勝ち取り、第一志望であった箱根大学史学部に進学。

慎吾「・・・　・・・」

大学学長の長ったらしい話・・・周りがあくびを連発する中、慎吾は目を輝かせて耳を傾けている。

初めての大学生活。初めての一人暮らし。初めての箱根の土地。

慎吾にとって、見るもの聞くもの感じるもの・・・その１つ１つが期待で胸一杯になるものだった。例えそれが・・・ほとんどの生徒が聞き流している学長の講話であっても。

・・・　・・・。

長い入学式が終わった後、新入生を待っているのは学部ごとのオリ

エンテーション。真面目な慎吾は大学生活における注意事項や、授業登録の案内について担当者の話に真剣に耳を傾ける。

配布された資料にしっかりと目を通し、時にはボールペンで資料のいたる所にチェックを入れていた。

大学の授業は「専門科目」と「共通教育科目」の２つに分けられる。

「専門科目」は慎吾の属している史学部の学生だけが受講する授業の事であり、「日本古代史Ａ」「江戸文学」といった授業がある。

「共通教育科目」は、学部学科をとわず全ての学生を対象にした授業の事であり、専門科目と違い他学部の生徒と一緒に授業を受ける事になる。「心理学入門」や「論理学入門」他、１００科目近い授業が用意されている。

資料を見ると授業内容や担当教官の案内があり、慎吾はこれからどの授業を選択しようかとワクワク感いっぱいで悩んでいた。

箱根大学の授業登録は、ネット登録方式。箱根大学に限らず、最近の大学での授業登録はネットを介して行う事が多い。

自宅にパソコンを持たない慎吾は、大学のコンピュータ室で授業登録を済ませていた。実際に授業が始まるのは数日後。

（慎吾「早く・・・授業を受けたい！」）

この気持ちは日々膨らんでいった。

・・・　・・・。

２０１２年４月１１日（水）。

待ちに待った大学の授業初日。この日最初の授業は、共通教育科目である「マス・メディア」である。

初めて大学で受ける授業に緊張している慎吾。引っ込み思案な性格ゆえ、目立たぬよう広い教室の一番後ろの左側の席に座った。３人が座れる横長の机の一番左端に座り、教室内を見渡す。

慎吾「・・・　・・・」

高校の時よりもさらに大きな教室。大きな黒板。多くの生徒。高校と違って、みな私服であるというのも違和感を覚える。

何よりも大学にはいろんな人がいる。

一番前の席には・・・インドネシアからの留学生が座っている。どう見ても３０を過ぎたおじさんにしか見えない生徒もいた。綺麗に化粧をした女子大生が多いのも不思議な光景である。

リュックを背負ったまま授業を受けようとするオタクっぽい男子学生もいれば、上下ジャージ姿で授業を受けようとする女子学生もいた。

かと思えば派手な洋服，アクセサリーに身を包んだ女子学生もいる。

一番後ろの右側の席・・・慎吾の反対側の右端の席には２ｍは越え

ているであろう大きな男子学生もいた。きっとバスケの選手か何かに違いないと慎吾は思う。

慎吾「・・・　・・・」

大学の教室で見る光景１つ１つが、慎吾に新鮮な感覚を与えた。

しばらくすると、白髪交じりのメガネをかけた賢そうな男が現れ、教壇に立つ。年齢は５０歳前後といったところか。この「マス・メディア」の講師である経済学部の教授だ。

教授はメガネをかけ直し、学生を一瞥したあと口を開いた。

教授「えー・・・みなさん、初めまして。単位を落として２回目の人もいるかな。
　ははは。この授業では、日本のマスメディアにおける・・・」

真面目な慎吾は、真新しいノートに教授の言う事をいちいちメモっている。３人がけの左側に座っていたが、残り２つは空席である。

授業が始まって５分。慎吾の１つ飛ばした右側の席に、遅れて着席する学生がいた。

赤いメガネで大きなポニーテール。慎吾はちらっとその女性を見た後、特に気にする事もなくまた教授の話に耳を傾けた。

教授「じゃ、講義日程を書いたプリントを配りますので・・・」

慎吾は前の席の生徒から渡されたプリントを、赤いメガネの女性に

渡した。女性は慎吾と目を合わせる事無く、無言で受け取る。

プリントを渡す際、初めて正面から女性の顔を見た。とても目立つ赤いメガネに、大きなポニーテール。少しばかり目つきが鋭く、目鼻立ちははっきりとした端整な顔立ち。慎吾の辞書にある言葉で言えば【美人】である。

女性は右手で頬杖をついたまま、ただ眠たそうに教授の話を聞いている。

慎吾「・・・　・・・」

少しばかり女性を気にしつつも、慎吾は再び教授の話に集中した。

大学の授業は高校と違って長く、１００分単位で授業が行われる。慎吾は長い時間にも集中を切らさず、教授が板書する内容をしっかりノートにとっていた。

何気に慎吾が右側を見ると・・・赤いメガネの女性はノートもとらず、ずっと右手で頬杖をついたまま。時々小さいあくびをしていた。

ふと教授が生徒に向けて講義に関する課題について言い出した。

教授「って事で・・この授業を受講している生徒諸君には最初の課題を与えたいと思う」

一瞬教室の中がどよめく。

教授「例えば雑誌社とか、例えばＴＶ局とか、例えば新聞社とか・・

・

日本のマスコミが関係している場所へ足を運び・・・

仕事内容について取材し、それをレポートとしてまとめてくる事！」

言い終わらないうちに、生徒から「え～」という重苦しい声が聞こえた。

教授「ははは。まぁ取材といったら、何かしら気が引けるだろうから・・・

見学で構わない。職場見学レポートな。小学生の頃、やったろ？

もちろん自分達で、その職場の見学依頼もする事。それも課題の１つだぞ」

慎吾は初めての大学からの課題について、一生懸命ノートにメモをとる。

教授「最初の課題の締め切りは５月いっぱいだ。

そうだな・・・ゴールデンウィークなどを利用するといい。

４００字詰めの原稿用紙５枚以上という事で！」

教室の中がさらにどよめいた。

「え～・・・」

「原稿用紙5枚も～」

「めんどくせー」

教室のいたる所から「イヤだな」「めんどくさいな」といった声が聞こえてくる。

教授「はっはっは。新入生にとっては最初の大学レポートかな。頑張るように！
何か質問は？」

教授の目の前にいた男子学生が挙手した。

教授「はい、君」

指された生徒は、座ったまま声をかける。

生徒「その取材は、個人でなくグループでも構いませんか？」

教授「あぁ、構わない。1人でも5人でも、同じ場所に取材や見学をしてOK！
ただしレポートは、各人の言葉でしっかりと書き上げる事だ」

生徒「わかりました。」

教授「他に質問は？」

今度は教室の真ん中あたりに座っていた女子学生が手を挙げた。

教授「じゃぁ、真ん中の君！」

生徒「具体的にどんな内容を書けばいいのでしょう？」

教授「それも自分で考える事」

生徒「あ、じゃぁ・・・。

　例えば去年のこの授業のレポートではどんな事書かれていたか・・・

　よろしければ聞きたいのですが」

教授「はっはっは。君、頭いいね～。そうだな、去年のレポートだと・・・

　マスコミの仕事に就くきっかけをまとめた生徒もいたし・・・

　この仕事のつらい事や、やりがいを感じる事を聞いてまとめた生徒もいた」

質問した生徒はうんうんと頷いている。

教授「日本のマスコミにおける批判的内容をレポートした生徒もいたな～。

　参考になったかな？」

生徒「は、はい！　ありがとうございます！」

教授が教室の生徒を再度見渡す。

教授「他に質問は？」

慎吾は手をあげようか迷っていた。どうしても教授に聞きたい事があったのだ。

慎吾「・・・　・・・」

引っ込み思案な性格だが、この日大学での初授業というワクワク感が小さな勇気を与えた。

慎吾「は・・・はい！」

思い切って手を挙げる慎吾。

教授「お？じゃぁ、一番後の席の君！」

そして、教授に指名された。

慎吾「あ・・・えっと。原稿用紙５枚以上と言ってましたが・・・」

教授「ああ。まさか３枚でもいいかとか言わないよな？　だとしたら答えはノーだ」

慎吾「いえ、その・・・　例えば原稿用紙３０枚とかでもいいですか？」

この日一番のどよめきが教室内を埋め尽くした。教授は意表をつかれたようで、一瞬目を丸くする。次の瞬間笑いながら教授は応えた。

教授「はっはっは！　もちろんさ！　何なら５０枚でも１００枚でもいいぞ！」

教室内のどよめきは耳に入ってない慎吾。教授の言葉に目を輝かせる。

慎吾「あ！５０枚でもいいんですね！　ありがとうございます！」

依然ザワザワしている教室の声は耳に入らない慎吾は、笑顔でノートにメモしていた。

【レポートは５０枚でもＯＫ】

女性「あんたさぁ・・・」

ふと慎吾の右側から声が聞こえる。慎吾はニコニコ顔のままで右を見ると、赤いメガネの女性がを眉をひそめ、右手に頬杖をついたまま慎吾を睨んでいた。

慎吾「・・・　・・・」

鋭い視線を受け取った慎吾は、顔をこわばらせる。

慎吾「あ・・・何・・・か？」

赤いメガネの女性は睨み付けたまま口を開く。

女性「あんたさぁ・・・」

女性は慎吾を見て何か言いたげな表情を浮かべたが・・・口から出

ようとした言葉を、大きなため息が阻止する。

女性「はぁ～・・・　いや、いい」

女性は吐き捨てるように慎吾に短く言い放ち、また黒板の方を向いて2度目の大きなため息をついた。そして小さな声でボソッとつぶやいた。

女性「死ねばいいのに」

（慎吾「え！？」）

慎吾には確かにそう聞こえた。

（慎吾「し・・・死ねばいいのに？　ぼ、僕が？」）

何故、彼女がそんな言葉をボソッと言ったのか全く理解できない。

「理由はわからないけど、何かすごいひどい事をしたらしい」と自分を責める慎吾は、見えない罪悪感に襲われた。

女性のつぶやきの後、講義が終わるまで・・・赤いメガネの女性を一切見ることができない。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾にとって、大学で初めての授業は・・・3時間ぐらいに感じら

れる長いものとなった。

この時、慎吾はまだ知ることはなかった。

この赤いメガネの女性と・・・

徳川埋蔵金の謎に挑戦する事になろうとは・・・・。

（第2話へ続く）

第1話　出会い（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

「死ねばいいのに・・・」

この言葉が頭から離れない慎吾。パソコン室で作業をしようと、席に座ろうとした瞬間・・・

隣に座っていた赤いメガネの女性と目が合ってしまう。

そして・・・

次回　「第2話　笑　顔」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２話　笑　顔（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義で、空気の読めない発言をしてしまう。隣に座っていた、赤い眼鏡・大きなポニーテールの女学生に

「死ねばいいのに」

と言われてしまった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２話　笑　顔

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第2話　笑顔

２０１２年４月１８日（水）。

大学で初の講義を受けてから、１週間が過ぎた。

ようやくキャンパスの雰囲気や、授業に慣れてきた慎吾。全ての講義を欠かさず出席し、大学一真面目とも思えるほど、毎日勉強に励んでいた。

大学の講義は、慎吾にとって非常に興味深いものばかり。軽快なトークで講義を楽しく盛り上げる教授もいれば、ちょっとした事ですぐ怒鳴る教授もいる。高校ではけして習うことのない内容で、どの講義も新鮮な気持ちで受けていた。

ただ１つの講義を除いて。

大学で最初に受講した「マス・メディア」の２回目の講義。慎吾は１回目に受講した時と同じ席に座った。そして慎吾の席の１つとばした右の席には・・・先週と同じ赤いメガネの女性が座っている。

彼女を確認した瞬間

「死ねばいいのに」

この言葉を思い出した。

どの講義も短く感じるのに、この「マス・メディア」の講義だけはどうしても長く感じてしまう。右側にいる女性の方をちらりとも振

り向くことが出来ない。

以前として、何故彼女が「死ねばいいのに」と言ったのかは不明。講義中はとにかく教授に質問したい事があっても、慎吾は終始ダンマリを通した。

いつ何時、また「死ねばいいのに」と言われないかと不安になり、ちょっとしたトラウマ状態だ。

（慎吾「早く終わって欲しい」）

そう思ってしまう唯一の授業。そんな2回目の「マス・メディア」の講義が、何事もなく無事に終了すると・・・慎吾はすぐに教室を出て行った。

・・・　・・・。

昼休み。

慎吾は大学の「パソコン室」に入っていった。

このパソコン室は大学構内に１０カ所設置され、大学生は出入り自由。箱根大学・学生証に埋め込まれているＩＣチップをパソコン横のチップ読み取り装置にかざせば、ネットでもワープロでも自由に使う事ができる。

約５０台のパソコンが設置された部屋の中。いつものクセで一番後ろのパソコンの方へと向かう。奥から2番目のパソコンが空いてい

たので、そこに座ろうと持っていたリュックを下に降ろした。

座ろうとした瞬間・・・その隣、一番奥のパソコンに座っていた人物と目が合う。

慎吾「あ・・・」

思わず声を出した。あの赤い眼鏡の女性だ。

慎吾「・・・　・・・」

手前にひいたパソコンチェア・・・　慎吾は静かに戻して立ち去ろうとする。

女性「ちょっとあんた・・・」

その女性は、リュックを持ち直した慎吾に声をかけた。

女性「あんたさぁ、普通に座りなさいよ。
　私の顔見てその場を去ろうとするなんて・・・失礼じゃない？」

そう言うと女性は自分のパソコン画面に視線を戻す。

慎吾「あ・・・えー・・・　あー・・・　はい」

しどろもどろに答える慎吾。戻したパソコンチェアを再度ひいてゆっくりと座った。

慎吾「・・・　・・・」

隣の女性を気にしながら、学生証を読み取り装置にかざしログインする。

女性「あたしさぁ。人に気を遣われるのって、大っ嫌いなんだよね」

女性は自分のパソコンから視線をそらさず慎吾に声をかけた。

慎吾「あ・・・　はい。すいません」

女性に向かって頭を下げるが、相手は視線を合わそうとせずにパソコン操作をしている。

慎吾「・・・　・・・」

隣を気にしつつもネットエクスプローラーを立ち上げ、とあるページを検索し始めた。

慎吾がパソコンの前に座って3分。

女性「ちっ！」

隣の女性が不意に舌打ちした。

一瞬、自分の事に対してかと思った慎吾。ちらっと横を見ると、女性は正面のパソコンしか見ていない。どうやら自分の事ではないようだと、ほっと胸をなでおろす。安心したのも束の間。

女性「マジかよ！」

またしても隣から声が聞こえた。小さな声ではあるが、慎吾にははっきりと聞き取れる大きさだ。

慎吾は気にしないように、自分の作業に集中する。

女性「うわ、ありえねー！」

慎吾「・・・　・・・・」

女性「ここで！？　コレ、くる！？」

慎吾「・・・　・・・・」

しかし、隣から頻繁に気になる声が聞こえてくる。どうやら女性は、パソコン画面に向かって小声で叫んでいるようだ。

慎吾は・・・女性のパソコン画面を覗かないようにしてた。覗くとまた何かトラブルになりそうな気がしたからだ。

しかし・・・とうとう女性はこの言葉を発してしまう。

女性「死ねばいいのに・・・」

慎吾「・・・　・・・・」

ハッキリと聞こえたこの言葉は、慎吾の胸を深くえぐる。おそるおそる横を見ると、女性はパソコンの画面を向いたままだ。

慎吾「・・・　・・・・」

意を決して、チラッと女性のパソコン画面を覗きむ。そして驚いた。

（慎吾「ま・・・　麻雀!?」）

女性のパソコン画面には、麻雀ゲームと思われるウインドウが開いている。麻雀ゲームに没頭し、どうやら自分が不利な局面になると舌打ちしたり、暴言を吐いているようだ。

突然女性が振り向き、慎吾と目が合う。

慎吾「あ・・・」

女性「何?」

慎吾「あー・・・いや、さっきから何か叫んでたので・・・気になって」

女性は目を丸くした。

女性「あれ?　私なんか言ってた?　やだなー、声出てたんだ。
　うん。気にしないで」

女性はまた自分のパソコン画面に視線を合わせる。この後、どう会話をつなげていいかわからない慎吾。

慎吾「あ・・・麻雀、好きなんですね・・・」

自分なりに言葉を投げかけてみた。

女性「・・・　・・・」

女性は目を細くして、また慎吾の方を見やる。

女性「あのね・・・気を遣われるの嫌いって言ったでしょ。
　無理に会話しなくていいから。あんたは自分の作業だけやってりゃいいのよ」

叱られている感覚になる慎吾。

慎吾「あ・・・そ、そうですね。自分は・・・
　ＴＶＳのホームページチェックしてるんです、ハイ・・・」

パソコン画面を指さす慎吾を見て、女性は小さなため息をついた。

女性「だからさー。無理に会話しようとしなくていいっての！
　はい！　あんたはＴＶＳのホームページ。私は仕事！

　それでＯＫ！　もうしゃべりかけないでいいから！」

慎吾「え、あ・・・はい。ごめん・・・なさい・・・」

女性は鼻息あらく、また麻雀のパソコン画面を見つめ始めた。

女性「まったく・・・」

粗い手つきでマウスをクリックする女性。しばらくすると・・・

女性「ん？」

何かに気づいたような表情を浮かべた。背筋を伸ばし、慎吾の方を向いた後声をかける。

女性「ちょっとあんた。さっき、ＴＶＳのホームページ見てるって言った？」

慎吾はキーボードを打とうとした手を止め

慎吾「・・・　・・・」

顔だけ女性の方に向け、無言で見つめる。

女性「だから、今あんたが見てるの・・・ＴＶＳのページ？」

慎吾はちょっと困った表情を見せた後

慎吾「あー・・・僕は・・・あなたに・・・
　しゃべっていいの・・でしょうか？」

女性は眉をひそめた。

女性「あー！　さっき、無理に会話するなって言ったのを気にしてるの？
　もうあんた・・・めんどくさいわね！！」

そして・・・

女性「イライラする・・・死ねばいいのに」

慎吾に聞こえないよう、小さな声で言ったつもりだった。

慎吾「・・・　・・・」

しかしその言葉は・・・しっかりと慎吾の耳に入る。２度目の「死ねばいいのに」は、さらに深く胸をえぐり、泣きそうな表情をする慎吾。

そんな慎吾の様子に気づいた女性。

女性「あ・・・ひょっとして聞こえてた？」

慎吾「・・・　・・・」

どんな言葉を返していいのかわからない。

女性「あー、気にしないで。【死ねばいいのに】は私の口癖だからさ。

たまに相手に聞こえるように言っちゃうのよねー」

言いながら赤いメガネをかけ直し、ポニーテールを軽くなでた。

女性「だから、今あんたが見てるの・・・ＴＶＳのページなんでしょ？」

慎吾は相変わらず泣きそうな顔で声を出す。

慎吾「はい・・・」

女性は鋭い目つきでさらに慎吾に聞いてきた。

女性「これ、絶対あれでしょ！　マスメディアの授業のヤツ！」

慎吾「はい・・・」

初めて女性が慎吾を見てニヤリと笑った。

女性「あー・・やっぱりね～。あんたさぁ、ＴＶＳに見学に行くの？」

慎吾「はい・・・。ホームページで局内見学の案内もあったので・・・」

おずおずと頷く慎吾。その様子を見た女性は、トレードマークの赤メガネをしっかりとかけ直し・・・

女性「私も連れてって！！」

さらなる笑顔で言葉を発した。

慎吾「え！？」

慎吾は目を丸くする。

女性「どれどれ？」

女性は慎吾のパソコン画面を覗き込んだ。

女性「あー、なるほどね。登録フォームに氏名や年齢、指定された見学時間・・・
　必要事項記入して送信ってわけね。ふむふむ。」

慎吾を押しのけ、ＴＶＳの見学案内のページをさっと目を通す。

慎吾「・・・　・・・」

女性の大きなポニーテールに、視界をさえぎられる。

（慎吾「あ・・・いい匂い・・・」）

心地よい香りが慎吾の鼻をついた。

女性「あった！　見学者人数。ねぇ、あんたさ、一人で行くつもりだった？」

急に女性は慎吾の方を向いた。

慎吾「え・・・　・・・」

ドキッとする慎吾。

慎吾「あ・・・はい。１人で行くつもり・・・です」

女性はニヤリと笑う。

女性「そうよねー。あんた新入生でしょ。まだ友達とかいなさそうだしね。はは。
　ＯＫ！　じゃぁ、見学者人数【２人】と・・・」

慎吾のＰＣキーボードを勝手に操作した。

女性「はい。じゃぁ他の必要事項はあんたが記入しといてね」

女性は満足した顔で、再び自分のパソコンを操作し始めた。

慎吾「あの・・・」

女性「なに？」

さっきと違って、機嫌の良さそうな表情でこたえる女性。

慎吾「なぜ・・・僕と？」

女性「いい質問ね。嘘つくの嫌いだから今のうちはっきり言うわね。

あんたさ・・・

多分田舎者でしょ？」

右手で眼鏡を軽く持ち直した女性は、遠慮せずに目の前の男に【田舎者】と言い放つ。

慎吾「あ・・・はい。沖縄から来たばかりなんです・・・」

そしてそれを肯定する慎吾。

女性「やっぱりね～、見ればわかるわよ。ふふん」

鼻をツンと上に上げ、満足げな表情を浮かべる。

女性「沖縄なら、地下鉄とかＪＲとかさっぱりわからないでしょ？」

慎吾「は、はい！　あれ、全然わからないです。
　いつも切符売り場で困ってるんです・・・」

正直に応える慎吾。

女性「私がＴＶＳまで連れてってあげるわよ」

慎吾「え！？」

予想外の言葉が返ってきた。

女性「優しいでしょ、私」

慎吾「え！　そ、そうしてもらえるなら・・・　嬉しいです！！
　ホントは僕・・・ＴＶＳまでたどり着けるか心配で・・・」

女性「でしょー。うんうん。」

女性は目をつむり、頷く。慎吾は、初めて女性に対して笑顔を見せた。

慎吾「ホントは、とっても優しい人なんですね・・・
　ありがとうございます！！」

女性「いや～、いいのよ～　ふふん！」

深々とお辞儀する慎吾に、鼻を高々と上げる。

慎吾「じゃぁ、早速・・・
　　ＴＶ局見学・・・２人という事で送信しておきますね！」

その言葉を聞いた女性がニコッと笑った。慎吾は一生懸命、ページを熟読して送信内容に誤りがないかチェックしている。

女性「・・・　・・・」

しばらく女性は慎吾の方を見ていた。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は女性の視線に気づかずパソコン画面を凝視している。それを見て、だんだんと女性の表情が曇ってきた。

女性「あんたさぁ・・・」

耐えきれずといった表情で慎吾に声をかける。

慎吾「え？　あ、はい・・・　何でしょう？」

慎吾は笑顔で女性に返した。

リナ「・・・　・・・」

いったん天を見上げた後、すぐに慎吾を睨み付ける。

女性「あなたと私、ＴＶＳに行くんでしょ？」

イライラ気味の声をかけてきた。

慎吾「え・・・はい・・・」

女性「じゃぁさ・・・お互い、連絡取り合えるようにするのが普通じゃない？」

慎吾「あ！そうか！　えっと・・・どうやって・・・？」

首をかしげる慎吾。さらに女性はイライラを募らせる。

女性「普通携帯でしょ！　もう、めんどくさいなー、君・・・」

慎吾「あ、そうか！　そうですよね！　赤外線通信で・・・」

女性「ちょっと待った！！」

慎吾「え？　まだ何か・・・？」

女性「うーーん・・・」

女性はメガネの中心を人差し指で押さえ、数秒程悩んだ表情を見せた。

女性「えぇい！　田舎者だから仕方ない！！」

今度は諦めた表情を見せる。

女性「あのさ！　普通、携帯のアドレスとか交換する前にさ・・・
　自己紹介するのが普通でしょ！　てか、人としての礼儀、
マナー！」

慎吾「あ・・・」

女性の言葉を受けた慎吾。

慎吾「あー！　そうだ！　僕、慎吾って言います。よろしく！」

笑顔のまま、お辞儀した。

女性「ふ～。ま、いいわ。私、リナ。はい、じゃぁ携帯出して。赤外線でっと・・・」

2人はお互いの携帯連絡先を交換する。リナは慎吾の携帯を指さし

リナ「この大学で、私のアドレス知ってるのって・・・
　今んとこあんただけよ。貴重だからね」

と言い放った。

慎吾「うん。リナさん、ありがとう！　ホントに優しい！
　正直、僕・・・田舎者だから・・・

　都会のルールとかマナーとか常識・・・いっぱいわかんないと思います。
　何かあったらまた教えて下さい！」

屈託のない笑顔をリナに見せる慎吾は、リナに対する苦手意識が完全に消えていた。

リナ「は？　めんどくさ。とにかくＴＶＳ行く日程決まったらメールしてよね」

慎吾「はい！　あの・・・　あと１つ聞いていいですか？」

リナ「何？」

ニコニコしながら慎吾が言う。

慎吾「リナさん、年、いくつ？」

リナ「・・・　・・・」

天をあおぐリナ。

リナ「あんたに教えるの・・正直めんどくさいわね・・・」

慎吾「え？　年を教えるの、そんなに大変な事です？」

リナ「違う違う。あんたに都会のマナーとか常識を教えるのがよ。田舎の沖縄だと『県民、みな兄弟』みたいな感じなんだろうけどさー。

都会じゃ、女性の年齢を聞くってのは普通・・・」

慎吾「・・・　・・・」

ずっとニコニコしている慎吾。

リナ「・・・　・・・　ま、いいわ。
私１９歳。工学部の２年だからあんたより先輩よ」

リナは小さな溜息のあと、自分の年齢を明かした。

慎吾「あ、先輩ですか！　じゃぁ言葉遣いも気をつけます！　リナ先輩！」

リナは複雑な表情を浮かべる。

リナ「だから気を遣わなくって・・・　まぁ、いいわ。好きにして。
はい、じゃぁお互いの作業に戻って仕事しましょうね」

慎吾「あ・・・はい。ホントありがとうございます！　リナ先輩！」

何度も何度もお辞儀する慎吾に・・・

（リナ「大学で『先輩』って呼ぶヤツ・・・いねーって・・・」）

少しばかり辟易（へきえき）していたリナ。

リナ「まぁ、でも・・・これで・・・
『マス・メディア』のレポート書いてくれるヤツ、キープっと・・・」

慎吾「え？」

リナは無意識に声を出していた。

リナ「なにせ、課題５０枚でも喜んで書くタイプだしね。ふふふ・・・」

慎吾には聞こえていないつもりだったが・・・

慎吾「・・・　・・・」

もちろん慎吾の耳に、その言葉は届いている。

リナ「よし！　国士無双！！！　今日はいい感じ～！」

麻雀ゲームに集中しつつ、声がもれ続けているリナ。

慎吾「・・・　・・・」

リナの見せた優しさの裏には・・・彼女のレポート執筆に、自分が利用されると知った慎吾。

（慎吾「でも・・・」）

不安な都会の地でナビゲートしてくれる・・・そんなリナの親切心の方が、慎吾にとっては大きかった。

慎吾「・・・・　まあ、いっか」

見学人数【２人】のまま・・・見学希望の登録フォームを、ＴＶＳに送信した。

（第3話へ続く）

第２話　笑　顔（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ＴＶＳへ向かう新幹線の中で、リナの意外な特技を知った慎吾。
そしてＴＶ局では・・・さらなるリナの特別な能力に驚かされる事になる。

次回　「　第３話　　リナの特殊能力　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３話　リナの特殊能力（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義・・・隣に座った１つ上の先輩リナに「死ねばいいのに」と言われてしまう。

そのリナと・・・課せられたレポートのため、ＴＶ局へ行く事になった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３話　リナの特殊能力

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第3話　リナの特殊能力

２０１２年5月3日（木）。

慎吾「遅いな～・・・　リナ先輩・・・」

携帯の時計を確認しながらつぶやく慎吾。

箱根湯本駅・駅前。午前１０時にリナと待ち合わせていた。

現在の時刻は、午前１１時３０分。

時間にきっちりしている慎吾、すでに2時間も駅前で待ち続けている。

何度もリナの携帯に「いつ着くんですか?」とメールしたが、そのたびに「あと5分」という4文字が戻ってくる。

・・・　・・・。

リナが慎吾の前に現れたのは・・・１２時前。

待ちくたびれた表情の慎吾が、リナに声をかける。

慎吾「リナ先輩・・・　2時間遅刻ですよ・・・」

特に慌てて来た様子もないリナ。

リナ「あー、ちょっと準備に時間がかかってね。女はそういうもの

なの」

慎吾「でも2時間は・・・厳しいです・・・」

小さなため息をつく慎吾。

リナ「は？　男が女を待つのは当たり前だっつーの。
　それにあんた沖縄出身でしょ？
　沖縄の人って、時間にルーズって聞くわよ？」

慎吾「いやいや・・・みんながみんな、そうってわけでは・・・
　てか今日のリナ先輩、なんかおめかししてません？」

赤いワンピースに、赤いヒール。セレブっぽい白い帽子とブランドものの白いバッグ。
赤と白を意識したコーディネート・・・大人びたリナの姿がそこにはあった。

大学での私服とは違った雰囲気のリナを目の当たりにした慎吾。

慎吾「都会の女性って感じですね・・・」

思った事を口にする。

リナ「は？　それ、褒めてんの？」

駅構内に向かいながら、リナが眉をひそめた。

慎吾「もちろんですよ！　いつもよりお化粧も濃いし！」

リナ「・・・　・・・」

さらに眉をひそめるリナ。

リナ「あんたさぁ。天然で人に殺意与えるタイプよね・・・」

慎吾「いや、ホントに綺麗だなって思ってますから！」

リナ「はいはい。どーも。まぁあんたのために、おめかししたんじゃないし。
　てか、あんた。リュック背負ってモロ田舎者丸出しって感じだわね」

慎吾に負けじと、リナも思った事を素直に口にする。
白のTシャツにジーンズ。リュックを背負った非常にラフな格好の慎吾。

慎吾「いいんですよ。田舎者は田舎者らしくてね」

屈託のない笑顔を見せる慎吾は、リュックを背負い直した。

リナ「・・・。はいはい。じゃぁ行くわよ。ＴＶＳなら1時間半ぐらいで着くから」

沖縄の人間が都会に出てきて、最初に戸惑うのが・・・
電車や地下鉄の乗り方である。

路線図の見方、切符の買い方、乗り換えの仕方、改札口の通り方・・

・

これら全てが不安の対象となる。

リナ「小田原って駅で、新幹線に乗り換えるから。まぁ私についてきなさい」

慎吾「はい！」

ナビゲート役がいてくれると、路線に関する全ての不安が払拭される。箱根に来て、初めて不安無しで電車や新幹線に乗る慎吾。リナの遅刻の事はすぐに忘れ去った。

・・・　・・・。

２人は小田原駅で、新幹線に乗り変え・・・ＪＲ新幹線、こだま６３８号の自由席に座っていた。

リナ「２駅だけど、３０分ぐらいかかるから。寝るなり本読むなり、好きにして」

そう言うとリナは、バッグの中から小さなノートパソコンを取りだし起動する。

慎吾「あれ？　こんなところでパソコンですか？」

リナ「あー、うん。ちょっと仕事あるの。
　３０分あれば半荘（ハンチャン）２回はいけるし」

慎吾「え？　麻雀やるんですか？　新幹線の中で？」

リナ「だからこれ、仕事だって。あんたさぁ・・・
　私が、ただの麻雀好きと思ってない？」

慎吾「思ってますよ？」

正直に返す慎吾。

リナ「あのね、このネット麻雀は電子マネー賭けてやるサイトなの。
　場代を払って、後は打ってる連中でリアルマネーのやりとりするのよ」

慎吾「えぇ！？　オンラインカジノ・・みたいなヤツですか？」

リナ「ま・・・合法じゃないサイトだけどね。アングラサイトの１つよ。」

慎吾「アングラ？」

リナ「・・・。アンダーグラウンド。つまり表には出ないサイトの事よ。
　紹介制度で登録して・・・あー、説明めんどくさい！」

リナはパソコンのキーボードをカタカタ打ちながら慎吾への説明を中断した。

慎吾「で、でもそれ・・・ギャンブルでしょ！？
　よく大学生がパチンコや競馬にハマって借金！とか聞きます。

ヤメましょうよ、リナ先輩！！」

リナ「あー、はいはい。全然大丈夫だから。私、死ぬほど麻雀強いし。

このサイト、名前は公（おおやけ）にされてないけど・・・

プロも多い有名なサイトなの。その中で、超勝ってるから。はい、ちょっと集中するからダマっててね」

そういうとリナは、キーボードをさらに高速で操作し始める。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は口から出そうな言葉を飲み込み、パソコン画面を静かに覗きこんだ。

・・・　・・・。

３０分後、２人の乗った新幹線は品川駅に到着。ここで東海道本線に乗り換える事になる。

慎吾「リナ先輩すごい！　連続で1位を取ってましたよね？」

少し興奮気味の慎吾がリナに声をかけてきた。

リナ「言ったでしょ。麻雀は死ぬほど強いって」

慎吾「あ、あの・・・今の３０分で、どれだけ勝ったんですか？

お金」

リナ「・・・。ふん、まぁいいわ。
　場代さしひいて、純利益は１万円ちょっとってトコね」

慎吾「リナ先輩すごい！！　３０分で１万円！？
　何で勝てるんですか？　秘密があるんですか！？」

慎吾はさらに興奮した様子で語り続ける。

リナ「うっさいなー・・・
　あんたはさ・・・ギャンブルしちゃいけないタイプだから」

慎吾の肩をポンと叩く。

リナ「これ以上その話題は禁止。
　今度は新橋ってとこまで行くから、切符買って来て」

そういうと慎吾を押し出した。会話を続けたかった慎吾だが、しぶしぶ切符を買いに行く。

（リナ「まぁ・・・
　レポート書いて貰うから、ここは我慢我慢」）

券売機の前に立つ慎吾を見て、リナは小さく溜息をついた。

・・・　・・・。

予定では正午についてるはずだったＴＶＳ。２人が到着したのは午

後2時過ぎだ。

リナ「はい、私の役目はここまで。後はあんた」

ＴＶＳの玄関前・・・右手を腰に当てたリナがアゴで玄関をさす。

慎吾「了解です。ここまでの案内、ありがとうございます！
　僕だと、こんなスムーズには来られなかったです」

苦笑いをしながらリナにお辞儀した慎吾。ＴＶ局に入り、事務で受付をする。

事務員にこの日の局内見学の旨を伝え、首からぶら下げるタイプの入局許可証を２つ受け取った。

そのうちの１つをリナに渡す。

慎吾「はい。この入局許可証を首にかけてください。
　僕たちは今日、局内見学の許可を得てる証明になりますので。

　この中にチップが入っていて、各所に設けられているゲートを通れます」

リナ「ＯＫ」

リナはすぐに許可証を首にかけた。

慎吾「この許可証を持たずにゲート通ると・・・
　警告音がなって、すぐに警備員が飛んでくるそうです」

リナ「は～、なるほど。ま、ＴＶ局だしセキュリティも厳重ってわけね。
で？　次の予定は？」

慎吾「えーっと。１時からの局内見学に間に合わなかったので・・・」

リュックからＴＶＳ局内見学の案内を取り出す。

慎吾「次は午後3時に・・・第１６スタジオで時代劇の撮影風景見学。
４時には、第2スタジオでクイズ番組の撮影見学。
６時には、ニュースの生放送の現場を見学という日程です」

リナ「えぇ・・・。歌番組とかないの？　男性アイドルとか見られるヤツ」

慎吾は今一度案内を見渡す。

慎吾「えっと・・・クイズ番組で、有名なお笑い芸人が出るみたいですよ」

リナ「超ー興味ない！　うわー、イケメンの芸能人見たかったのに・・・」

慎吾「あ、すいません・・・」

申し訳なさそうな表情をする。

リナ「別にいいわよ。じゃあ次の見学までは・・・1時間ぐらいあるわね」

慎吾「お昼ご飯にします？　まだ食べてないですし」

リナ「あんたさぁ。ＴＶ局に来て、昼ご飯なんて食べてる場合じゃないでしょ。
　私、行きたい所あるの」

そういうとリナはスタスタと歩き出した。その後を慎吾が追う。
リナは局内の見取り図版のところで立ち止まり、指でなぞりながらどこかを探すしぐさをする。

リナ「えっと・・・あった！　ここね！」

何かの場所を確認したリナは、慎吾の事を気にせずまたスタスタと歩き出した。

慎吾「ちょっとリナ先輩・・、どこに行くんですか？」

リナは無言で目的地に向かって歩いて行く。やがて階段を下り、２ヶ所のゲートを通って薄暗い地下へとたどり着いた。

慎吾「・・・。ここ、駐車場ですか？」

リナ「そう」

ＴＶＳ地下2階にある広い駐車場。

慎吾「何でこんな所へ？」

リナ「ちょっとね・・・」

そういうとリナは、駐車場の中をランダムに歩き始めた。そして車の前を通り過ぎては、何かを確認する。

約１０分。広い駐車場内を歩き回ったリナと、ただ後ろからついてきただけの慎吾。

慎吾「あの・・・リナ先輩？」

リナは慎吾の方を向いてこたえる。

リナ「うん！　今ね・・・ジャネーズアイドルの【山嵐】がこの局にいるわよ」

慎吾「な・・・　何でわかるんですか？」

リナ「車があった」

慎吾「えぇ！？」

大きな声を出して驚く慎吾。

慎吾「って事は、リナ先輩・・・

【山嵐】のメンバーの車とかわかるんですか？」

リナ「まぁね」

（慎吾「うわ・・・絶対アイドルのおっかけとかするタイプだ・・・」）

リナ「あー、あのね。ひょっとして私がアイドルオタクとか思ってない？」

慎吾「思ってますけど・・・」

素直に返す慎吾。

リナ「アイドルとか興味ないの、私は。興味あるのはイケメン！
私はイケメンをおかずにして、ご飯を食べる女子なの！」

赤いメガネをキュッとかけ直し、鼻高々に言い放つ。

慎吾「・・・　・・・」

アイドルオタクと、何が違うのか理解出来ない慎吾。

慎吾「だからって、芸能人の車をチェックするのは・・・
ストーカーの領域ではないかと・・・」

リナ「あんたさぁ。どこまでバカ正直なの？　アイドルってのはね・・・
こういう事されるの、許容範囲と思ってるから大丈夫だって」

慎吾「・・・・」

リナ「ホントは駐車場でウロウロしてる方が・・・

イケメン芸能人との遭遇率高いけど・・・

ここは警備員が、定期的にチェックしてるからなー」

慎吾「出待ちってヤツです？」

リナ「違う！　偶然の出会いってヤツ！」

慎吾「・・・　・・・」

リナ「とりあえずここは出ますか。少なくとも【山嵐】がいる事はわかったし。

時間まで、局内ウロウロして・・・

偶然曲がり角で【山嵐】のメンバーとぶつかり・・・

運命の恋、始まり始まり～」

陶酔した表情で語るリナ。

慎吾「・・・・」

冷めた目で見る慎吾。

リナ「運命の恋に・・・いざ、しゅっぱーつ！！」

こうしてリナは一人でスタスタと歩き出し・・・慎吾はまた、その後ろをついていく。

リナ「・・・　・・・」

一瞬リナは駐車場から局内へ入る入り口で止まり、今一度駐車場を見た。

慎吾「なにか？」

リナ「うん・・・。いや、何でもない。さ、行こう！
今日のおめかしの成果を発揮しないとね！」

リナは右手で拳を握り、気合いを入れる。

慎吾「・・・　あれ・・・？」

ふと何かに気づいた表情を浮かべる慎吾。

慎吾「ちょっと待てよ・・・」

最近ネットで見た【山嵐】のニュースの事を思い出した。

慎吾「確か【山嵐】のメンバーが立て続けに交通事故起こして・・・
今、メンバーは運転禁止だってニュースで言ってましたよ？

メンバーの車があるっておかしくないですか？」

キョロキョロしながら局内を歩くリナは、慎吾の方を振り返る事なくこたえる。

リナ「あら・・・芸能関係弱そうなのによく知ってるわね。
そう。確認した車は【山嵐】のマネージャさんの車よ」

慎吾「マ、マネージャ？」

リナ「そう。超売れっ子の【山嵐】は・・・
メンバー1人1人、個別にマネージャがついてるからね。
そのメンバー全員の・・・マネージャの車あったの。
だから絶対【山嵐】は、ＴＶＳで何かの撮影のはず！」

それを聞いた慎吾は、さらに驚く。

慎吾「リ、リナ先輩・・・
なんでマネージャさんの車までわかるんですか？」

リナ「あるのよ。そういう芸能人のプライバシーに関する事を・・・
公表してるアングラサイトがね。
ストーカーレベルのファンが、裏で情報交換してるの」

慎吾「・・・　・・・」

リナ「私はイケメンと・・・
そのマネージャーの車のナンバー、全て覚えているの」

1年前。芸能人の自宅の住所や電話番号を載せた本の出版が、プライバシーの侵害に当たるとして発売禁止になるというニュースがあった。

慎吾「・・・　・・・」

その記事を思い出す慎吾。

（慎吾「そんなサイトが・・・　あるんだ・・・」）

リナ「そのサイトには、抱かれたい男1位の福山雅秋の車のナンバーや・・・
　携帯番号、自宅の場所まで載ってるのよ。すごいでしょ？
　今日、福山さんは・・・TVS来てないみたい。残念」

慎吾「てか・・・なんでリナ先輩・・・ナンバーとか全て暗記してるんすか？」

リナはイヤらしい笑いを浮かべてこたえる。

リナ「しっしっし。そゆの得意なのよ、私」

その顔は得意満面だ。

慎吾「・・・　・・・」

驚きの表情を浮かべたままの慎吾。いくらイケメン芸能人が好きとはいえ・・・

（慎吾「本人の車やマネージャの車のナンバーを・・・
　全て暗記できるものだろうか？」）

思い切ってリナに聞いてみた。

慎吾「リナ先輩」

慎吾の前を歩くリナは振り返る事無く返事する。

リナ「なに？」

慎吾「ひょっとしてリナ先輩・・・すごい暗記の天才ですか？
　歴史のテストとか全て１００点満点だったとか？」

リナは立ち止まって慎吾の方を振り返った。

リナ「あのさー・・・。私、歴史って大っ嫌いなの！
　テスト、いつも赤点よ！」

慎吾「でも・・・でも、あんなにたくさんの車のナンバー覚えるって・・・
　普通の人には無理ですよ！　絶対暗記の天才ですって！」

リナは慎吾の目を見て、一瞬無表情になる。

リナ「・・・」

慎吾もリナの目を見つめる。

（慎吾「あ、あれ？　何か変な事言ったかな？」）

リナは軽い溜め息をついたあと慎吾に告げる。

リナ「ま、いっか。いいわ、教えてあげる。
　でも誰にも言わないって約束できる？」

慎吾は目を丸くする。

（慎吾「え？　何かそんな深刻な秘密があるの？」）

慎吾は作り笑いを浮かべた。

慎吾「え、ええ。もちろんです・・・よ？」

リナは軽く目を閉じた後、真剣な表情で少し重そうな口を開いた。

リナ「私はね・・・

【数字依存症】なのよ・・・」

慎吾「え？」

（第４話へ続く）

第３話　リナの特殊能力（後書き）

次回予告

リナが称する「数字依存症」。
慎吾の目の前で、驚異的な能力を見せる。
しかしリナはずっとこの症状に悩まされ続けていた。
話を聞いていくうちに、慎吾はその症状の正体を突き止める。

次回　「第４話　数字依存症　」

第４話　数字依存症（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義・・・隣に座った１つ上の先輩リナに「死ねばいいのに」と言われてしまう。

そのリナと・・・課せられたレポートのため、ＴＶ局へ行く事になった。

第４話　数字依存症

第4話　数字依存症

リナ「だから・・・　私、【数字依存症】なのよ・・・
　それも、かなり深刻な・・・」

慎吾「な、何ですか？　その・・・
　よくわからないですが？」

リナは慎吾の目を見た。

目を閉じ、少しばかり上を向き・・・そして目を開くと、また慎吾の目を見る。

慎吾「　？　」

意を決したように、リナは語り始めた。

リナ「なんつーか・・・　目に映る物が数字として頭に入ってくるのよね・・・
　私の意志とは関係なく・・・

　だから車のナンバーとかもさ・・・
　意識してないのに、勝手に覚えてるのよ」

慎吾「・・・　・・・」

すぐには信じられない話だ。

慎吾「あの・・・リナ先輩。冗談では・・・ないですよね？」

リナは目を閉じ天を仰いだ。そして小さなため息をつき・・・

リナ「財布！」

目を閉じたまま、慎吾に一言（ひとこと）発する。

慎吾「え？」

キョトンとする慎吾。

リナ「だから、財布。出して！」

今度は目を見開いて、やや強い口調で慎吾に言う。

慎吾「えっと・・・　は、はい。財布ですね」

ジーンズの右ポケットから財布を取り出した。

リナ「小銭。何枚ある？　だいたいでいいから」

慎吾は財布を開いて、小銭を数え始める。

慎吾「えっと・・・　１０枚ぐらいですかね？」

リナ「ＯＫ。じゃ、小銭を全て右手で持って握って」

慎吾「な、何を・・・？」

リナ「いいから、小銭全部握って！」

慎吾はワケもわからず財布の中にあった小銭・・・１０枚程度を全て右手に握った。

リナ「じゃ、右手を前に出して手の甲を上に向けて」

言うとおりにする慎吾。

リナ「深呼吸して、力を抜いて・・・」

慎吾は深呼吸をして・・・力を抜く。その瞬間・・・

バチーン！！！

リナは慎吾の拳を・・・上から思いっきりひっぱたいた。

慎吾「あがっ！！」　※あが　＝　痛い

小さな悲鳴と共に・・・

チャリンチャリチャリリーン・・・

握っていた小銭が、全てフロアに散らばる。

慎吾「ちょ！　リナ先輩、何するんですか！？」

リナは慎吾の目を直視して・・・

リナ「３７４円」

言い放った。

慎吾「え？」

リナ「今、あんたが握っていた小銭の総額よ。３７４円だったわ」

眉をひそめる慎吾。

慎吾「じょ、冗談・・・ですか？」

リナ「落ちた小銭拾いなさい。その後、文句あるなら聞くから」

リナは腕組みをして慎吾を睨み付ける。その迫力に慎吾は少し怖じ気づいた。

慎吾「・・・　・・・」

そして、すぐに小銭を拾い始める。

全て拾い上げた後、左手に小銭をのせ勘定する。

１００円が２枚、５０円が３枚、１０円が１枚、５円が１枚、１円が４枚・・・

慎吾「えっと・・・３００・・・　３６９円です・・・　けど？」

リナは腕組みしたまま、慎吾の斜め後ろにある自動販売機に視線を移す。

リナ「そこ。その自販機の下に、もう１枚５円玉が落ちてるから」

アゴで自販機をさした。

慎吾「・・・　・・・」

身をかがめ、自動販売機の下を覗くと・・・５円玉が１枚あった。

慎吾「さ・・・３７４円。え！？　な、なんで！？」

リナ「だから・・・言ったでしょ！　数字依存症だって！」

しばらく呆然とする慎吾。少しの沈黙の後、口を開いた。

慎吾「ま、マジックとかじゃないですよね！？」

恐る恐る聞いてみる。

リナ「あんたさぁ・・・この状況でマジックって・・・意味ないじゃん！

目に映った小銭の金額・・・勝手に頭に入ってくるの！」

慎吾「そ、そうなんですか・・・はぁ・・・」

しばらく呆然とするが・・・

慎吾「そういえば・・・」

左手の人差し指と親指を額にあて、悩むポーズをする。

慎吾「そういえば・・・　吾郎先生が・・・そんな話を・・・」

リナ「誰？　それ？」

慎吾「あ・・・高校の時の先生で・・・
　なんていうか、オカルトとかＵＦＯとか超能力とか好きな・・・」

瞬間、慎吾は何かを思い出したような表情をした。

慎吾「そ、そうだ！　【レインマン】だ！！」

この言葉にリナが即反応する。

リナ「は？　雨男？」

慎吾「映画ですよ、映画！　ほら！
　トムクルーズと、ダスティンホフマンが出てた！」

リナ「知らない・・・私、映画観ないし・・・」

慎吾「映画の中で、ダスティンホフマンが自閉症の兄を演じてまして・・・
　床に落ちたつまようじの本数を、即座に答えるシーンがあるんです。

　今のリナ先輩と同じような感じです」

リナ「だから？　それ、映画の話でしょ？」

慎吾は目を大きく見開いて話し始めた。

慎吾「違います。あの映画に出てくる兄は・・・
　実在の人物をモデルにしてるんです」

リナ「実在？　え？　じゃぁ、リアルにそんな人・・・いるわけ？」

慎吾「はい！」

リナ「・・・　・・・」

ニコニコ笑顔の慎吾だが・・・リナは眉をひそめたまま。その表情は、半信半疑と言った感じだ。

慎吾「そうだ！　リナ先輩、パソコン持ってましたよね？
　貸してもらえますか？　3分あれば調べられますよ！」

リナ「・・・　・・・」

2人は局内の長いすが置かれてある所に移動し、そこに座る。慎吾はリナのパソコンを起動し、ネットで【レインマン】から検索を始めた。

リナ「・・・　・・・」

その様子を黙って見ているリナ。

リナ「・・・　・・・」

リナは・・・　自分が【数字依存症】とよんでいる症状について、深刻に悩み続けていた。

４年前のある時期から・・・この症状が表れた。症状が出始めた当初は、不気味で怖くて仕方なかった。目に映った数字はもちろん・・・お金や時間など、数字の情報は勝手に頭の中に入ってくる。そして自分の意志で、数字の侵入を抑える事が出来ない。

自分とは違う、別の意志を持った何かが・・・自分の脳を支配しているような感覚で、この症状は恐怖以外の何者でもなかった。ノイローゼ気味になりかけたリナを、ギリギリで救ったのは・・・その負けん気の強さだ。

子供の頃は、おとなしい性格だったリナだが・・・ある事をきっかけに、その性格が変わる事になる。

リナ「・・・　・・・」

脳に数字が入ってくる症状でノイローゼになってしまうのであれば・・・

それは自分の中に入ってくる「何か」に負ける事になると思うようになる。
数字が自分の中に侵入してくる事は止められないが・・・

それに屈する自分は許せない！

こうして・・・パニックになりかけた自分の精神を持ち直した。

（リナ「こんな症状・・・　世界で私だけと思っていたけど・・・」）

慎吾「あった！　ありましたよ！　見てください、リナ先輩！」

慎吾はパソコンのディスプレイをリナの方に向ける。

リナ「・・・　・・・」

リナは注意深く慎吾が検索したページを読み始めた。

慎吾「・・・　・・・」

リナ「サヴァン・・・症候群？」

【サヴァン症候群】

知的障害や自閉症の人物が、稀に常人では持ち得ないような特殊能力を持つことがあり、その症例を総じて【サヴァン症候群】という。

特殊能力の例として

・西暦・月・日を言えば、即座にその日の曜日を答える事ができる。
いわゆるカレンダー算の能力。
（かけ算九九すらできない人物が、この能力を持つ事例も報告されている）

・どんな楽曲でも、一度聴けば完全にコピーしてピアノで演奏する事ができる能力
（この能力の保有者で、楽譜を全く読むことができない事例もある）

・一度見た風景や写真を、その細部まで完璧に絵画で再現できる能力

・1冊の書物を一字一句全て完璧に暗記できる能力

・大きな数の複雑な計算を即座にできる能力

これらの能力が例としてあげられる（その他にもたくさんある）。

リナ「・・・　・・・」

ページの隅々まで目を通す。真剣な眼差しでディスプレイを見ているリナに、慎吾が声をかけた。

慎吾「どうです？」

リナはページから目を話さず応える。

リナ「確かに・・・いくつか当てはまる。でも・・・」

自分に当てはまらないと確信してる事があった。

リナ「でも私、知的障害でもないし・・・
　過去ひきこもりだった経験もないわよ・・・

この症例って、そういう人がなるんでしょ？」

慎吾「ちょっと待ってください・・・」

慎吾はリナの見てるページとは別のページを開いた。そのページには、自閉症についての説明がされている。

慎吾「ほら、自閉症ってのは・・・
ひきこもりとかでなく、脳機能障害の１つなんです。
これがどのようにして、特殊能力の覚醒に結びつくかは・・・
未だに全くの謎らしいですが・・・」

ページに書かれてある内容を簡略して言っているだけだが、リナは真剣に聴いていた。

慎吾「それに、交通事故とか頭に衝撃を受ける事をきっかけに・・・
特殊能力に目覚めたって話が、よくあるんです」

実際交通事故など、頭に大きなダメージを受けた人物が、事故後特殊能力を発揮するという例は世界でも数多く報告されている。

慎吾「以前お笑いタレントだった、北尾監督も・・・
バイク事故の後に、芸術的才能が覚醒したと言われています」

リナ「あ・・・映画見ない私でも、北尾監督は知ってる。
毎年ヨーロッパで映画の賞を取っているのよね」

慎吾「そうです！　今や世界的な映画監督。世界中には彼のように・・・
　事故後、芸術や計算の才能を発揮した例がたくさんあるんです」
リナ「世界・・・中に・・・」
慎吾「だから・・・ひょっとしてリナ先輩。その症状が表れる直前・・・
　頭を強く打ったとか、そういう事ありませんでした？」
瞬間、リナは大きなポニーテールをとめているシュシュを右手で握りしめた。
リナ「・・・　・・・」
慎吾の言うとおり・・・思い当たる節がある。シュシュを握ったまま慎吾を見つめ・・・
リナ「話したく・・・ない」
声を絞り出した後、口元をぎゅっと閉じた。
慎吾「・・・　・・・」
過去リナに何かがあったらしいというのを、慎吾は察した。
慎吾「あ！　いえ、言わなくていいですよ！　すいません。
　僕はただリナ先輩のすごい能力について・・・

少しでも情報をと思っただけですから。
話したくない事は話す必要ないですよ」

優しい笑顔を見せながら、リナに声をかける。

リナの後頭部に大きな傷がある事・・・

それ以上に、大きな心の傷をリナがおっている事・・・

慎吾がそれらを知るのは・・・もう少し先の未来だった。

リナ「そっか・・・じゃ、私みたいな人が、この世界のどこかにいるのね」

慎吾「そうです。でもすごいな、リナ先輩。麻雀が強いのもそれですか？」

リナはパソコンから目を離し、天井を見上げた。

リナ「そうね・・・1度でも対局すれば、その人の打ち方が全てわかるわね。
それに一度見えた牌は勝手に暗記するから、残りの牌もある程度わかるし。

牌譜が勝手に頭の中に入ってくる・・・そんな感じかな・・・」

麻雀を全く知らない慎吾は、とりあえずうんうんと頷いている。

慎吾「へー、やっぱりすごいですよ、リナ先輩は。
僕、文系だし、数学は大の苦手ですし」

頭をかきながら、おどけて笑った。

慎吾「あー、サヴァン症候群・・・吾郎先生から話を聞いてなかったら・・・
絶対にわからなかっただろうな～」

リナは慎吾の笑う顔を見て・・・少し胸のつかえがとれたような気がした。

今まで・・・

数字が体を侵す・・・そんな気味の悪い病気を、世界でただ1人経験していると思っていた。

自分以外にも同じような感覚を持っている人間がいる・・・

そう思えるだけでも、リナの心には勇気がわいてくる。

慎吾「吾郎先生って、すごかったんですよ。オカルトの話をさせたら・・・」

慎吾は珍しくリナにずっと話しかけている。リナはそれを制止するように口を開いた。

リナ「あんたさぁ・・・私、気を遣われるのがイヤだって・・・

そう言ったの、覚えてるでしょ？」

リナが落ち込み気味だと察した慎吾が・・・喋って、場を和ませようとしているのを見抜いていた。

慎吾は話を遮(さえぎ)られても笑顔のまま。リナは小さな声で一言発した。

リナ「ありがと」

瞬間、慎吾は口を開いてびっくりした表情をする。その慎吾の表情を見て、今度はリナが驚く。

リナ「な、何よ、その顔！？」

慎吾は驚いた表情から笑顔に戻った。

慎吾「僕、リナ先輩って絶対【ありがとう】って言わない人だと思ってました」

リナは驚いた表情から、眉間にしわを寄せる。

リナ「あんたさぁ。私だって感謝すべき時には【ありがとう】ぐらい言うわよ！

ホントあんたって、天然で殺意与える時あるわよね！！」

慎吾「・・・　・・・」

ずっと笑顔の慎吾。リナの毒舌よりも【ありがとう】の方が圧倒的に嬉しい出来事だった。

リナも慎吾の笑顔に負けて

リナ「まぁ、いいわよ・・・ふん」

と声を発した。やれやれといった表情の後、自然と笑いがこみ上げてくる。

リナと慎吾。

2人が出会ってから初めて・・・お互いが、心から笑い合えた瞬間だった。

その心地よい瞬間を打ち破る者が現れる。

「すいません、ちょっといいですか?」

リナの肩を後ろからトントンと叩く人物がいた。

笑顔のまま、視線を慎吾から背後の人物へと移すため振り向いたリナ。

リナ「え?」

その人物を見たリナの表情が固まる。

そこには制服姿の警察官の姿があった。

（第５話へ続く）

第４話　数字依存症（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

ＴＶ局内で、人気アイドルのバッグ盗難事件が発生。
盗まれたのは、リナの大好きなイケメンジャネーズアイドル。
バッグを盗んだ犯人に憤りを覚えたリナは・・・
犯人を捕まえようと画策。
そしてまだ見ぬ、リナの驚くべき能力が発揮される。
次回　「　第５話　初めての事件　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第5話　初めての事件（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾。

大学の講義で知り合った１つ上の先輩リナ。講義の課題のため、２人でＴＶ局へと向かった。

そこで慎吾は、リナの驚くべき数字の感覚を見せつけられる。リナは【数字依存症】とよんでいたが、慎吾はそれが【サヴァン症候群】だと突きとめた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

不意にリナは・・・警察官に声をかけられ、固まってしまう。

第５話　初めての事件

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第5話　初めての事件

リナ「あ・・・」

声をかけてきた警官と視線が合い、固まるリナ。

警官「ちょっと聞きたい事があるのですが・・・
　よろしいですか？」

恰幅のよい白髪交じりの中年警官が、リナの顔を覗き込んだ。

リナ「あ・・・はい？　えっと・・　何で・・・しょう？」

緊張しているリナの様子を見た慎吾が、助け船を出す。

慎吾「あ、お巡りさん。お疲れ様です。何かあったんですか？」

笑顔のままいつもと変わらぬ口調で、警官に声をかけた。警官はリナから慎吾に視線を移す。

警官「あぁ。実はさっき、局内で盗難事件があったもので。
　君たちは・・・　ずっとここにいたかな？」

慎吾「はい。今日、局内見学で・・・」

首に提げていた、入局許可証を見せる。

慎吾「僕たちは15分ぐらい、ここでおしゃべりしてました。
　えっと・・・その盗難事件って、いつ頃ですか？」

リナに落ち着く時間を与えようと、間髪入れず警官に質問をぶつけた。

警官「うむ。通報が入ったのは今から１０分前だが・・・
盗難が発覚したのは、今から３０分ほど前。

タレントのバッグが楽屋から消えたらしくてね・・・」

慎吾「タレント・・・？」

警官「あぁ、何でも【松浦順】君というタレントのバッ・・・」

突然リナが反応する。

リナ「松順！？　【山嵐】の松順様のバッグが、盗まれたんですか！？」

急に大声を出したリナに警官は驚いた。

警官「あ、あぁ。財布や携帯、その他私物が入ったバッグが・・・
３０分程前に盗まれたらしいと通報があってね」

リナ「マ・・・　マジ・・・？」

警官「彼の楽屋から、バッグを持ち出す女性の姿も目撃されていてね・・・」

胸ポケットから、手帳を取りだしペラペラとめくる。

警官「長髪で、帽子を着けた女性が・・・バッグを持ち出したらしい。
そこで今、局内の若い女性を中心に聞き込みをしてるところなんだ。

知り合いにそういう人がいないか。
あるいは、そういう人を見てないか・・・」

リナ「・・・　・・・」

思いっきり眉間に眉をひそめたリナ。

リナ「あの・・・どんなバッグですか!?」

警官「真っ白なヤツで、肩にかける大きなスポーツバッグだ」

リナ「白の・・・　スポーツバッグ・・・」

ここまで、そのようなバッグを見た記憶はない。

警官「【長髪に帽子】【スポーツバッグ】を身につけた女性だが・・・

警備員からは、そういう人物を見たという情報がなくてね。
まだ局内にいる可能性が高いとみて、聞き込みをしてるところだ」

リナ「まだ局内に!?　わかりました!　見つけたら捕まえますから!」

迫力のある声を出しながら、リナが身を乗り出した。

警官「いやいや。怪しい人物見たら・・・
　局の人に迅速に伝えるか、すぐ１１０番してくれ。
　協力ありがとう。私は行く事にしよう」

慎吾「あ・・・はい・・・」

途中からリナの態度が一変したため、横でチョコンとしていた慎吾がお辞儀をする。警官が立ち去っていく姿を見守った後、リナに視線を移した。

リナは腕組みをしながら、その場で小さな円を描くように歩いている。

リナ「全く・・・松順様のバッグを盗むバカ女がいるなんて・・・
　ファンとして最低だわ・・・。何とか捕まえてボコボコに・・・」

不機嫌な顔で独り言をつぶやいているリナに、慎吾がおそるおそる声をかけた。

慎吾「あの・・・リナ先輩。ほら、もうすぐ3時。
　第１６スタジオで、時代劇の撮影風景見学ですけ・・・」

言い切る前に、リナに睨まれる。

リナ「はぁ？　松順様のバッグが盗まれたのよ！
　それどころじゃないでしょ！！」

目を丸くする慎吾。

慎吾「え・・・？　僕たちには・・・関係ない・・・かと？」

リナが慎吾の所へ歩み寄り、さらに睨み付ける。

リナ「あんたさぁ・・・
　あんたなら、どうやってバッグ持ち出したあと逃げる？」

慎吾「え？」

意外な質問を受けた慎吾は、額から汗を流した。

（慎吾「リナ先輩・・・マジで犯人捕まえる気だ・・・」）

慎吾「え、えーっと・・・普通に、玄関か非常口から逃げますけど」

リナ「あんたさぁ。本気で考えてないでしょ？
　どの入り口も警備員がチェック入れてるのよ！
　泥棒がそんなトコ堂々と通る？」

慎吾「あー、ほら。あえて堂々と通り抜けて、裏をかくって作戦で？」

リナは大きなため息をつく。直後、慎吾に顔を近づけ言い放つ。

リナ「いい？　お巡りさんの話じゃ、でっかいバッグ持った人物が・

・・・

ＴＶ局を出たという、警備員の目撃証言はないのよ?

トイレの窓とか、警備員がチェックしてないところとか・・・

・

もっとこう・・・犯罪者の気持ちになって・・・」

慎吾「・・・　・・・」

必死なリナの姿を見て、慎吾はちょっと真剣に考える。　ふとその場を離れ、ＴＶ局内の見取り図がある所へ向かった。何も言わずリナはついてくる。

局内の見取り図を真剣に見つめる慎吾。

慎吾「あの・・・地下駐車場はどうでしょう?」

リナ「はぁ?　私たちがさっき行った時、２カ所もゲートチェックあったじゃない」

慎吾「えぇ。でも確か駐車場の入り口横に・・・

【ＳＴＡＦＦ　ＯＮＬＹ】のエレベーターがあったじゃないですか。

見取り図で言うとココですよ」

地下駐車場の出入り口横にある、エレベーターの位置をさす。

慎吾「ここならタレントさんの楽屋から、チェック無しで駐車場へ行けます。

多分これ、タレントさんがすぐに移動できるようにっていう・・・

関係者専用というか、芸能人専用エレベーターじゃないかなと・・・」

リナも見取り図を確認する。確かにこのエレベーターを使えば・・・中に入る際も、チェック無しで局内に入ることが出来る。

リナ「ふ～ん・・・やっと真剣に考えたわね。でも残念。
駐車場は許可車しか止められないのよ。

駐車場から外へ出る際も、警備員がチェックするし」

慎吾「う～ん・・・」

右手の手のひらを額にあてた慎吾。

慎吾「いや・・・出来ます。まず僕たちみたいに・・・
局内見学の手続きをして、この入局許可証を手に入れる」

首にぶら下げた入局許可証を握りしめながら説明を続ける。

慎吾「その許可証を持って一度外を出て・・・
今度は車で地下駐車場から入る」

リナ「・・・　・・・」

慎吾「そしてこのエレベーターを使い、目的の楽屋に入り・・・バッグを盗む。

その後も同じエレベーターを使い、駐車場へ行き・・・

駐車場を出る時にチェックは入りますが・・・

バッグはトランクの中だから目撃されない・・・どうです？」

腕組みをしたまま、リナは真剣に聞き入った。

リナ「ふ～む・・・　アリね、その推理。

なるほど・・・駐車場のエレベーター。う～ん・・・

待ってよ・・・そういえば・・・」

何かを思い出したような表情を浮かべる。

リナ「そういえば・・・さっき駐車場を見た時・・・

1台だけ変な車・・・あったのよね」

慎吾「変な車？」

リナ「【わ】ナンバーよ。関係者が停める駐車場に【わ】ナンバーは場違いだわ。

それにエンジンかかってたのに、誰も乗ってなかった・・・超怪しい！」

慎吾「えっと・・・確か、【わ】ナンバーって、レンタカーでしたよね？」

リナ「そう。おそらく・・・犯人の車じゃない？」

目を大きく開いた慎吾。

慎吾「ありえますね。偽名で借りた車を使って逃走し・・・
そのままレンタカーを返して逃げれば、足はつかない。
エンジンかかっていたのは、すぐに逃走できるよう・・・」

リナ「うん。あの車ね・・・怪しいのは。よし!!」

そういうとリナは、ノートパソコンを取り出し起動する。

慎吾「・・・　？」

慎吾が黙ってその様子を見ていると、リナはキーボードをカタカタと打ち始めた。

リナ「さて・・・」

慎吾「あの・・・パソコンで・・・何かわかるんですか?」

リナ「わかるわよ・・・。この近辺で、レンタカー扱ってる店探すのよ」

慎吾「え?　でも、それで犯人を捕まえられるんですか?」

リナはキーボードを打ちながら慎吾を見る。

リナ「あんたさぁ・・・なんか秘密ある?　人に言えないような」

意表をついたリナの質問に、慎吾は一瞬身をひいた。

慎吾「え？　何でまた急に・・・？」

リナ「いいから！　これは人に言えない！！ってな秘密はあんの？」

慎吾は困惑した表情を浮かべる。

慎吾「えっと・・・・　あの・・・」

意を決したように慎吾は口を開く。

慎吾「僕・・・霊が見えます！！」

直後、リナは非常に残念そうな顔をした。

リナ「あんたさぁ・・・嘘つくならもうちょっと・・・
まぁいいわ。あんた、巧妙な嘘とかつけそうにないし。
いい？　今から私がする事は・・・絶対人に言っちゃダメよ！」

リナは慎吾を睨み付ける。

慎吾「え・・・？　は、はい。わかりました・・・
何を・・・　するんです？」

リナ「ほら、これ見て。近くのレンタカーの店のページ。
ここから社員専用のページに潜り込むの。

つまりパスワードが必要なリンク先ね」

パソコンの画面を見せながら説明する。

慎吾「えぇ？　ちょっと待ってくださいよ。
まず１つ、どうやって潜り込めるんですか！？

そういうとこって・・・
ＩＤとかパスワードとか必要じゃないんですか？」

リナ「ふん。本格的なセキュリティは導入してないわよ、こんな所。
まずＩＰアドレスからＦＴＰサイトを特定・・・」

喋りながらも高速でキーボードを打ち続ける。

リナ「私の組んだアルゴリズムのプログラムで・・・
ちょっとサーバにお邪魔して・・・パスワード保護を回避・・・

って言ってもあんたには理解できないわね」

慎吾「えぇ！？　ハッキングですか！？　それ？」

リナは首を横に振る。

リナ「私から言わせれば・・・
簡単にハックできるセキュリティシステムの方が悪いわ。

私は・・・なんだっけ？　サバンナ症候群なのよ！」

慎吾「サヴァン症候群ですよ」

リナ「そう、それ！
　サイト１つ１つのページが、数字の情報で頭に入ってくるもの。
　高度なセキュリティでない限り、どこにだって侵入できるわ」

慎吾「すごいけど・・・　でも・・・」

リナ「だから、絶対誰にも言わないでよ！　あんただから言ったのよ！」

慎吾「え・・・？　僕だから・・・？」

リナ「そう！」

慎吾「・・・　・・・」

首をかしげる慎吾。

リナ「別に深く考えなくていいから。あんたを信用してるって事よ」

慎吾「わ・・・わかりました。
　でも・・・レンタルした人の情報を、ネット上に残すでしょうか？」

リナ「当たり前じゃない！　あんたさぁ、何も知らないでしょ！」

慎吾「は、はい・・・」

正直に頷く慎吾。

リナ「レンタカーってのは、同じ系列店舗なら・・・
借りた所と返す場所が違っても大丈夫なのよ！

長崎でレンタルした車は、熊本でも返せるの！」

慎吾「え？　そ、そんなんですか！？」

リナ「だからレンタルした客の情報は・・・
ネット上でやりとりするのが常識！」

慎吾「知らなかった・・・。でもどうやって・・・
その車を探すんですか？　登録名も偽名だろうし」

リナ「だーかーらー！　一度見た車のナンバーは忘れないのよ私は！

あの【わ】ナンバーの車もちゃんと覚えてるってば・・・

ほら、あった！！！」

ハッキングしたレンタカーのとある店舗。その顧客情報ページを、慎吾に見せた。

リナ「あれ？　でもおかしいわね・・借りたのは一人で・・・
男だわ・・・　弘（ひろし）って名前の」

慎吾「・・・　・・・・」

リナと共に、その車を借りた人物の情報を凝視する。

リナ「名前は偽名だとしても・・・
　車レンタルする時、女装するとは思えないなー。
　犯人は女性だから・・・　シロ・・・？」

慎吾はそのページ情報を睨み付けたまま・・・

慎吾「いえ・・・　間違いないと思います。彼が犯人ですよ」

口を開いた。

リナ「え？　何故？」

慎吾「帽子と長髪の女性が犯人って聞いた時、違和感ありました。
　犯人が疑われないようにする、典型的なパターンにあるんですよ。
　性別を偽るってのが・・・」

リナ「そうか・・・犯人の方を女性と思わせれば・・・男は疑われない」

慎吾「リナ先輩、駐車場に行ってみましょう。その車があるかどうか確認しに」

リナは慎吾を見て軽く笑う。

リナ「必要ないわ。その車、今からおよそ5分後に・・・
　赤坂にあるレンタカーの店に到着する」

慎吾「え？　何故・・・」

リナ「レンタカーにＧＰＳがついてるのは常識。
　逆に貸した側も、貸した車の位置がわかるようにしているのも常識よ。ほら」

リナが示したページには、地図上を走る光の点滅があり・・・それが例の車だと言う。

その点滅は、あと数分で赤坂のレンタカー店に到着しようとしていた。

慎吾「で、でも、どうするんです？
　どうやってその人を・・・捕まえるんですか？」

リナ「はぁ？　そんなの簡単よ」

慎吾の目の前で、手のひらを上にして見せる。

リナ「携帯」

慎吾「え？」

リナ「あんたの携帯貸して」

慎吾「あ・・・はい」

慎吾はジーンズの左ポケットから携帯を取り出しリナに渡した。
リナは即座に「1」「1」「0」とプッシュし、慎吾に返す。

慎吾「え!?　ちょ・・・１１０番!?　どうするんですか?」

リナ「赤坂のレンタカー店に、お巡りさんを向かわせて」

慎吾「え!?　どんな風にお巡りさんに言えば・・・
あ!　はい!　もしもし!　えっと・・・

僕は慎吾って言いますが・・・
あの・・・赤坂のレンタカーの店にですね・・・」

リナは自分の携帯電話を使い、赤坂のレンタカー店へ電話をかけた。

リナ「あ!　こちら赤坂警察署です。ちょっと情報が入りましてね。

「２３－〇◎」ナンバーの車をレンタルしてる客がですね・・・

盗難事件関与の疑いがありまして・・・はい・・・そうです」

慎吾「そ、そうです。犯人がそのレンタカー店に・・・」

リナ「えぇ、もしその客がそちらに現れましたら・・・
しばらくの間、足止めしてください。

えぇ・・・そうです。５分でそちらに向かいますので」

こうして・・・

ジャネーズの人気アイドルグループ【山嵐】のメンバー松浦順・・・

彼のバッグを盗難した犯人は、犯行からわずか９０分で捕まる事になる。

しかしこの事件解決がきっかけで・・

２人はさらに大きな事件に巻き込まれる事など・・・

まだ知る事はない。

（第６話へ続く）

第5話　初めての事件（後書き）

〜〜〜

次回予告

リナの活躍で、アイドルバッグ盗難事件の犯人を逮捕。
思わず警察に名前をもらした慎吾は、事情聴取を受ける事になってしまった。

そこで日本のトップアイドル【松浦順】と出会う事になる。
その彼と初対面したリナは・・・？

次回　「　第6話　運命の出会い　」

〜〜〜

第6話　運命の出会い（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第６話　運命の出会い

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第6話　運命の出会い

リナ「ったく・・・。あんたさぁ・・・
　　ホント間抜けよねー」

腕組みをしたリナが、大きなため息をつく。

慎吾「し、仕方ないじゃないですか・・・。
　　リ、リナ先輩が急に１１０番するから・・・」

２人はＴＶＳのとある一室で、ある人物を待っていた。

リナ「は～・・・」

タレントの【松浦順】バッグ盗難事件を解決した２人。慎吾は１１０番で犯人情報を提供した際、自分の氏名と電話番号まで警官に伝えてしまった。

リナ「あんたさぁ・・・あーいうのは、匿名でいいのよ、匿名で。
　　最悪、電話番号は教える必要ないっつーの！」

警官側から折り返し電話を受けた慎吾は、ＴＶＳのとある一室で待つように指示される。今回の盗難事件に関し、事情聴取を受けるためだ。

慎吾「あー・・・僕、お巡りさんに何て言えば・・・？」

右手の拳をトントンと軽く頭に叩きながら、悩むそぶりを見せる。

リナ「知らない。アドリブで何とかしてよ。
　ヘタな事言って、帰るの長引くのはゴメンだからね！
　てか、マジ長引いたら・・・あんた置いて帰るから」

冷たく言い放つリナは、今回の事件解決の中心人物であったが・・・
警官側には一切自分の身元情報を伝えてない。

リナ「さて・・・あたしは局内ブラブラして・・・
　イケメン芸能人と【運命的な出会い】でもしてこようかしら」

そう言うと部屋の出口へと向かった。

慎吾「ちょ・・・　リナ先輩・・・」

泣き顔でリナの後を追おうとする。後ろを振り返ったリナは・・・

リナ「はい！　これも勉強の１つ！　頑張って事情聴取されてね！」

満面の笑みを浮かべた。瞬間、思いっきり怖い表情になる。

リナ「いい？　あたしは今回の事件、一切関わってないから。
　絶対、あたしの名前出さないでよ！！」

慎吾「は・・・はい・・・」

慎吾の困惑した顔を確認したリナは、再び笑顔になる。

リナ「じゃ、私はこれで。
　運命の出会いの旅に・・・いざ出発～」

言いながらドアノブに手をかけようとした。

ガチャッ。

ドアノブに触れる直前、部屋の外側から扉が開けられる。そして一人の警官が、部屋の中に入ってきた。

リナ「あら・・・　お巡りさん。
　意外と早かっ・・・　た・・・　わ？」

警官と目があった瞬間、言葉に詰まるリナ。そして口を【わ】の形に開けたまま固まった。

慎吾は、入ってきた警官を見て緊張する。

慎吾「あ！　お、お巡りさん！！　ぼ、僕は慎吾って言いまして・・・」

1つの乱れもない警官服をビシッと着こなし・・・少し外側に跳ねたクセっ毛、日本人離れした端整な顔立ちはヨーロッパ系のハーフかと思わせる。

その警官は慎吾と目を合わせ口を開く。

男「はは。お巡りさんに見える？　だとしたら嬉しいなぁ」

リナの視線は・・・透き通るような声のその男に、釘付けのままだ。

男「初めまして。俺は松浦順。お巡りさんでなくてタレントなんだ。
　ドラマの撮影でこんな格好してるだけさ」

一瞬「え？」という顔をした慎吾。

慎吾「あー！！　バッグ盗まれたタレントさんですね！　初めまして！」

慎吾は深々とお辞儀をした。

松浦「はは・・・　そう、バッグ盗まれた間抜けなヤツさ」

慎吾「あ、いえ！　そんなつもりでは・・・」

軽く頭をかいた松浦は、慎吾の目を見て笑顔を見せる。

松浦「お巡りさんから聞いてるよ。本物のね。
　犯人捕まえたの・・・君だって？」

慎吾「え、あ・・・」

松浦「心から礼を言うよ・・・」

そういうと松浦は右手を慎吾の前にさしだし、握手を要求した。

慎吾「・・・　・・・」

握手に応じた慎吾は、困った表情を見せる。

慎吾「あー、いえ。はい・・・」

事件解決の一番の功労者は・・・リナ。彼女がいなければ、間違いなく犯人は逃走していた。

でもリナは、今回の事件に関わっていない事になっている。慎吾はリナに視線を向けたが、口を開けたまま松浦を見つめ・・・固まり続けていた。

慎吾「・・・　・・・」

そんなリナを見て、慎吾は意を決する。

慎吾「えぇ。でも僕は・・・
　犯人を見つけた後、どうしたらいいかわからなくて・・・」

リナの方に視線を合わせたまま・・・

慎吾「リナ先輩が、警察や警備員に連絡するように言ってくれたんです。
　リナ先輩がいなかったら・・・パニクって犯人逃がしてました」

笑顔で説明する。

松浦「・・・　・・・」

松浦の視線は・・・慎吾から、赤いメガネの女性へと移る。そして

呆然としたままのリナへと、ゆっくりと歩み寄っていった。

松浦「・・・　・・・」

リナの真正面に立った松浦は、さわやかな笑顔をふりまく。

リナ「あ・・・　・・・」

目の前に、あこがれのアイドルがいる。

さわやな笑顔の松浦は、リナから視線をそらさず・・・

優しくハグした。

松浦「ありがとう。君がいなければ・・・　ホントに感謝してるよ」

ハグしたまま、リナの耳元で囁く。

その後リナの両肩に手を置き、真正面から目を見つめる。

松浦「ありがとう」

2度目の感謝の言葉を囁いた。ステキな笑顔を見せた後、慎吾の所へと戻っていく。

リナ「・・・　・・・」

リナの心臓はバクバクと激しく動悸し、全身の鳥肌が立った。松浦

に声をかけようと脳が命令するのに、体がそれを拒否する。

リナ「・・・　・・・」

ただ・・・　その場で固まる事しかできなかった。

松浦「バッグには携帯も入ってたから、焦ってたんだ。
　アイドルとか芸能人の情報が、１０００以上も入っててさ。
　あれが一般人に出回ったらと思うと・・・
　バッグが戻ってきて、ホントよかったよ」

慎吾「・・・　・・・」

感謝の言葉をさらっと言える松浦を見て、慎吾は好感を持った。

ガチャッ。

直後、部屋には・・・本物の警官が入ってきた。

その後・・・無関係者のリナは、部屋の外に出され・・・

松浦や松浦のマネージャ、それに慎吾と2人の警官による事情聴取が行われた。

慎吾は・・・

たまたま駐車場で見かけた男が白いバッグを持って、急ぎ足でレン

タカーに乗り込む姿を見た・・・

そこで慌てて１１０番したというシナリオを、しどろもどろで警官に説明した。

・・・　・・・。

約1時間・・・事情聴取は終了した。

警官らが部屋から出た後・・・松浦と慎吾が出てきたのはその３０分後。

慎吾「とにかく大事（おおごと）にならなくって何よりです」

松浦「あぁ。またどこかで会うことがあれば絶対声かけて」

慎吾「はい！」

笑顔のまま元気よく応えた慎吾は、数m離れた所にリナがいるのに気づいた。

カベを背に立っていたリナ。2人が出てきたのを見て近寄ってくる。

慎吾「あ！　リナ先輩！　え？　まさかずっといたんですか！？」

リナは慎吾を無視して松浦の正面に立った。そして深く頭を下げ・・・

リナ「握手してください！」

両手を松浦の前に出した。

一瞬驚いた表情を見せた松浦だが、

松浦「ＯＫ」

優しい声で返し、リナの両手を握り返す。

リナ「は・・・　・・・」

手を握られたリナは、顔を松浦に向けた。

松浦「リナ。ありがとう」

待ってましたとばかりに、さわやかな笑顔を作り・・・リナの瞳を直視する。

リナは無意識に口が開き、

リナ「ふぁ～・・・」

気の抜けた声を出す。

松浦は握手を解こうとするが、リナがそれを許さない。しかしそこは、日本を代表するアイドル松浦。

強引に・・リナの手をふりほどき、今度は慎吾と握手をした。リナの手を無理矢理ほどいたそぶりを全く見せない、握手から握手への

自然な流れ。

リナ「・・・　・・・」

慎吾はリナに睨み付けられているのに気づかない。松浦は握手を解いた後、慎吾に質問した。

松浦「そういえば・・・
　大学のレポート課題のため、ＴＶ局に来たと言ってたね。
　何か面白いものは見たかい？」

慎吾「あ、いえ・・・。実はまだどこも見て無くて・・・」

ふと廊下の向こうのロビー・・・柱にかかっている時計が目に入った。

慎吾「あ・・・もう６時回ってるや・・・」

ニュースの生放送を見学する予定だったが・・・間に合う時間ではない。

松浦「えー、ひょっとして・・・俺のせいで、何も見られなかった！？」

慎吾「ま、まさか・・・違いますよ」

慎吾は不自然な笑顔で返事する。

松浦「そうか・・・悪いことしたね・・・」

慎吾の下手な笑顔は、松浦に通じない。自分のせいで、慎吾達の予定を台無しにしたと確信した松浦は・・・

松浦「よし！！」

思い立った声をあげると、側に立っていたマネージャとヒソヒソ話を始めた。

時折、慎吾とリナに視線を向けながら・・・。

話が終わった後、慎吾に声をかける。

松浦「君達さえよければだけど・・・
あさっての5月5日。ＴＶＳの特別番組の収録があってさ。
俺ら【山嵐】がスペシャルゲストなんだけど・・・
観客席に、君たちを招待するよ」

慎吾「え！？　ホントですか！？」

驚いた声をあげる慎吾。

松浦「俺のドジで・・・君たちは何も見学出来なかったし・・・
それじゃぁ、レポート書けないだろうしさ」

リナ「行きます！　行きます！　絶対行きます！　お願いします！！」

松浦と慎吾の間にリナが割って入ってきた。

リナは松浦の手を握ろうとしたが、松浦はさりげなくポケットに両手を入れてそれを拒否する。

松浦「じゃぁ決まりだな。マネージャが今から招待状渡すからさ」

言いながら目線で、マネージャに合図をする。

松浦「それと、1つ約束してくれないか？
必ず収録前に・・・俺にあいさつしに来て欲しい。
それだけ。いいね？」

リナ「はい！　はい！！！」

慎吾「わかりました」

2人はマネージャから招待状を受け取った。そして松浦は、右手で「グッバイ」の合図をしてマネージャと共に去っていく。

リナは去りゆく松浦に、いつまでも大げさに手を振っていた。

満面の笑みを浮かべるリナに、慎吾が声をかける。

慎吾「でもよかったですね。憧れの松浦さんにハグされて」

リナは眉をひそめて、慎吾を見た。

リナ「え？　何言ってんの？　握手しかしてないわよ、私」

慎吾「いやいや・・・最初ハグされてたじゃないですか・・・」

リナ「嘘！　なんでそんな嘘つくの！？」

慎吾「え？　いや・・・だって・・・
　ひょっとして、記憶ないんですか？　ハグされた時の？」

リナは両手で頭を抑え、思い出そうとするそぶりを見せる。

慎吾「あの・・・どこまで記憶があります？」

リナ「えっと・・・
　運命の出会いを探しに、部屋を出ようとして・・・
　気がついたら、部屋から出てきた松順様と握手した・・・」

慎吾「うわ！　その松順様がリナ先輩ハグしたんですよ！
　あんなに記憶力すごいのに・・・
　一番いい想い出だけ、欠損してるんですか！？」

リナは両手で頭を抑えて叫んだ。

リナ「うそー！　絶対うそー！！　でもあんた嘘つかないし・・・
　日本で唯一松順様のハグを受けたのに、何で記憶ないのー！！」

慎吾「いや・・・唯一じゃないと思いますけど・・・」

この調子で2人は・・・

ＴＶ局の出口へと向かっていった。

リナ「あ、ちょっと待って。化粧直し行ってくるから」

若干冷静さを取り戻したリナが化粧室を探す。

慎吾「あ、あっちにあるみたいです」

トイレ表示を見つけた慎吾が、その方向を指さす。

慎吾「じゃぁ僕、この辺で待ってますね」

リナを見送った後、慎吾は先ほどもらった招待状を見た。

慎吾「・・・　・・・」

見た瞬間、慎吾の表情が一瞬固まる。

招待状には、松浦のマネージャのサインと・・・

特別番組の番組名と収録時間が書かれているだけだった。

その番組名は・・・・

【１０年ぶりに復活！　徳川埋蔵金を追え！　ついに発見！？】

慎吾「・・・　・・・」

招待状から目が離せない。

慎吾「徳川・・・埋蔵金か・・・」

軽くため息をついき、天井に視線を移した。

慎吾「・・・　・・・」

じっと蛍光灯の光を見つめる。

「驚いたな」

ふと慎吾に声をかける者がいた。

慎吾「え？」

視線を正面に戻すと・・・男が立っている。

慎吾「・・・　・・・」

この男こそ・・・後の慎吾の運命を大きく変える人物。

慎吾にとってはまさに・・・運命的な出会だった。

（第7話へ続く）

第6話　運命の出会い（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

招待状を見つめながら、考え事をする慎吾に声をかけた男。
その男は慎吾に意味ありげな言葉をかけてくる。
後に慎吾の運命を大きく揺るがす事になる、彼の正体は・・・？

次回　「第7話　スピリチュアル・カウンセラー　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第７話　スピリチュアル・カウンセラー（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・

アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。そしてアイドルの松浦から、２人は特別番組の観客としての招待を受けた。

ＴＶ局から出ようとした慎吾に、何者かが声をかける。

第７話　スピリチュアル・カウンセラー

第7話　スピリチュアル・カウンセラー

慎吾「・・・　・・・・」

その男は・・・

Ｙシャツネクタイ、黒いスーツをびしっと決め、銀縁メガネはその知性をにじみ出している。右手はポケットの中、左手は黒い大きなバッグを持っていた。

年の頃は４０歳前後といったところか、メガネの向こうの優しそうな目は慎吾を冷静に見つめている。

慎吾「あ・・・　あなたは?」

男「驚かせて失礼。私の名は江浜。
　スピリチュアル・カウンセラーをしている」

そう言うと、眼鏡を外し胸ポケットにしまった。

江浜「この眼鏡は・・・　まぁ、フィルターのようなもんでね・・・」

ズボンのポケットから名刺入れを取り出すと・・・1枚の名刺を慎吾に渡す。

慎吾「・・・　・・・・」

無言で受け取る慎吾を見て、江浜は静かに話し始めた。

江浜「仕事がら、いろいろな霊を見てきたが・・・
　日本を統べた人物を守護霊を持つ者は少ない」

慎吾「！？」

慎吾の表情が急に険しくなる。

江浜「安心しろ。私は敵ではない。１つ警告したいだけだ」

直立不動のままピクリとも動かず、江浜は慎吾の目を見続けている。

江浜「ＴＶ局は特異な所。芸能人やその関係者だけでなく・・・
　政界や財界、各界の人間、はては暴力団や犯罪者なども訪れる事がある。

　君がこんな所に来るのは危険だ。悪意を持った者に狙われかねないからな」

慎吾「・・・」

緊張した表情の慎吾。江浜への視線を切らすことはない。

江浜「ふ・・・。それぐらい警戒してくれた方がちょうどいい。
　とにかく、こういう所はなるべく避けろという警告さ」

優しいながらも厳しい眼差しを慎吾に向け、小さく笑った。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は、どんな言葉を返していいのかわからない。

ふと化粧直しを終えたリナが戻ってきた。

慎吾に「お待たせ」と声をかけようとしたが・・・にらみ合う2人の男にただならぬ雰囲気を感じ、足を止める。

江浜「万が一何かトラブルに巻き込まれるようであれば・・・
いつでも連絡を。名刺は無くすなよ。お守りにもなっている」

慎吾「・・・　・・・」

名刺を見つめる慎吾。

江浜「もっとも君には・・・
その程度のお守りなど、必要無いが・・・」

そう言うとリナの横を通り過ぎ、ＴＶ局の奥へと向かって行った。

江浜が横を通り過ぎた後、リナが慎吾の元へよってくる。

慎吾の目線は、江浜の後ろ姿を追ったままだ。その視界をリナがさえぎる。

リナ「あんたさぁ・・・　江浜氏と何話してたの？」

リナの声で我に戻る慎吾。

慎吾「え？　あぁ・・・　えっと？　何でしたっけ？」

軽く慎吾の頭をはたくリナ。

リナ「何、寝ぼけてんのよ。
　何であんたが、江浜氏とにらみ合っていたかって話」

慎吾「え？　リナ先輩・・・今の人、知ってるんですか？」

慎吾の目を見て、リナは大きく口を開ける。

リナ「マジ！？　あんたマジ江浜氏、知らないの！？」

リナの大きな声に気圧（けお）される慎吾。

慎吾「え？　ひょっとして超有名なタレント・・・？」

リナ「違うわよ！　日本一有名なスピリチュアル・カウンセラーよ！
　あんたさぁ、あの有名な番組【ホラーの湖】見た事ないの？」

慎吾は迫ってくるリナに、両手でストップのジェスチャーをした。

慎吾「あ・・・　ない・・・です」

リナ「霊に関する仕事してる人よ」

慎吾「霊・・・関係？」

リナ「行方不明になった亡骸をさがすとか、悪霊が憑いた人のお祓

いするとか・・・
　他には、殺人事件の霊視による犯罪捜査とかもやってたわね。
　すっごい霊能力の持ち主で、色んな事件を解決してるのよ」

慎吾「そ、そうなんだ・・・」

リナ「日本一の霊能力者として、超有名よ。マジ、知らなかったわけ？」

慎吾「は、はい・・・」

リナ「で？」

慎吾「？」

リナ「その江浜氏と何話してたのよ？
　彼も私のイケメンランキングベスト１０に入ってるのよ。
　とても５０歳には見えない、若々し・・・」

慎吾「え！？　あの人５０歳なんですか！？　全然見えない・・・」

リナの言葉を遮って、慎吾は驚きの言葉をあげる。

リナ「噂じゃ、高校生ぐらいの娘がいるらしいわよ。
　まぁ今日は私・・・　松順さまでお腹いっぱいだから・・・

」

そう言うと、出口に向かって歩き出した。

リナ「さ！　帰るわよ！」

慎吾「え・・えぇ・・・」

２人はＴＶＳの出入り口で、入局許可証を返却して帰路につく。

・・・　・・・。

帰りの新幹線の中。

窓際に座るリナは、ずっと外の景色を見ている。

慎吾「あれ？　リナ先輩、麻雀しないんですか？」

隣に座る慎吾が声をかけた。

リナ「あんたさぁ。私が年中麻雀してると思ってるわけ？」

振り返ったリナは、怪訝な表情を浮かべる。

慎吾「い、いえ・・・ただ、麻雀で勝つのがすごかったから・・・
　また見られるかなーって」

リナ「ったく・・・。
　まぁ、あんたのおかげでサバンナ症候群とやらもわかった

し」

慎吾「わざと間違ってますよね？　サヴァン症候群です！」

リナ「そうだっけ？」

慎吾「でも、リナ先輩・・・1つ聞いていいですか？」

リナ「何？」

慎吾「いや、レンタカー店のページにハッキングしたじゃないですか」

リナ「もう少し小さな声で話してよ。それに絶対それ、他言しちゃだめよ！」

慎吾「わかってます。ただ、例えば金融関係とかにですね・・・」

声を小さくしながら話す慎吾。

慎吾「ハッキングして、お金とか引き出せるのかなーって・・・」

リナ「そういう所のファイアーウォールは、さすがに高度だから。私でも、そう簡単には破れないわよ。

でも、まぁ・・・本気出せば出来ると思うけど・・・」

慎吾は専門用語の意味を理解していないが、とりあえず頷く。

ふとリナが何かを思い出したように熱く語り始めた。

リナ「お金はね！　お金はハッキングして稼いでも意味ないの！！
　　ウデよ、ウデ！　自分のウデで稼いでこそのお金よ！」

そう言うと右腕の上腕二頭筋を、左手でパチンと叩いた。

慎吾「そうですか・・・」

と言いつつも

（慎吾「賭け麻雀も、違法サイトなのに・・・」）

心の中ではそう思っている。

リナ「お金は・・・大好きだけどね・・・」

どうやらリナには・・・リナなりのお金に対するポリシーがあるらしい。

慎吾は同じセリフを、ちょうど7ヶ月後にも聞かされる事になる。
その時には・・・まだ知る事のない、リナの重大な秘密を知る事になるのだが・・・

慎吾「あともう1つ。お巡りさんがリナ先輩に声かけた時・・・
　リナ先輩、すっごい緊張してたじゃないですか。
　過去逮捕された事でもあるんですか？」

リナ「はぁ～！？　なんで私が逮捕されんのよ！！
　ばっかじゃないの、あんた！！」

反射的に大声で言い返す。

リナ「賭け麻雀のサイトで荒稼ぎしてるのがあるからさ・・・
　ちょっとドキッとしただけよ！

　まぁ・・・アメリカのサーバ経由してるから・・・
　簡単には足つかないはずだけど・・・」

慎吾「なるほど。てっきり逮捕歴があるのかと思いましたよ」

そうでない事が、ガッカリしたようなという表情で小さく笑う慎吾。

リナ「笑うトコじゃないっつーの！！
　私はあれで学費・生活費、その他全てまかなってるんだから！

　あんたみたいな親の仕送りは一切ないんだからね！」

慎吾「わ・・・そうなんですか！？　やっぱりリナ先輩はすごいな～。

　自分で生きていく力を持っている！」

少しずつリナに関する知識が増えていく慎吾。なんだか嬉しくなり、さらに笑顔がこぼれた。

リナ「あー・・・でも、せっかく松順様に会えたんだから・・・
　握手だけでなく、サインももらっておけばよかったー」

リナはお祈りのポーズをして、新幹線の天井を見つめる。

その言葉を聞いて慎吾が、思い出したように声をあげた。

慎吾「あ！　忘れてた！　リナ先輩！
　事情聴取が終わった後ですね・・・
　僕、松浦さんにサインもらっておきましたよ」

リナ「え！？　マジ！！」

慎吾「なんかリナ先輩、松浦さんの事すごい好きそうだったし。ほら！」

慎吾はリュックの中からタオルを取り出す。
それには日本のＴＯＰアイドルの１人、松浦順のサインが書かれていた。

慎吾「このタオル、買ったばかりでまだ未使用ですから。
　ホントは色紙があればよかったんですが・・・
　あの時は事情聴取だったし、手元にはこれぐらいしかなくて・・・
　これでよろしければ、差し上げます」

リナ「わー！！　タオルでも全然ＯＫ！！　マジ嬉しい！
　てかあんた気が利くじゃない！　やりぃ！！」

リナは松浦のサインが書かれたタオルのにおいをかぎ始めた。

（慎吾「はは・・・気を遣われるの、嫌いって言ってたのに・・・」）

タオルを顔にくるみ、妄想モードに陥るリナ。しばらくそれを見ていた慎吾が、その妄想を打ち破る。

慎吾「あ・・・リナ先輩？」

ニヤけた顔が一瞬にして不機嫌な顔になる。

リナ「なに！？」

慎吾「あ、いや・・・　ほら、明後日の収録見学・・・
　　行きます・・・よね？」

リナ「当たり前じゃない！
　　今度は【山嵐】メンバー全員のサインゲットするわよ！」

（慎吾「・・・　レポートの事、全く頭に入ってない・・・」）

すでにリナは本来の目的を忘れていると確信した。

慎吾はガッツポーズしてるリナに聞いてみる。

慎吾「明後日の収録なんですけど・・・
　　僕も行った方がいいですかね？」

（江浜「君がこんな所に来るのは危険だ」）

江浜に言われた言葉を、少し気にしていた。

リナ「はぁ？　当たり前でしょ。あんたは私のレポ・・・」

リナは「あっ」という顔をする。そのリナの表情を見て、慎吾は笑顔でこたえた。

慎吾「はは。大丈夫ですよ。リナ先輩のレポートも、僕、書きますから」

リナ「あ、あら・・・　気が利くわね、今日は」

ばつの悪そうな表情を見せるリナ。

江浜に言われた事も気になったが・・・　慎吾は、再びリナとＴＶ局に行く事を決意した。

・・・　・・・。

箱根湯本駅・駅前、午後９時過ぎ。

慎吾「なんだか・・・　色々あった１日でしたね」

リナ「そうね・・・う～ん・・・」

思いっきり背伸びする。

リナ「今日は変な事件あったけど、スピード解決できたし。
松順様と握手も出来たし・・・サインももらったし！！！
レポート書いてくれる約束も取り付けたし！！」

そういうとリナは慎吾の顔を見た。慎吾は一瞬ドキッとする。

リナ「ありがと！」

リナは笑顔で、素直に感謝の言葉を言った。

慎吾「こ・・・こちらこそ、ありがとうです！
あんなに遠くまで、案内して貰って・・・」

小さな笑顔で慎吾もこたえる。

慎吾「僕、女の人と2人で出かけたの・・・初めてです！　楽しかったです！」

その言葉を聞いたリナが冷ややかな顔になった。

リナ「あんたさぁ・・いい1日だったと締めくくりたい時にそれ？
何、この場でチェリーを宣言してんのよ・・・」

慎吾「え？　何ですか、チェリーって？」

慎吾は笑顔のままリナに聞き返す。リナは小さく溜息をつき・・・

リナ「今度ネットで調べてみなさい。じゃ、ここでお別れね！」

そう言い放つと、片手でさよならのそぶりを見せ、スタスタと歩き出した。

慎吾「あ、待ってください」

慎吾がリナの後を追いかけてくる。

リナ「ちょっと・・なんでついてくるのよ？　今日はもうバイバイっしょ？」

慎吾「あ、僕もこっちなんです、帰り道」

慎吾は、リナが歩き出そうとした方向を指さす。

リナ「えー・・・」

リナは露骨にイヤそうな顔をした。

・・・　・・・。

しばらく同じ道を歩いていた2人。

慎吾「でも今日のリナ先輩、カッコよかったです！」

リナ「あ、そ」

どうでもいいといった感じで、素っ気なく返事をするリナ。

慎吾「絶対リナ先輩以外、犯人捕まえられる人いませんでしたよ！」

慎吾は、少し興奮気味に話していた。

リナ「あんたさぁ。まさか私に惚れたりしてないわよね？」

慎吾は笑顔のまま、リナを見つめる。

リナ「・・・　・・・」

一瞬ドキッとするリナ。

慎吾「惚れたりなんて絶対ないですよ！」

慎吾は元気よく素直こたえた。この日何度目だろうか・・・リナの冷ややかな視線が慎吾を突き刺す。

リナ「あんたさぁ・・・ホント、マジで空気よめないっつーか・・・
天然で人に殺意与えるプロよね、プロ」

慎吾「え？　今、僕、何か失礼な事言いましたっけ！？
だってリナ先輩が好きなのは松浦さんでしょ！

次のＴＶＳ訪問であいさつしに行くし・・・楽しみですね♪」

リナは軽く頭をかく。

慎吾「今度、２ＳＨＯＴの写真撮ってあげますよ！」

嬉しそうに話す慎吾。

リナ「・・・　・・・」

慎吾と出会って何度目となるだろうか・・・リナは小さく溜息をつ

いた。

リナ「まぁ・・・いっか・・・」

・・・　・・・。

数分後。

大通りから小道に入り、しばらく歩く2人。

リナ「結局あんた・・　私んちの前までついてきたわね・・・」

2人は、とあるマンションの前で立ち止まった。

リナ「あたしはこのマンションだから。あんたんちは？
まだ先？　それとも・・・

実は私を送ろうとか、変な気を利かせたわけ？」

慎吾「あー・・・」

慎吾はマンションを見つめ、こたえづらそうな顔をする。

リナ「あ、やっぱり私を送ったのね！　気を遣わなくていいってば！」

不機嫌そうに語るリナに、慎吾が口を開いた。

慎吾「あ・・・　僕・・・　僕もこのマンションなんですけど・・・

」

慎吾は目の前のマンションを、申し訳なさそうに指さす。

リナ「えぇ！？　　マジ！？」

閑散とした小道に、リナの大声が響き渡った。

（第８話へ続く）

第7話　スピリチュアル・カウンセラー（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

２度目のＴＶ局見学前日。パソコン室で調べ物をしていた慎吾は、リナと鉢合わせる。徳川埋蔵金は眉唾ものだと主張するリナに対し、慎吾は豊富な知識で反論。

慎吾は実際に発掘された埋蔵金の話を始めた。その価値１０億円という話に驚くリナ。

次回　「　第８話　埋蔵金伝説　」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第8話　埋蔵金伝説（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　First　season

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、2人は特別番組の観客としての招待を受ける。

慎吾はTV局で、スピリチュアル・カウンセラーの江浜に声をかけられた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第8話　埋蔵金伝説

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第8話　埋蔵金伝説

ＴＶ局での見学を終えた翌日。
（実際は盗難事件の犯人を捕まえ、タレントにサインをもらっただけで、見学はしていないが・・・）

２０１２年5月4日、正午過ぎ。
ＧＷで大学は休講であったが、慎吾は大学のパソコン室にいた。

自宅にパソコンを持たない慎吾。課題や調べ物をする時、いつもここを利用している。

大学が休みとはいえ、構内にはまばらに学生や教授の姿が見えた。
仕事に励む教授、サークル活動にいそしむ学生や図書館で勉強する学生、ただたむろしているだけの学生・・・

約５０台のパソコンが設置されたこの部屋にも、５，６名ほどの学生の姿が見える。

慎吾は一番後ろ、一番奥のパソコンを利用していた。

【スピリチュアル・カウンセラー】【江浜】【霊】などを検索ワードにし、たどりついたページを熱心に読んでいる。

そしてＴＶＳ・週一レギュラー【ホラーの湖】という番組に、彼が出演していることを知った。

番組中で彼は、行方不明になった家族の亡骸を見つけ出したり・・・

悪霊のようなものに憑かれた人を除霊したり・・・
悪夢にうなされる者へ、的確な助言を与えたり・・・
季節の変わり目などの特番では・・・殺人事件における死体を霊視し、犯人逮捕に貢献したりもしている。ＹＯＵＴＵＢＥでは、彼が除霊した回の放送分を見る事も出来た。
「あら・・・？」
パソコンから目が離せない慎吾に、何者かが声をかける。
「なんであんたがここいるの？」
慎吾が振り向くと、眠そうな目をしたリナが横に立っていた。
慎吾「あ・・・リナ先輩。あれ？　今日大学休みですよ？」
反射的に出た慎吾の言葉は、リナを不愉快にさせる。
リナ「あんたさぁ・・・大学休みでも来ちゃいけないってルールある！？
　むしろ休みの日にパソコン室で仕事しようってんだから・・・
　褒めてもらいたいぐらいだわ！」
慎吾「え？　仕事って・・　麻雀ですか？」

リナ「そそ。ホントはいつもその席でやってるんだけどね」

アゴで慎吾の操作しているパソコンをさす。

慎吾「あ・・変わりましょうか？」

リナ「いい。気を遣われるのイヤだって言ってるでしょ。
ここでいいわよ」

そういうとリナは慎吾の隣に座り、パソコンを起動させた。

リナ「ノートより・・・　デスクトップの方が、大きくて見やすいのよね～」

パソコンが起ちあがる間、リナは慎吾のパソコンを覗き込む。

リナ「あら、江浜氏ね。ホントＴＶ映りいいわよね～。５０歳に見えない！
でも最近、この【ホラーの湖】も視聴率悪いらしくてさ・・・

打ち切りの話出てるんだって」

この番組では、よく「スピリチュアル・カウンセラー江浜氏は・・・」というナレーションが流れるため、リナも彼の事を【江浜氏】とよんでいた。

慎吾「リナ先輩は・・・この番組、よく見てるんですか？」

リナ「昔はよく見てたんだけどね～、最近は全然。

でもこの番組さ・・・　モロやらせでしょ？」

慎吾「え・・・？」

目を丸くする慎吾。

リナ「だって霊なんているわけないじゃん！　やらせってわかってても・・・

江浜氏のイケメンさと、番組構成の巧みさ！

リアリティあって面白いのよねー。

まぁでも最近は・・・マンネリだから、見なくなったけどさ」

（慎吾「そっかぁ・・・リナ先輩は、霊の存在を信じてないんだ・・・」）

慎吾は・・・

子供の頃から霊が見え、霊と会話して育ってきた。

幼い頃の慎吾は、人間も霊も同じ世界に住んでると思っていた。日常で人と会話もすれば、霊とも会話する。

霊は必ずしも人の形をしてるわけではない。

時には、火の玉が話しかけてきたり・・・　時には、体長５ｃｍ程度の小さなおじさんが群れをなして話しかけたり・・・

時には、全く喋らない緑色の人や黄色の半漁人みたいな人も見かけ

る事があった。

霊の世界には・・・　いろいろな形を有したものが存在するのである。

また霊の世界にも・・・　人間界同様、悪い霊も良い霊も、普通の霊もいる・・・。

霊と話す慎吾は・・・周りから見れば、宙に向け独り言を言う不気味な子供だった。

母親が慎吾を気味悪がった事をきっかけに・・・
「霊なんて見えない方がいい」と強く思うようになる。

そして幼い慎吾は、無意識に「チャンネル」と呼ばれるものを操作出来るようになった。いわゆる「霊の周波数」とよばれるもので、意識して霊を見えないように自分で調整できるのだ。

普段、慎吾は霊が見えないように「チャンネル」を操作している。

しかし・・・それでも、霊が慎吾の前に現れる時がある。
そういう時は、どんなにチャンネルを操作しようとしても・・・霊は視界に入り、霊の言葉は頭に入り込んでくる。

そしてそういう時は・・・決まって、何らかの危険が迫っている時だった。

リナ「ちょっと！　あんた聞いてる？」

心ここにあらずといった表情を見せる慎吾に、リナは大きな声をか

けた。

慎吾「え？　あ、もちろん！」

リナ「だからこの夏で、【ホラーの湖】も打ち切りか？って話なのよね～」

リナはすでにネット麻雀を始めている。

慎吾「そうですか・・・」

慎吾が見る限り、江浜の霊能力は本物だ。ディスプレイ越しでも十分にわかる。彼が霊に語りかける口調や視線は、自分が霊に語りかける時のしぐさと全く同じだった。

ただ慎吾は・・・除霊の仕方や、霊視の方法などは知らない。霊が見え、会話が出来るだけの能力に過ぎない。江浜の霊能力とは比べようもない程、未熟なものだ。

慎吾は江浜について約2時間調べ上げた後、今度は【徳川埋蔵金の謎を追え】をキーワードに検索を始めた。

リナ「よし！　国士無双！！！」

隣でリナがガッツポーズをしている。

リナ「あら？　今度は徳川埋蔵金？」

キリよく半荘（ハンチャン）を終えたリナが、ちらっと慎吾のパソコンを覗いた。

リナ「埋蔵金なんて絶対見つからないって。
見つけたって聞いた事ないし！
賭け麻雀の方がよっぽど生産的！」

そう言うリナに、慎吾は反論する。

慎吾「そんな事ないですよ。埋蔵金は十分存在する可能性あります」

リナが眠そうな目を慎吾に向ける。

リナ「冗談・・・だって見つかった事、無いじゃん・・・」

慎吾「いえ！　あります！
戦後、公（おおやけ）になっているだけでも・・・
５０件以上、埋蔵金発見の事例があります」

リナ「嘘ー、絶対嘘！！
てかあんたさ・・・そゆのくわしいの？」

慎吾「はい。僕、史学部ですから。
歴史や古代遺跡とか大好きですし、オーパーツなんかも大好きです。
失われた古代大陸や文明なんて、想像するだけでワクワクします！
もちろん財宝伝説とか、埋蔵金なんかも興味津々です！」

リナ「あー・・・オタクってヤツね・・・はいはい。
　一応、聞くけど埋蔵金見つかった例って？
　小判数枚で５万円ぐらいとか？　よくて１５万円ぐらい？」

慎吾はニヤッと笑う。

慎吾「まさか・・・埋蔵金ですよ！
　歴史的価値を含めると、１００万はくだらないものばかりですから！」

リナ「１００万？　う～ん・・・微妙・・・
　それにそんな話、聞いた事ないしな～」

慎吾「戦後最大の発見といえば、１９６３年の【鹿島清兵衛の埋蔵金】でしょう！
　当時、時価で６０００万円！！」

それを聞いて、リナが目を大きく見開いた。

リナ「６０００万円！？　マジ！？」

慎吾「それが当時の価値ですから、今だと・・・
　１０億円ぐらいですねかね？」

リナ「じゅ、じゅ・・・１０億円！？　嘘よ・・・絶対嘘よ！！」

リナは麻雀の手を止め、慎吾に言い寄る。

慎吾「ホントですって・・・ネットで【鹿島清兵衛の埋蔵金】って検索したら
　多分、一発で出てくると思いますよ」

慎吾が言うが早いか、リナは高速でキーボードを打ち始めた。マウスをクリックした後・・・

リナ「ほ・・・ホントだ・・・　今の価値で１０億円・・・」

ディスプレイを見つめながら、目を丸くする。

慎吾「日本には、埋蔵金や宝物伝説が２００以上もあるんです。
　そのいずれも億単位の価値がありますよ」

リナ「は～・・・」

溜息しか出てこないリナ。

慎吾「未だに発見されてない宝の総額は・・・
　３００兆円とも５００兆円とも言われてますから」

リナ「あ、ごめん・・数字に強い私でも５００兆円とか想像できない・・・」

慎吾「北は北海道、南は沖縄まで・・・
　どの土地にもお宝伝説はありますからね」

リナ「北海道や沖縄にもあんの!?　初めて聞くわ・・・」

慎吾「えぇ。沖縄には【キャプテンキッドの宝物】伝説があります

よ！」

嬉しそうに慎吾は、自分の出身地の話をする。

リナが【待て！】と右手でジェスチャーをする。

リナ「ちょ、ちょ、ちょ・・・ちょっと待って！
今、あんた・・・嘘ついたでしょ！」

慎吾「嘘？」

リナ「キャプテンキッドって、あたし・・・
確か、子供の頃漫画で読んだわよ！
キッドって漫画のキャラでしょ！　それに外人なのに沖縄！？
いくらあたしが歴史に疎いからって、嘘はヤメてよ！」

慎吾「いやいやいや！！　キャプテンキッドは実在の人物です！
ウィリアム・キッドが本名で、海賊船討伐に出たハズなのに・・・
自ら海賊になったっていう、ミイラ取りがミイラみたいな人ですから」

リナは慎吾の話を聞きつつ、【ウィリアム・キッド】を検索して調べている。

リナ「・・・・。ホントだ・・・　漫画の世界の海賊だと思ってた」

慎吾「彼は結局ロンドンで処刑されるんですが、処刑される直前・・・

『私は財宝を隠している』と叫ぶんです。

でも場所を告げる前に絞首刑・・・」

リナ「・・・　・・・」

慎吾「キッドは強奪した宝物を、近辺の島に隠すクセがあったんです。

だから彼の最期の言葉は、信憑性が高いと世界中に広まった。

こうして7つの海をまたにかけた・・・

【キャプテンキッドの財宝】伝説が世界中に生まれたんです」

リナ「いやいや・・・それはアリとしてもさ・・・

沖縄はないっしょ・・・いくら何でも」

慎吾がさらにニヤッと笑う。

慎吾「ところが・・・今から７０年以上前。

キッドの残した地図が日本のある島と酷似していると・・・

調査した人がいたんです！これがまた非常に興味深くて・・・」

リナ「あー・・・なんかあんたの話、長くなりそう。わかった！

信じるから！」

慎吾「え！？　聞かないんですか？
　新潟県のとある教師がですね・・・伯父からもらった遺品の中に・・・
　何とキャプテンキッドの地図と同じものを見つけたんですよ！
　漫画みたいですがホントの話で・・・教え子の夫のアメリカ人が・・・・」

リナ「うわー、すっげー信じられないけど、なんか信じたい自分もいる・・・」

リナは両手で頭を抑え、苦悩するしぐさを見せた。

慎吾「全て本当です！！」

リナ「わかったわかった・・・じゃあ徳川埋蔵金ってのは・・・
　ズバリ聞くけど・・・マジあんの！？」

慎吾「過去の文献や記録、また調査した範囲での出土品から・・・
　間違いなく存在すると言われています」

リナ「ある・・・　のね・・・」

慎吾「えぇ。２年前の鳩川政権では、それをアテにした財源確保をうたってましたね。
　政府関係だけでなく、組織ぐるみで発見に着手してる団体もいるとか・・・

暴力団なんか・・・よく探しているって話を聞きますね」

リナ「でも未だに見つかったって聞かないし・・・」

慎吾「実はすでに見つかっていて・・・公表してないという噂も・・・」

リナ「ふ～ん・・・。　で？　もし見つけたとして、その・・・
お金の価値は・・・　いかほどなの？　徳川埋蔵金は？」

リナにとって、最も興味があるのはそこだ。

慎吾「もし伝説通りなら・・・
現在の価値で、１００億以上はあると言われています」

リナ「ひゃ・・・１００億円以上！？」

慎吾「そんな簡単に見つけられる場所には隠さないですよ。
徳川埋蔵金を見つけるには・・・

いくつかの謎に挑戦しなければならないんです」

リナ「うわー・・・お金は大好きだけど・・・
やっぱり簡単じゃないのね・・・

数字がらみの謎なら、自信あるんだけどなー」

慎吾「過去、こういった埋蔵金のありかを示す方法として・・・
数字が使われた例もたくさんあります。

あとは地図とか暗号とか・・・
徳川埋蔵金だと・・・有名なのは【かごめかごめ】なんてのもあります」

リナ「え？　かーごーめーかーごーめ　ってヤツ？」

慎吾「えぇ・・・　後ろの正面・・・だあれ？　ってヤツです」

リナ「それが・・・　徳川埋蔵金の謎を解く鍵？」

慎吾「そうです！」

慎吾はニヤッと笑った。

（第９話へ続く）

第８話　埋蔵金伝説（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

誰もが知っている「かごめかごめ」。
この歌詞に「徳川埋蔵金」のありかを示す手がかりがあるという・・・

ただの都市伝説か・・・それとも事実なのか・・・・？

次回「第９話　かごめかごめ」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第９話　かごめかごめ（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・

アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組の観客としての招待を受ける。

慎吾はＴＶ局を出る時、スピリチュアル・カウンセラーの江浜に声をかけられた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第９話　かごめかごめ

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第9話　かごめかごめ

西暦１８６８年（慶応４年）。

永(なが)きにわたって、徳川家が君臨した江戸城。幕府軍（徳川家）の代表・勝海舟と、明治新政府軍の西郷隆盛らとの交渉の末・・・江戸城は官軍（政府）に引き渡された。

当時１００万人以上もの民を抱える江戸は、世界でも最大規模の都市。それらの住民を戦火に巻き込ませる事無く、江戸城の明け渡しを成しとげた・・・　これが世に言う「無血開城」である。

当時財政難にあえいでいた明治新政府は、幕府の御用金を接収しようと江戸城内の金蔵に足を踏み入れた。

ところが・・・

金蔵は空っぽ。

開城をよぎなくされた旧幕府が、それらを隠匿(いんとく)した・・・そう判断した政府は、御用金の捜索を始める。

真っ先に政府に目をつけられたのが、大政奉還(たいせいほうかん)当時勘定奉行であった小栗忠順(おぐりただまさ)。小栗は開城前、政府側と徹底抗戦した主要人物であり、開城直前に幕府の再興資金として御用金を隠匿したと疑われた。

開城後、小栗は故郷の上野国(こうずけのくに)（群馬県）に隠棲(いんせい)していたが、政府の放った追っ手に捕まる。幕府の財政責任者であったと小栗が、何も知らぬという事はありえないとした政府側は、彼を厳しく追及。

しかし小栗は御用金について何も喋る事は無かった。

業を煮やした政府は、小栗を謀反の罪で斬首の刑に処す。

「無血開城」と言われた歴史的偉業の背景で、唯一命を落とした男・・・それが小栗忠順である。

後に政府が小栗の故郷をくまなく探索するも・・・御用金はおろか、小判の1枚も出てくることはなかった。それどころか謀反の証拠となるものすら、一切出る事もなかったのである。

小栗を処刑後も、新政府は躍起になって御用金捜索を継続。

幕府崩壊から数ヶ月・・・

赤城山周辺の村人達から、旧幕府の武士達を始め多くの人間が大量の荷物を赤城山に運んでいたとの目撃情報が入る。

徳川御用金が赤城山に埋蔵されている・・・

この噂は世に広まり、埋蔵金の存在を確信する多くの民間人も徳川埋蔵金捜索に着手・・・赤城山の各所で発掘が行われることになった。

そして赤城山周辺の発掘で、黄金の徳川家康像が発見され・・・さらには埋蔵金のありかを示したといわれる銅板地図も発見される。

これらの発見をしたのが水野智義。

この発見と記録が、今の「徳川埋蔵金」伝説をさらに広く世に知らしめる事になった。

智義が徳川埋蔵金の発掘に着手したきっかけは、義父の中島蔵人（なかじまくらんど）が死の間際に話した体験談からである。

中島は彰義隊の隊長として上野で活躍。敗色濃厚となった際、甲府に落ち延び・・・城代の柴田監物（しばたけんもつ）と幕府御用金を持ち出し、２４万両を榛名（はるな）神社の近くに埋蔵。

戊辰（ぼしん）戦争の後、中島は榛名神社に向かう。ところがすでに掘り起こされた後があり、埋蔵金はなかった。中島は柴田が先に掘り起こしたと確信。無血開城の際、江戸城御用金３６０万両と共に埋め直した可能性があることを語っている。

さらに中島は幕府の将来を不安視していた大老・井伊直弼が、腹心の小栗忠順や自分（中島）らごく少数の人間に御用金の埋蔵を指示したと語った。

【赤城の井戸を掘れば、埋蔵金の場所がわかる】

中島は死の間際、水野智義にそう語ったという。

水野は中島の死後、津久田原にある「源次郎の井戸」を発掘。その際、黄金の家康像や銅板地図を発見した。

水野家は智義死後も、次男の義治氏と弟の愛三郎氏が後を継いで発掘に携わる。また、愛三郎氏の次男智之氏が現在でも私財をなげうって発掘に携わっており、水野家は3代にわたって徳川埋蔵金を追いかけている事になる。

水野家以外にも、多くの民間人や組織が徳川埋蔵金の発掘に挑戦している。だが、未だに発見の報告はない。

勝海舟の日記に「軍用金として３６０万両有る」という記録があり、徳川埋蔵金の総額は３６０万～４００万両と推定され、現在の価値に換算すると１００億円以上と言われる。

２年前の日本政府が、この徳川埋蔵金を財源のアテにしようとした話は有名である。
もっとも最初に徳川家の御用金に目をつけたのは、明治新政府なのだが・・・

なお、これだけ多くの人が長年徳川埋蔵金に着手し未だに発掘の報告がない事から、「赤城山はおとりだった」「いや、それ以前に徳川埋蔵金自体がないのでは？」「絶対にある！」という議論が今なお続いている。

・・・　・・・。

リナ「で？　なんで【かごめかごめ】が、徳川埋蔵金とつながんのよ？」

慎吾「えぇ、こういった宝とかを隠す場合・・・
　完成度の高い暗号や地図を使うケースが多いんです。
　徳川埋蔵金は、この【かごめかごめ】の歌詞に・・・
　そのありかを示したと、昔から言われています」

リナ「信じられないわね・・・　ただの子供の歌でしょ？」

慎吾「じゃぁ、リナ先輩。かごめかごめの歌って歌えます？」

リナ「多分、歌えると思う・・・」

かーごーめー　かーごめー
かーごのなーかのとーりーはー

いーついーつでーやぁるー
よーあーけーのばーんにー

つーるとかーめがすーべったー　（※　地方によっては　つるとかめ【と】　と歌われる）
うしろのしょうめんだぁーれー

特にひっかかる事もなく歌ってみせた。

慎吾「リナ先輩。この歌詞の意味わかります？」

リナ「は？　考えた事もないわ。
籠（かご）の中の鳥が出ようとしたら・・・
　鶴と亀がすべって、後ろに何かある？」

慎吾「どういう意味ですか？」

リナ「全然・・・」

首を横に振るリナ。

慎吾「じゃぁ何故、リナ先輩はこの歌を歌えるんですか？」

リナ「はぁ？　だって・・・　有名だからでしょ？」

ニヤッと笑う慎吾。

慎吾「それですよ！」

慎吾はリナを指さす。

リナ「あの・・・　あんたが何言ってるかも、わかんないんだけど？」

慎吾「歌詞の意味が全くわからないのに・・・
何故、こうもう完璧に歌えるかって事です」

リナ「う～ん・・・
子供の頃から、何度となく歌ったり聞いたりしてたから？」

慎吾「そう！　それが狙いです！」

リナ「？」

慎吾「無血開城時の幕府は、御用金を隠す事を決意。
時が来たらまた掘り起こすつもりで・・・
必要最小限の人間以外、誰も知らぬ場所へ埋蔵した・・・」

リナ「・・・　・・・」

無言で頷くリナ。慎吾の話に、かなりに食らいついている。

慎吾「御用金を埋めた連中が亡くなった後でも・・・
　埋蔵した場所や情報を示す何かを、この【かごめかごめ】に隠した。

　そして幕府は、その歌を世に広めたんです」

リナ「幕府が・・・　【かごめかごめ】を広めた・・・？」

慎吾「はい。何でもない歌が、全国に広まるのは・・・
　当時世を治めた幕府の力としか考えられない・・・

　ってわけです」

リナ「でも・・・　やっぱ信じられないわよ」

慎吾「日本人の多くは、【山嵐】のヒットソングより・・・
　【かごめかごめ】の方を歌えますから」

リナ「そ、そうかな・・・？」

慎吾「【山嵐】のヒットソングと違い・・・
　【かごめかごめ】は作詞作曲どころか、その発祥も不明なんですよ」

リナ「む～・・・」

腕組みをし、眉をひそめるリナ。

リナ「確かに・・・　謎の多い歌だわ・・・」

埋蔵金伝説に対し、最初全く信じていないリナだったが・・・信憑性の高い慎吾の話の後では、半信半疑になっていた。

慎吾「じゃぁ、リナ先輩は【ドナドナ】って曲知ってます？」

リナ「あー、あの子牛が売られていくよーって歌ね。知ってる知ってる」

あーるはれたー　ひーるーさがりー　いーちばーへつづーくみちー
にーばしゃーが　ごーとごーと　こーうーしーをのせーていくー

かーわーいーいこうしー　うられていーくーよー
かわーいそーなひーとーみーでー　みーてーいーるーよー

ドナドナドーナードーナー　こうしをのーせーてー
ドナドナドーナードーナー　にばしゃがゆーれーるー

リナは歌ってみせた。

リナ「あら。中学校の音楽の時間で習って以来だけど・・・
　結構、歌えるものね」

慎吾「この歌、ユダヤ人がアウシュビッツに連れて行かれる歌なんですよ」

リナ「は？　えっと・・・ナチスドイツに？」

慎吾「えぇ。子牛はユダヤ人。
荷馬車は、アウシュビッツへ行く車を表現してるんです」

リナ「言われてみれば・・・でも、そうだとしたら恐ろしい歌じゃん！」

慎吾「【ドナドナ】だって、何でもない歌のはずなのに誰もが歌える歌。
そういう曲には、何らかのメッセージが隠されている・・・
そういう例の1つですね」

リナ「ふ～ん・・・　何かだんだん・・・
あんたの言う事が、すっげー正しい気がしてきたわ」

とはいえ、まだまだ完全には信じられない。

慎吾「【かごめかごめ】も・・・
メッセージが隠された歌の1つってわけですよ」

リナ「確か・・・子供の頃にやったわね、かごめかごめって遊び。
目隠しして輪の中心に座って、歌が終わった時に・・・
自分の後ろにいる人を当てる遊びだったわよね？」

慎吾「そうです」

かーごーめー　かーごめー
かーごのなーかのとーりーはー

いーついーつでーやぁるー
よーあーけーのばーんにー

つーるとかーめとすーべったー
うしろのしょうめんだぁーれー

リナ「でも埋蔵金とつながるようなのって・・・
　この歌詞にはないと思うけどね～　ふぁ～」

リナは大きなあくびをした。

慎吾「そもそも【かごめかごめ】の歌詞自体、不思議な表現が多いんです」

リナ「？」

慎吾「まず最初の【かごめ】。
　これは、籠（かご）の編み目という意味や・・・

【囲め】のなまった音、そうとらえる事もできます。
埋蔵金を何かで囲った・・・という人もいます」

リナ「それだけじゃー、話にならないわね」

慎吾「【かごのなかのとり】も、単純に籠の中の鳥ともとれるし・・・

　籠の中の鳥居、つまり竹林の中にある鳥居とも。

　あるいは、隠した金そのものを鳥と表現しているのかも・・・」

リナ「ふ～ん・・・」

だんだんと瞼（まぶた）が重く感じてきたリナ・・・。

慎吾「【いついつでやる】は、いつ出られる。つまり子供の遊びとして・・・

輪の中にいる鬼がいつ出られるという意味・・・ではなく・・・

埋蔵金がいつか出てくる・・・という意味なのかも」

熱く語る慎吾に対し、リナには眠気が襲っている。

慎吾「そして一番おかしな歌詞が次。【よあけのばんに】です。

夜明けは朝をさすのに、晩は夜をさす・・・

夜明けのような晩なのか、順番として夜明けの番なのか・・・」

リナ「・・・　・・・」

慎吾「あるいは夜明けと晩とは、反対の意味として・・・

存在しないという意味なのか・・・」

慎吾の催眠術のような語り口は、リナの眠気を促進させる。

慎吾「【つるとかめが滑った】。縁起の良い鶴と亀がすべるので・・・

とても悪い事ともとれるし、とてもいい事ともとれるんで

す。

敦賀と亀岡を統べたという事で、明智光秀の意味という人もいますし。

あるいは、埋蔵金を発見するために何かしろという意味なのか・・・」

腕組みをしたままリナは・・・

リナ「・・・　ｚｚｚ・・・」

本格的に眠り始めた。

慎吾は気を遣って小さな声で語り続ける。

慎吾「そしてもう１つおかしな歌詞【うしろのしょうめんだぁれ】。

普通後ろの人を誰か聞くなら、【後ろはだぁれ?】ですむのに・・・

【後ろの正面】はおかしな表現・・・」

リナ「ｚｚｚ・・・」

さらに声のトーンを落とす慎吾。

慎吾「だって、後ろは後ろだし、後ろの正面は結局自分という事に・・・

自分に向かって【だれ?】というのもおかしな話・・・」

リナはスースーと寝息をたて始めた。慎吾はすでにリナにでなく、自分自身に話しかけている。

慎吾「この歌に隠された場所は・・・
日光東照宮という興味深い説もあるんですよね～・・・
それだけでなく・・・」

・・・　・・・。

慎吾「・・・　・・・」

一通り話し終わった後、慎吾はリナを見て優しい視線を送った。

リナ「ｚｚｚ・・・」

腕組みをしたまま、とても心地よさそうに・・・そして器用に寝ている。

今一度ニコッと笑顔を見せた慎吾は、自分のパソコンを見つめた。

慎吾「・・・　・・・」

【ＴＶＳ】【徳川埋蔵金の謎を追え】を検索ワードに、いくつかのページを読み始める。

そして・・・

翌日起こる大きな事件・・・・

その首謀者の書き込みを、目にする事になった。

（第１０話に続く）

第９話　かごめかごめ（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

慎吾はＴＶ番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】に関するページをいくつか検索しているうち、とある掲示板にたどり着く。

そこでは、徳川埋蔵金の存在について賛否両論が展開されていた。

ふと目を覚ましたリナが、その掲示板に違う名前の同一人物がいると指摘。

そしてその人物は・・・意外な場所から、その書き込みをしていた。

次回　「第１０話　謎の同一人物　」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１０話　謎の同一人物（前書き）

〰〰

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〰〰

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

慎吾はリナに、徳川埋蔵金のありかを示すヒントは、【かごめかごめ】の歌にあると語った。

〰〰

第１０話　謎の同一人物

〰〰

第１０話　謎の同一人物

【ＴＶＳ　徳川埋蔵金の謎を追え！】

ネットで検索していると、必ず一人の男が現れる。
この番組のプロデューサーである・・・糸見という男だ。

１９９０年代に活躍した、日本を代表するコピーライターであり・・・作家でもある。

彼の発案した【徳川埋蔵金の謎を追え！】の企画が通り、番組として大々的に放送される事になったのが１９９９年。

第１回放送では、徳川埋蔵金にまつわる史実を歴史研究家やタレントを交えて放送。見事高視聴率をとり、国民の話題をかっさらった。

半年後の第２回放送からは、大型重機を使って赤城山周辺を発掘。
番組中、江戸幕府に関する出土品が数点発掘されたものの・・・その歴史的価値は低く、徳川埋蔵金につながる事はなかった。

地中５０ｍもの大規模な発掘作業の際、いくつかの不自然な横穴を発見するが・・・こちらも徳川埋蔵金につながるものではなかった。

番組自体は数度の特番が組まれるも、視聴者を惹きつけるような結果を出す事が出来ず・・・視聴率の降下と共に２００２年、同企画は打ち切りとなる。

あれから１０年・・・・

番組改編期のこの時期に・・・特番で【徳川埋蔵金の謎を追え！】が放送される事が決まった。

何故１０年の時を経て、この番組が再度登場したのか・・・

徳川埋蔵金のありかを示す信憑性の高い「何か」が、新しく発掘されたのだろうというのが大方の見方である。

５月５日・・・すなわち明日、その番組収録がある。

プロデューサーでもあり、発掘の陣頭指揮をとっている糸見。もちろん番組の主要な出演者の１人だ。他にも歴史学の権威や、考古学の教授、タレントサイドからは人気絶頂アイドルグループ【山嵐】の出演も決まっていた。

ＴＶＳのページで同番組をチェックすると、スペシャルゲストも来るという。

慎吾「・・・　・・・」

この番組について調べている慎吾だが・・・１０年ぶりの復活となった理由は、どのサイトにも記されてない。番組を見てのお楽しみといった所であろう。

慎吾「・・・　・・・」

日本最大の巨大掲示板【５ちゃんねる】では、この番組に関するス

レッドが賑わいを見せていた。埋蔵金は発見できないであろうという「否定派」の書き込みが圧倒的に多い。

「１０年前はマジ騙された。今度もダマされるのがオチ」

「どうせまた、世界一の土木番組になるって」

「だいたい埋蔵金の存在自体が怪しい話」

「え？　まだ懲りてないの？　この不況時、制作費無駄遣いナンバー１」

「何か出ても、ヤラセとしか思えないし」

「夢見るオヤジじゃいられないってか？」

「ま、宝くじと同じ。夢見る番組って事でいーんじゃね？」

多くの否定派に混じって、ポツリポツリと肯定派の書き込みもある。

「何故、１０年越しに番組再開したか考えろよ。あるって事だろ？」

「なけりゃ番組再開する意味ねーじゃん」

「無血開城の際に、蔵が空っぽだったんだぜ？　絶対持ち逃げしてるって」

「黄金の家康像見つかってる！　絶対どこかにあるだろ！」

注意深く読んでいくと、深い知識で肯定する人間もいた。

慎吾「・・・　・・・・」

さらに1つ1つの書き込みを丁寧に目を通していく。

ふと、腕組みをしたまま眠っていたリナが目をさました。

リナ「う、う～ん・・・」

大きな伸びをした後、メガネをかけ直す。

リナ「あ、あれ？　私、何で寝てんの？
　あ、ヤベ！　麻雀の途中だったんだ！
　ラスのまま放置してるし・・・」

慎吾がリナの方を振り返り、ニコッと笑う。

慎吾「おはようございます」

リナはいったん麻雀サイトからログアウトする。

リナ「えーっと・・かごめかごめの話してたような・・・
　あまりにつまらなくて寝てたわ・・・
　私、歴史とか興味ない話聞くと、すぐ眠くなるのよね」

慎吾はくすっと笑いながら声をかける。

慎吾「なのに、明日の番組収録は行くんですよね？
　徳川の話がメインの番組ですよ？」

リナ「もちろん行くわよ！　レポートあんた書いてくれるでしょ？
　私は【山嵐】のサインをもらうって使命があるしね～」

慎吾「・・・　・・・」

リナ「あら？　何、あんた？　番組の予習でもしてんの？」

リナは慎吾のパソコン画面を覗き込む。

慎吾「えぇ。とりあえず過去、この番組がどんな進行だったのかとか・・・
　どんな発見があったのかとか・・・色々調べてるんです」

リナ「は～、あんた真面目よね～。
　ま、私のレポートのためにも頑張ってね・・・・・

　あら？」

リナが何かに気づいた表情をした。

慎吾「何か？」

リナ「・・・」

じっと慎吾のパソコン画面を凝視するリナ。

リナ「うん。これ・・・そしてコレ」

リナは慎吾のパソコン画面の2ヶ所を指さした。そこには、ハンドルネーム

【Ａｒｉｔｏｕ　Ｔｏｍｏｋｉ】【Ｔｏｋｕｍｏｔｏ　Ａｉｒｉ】

の書き込みがあった。

慎吾「？」

リナ「この2人、同一人物ね」

慎吾「え？」

慎吾はスレッドを確認する。

【Ａｒｉｔｏｕ　Ｔｏｍｏｋｉ】が、徳川埋蔵金の存在を肯定する書き込みに対し・・・

【Ｔｏｋｕｍｏｔｏ　Ａｉｒｉ】は、それを否定する立場をとっている。

慎吾「どう見ても同じ人に見えませんが・・・」

リナ「こういう掲示板ではよくあるのよ、自作自演ってヤツが。
　自分の意見を通したかったり、周りを盛り上げるためにね。
　反対の立場とってるのは、同一人物と思わせない偽装よ、偽装！」

慎吾「いや、だから何故・・・同一人物だってわかるんですか？」

リナ「見えるのよね～、こういうの。意識しなくてもさ」

そう言うとリナは、自分のパソコンでワープロソフトを開いて説明し始めた。

【Ａｒｉｔｏｕ Ｔｏｍｏｋｉ】＝ＡＲＩＴＯＵＴＯＭＯＫＩ

【Ｔｏｋｕｍｏｔｏ Ａｉｒｉ】＝ＴＯＫＵＭＯＴＯＡＩＲＩ

リナ「わかる？　片方のアルファベット並び替えたらさ・・・もう片方の名前が出来るの？」

慎吾はゆっくりと、１文字１文字確認する。

慎吾「ほんとだ・・・アナグラムってヤツですね。でも、ただの偶然って可能性も・・・」

リナは慎吾の目の前で、右手を左右に振る。

リナ「ないない。たかだか数１０人が書き込んでるスレッドなのよ。こんな長い適当なハンドルネーム２つが、ローマ字並び替えて・・・

一致する確率、０．１％以下よ。こんな偶然ないって」

慎吾「でも性別も言葉遣いも違うし・・・
やっぱり違う人にしか見えないな～。

０．１％の方じゃないですか？」

リナ「あんたさぁ。０．１％を知らないでしょ？
数学の世界では、起こりえないって意味よ。

それにネット世界で、どれだけ性別偽ってるヤシがいる事か・・・」

慎吾「そ・・・そうですか？　う～ん・・・　でも・・・」

それでも納得できない慎吾。リナは小さいため息をついた後、

リナ「しゃーない、見てて」

と声をかける。

カタカタカタカタ・・・

画面を見ながら、ブラインドタッチでキーボードを高速で打ち始めた。

リナ「別パソコン使って自作自演しても、ＩＰアドレスを調べれば一発よ・・・」

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は黙って、リナの作業を見ている。

リナ「あら・・・？」

眉をひそめるリナを見て、慎吾が少し勝ち誇ったように

慎吾「ほら～、やっぱ別人だったでしょう？」

と言った。

リナ「・・・　・・・」

眉をひそめたままのリナは、自分のパソコン画面を確認している。

リナ「いや・・・同一人物なんだけどさ・・・」

慎吾「あれ？　そうなんですか？　何かおかしい事でも？」

リナ「うん・・・　ＩＰアドレスからはプロバイダと・・・
　使用者がどこにいるかってのが、だいたいわかるんだけど・・・

　会社とか組織単位なら、書き込んだ住所まで特定できるのよ・・・」

慎吾「え？　じゃぁ、書き込んだ場所までわかっちゃったとか？」

リナ「うん。この同一人物が書き込んだ場所・・・
　何度も確認したけど・・・間違いないわね、うん」

自分を納得させるようにつぶやき、意外な一言を口にした。

リナ「この部屋よ。絶対間違いない」

慎吾「えぇ！？」

驚きの声をあげる慎吾。

リナ「何度も確認したけど・・・　絶対この部屋から。間違いない！」

リナはパソコンのＩＰアドレスを指さしているが、慎吾にはただの数字と英字の羅列にしか見えない。

慎吾「この部屋から・・・」

しばらく自分のいるパソコン室を見渡す。今、この部屋にいるのは慎吾とリナの２人だけだ。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は再度【徳川埋蔵金の謎に迫る！】専用スレッドを読み直した。

【Ａｒｉｔｏｕ　Ｔｏｍｏｋｉ】　書き込み日時　５月３日　１６：０７

俺は、明後日の収録に参加する。とっても楽しみだ！

【Ｔｏｋｕｍｏｔｏ　Ａｉｒｉ】　書き込み日時　５月３日　１６：１１

埋蔵金なんて見つからないわよ。ある意味、またやっちゃいそうで楽しみだけど

【Ａｒｉｔｏｕ　Ｔｏｍｏｋｉ】　書き込み日時　５月３日　１６：１３
スタジオには埋蔵金のありかを知ってる人がくるんだってよ！

【Ｔｏｋｕｍｏｔｏ　Ａｉｒｉ】　書き込み日時　５月３日　１６：１６
今までもありかを知るって人が出てたけどダメだったじゃん！
どうせ今度の人間だって、期待ハズレよ

慎吾「・・・　・・・」

リナの言う事が正しいなら・・・
この２人は前日の午後４～５時の間で、このパソコン室で自作自演をしている事になる。ちょうど松浦順のバッグ盗難事件を解決している頃だ。

慎吾「この人、明日の収録に参加するんだ・・・」

リナ「みたいね」

リナは全く興味なさそうだ。

慎吾「この部屋で書き込んで・・・
　　ひょっとしたら・・・マスメディアのレポートを書くために？」

リナ「さすがの私でも、そこまではわからないわ。
まぁ明日スタジオに行けばわかるんじゃない？
講義で見た顔がいればそうだし、いなければ関係無し！」

慎吾「えぇ・・・」

元気のない返事をする慎吾。

今なお埋蔵金を発見したという情報は見つけられない。新たな情報が出ない限り、埋蔵金発見へは遠い道のりに思えた。

（慎吾「それよりも・・・」）

何故、この人物はこの部屋から自作自演を演じたのか・・・

そして・・・慎吾にはどうしても気になる1つの書き込みがあった。

【Ａｒｉｔｏｕ　Ｔｏｍｏｋｉ】　書き込み日時　5月3日　１６：１３
スタジオには埋蔵金のありかを知ってる人がくるんだってよ！

埋蔵金のありかを知る人物とは・・・

（慎吾「いったい・・・？」）

多くの謎を抱えた慎吾。この後も、ずっと番組に関するサイトを閲

覧していた。

（第１１話へ続く）

第１０話　謎の同一人物（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

５月５日。リナと慎吾は再度ＴＶＳに訪れる。
松浦との挨拶を済ませ、いよいよ番組収録に参加。
最初、前説のお笑い芸人のネタ見せから始まった。
その後、ニュースでよく見る女子アナやプロデューサーの糸見が姿を現し・・・

スペシャルゲストの【山嵐】に加え、スピリチュアル・カウンセラーの江浜も姿を見せた。

慎吾は、このスタジオで・・・
これから巻き込まれる大事件の黒幕と遭遇する。

次回「　第１１話　　ファースト・コンタクト　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１１話　ファースト・コンタクト（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・

アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１１話　ファースト・コンタクト

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第11話　ファースト・コンタクト

２０１２年5月5日土曜日。正午・・・

慎吾とリナはＴＶＳの受け付けで、入局許可証を受け取った。

２日前にもらった招待状を受け付けに見せると、待つように指示される。しばらくすると、松浦順のマネージャが2人の前に現れた。

軽い挨拶をすませると、マネージャが2人を連れて歩き出す。そしてたどり着いたところは・・・小さな楽屋。

マネージャが軽くノックして先に中に入った。すぐにまた楽屋の扉が開き、2人を招き入れる。

2人が楽屋に入ると・・・

日本のＴＯＰアイドルグループ【山嵐】のメンバーの1人、松浦順がいた。

白いＴシャツの上から黒いベストを羽織り、室内にも関わらず黒い帽子をかぶっている。松浦は自信に満ちたその表情と、余裕のある笑顔を2人に投げかけた。

芸能人をよく知らない慎吾でも、アイドルの存在感・・・オーラを感じる。

松浦の笑顔をキャッチしたリナは、大きなポニーテールをなびかせ両手を広げた。そして松浦に向かって走り出し、熱烈なハグをしよ

うとする。

それをスルリと華麗にかわした松浦は、自然な流れで慎吾に握手を求めた。熱烈ファンへの対応もお手の物である松浦。慎吾は「さすが日本のトップアイドル」と感心しながら、握手に応じる。

松浦「やぁ、2日ぶり。ちゃんと来てくれたね」

握手をしながら松浦は・・・アイドル光線とでもいおうか、華やかな雰囲気を周りに発散した。

慎吾「はい！　今日はＴＶ収録に招いていただき感謝です！」

松浦の手を力強く握り替えし、笑顔で応える慎吾。

リナ「・・・　・・・」

ハグが空を切ったリナは、腕をクロスしたまま固まっている。

松浦「収録まで1時間あるけど・・・
打ち合わせで、もう行かなくちゃいけないんだ。

またスタジオで会おう」

慎吾「はい！」

松浦はリナの方を振り返って静かに握手を求めた。

松浦「リナ・・・　今日はよろしく」

慎吾に見せた笑顔とは違う、【女性専用】の笑顔がリナの硬直を解く。

【これでもか！】というぐらいのにこやかな笑顔を見せたリナは、松浦の右手を両手で握り返した。

リナ「あの・・・　あ・・・」

普段慎吾に対してふてぶてしいリナが、緊張のあまり声を出せない。

松浦「じゃぁ、2人とも。スタジオで！」

そう言うと松浦は、リナの両手を半ば強引に引き離して楽屋の出口に向かった。

リナ「あ・・・」

松浦に何か言いたいが、何を言ったらよいのかわからず言葉が出ない。

察した慎吾が代わりに声をかけた。

慎吾「松浦さん！」

出口手前で慎吾の方へ振り返るしぐさがいちいちカッコイイ。

松浦「なに？」

笑顔を絶やすことはない松浦。

慎吾「もしよろしければですが・・・
後で【山嵐】さんの他のメンバーにも会えないでしょうか？」

松浦は迷う表情を一切見せずに即答する。

松浦「あぁ、構わない。メンバーに君たちを紹介してあげるよ。
あと望めばだけど・・・サインも全員分書かせてやるさ」

時にアイドルは、打算的にファンに接する時がある。周りに誰もいなければ、たかだか一人二人のファンに冷たい態度をとるものだ。

しかし松浦にそのようなそぶりは一切無い。ファンに対する真摯な姿勢・・・それが日本一のアイドルたる条件なのかもしれないと慎吾は思った。

松浦「じゃぁね」

今一度笑顔を振りまいた松浦は、楽屋から出て行く。

その後松浦のマネージャから、収録に関しての説明を受ける慎吾とリナ。

慎吾「わかりました」

心ここにあらずのリナに変わって、慎吾がしっかりと説明を聞く。

説明が一通り終わった後、２人は楽屋を後にした。

慎吾「あ、すいません！」

松浦の楽屋を出た際、慎吾は何者かにぶつかる。

「・・・　・・・・」

慎吾「あ・・・　・・・」

ぶつかった相手は・・・２ｍはあろうかという大男。その男は、ギロリと慎吾を睨み付けた。

慎吾「す・・・　すいません・・・」

深々と頭を下げる慎吾。

「ほら、マリオ！　行くぞ！！」

その大男・・・マリオと呼ばれた男は、後ろから来た別の男に背中を叩かれ、無言のままその場から立ち去った。

慎吾「・・・　・・・」

その大きな背中を、しばらく見つめる慎吾。

リナ「で？　どれぐらいでスタジオに向かえばいいの？」

楽屋から出てきたリナに声をかけられる。あわてて携帯の時間を確認する慎吾。

慎吾「あと４０分。午後１時から第１７スタジオで収録です」

リナ「ＯＫ」

慎吾と２人になったリナは、いつもの調子に戻っていた。

リナ「しっかし・・・。
　　時々、あんたの空気読めない性格をうらやましく思うわ」

慎吾「ありがとうございます！」

リナ「いや・・・褒めてないっつーの・・・。
　　でも【山嵐】メンバー全員分のサインは大きいわ！」

慎吾「写真もＯＫなら、リナ先輩と一緒に撮りますから」

リナ「マジ！？　絶対写真撮って！　絶対よ！！」

そういうとリナはお祈りのポーズをする。

リナ「これがきっかけで・・・
　　メンバーの誰か、私の彼氏にならないかしら～」

慎吾「そういう夢を見るのもアリだと思いますよ」

相変わらず屈託のない笑顔でリナに話しかける慎吾。

リナ「・・・　・・・」

その言葉に反応したリナは、冷たい視線で慎吾を睨み付ける。

リナ「・・・　・・・・」

何か言いたげだが、ぐっとこらえた。

リナ「ま、今日はメンバー全員のサインで許してあげるわ」

・・・　・・・。

午後1時。約束の時間にスタジオ入りする慎吾とリナ。
観客席に座らせられるも、メインステージにはセットのみで【山嵐】や他の出演者の姿はない。

観客は約１００人。慎吾はキョロキョロと観客席の方を見渡すが、知った顔はいなかった。

慎吾「・・・。授業で見た顔、いませんね・・・」

リナ「あ、そ」

素っ気ない返事を返すリナ。

リナ「てか、まだ【山嵐】は出てこないの？」

席について数分。観客の前に真っ先に出てきたのは・・・若手お笑い芸人だった。

慎吾「あ！」

芸人右「どうも～、時任（ときとう）マリオで～す！」

芸人左「どうも～、赤塚(あかつか)ルイージで～す！」

コンビ芸人の片方・・・慎吾が楽屋から出てきた際、ぶつかった大男だ。

２人「２人合わせて・・・スーパーマリオブラザーズで～す！」

マリオ「コント！

【１ｕｐキノコと間違えて、リアル毒キノコを食べるマリオ】！」

ルイージ「あ！兄さん！　１ｕｐキノコだよ！　早く食べなきゃ～」

ＴＶカメラが回っているわけでもないのに、彼らは観客の前でネタを見せ始めた。

慎吾「な・・何ですかね？

全然番組と関係無いし、カメラも回ってないのに」

リナ「知らないの～？　前説(まえせつ)ってやつよ」

慎吾「前説？」

リナ「収録前に、観客に注意事項とか色々説明したりすんのよ。

まずは芸人とかが盛り上げて、雰囲気作りをしたりすんの」

慎吾「へ～、収録前にこういうのがあるんですね」

芸人のコントに慎吾は笑っている。

慎吾「なかなか面白いですね、あの芸人」

リナ「はぁ！？　どこがぁ！？　あんた、笑いのレベル低すぎ！」

慎吾「あ・・・リナ先輩。ちょっと声、大きい・・・」

リナは眠そうに芸人のネタを薄目で見ていた。

マリオ「はい、じゃぁ盛り上がった所でですね～」

ルイージ「観客のみなさんに注意事項がありま～す！
よく聞いてくださいね～」

ネタ見せを終えた芸人は、観客に「拍手する時は大きく」、歓声を上げるときは「お～」と大げさに言うなどの指導を始めた。

マリオ「写真撮影は禁止ですから～」

大きなジェスチャーと共に、携帯の電源を切るよう指示する。

慎吾は指導された通り、大きな拍手の練習に参加した。リナはかったるそうにリズム感のない拍手をしている。

リナ「もう・・・早く【山嵐】を見せて欲しいのに・・・」

慎吾「まぁまぁ。もうすぐですよ。
でもあのマリオって人、かなり大きいですよね～」

リナ「全く興味ない」

慎吾「２ｍ越えてるんじゃないですか？」

リナ「あんた目ぇ悪い？」

細目でその芸人を見るリナ。

リナ「私が見た所・・・
　イケメン俳優の大栗旬と同じぐらいかな。
　ズバリ１８４ｃｍと見た」

慎吾「えぇ！？　絶対２ｍ越えてますって！」

リナ「はいはい。じゃ、２ｍ５０ｃｍにしとくわ」

全く興味のない話題に適当に応えるリナだった。

・・・　・・・。

２人がスタジオ入りして２０分ほど過ぎた後・・・

撮影用の大きなＴＶカメラを持ったスタッフらしき人が、数名入ってきた。さらには音声マイクや、見慣れぬ機器を持った人たちもぞろぞろとスタジオ入りする。

カメラクルー、撮影スタッフ、ＡＤ（アシスタント・ディレクター）ら２０名以上がステージに上がり、色々な機器の調整をし始めた。

慎吾「あ・・・　何か慌ただしくなってきましたよ」

すると今度は司会者用のマイクと思われる場所に、ＴＶでよく見る女子アナウンサーが現れる。

慎吾「あ、リナ先輩！　見てください！
いつもニュース読んでる人ですよ！！
ＴＶで見るより綺麗な人ですね～」

リナ「だからあたしはイケメンしか興味な・・・」

台詞が言い終わらないうちに、観客席から大きな女性の歓声があがった。

日本を代表するアイドルグループ・・・【山嵐】が全員揃ってスタジオに入ってきたのだ。

リナ「きゃーーーー！！！」

腹の底から黄色い声をあげるリナ。右側に座っていた慎吾は、反射的に左耳を押さえる。

リナ「きゃーーーー！　きゃーーーーー！　きゃーーーーー！！！」

もはや声にならない奇声をあげ、彼らに大げさに手を振った。その大げさなアクションが功を奏し、松浦が２人に気づく。

松浦は指をパチンと鳴らし、２人を指さして笑顔を振りまいた。

リナ「きゃーーーーー！！　松順様が、きゃーーーーー！！」

慎吾の左耳を抑える手は・・・しばらくそのままだった。

【山嵐】に続いてスタジオ入りしたのは、この番組の企画発案者である糸見。

黒一色で固めたコーディネートで登場し、鋭い目つきのまま所定の位置につく。今回の収録に対してのただならぬ意気込みが伝わってきた。

続いて、いかにも大学教授っぽい貫禄あるスーツにネクタイ姿の男が3名スタジオに入ってきた。

さらに・・・

慎吾「あ・・・」

思わず声が出た慎吾の視線の先に・・・

スピリチュアル・カウンセラー江浜の姿があった。

Ｙシャツネクタイの上から黒いスーツ。２日前、初めて出会った時と同じ格好。銀縁眼鏡の奥にある優しい目つきは、一瞬だが間違いなく慎吾をとらえた。

プロデューサー糸見、スピリチュアル・カウンセラー江浜。

慎吾はまだ気づいていないが、あの掲示板へ書き込んだ人物も・・・

今まさに慎吾の身近にいる。

そして・・・

掲示板の書き込みにあった「埋蔵金のありかを知ってる人」・・・

その正体を慎吾が知るのは・・・　もうしばらく後だった。

（第１２話へ続く）

第１１話　ファースト・コンタクト（後書き）

〜〜

次回予告

とうとう１０年越しに・・・【徳川埋蔵金の謎を追え！】の収録がスタートした。

最初は糸見や、学者のディスカッションが続く。

糸見が新たに発見した銅版について語り出した所から、スタジオ内は盛り上がってきた。徳川埋蔵金のありかを示したと言われる銅版。

その銅版を持って現れたのは・・・　意外な人物であった。

次回　「　第１２話　　白ずくめの男　　」

〜〜

第１２話　白ずくめの男（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

番組収録では、スピリチュアルカウンセラーの江浜がスペシャルゲストとして招かれていた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１２話　白ずくめの男

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１２話　白ずくめの男

女子アナ「お待たせしました。ついにこの日が来ました！
今宵、とうとう・・・徳川埋蔵金発見か！？」

ＴＶＳを代表する美人女子アナ。その綺麗な声で、収録が始まった。

観客席の慎吾達は、前説の芸人に指示された通り大きな拍手を送る。

慎吾「・・・　・・・」

気になる人物がいた。スピリチュアル・カウンセラーの江浜だ。

（慎吾「・・・　体調が・・・　悪そうだ・・・」）

何となくではあるが、慎吾には江浜の顔色がすぐれていないように見えた。

女子アナ「では早速。まずは糸見さんにお話を・・・」

いつもは発掘現場にいる事が多い糸見だが、今回はスタジオ収録に参加している。

収録開始最初の３０分は・・・過去の番組構成と同じ、徳川幕府が終焉を迎える歴史的背景や無血開城の話がスタジオ内にある大型ＶＴＲで説明された。そして本来あるべきはずの御用金が全て行方知れずになっていた流れから、出演者との間でディスカッションが始まる。

教授Ａ「今まで見つかった文献や資料を見渡しても・・・
　埋蔵金の存在は間違いないですよ」

教授Ｂ「ならば何故、御用金消失から１５０年近くも見つからないのですか？
　そもそも新政府が勝手に江戸の御用金を目当てにしていただけ。

【ある】でなく、【あるはずだ】って思い込んでただけでしょう！？」

糸見氏「ならば勝海舟の記録にある３６０万両はどこへ行ったのでしょう？」

教授Ａ「それに徳川家康の黄金像の発見からも・・・」

教授Ｂ「いやいや、それ、行方不明になったんでしょ？
　確かな鑑定も受けてないのに、まともに取り合うのはどうかと。

　過去、ここまで大規模な発掘をして見つからない・・・
　って事は、埋蔵金なんかないって事ですよ」

教授Ｃ「それは論理的におかしいですね。
　今まで見つからなかったから、存在しない・・・
　それは論理的に真ではない」

・・・　・・・・。

スペシャルゲストの【山嵐】のメンバーはこのディスカッションに何とか加わろうとするが、埋蔵金の知識に関しては教授陣や糸見氏にはかなうはずもない。

アイドルの彼らが発言しようものなら、微妙な空気が流れてしまうのをスタジオ内の全員が感じていた。

少しでもＴＶに写ろうとするアイドルの使命感がそうさせるのか、彼らはタイミングを見計らって彼らなりの発言をする。後にこの番組をＴＶ放映で見る事になる慎吾とリナだが、スムーズに彼らがディスカッションに加わる様（さま）に、編集のなせる業（わざ）を感じる事になる。

江浜はというと・・・終始無言。ただそこに座っているだけで、我関せずといった感じだ。その表情は何か考え事をしているようだった。

・・・　・・・・。

リナ「・・・　退屈ね。まぁ、イケメンアイドル見るだけでも来た価値はあるか・・・」

慎吾「そうですね。今やってる議論って昔からあるヤツですし。ちょっと退屈ですね」

リナが眠そうに慎吾に視線を向ける。

リナ「・・・。あんたの退屈と私の退屈は、質が違うっつーの。
ま、サインもらうためにも、最後まで我慢して見てやるか・・・」

収録から1時間が過ぎた頃・・・
劣勢な埋蔵金存在説側の糸見が、奥の手を出した。

糸見氏「実は・・・以前我々が発掘した源次郎の井戸の付近でですね・・・
今から1ヶ月前、ある銅板が見つかったんです。
まさに・・・埋蔵金のありかを示した銅板です！」

観客の慎吾達は大げさに「おーーー！！」という歓声をあげた。

リナ「ふん・・・どうせまた、ガセネタっしょ・・・」

大きな歓声に混じってリナがつぶやく。

糸見が銅板発掘の経歴や苦労話を短めに語った後、アナウンサーに合図を送った。

ガコン！

会場内の電気が一斉に消える。

ザワザワ・・・　ザワザワ・・・

急にスタジオ内が真っ暗になったため、観客席からは自然とざわめ

く声が漏れた。
数秒の間を経て・・・
パァン・・・
女子アナウンサーのみに、スポットライトが当たる。
女子アナ「では・・・　今宵徳川埋蔵金のありかを記した銅板が・・・
　　ＴＶの前のみなさんに、お披露目されます！」
そう言うと、今度はステージ上の１人の男にスポットライトが当たった。
そこには大柄な男が、銅板を両手に抱えて立っている。
白のスーツ、白のネクタイ、白のズボン・・・完全に白一色のコーディネートを意識したかと思いきや、大きな黒いサングラスが際だち、その年齢を不詳にしていた。
数秒の間の後、おもむろに男はサングラスを取る。
慎吾「あ・・・あの人・・・」
リナ「何、あんた？　知ってんの？」
慎吾「いや、ほら・・・さっき、前説してたお笑い芸人です。
　　大きい方の人ですよ！」
リナが目を凝らして大男を見つめる。

リナ「あ、言われてみればそうね・・・
　さっきまでラフな格好だったのに。
　ヤクザっぽい格好して・・・
　なんでステージの真ん中にいんの？」

女子アナ「ご紹介しましょう。ステージに立っておられる彼は・・・
　若手お笑い芸人【スーパー・マリオ・ブラザーズ】・・・
・
　時任（ときとう）マリオさんで～す」

アナウンサーの紹介直後、観客席はとりあえず拍手をした。
慌てたＡＤが、観客席に向かって「もっと大きな拍手を！」のジェスチャーをする。

慎吾「そっか・・・僕らにはさっき見た芸人ですけど・・・
　ＴＶ見てる人には、初登場なんですよね。
　盛り上げなきゃって事です」

リナ「どーでもいーっつーの・・・眠・・・」

リナは小さなあくびをする。

女子アナ「今年、二十歳（はたち）になるマリオさん。
　今回、赤城山周辺の過酷な発掘ロケに参加してもらい・・・」

女子アナが、銅板発掘の経緯を紹介し始めた。ステージの中心にいる時任マリオ・・・スタジオ内の出演者や観客席に対して、無表情を貫く。

一通りスタジオ内を見渡した後、大きなサングラスを再びかけた。

リナ「あー・・・はいはい、あれね・・・。
　過酷なロケに、ギャラのかからない無名若手芸人ってパターン」

ふと慎吾が何かを思い出したような顔をする。

慎吾「どこかで・・・」

右の拳をコツンと額にあてるしぐさをした。

慎吾「どこかで・・・見た事がある・・・彼・・・」

リナ「さっき前説で見たんでしょ？」

慎吾「あ、いえ。そうでなく・・・」

リナ「松順様の楽屋出た時、ぶつかってなかった？」

慎吾「あー、それもそうなんですが・・・。
　今日でなくて、どこかで・・・彼を見た事があるような・・・。

　あの雰囲気・・・　ごく最近・・・どこかで・・・」

リナ「ま、売れてないとはいえ芸人だし・・・何かのＴＶで見たんじゃない？」

慎吾が静かに首をふる。

慎吾「違います・・・　直接見た事が・・・」

記憶を探るが、思い出すことが出来ない慎吾。

マリオ「・・・　・・・」

白ずくめの大男・・・その両手に抱えられている、徳川埋蔵金のありかを示したとされる銅版・・・スポットライトの光を浴びたまま、みなの目に触れられるのを待ち構えていた。

時任マリオ・・・

サングラスの奥で、殺気じみた鋭い眼光を放っている。

その瞳の先には・・・

慎吾の姿があった。

（第１３話へ続く）

第１２話　白ずくめの男（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

とうとう徳川埋蔵金のありかを示したとされる銅板が、皆の目に晒される。

それを見たリナが、何かをつかんだような表情を見せるが・・・？

収録の後、慎吾はリナに意外な言葉を発する。

慎吾「黙ってましたけど僕・・・
　　　リナ先輩の自己中にウンザリしてたんです！」

次回「第１３話　魔方陣　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１３話　魔方陣（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

番組収録では、スピリチュアルカウンセラーの江浜がスペシャルゲストとして招かれていた。お笑い芸人の時任（ときとう）マリオは、徳川埋蔵金のありかを記しているという銅板を持って現れた。

第１３話　魔方陣

第１３話　魔方陣

その銅板は・・・時任（ときとう）マリオの手によって、高々と持ち上げられた。

ボクシングのラウンドガールがごとく、マリオはその銅板の角度を変えていく。

慎吾「・・・　・・・」

そしてそれは・・・慎吾を始め、スタジオ内の全ての人物の目に触れた。

スポットライトはその銅板にまぶしいほどの光を与え、ＴＶカメラはアップでとらえる。スタジオ内の大型ＴＶにそれは映し出された。

３０ｃｍ四方といった大きさぐらいか。

多少の傷やはげた部分もあるものの、１４０年の眠りから覚めた割には遠目で見ても「何かが書いてある」と判断ぐらいはできる。

ただ光の反射が強すぎて、書かれてある詳細までは判別できない。

ようやくここで会場が明るくなった。

女子アナ「今の銅板は先ほど糸見氏がおっしゃられた通り・・・」

ＴＶＳの看板アナウンサーが、説明を始める。

女子アナ「黄金の徳川家康像が見つかった源治郎の井戸。

その付近にある横穴から、新たに発掘されました。

４日前、金沢大学のＯ教授に銅板の鑑定を依頼。
１８６０年代のものという鑑定結果が出ました」

観客「お～！」

観客席の慎吾達・・・意識したわけではないが、自然と大げさな声が出た。

女子アナ「では、この銅板を発見したマリオさんに話を聞いてみます。

マリオさん、発見当初の状況をお聞かせください」

ステージの大男は、ゆっくりと口を開く。

マリオ「そうですね・・・今からちょうど1週間前、激しい雨が降る中。

スタッフとこの日の発掘を中止にしようかと、検討していました。

でも、こういう日こそ何か発見できそうな気がして・・・」

女子アナ「何かそういう・・・予感がしたって事ですか？」

マリオ「えぇ。だからスタッフに無理を言って・・・」

観客席にいるリナがぼそっとつぶやいた。

リナ「どうでもいいわよね、あの会話」

慎吾「まぁ・・・ＴＶ見てる人にわかるようにって・・・
　　番組的な事ですから、仕方ないです」

リナ「あの銅板・・・ライト反射して、何なのかわからなかったなー」

慎吾「あれ？　リナ先輩、興味あるんですか？」

リナ「いや・・・一瞬見えたのがね・・・
　　なんか頭にさーっと入ってきてね」

慎吾「まぁ、しばらく待ちましょう。絶対また出ますって」

リナ「うん・・・」

リナは一瞬だけ見えた銅板の情報が、頭の中に数字として入ってきていた。
ただ見えない部分があり、それが何を意味するかはわからなかった。

しばらく銅板発見者のマリオと女子アナ、そしてスタジオ内のゲストらの会話が続く。

そして・・・

女子アナ「この銅板は、地図・・・という事ですね？」

マリオ「えぇ、間違いありません。いくつかの情報と地図が混在し

たものです。
地図は赤城山周辺のもので間違いありません。
はっきり言いましょう・・・」
ＴＶカメラが、マリオのアップを捉える。
マリオ「これこそ・・・徳川埋蔵金のありかを示した地図です！」
観客「おーー！！！」
女子「何と埋蔵金のありかを示した地図！
ただ劣化が激しいところがあり、見づらい部分もあります。
そこでスタッフが銅板に書かれた地図と同じ尺度の航空図を用意。
銅板の地図と完全に重ねたものが・・・コレです！」
スタジオ内の大きなスクリーンに、それが映し出された。
＞ｉ３３７０３―２４３０＜
赤城山周辺の地図が９分割にされている。そして各部分に妙な線の羅列と漢字が書かれてあった。
慎吾「あ！」

スクリーンの画面を見た瞬間、慎吾が声をあげる。

リナ「・・・。一応聞くけど、何、その反応？
　まさか、埋蔵金の場所わかった？」

とりあえず慎吾の声に反応するリナ。

慎吾「いや・・・あの文字とか線の書かれた図・・・
　八卦（はっけ）ですよ」

リナ「は？　はっけ？　【当たるもはっけ、当たらぬもはっけ】の？」

慎吾「そうです！」

リナ「え・・・マジ？　ボケたつもりなんだけど・・・」

慎吾「古代中国の【陰陽思想】を表したもので、【易経】における・・・」

リナ「あー・・・ちょっちょっちょっと・・・　私、歴史とかダメなのよ！」

慎吾「五経（ごきょう）の話ですよ・・・　歴史で学びましたよね？
　儒教の教典！　易経は五経の１つだし、徳川の将軍も・・・」

リナ「わかった！　わかったから黙ってて！　あんたの話長くなりそうだし・・・」

歴史に全く興味のないリナは、慎吾の歴史オタクトークを制止した。

リナ「ただ、あの【一】とか【一　一】は数学的な意味がありそうね・・・

2進法に近いものが・・・」

それを聞いた慎吾が、再び反応する。

慎吾「そう！　それ！　さすがリナ先輩！　数字【は】強い！」

リナ「・・・。　なんか、あんた・・・ムカつくんだけど・・・」

慎吾「確かにあの記号は数字に対応するって・・・

ライプニッツって人が、解読したと聞いた事があります」

リナ「ライプニッツ・・・。高校の時数学の授業で出たわね、その名前。

ニュートンと並んで【微分積分、やな気分】の発見者よ」

慎吾「び・・・微分積分・・・

その言葉聞くだけで僕、確かにやな気分でした・・・」

そんな2人の会話をよそに、女子アナが銅板に書かれた図の説明を始めた。

これらの記号が易経で使われる八卦の記号である事。【一】【一一】の記号が2進数に対応する事などを説明する。

リナ「うん・・・　わかった・・・」

慎吾「え!?　埋蔵金のありかが!?」

リナ「まさか・・・あんたが歴史ヲタクだって事がわかったって話よ。

あんたの言った事が、今説明してる事と同じだもん」

そういうと、リナは携帯を取り出し何かを操作し始めた。

慎吾「何やってるんですか?」

リナ「いや、携帯のあんたの名前を【歴ヲタ】に変えてるの。

一発であんただとわかるし」

慎吾「え～。何だか微妙な名前ですね・・・。

でもちょっとカッコいいかも・・・」

リナ「・・・」

リナは無言で携帯を操作し終える。

銅板に使われた図は・・・八卦で使われる歸藏(きぞう)図と呼ばれる図であり、各所に対応する数字を当てはめ・・・

＞ｉ３３７０４―２４３０＜

そして真ん中に【５】を入れると

＞i３３７０６―２４３０＜

魔方陣になる事を女子アナが説明した。

リナ「魔方陣か・・・」

慎吾「歸藏図が魔方陣になるってのは、けっこう有名な話なんですよ」

リナ「財宝を隠すために、魔方陣使う・・・っていうのはアリなの？」

慎吾「えぇ、ありますよ。日本の場合、財宝秘宝を隠す手がかりとして・・・
　高度な暗号や数値記号を使い、そのありかを示した例はいくつもあります」

リナ「ふ～ん・・・そっかぁ・・・」

リナはスタジオの巨大スクリーンをじっと見つめている。

６―１―８
｜　｜　｜
７―５―３
｜　｜　｜
２―９―４

魔方陣とは・・・縦・横・斜めの数字３つを足すと、全て同じ和になる数字配置の事である。今回の魔方陣は全ての和が１５となる。

リナ「でも・・・」

ふとリナが口を開いた。

リナ「私が見たのは・・・銅板の裏。
あの裏にまだ何か書かれてあったのよね～」

確かに見た。一瞬だけだったが・・・銅板の裏に何かの対称的な図形と、文字が書かれてあるのを。

慎吾「あの一瞬で見えたんですか？」

リナ「メガネかけてはいるけどさ。動体視力はいいもんよ。
それに一瞬で覚えるのが得意なのは・・・あんたも知ってるでしょ？

あの裏に書かれてあるのも・・・見たいな一・・・」

慎吾「何で見せないんでしょう？」

リナ「決まってるでしょ！
裏には埋蔵金のありかを示す【確信的な何か】があるのよ！」

慎吾「確信的な・・・何か・・・？」

リナ「私達が埋蔵金を獲らないように、秘密にしてるんじゃないの？
くそー・・・　あの裏、見たいな・・・ちぇっ！」

この後・・・

スタジオ内では、銅板をめぐるディスカッションが行われた。

埋蔵金否定派は「どうせ、またガセ」「見つけてから大口を叩け」の姿勢を崩さない。

肯定派は「ならば見つけてみせよう」と強気の姿勢。

しばしの時が流れた後・・・

マリオ「1週間！」

いつの間にか、肯定派の席に着いていた時任（ときとう）マリオが高らかに宣言した。

マリオ「1週間で埋蔵金が見つからない場合・・・
あなた方（がた）、否定派の勝ちを認めましょう！」

女子アナ「おぉ！　強気な発言が出ました！」

マリオ「我々はこの後・・・
銅板に示された地図を手がかりに、発掘作業へと戻ります。

今ここで宣言します！
１週間以内に我々は徳川埋蔵金を見つけます！」

ＴＶカメラがマリオのアップを捉える。観客席の慎吾らは、ＡＤの指示に従って大きな拍手で会場を盛り上げた。

拍手の音が静まった頃、カメラは女子アナのアップに切り替わる。

女子アナ「本当に徳川埋蔵金は出るのか！？
いよいよ来週・・・
お茶の間の皆様に、衝撃映像をお届けします！！」

・・・・・・。

こうしてこの日の収録が終わった。

慎吾ら観客は、ＡＤの指示に従ってスタジオの出口へと歩いて行く。

リナ「え？　何？　この番組、２段階構えなの！？
来週に続くって・・・」

慎吾「さっきＡＤの方が言ってましたけど・・・
次の収録は１０日後ですって・・・」

リナ「くぁー！　２週にまたがって引っ張るつもりね！
てか、マジで埋蔵金１週間以内に発掘するって事？」

慎吾「どうやら発掘に相当の自信があるみたいですね・・・
　あのマリオって人」

リナ「でも今日の収録、つまんなかったー！
　【山嵐】いなかったら、絶対こんなＴＶ見ないわね！」

慎吾「だからですよ・・・
　視聴率取るためにアイドル呼んだって事ですね」

リナ「ま、いーわ。どうせ次の収録なんて見学しないし！
　さ～、サインもらいに行くわよ！サイン！！」

慎吾「はい！」

２人にとって・・・徳川埋蔵金は、すでに対岸の火事だった。

５分後。

ポーン・・・

２人は松浦の楽屋のある６階でエレベーターを降りる。
松浦に【山嵐】のメンバーを紹介してもらうとあらば、リナの機嫌も最高潮に達するしかない。

だが・・・。

エレベーターを降りた瞬間だった・・・。

＊＊「＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

慎吾「え？」

突然慎吾が右手でコメカミを押さえた。

リナ「何？」

周りに変わった様子はない。

＊＊「＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊　・・・」

慎吾「な・・・？」

＊＊「＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　・・・」

慎吾「・・・・」

慎吾の様子が変だ。

リナ「ちょっとあんた・・・大丈夫？　気分悪くなるならせめて・・・

【山嵐】メンバー、全員のサインもらってからにしてよ！！」

様子のおかしい慎吾の肩に手をおいてゆするリナ。

慎吾「・・・　・・・・」

突然慎吾は、真剣な目でリナを見た。

リナ「な・・・　何よ？」

慎吾「リナ先輩！　好きな言葉は！？」

唐突に慎吾はリナに変な質問をぶつける。

リナ「は！？」

慎吾「急いで！　好きな言葉ありますか！？」

リナ「う～ん・・・【イケメン】かな」

慎吾のは迫力に押され、正直に応えた。

慎吾「わかりました！　いいですか、よく聞くいてください！」

ものすごく焦った表情で喋る慎吾に、どう対応していいかわからないリナ。

慎吾「僕からのメールは、必ず最初に【イケメン】と書きますから！」

リナ「は？　何言ってんの、あんた？」

慎吾「それ以外のメールは絶対返さないでください！　いいですね！！」

リナ「言ってる意味、わらかないっつーの！！！」

慎吾の不自然な行動にイライラし始める。

突然・・・

慎吾が不愉快そうな表情を浮かべ、信じられない事を口にする。

慎吾「黙ってましたけど僕・・・
　リナ先輩の自己中にウンザリしてたんです！」

リナ「！？」

慎吾の言葉が頭に入ってくるのに、しばしの時間を要した。

リナ「は～！？　あんた何言ったの？　マジ言ってんの！？」

思いっきり眉毛をつり上げたリナが、大声で返す。

慎吾「もちろんですよ。僕が嘘ついた事ありますか？」

慎吾は挑戦的な態度をとる。

リナ「あんた、言ってる事がしっちゃかめっちゃかよ！」

慎吾の言葉と態度に、リナの怒りの度合いが加速する。

慎吾「ホントは、松浦さんの楽屋も3階なんですよ。
　6階まで来て騙されましたね！」

赤メガネの向こうの瞳が大きく見開いた。

プチッ。

そして何かが切れた。

瞬間、慎吾の顔面右頬に・・・リナの右ストレートが炸裂していた。

もんどりうって、フロアに倒れる慎吾。

その慎吾に背を向けてエレベーターに向かうリナ。

イライラしながら、エレベーターの「←」ボタンを連打する。

リナ「ちょっと優しくしたら・・・全く、だから男ってヤツは・・・」

ようやく開いたエレベーター。

リナ「おっと・・・」

イライラしながら乗り込もうとするが、エレベーターの中から降りる人物がいた。

黒いスーツ、黒いズボン、黒いサングラス・・・黒ずくめの男が３名、降りてくる。

怒り心頭のリナは男らをかわし、すぐにエレベーターに乗ろうとした。

一人の男とすれ違った瞬間・・・

リナ「・・・　・・・」

男のスーツが一瞬めくれた際、【それ】がリナの視界に入る。

ズボンとメタボなお腹の間にある・・・

拳銃を。

そして黒ずくめの男3人は・・・

慎吾を取り囲んだ。

（第１４話へ続く）

第１３話　魔方陣（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

銃を持った黒ずくめの男３人に取り囲まれた慎吾。
直後江浜も現れ、慎吾に相対する。

エレベーターの中からその様子を見ていたリナ。
ただ事でない雰囲気を察し、慎吾の元へ向かおうとする。

その時、江浜は慎吾に向けて強烈な攻撃をくわえた。
そして慎吾は・・・　　　リナは・・・

次回　「第１４話　　拉　　致　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１４話　拉　致（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった2人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

その番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は包囲された。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１４話　拉　致

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第14話　拉致

慎吾の無礼な発言に、怒り心頭のままエレベーターに向かったリナ。

一人の男とすれ違った瞬間・・・

リナ「・・・　・・・」

エレベーターから出てきた黒ずくめの男・・・銃らしきものを持っているのが見えた。

（リナ「まさか・・・ドラマか何かの小道具よね？」）

そう言い聞かせ、エレベーターの中に入り【3】を押す。

ふと自分が来た道に目を見やると・・・

倒れている慎吾を、黒ずくめの男3人が囲っていた。

リナ「え・・・？」

不穏な空気を感じたリナ。閉まろうとしたエレベーターの扉を手で止め、事態を見つめる。

無様に床に倒れた慎吾は、右頬を抑えながら・・・

慎吾「・・・　・・・」

3人の男に囲まれている事を確認した。目の前に一人、後ろに2人・・・3人とも慎吾を凝視している。

慎吾「・・・　・・・」

背後の男を確認するふりをして、チラッとエレベーターの方を見た。リナはエレベーターに乗っているものの、その扉は開いたままこちらを見ている。

（慎吾「ま、まずい・・・」）

正面に目をやると、さらに一人の男が向こう側の廊下から現れた。

スピリチュアル・カウンセラーの江浜である。

こちらも黒ずくめ。慎吾は4人の黒ずくめの男に囲まれた事になる。

＊＊「＊＊＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊　・・・」

慎吾「う・・・」

慎吾はコメカミを抑える。

＊＊「＊＊＊＊＊＊＊＊＊・・・」

慎吾「ぐ・・・」

慎吾は小さな悲鳴を上げながらゆっくりと立ち上がった。

リナのパンチで軽い脳しんとうを起こしているため、足下がおぼつ

かない。

エレベーターにいるリナの視界が江浜をとらえた。

（リナ「な・・・　江浜氏!?　何が・・・？」）

江浜を含めた黒ずくめの男４人に囲まれた慎吾が、無理に立ち上がろうとしている。それを見ていたリナはただならぬ事態と感じ、エレベーターを降りようとした。

その時・・・

江浜「・・・　・・・」

数ｍ離れた慎吾に向け、江浜は右の手のひらを垂直に向ける。

江浜「？！（おん）」

大きなかけ声と共に、その手のひらを数１０ｃｍ押し出した。

慎吾「！？」

瞬間、慎吾の右肩に激痛がはしり、そのまま後ろに吹っ飛ばされる。

江浜、慎吾の直線上・・・エレベーターを出ようとしたリナにも、目に見えない風圧が襲いかかった。

リナ「きゃ！」

風圧に押され、エレベーターの中で尻餅をつく。

そのままエレベーターの扉が閉まり、下へと移動を始めた。

リナ「ちょ・・・　ちょっと待って・・・」

すぐにエレベーターの【開】ボタンを連打するが、その要求を受け入れられる事はない。

エレベーターは3階↓1階まで降りた後、各階で停止しながら6階まで上っていく。

再度6階に降り立ったリナだが・・・

慎吾の姿はおろか、黒ずくめの男達、江浜の姿もそこにはなかった。

・・・　・・・。

その頃、慎吾は・・・

黒ずくめの男に抱えられ、とある場所へと身を移されていた。

慎吾「・・・　・・・」

リナに受けた右ストレートにくわえ、江浜に受けた【何らかの衝撃】

で気絶寸前。

意識朦朧（いしきもうろう）の中、慎吾はとある部屋へと連れて行かれる。

男は、無造作に慎吾を床に放り投げた。

極限にまで気分の悪い慎吾は・・・

慎吾「・・・　・・・」

ひどい頭痛のまま、気絶する。

江浜「・・・　・・・」

気絶した慎吾を見て、江浜がつぶやいた。

江浜「だから警告したんだ。ここには来るなと・・・」

・・・　・・・。

ただならぬ事態を察したリナは、ＴＶＳ局内を駆け回る。

リナ「リュックを背負った、オタクっぽい男の子を見ませんでした？」

局内の人に聞き回るが、誰一人満足のいく回答をする者はいなかった。

（リナ「今、思えば・・・」）

あの慎吾が、自分に暴言など吐くはずがない。どう見ても、あの態度は不自然。

（リナ「だとしたら・・・」）

何らかの危険を察知した慎吾が、わざと自分を逃すためにひどい事を言った・・・

（リナ「そう考えるのが妥当・・・か・・・」）

【山嵐】の事など、すでに脳内にない。慎吾を見つけ出そうと、広い広いＴＶ局の中を・・・ただ、ひたすら探し回った。

（リナ「ったく・・・　気を遣うな！って、いつも言ってるのに・・・」）

慎吾のおせっかいにイラつく以上に・・・慎吾の異変に気づいてやれなかった自分にイラつく。

結局・・・慎吾を見かけたらすぐ連絡するよう、事務の人に電話番号を伝える事しか出来なかった。

これまでの事を振り返るリナは

（リナ「ひょっとして・・・　拉致られた・・・？」）

そう思い始める。都内にうとい慎吾が、自分を局内に残して出て行くはずがない。

（リナ「もしそうだとして・・・　何故、あいつが拉致られるの？
それに男が持っていた銃は・・・本物？

江浜氏はいったい・・・？」

多くの謎がリナの頭を駆け巡る。

・・・　・・・。

慎吾「・・・　・・・」

ふと慎吾は意識を取り戻した。

軽い脳しんとうのせいか、まだ視界がぼやけている。小さな部屋・・・六畳ほどの薄暗い部屋にいるようだ。

イスに座っていた。いや・・・イスに座らされ、縛られていた。

慎吾「・・・　・・・」

両手は後ろでイスに縛られ、両足も1本のひもでぐるぐるに結ばれている。

目の前には・・・黒ずくめの男が2人いた。江浜の姿は見えない。

慎吾の意識が戻ったのを確認すると、1人が外に出て行く。

残った一人は慎吾から目を離さない。監視役だろうか？

慎吾「・・・　・・・・」

5分後・・・男は戻ってきた。そしてもう1人別の男が部屋に入ってくる。
その男は、折りたたみ式のパイプイスを拡げ・・・慎吾の前に置くと、向かい合うように座った。

「やぁ・・・　お目覚めかい？」

慎吾が目の前の男を確認する。

慎吾「あ・・・　あなたは・・・」

TV収録で、番組の中心人物だった・・・

あの男の姿があった。

（第15話へ続く）

第１４話　拉　致（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

収録を終えた糸見は、出演者らに握手を求めていた。
楽屋に戻ると、中にはお笑い芸人のマリオがいる。
２人は握手を交わし、今後の確認作業を始めた。
そして・・・
時任マリオ・・・その素性が明らかになる。
次回　「　第１５話　　時任マリオ　　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１５話　時任マリオ（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は包囲された。さらに江浜も現れ、慎吾に攻撃。そして慎吾は、連中に拉致された。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１５話　時任マリオ

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１５話　時任マリオ

慎吾が拉致される２０分前。

ＴＶＳ特番【徳川埋蔵金の謎を追え!】収録直後・・・

番組の出演者でありプロデューサーでもある糸見は、出演者らと握手を交わしている。徳川埋蔵金存在否定派の教授陣にも、笑顔で握手を求めた。

糸見「十日後の収録も・・・　お願いします・・・」

１週間以内に徳川埋蔵金を確実に発掘する・・・糸見の笑顔は、その自信の表れでもある。ただ一人だけ糸見の握手を拒否した男がいた。

スピリチュアル・カウンセラー江浜・・・

握手を求めた糸見に対し、江浜はポケットの中に手を入れたまま。

江浜「・・・　・・・」

鋭い視線で糸見を睨みつけ、その手を外に出すことはない。

「わかったよ」という表情を見せ手を引っ込める糸見。そして小さな声で江浜に声をかけた。

糸見「まだ、大丈夫さ。後はお前次第・・・」

不適な笑みを浮かべた糸見は【山嵐】のメンバーに握手を求めるため、その場を離れる。

江浜「・・・　ゴホッ・・・」

1つ咳をした江浜は・・・とある場所へと向かった。

糸見「・・・　・・・」

その江浜をチラリと見つめる糸見。

糸見「・・・　ふっ・・・」

今回新たに発見した銅板。それに加え、糸見には・・・

埋蔵金を発見するための、もう1つの切り札があった。

・・・　・・・。

出演者と一通り握手を終えた糸見は、自分の楽屋に戻って来る。

ガチャッ

楽屋のドアを開けると・・・中に一人の男がいた。

白ずくめの大男・・・　お笑い芸人、そして銅版発見者である時任マリオである。

マリオの顔を確認した糸見は、右手を差しだし握手を求めた。
彼は迷わずその右手を力強く握りしめる。

マリオ「あれでよかった？」

糸見「あぁもちろん！　すばらしい演出だった！
　あの【一週間！】は、まるで映画のワンシーン。最高さ！」

握手を解いた2人。マリオは小さな椅子に、糸見は大きなソファーに座った。

糸見「今日は完璧。
　とうとう、埋蔵金を見つける時が来たな・・・」

マリオ「あぁ。でもあの銅版の解読は？」

糸見「任せろ。専門家に頼んである。もうすぐ結果が出るはずだ。
　それに・・・もう一人強力な助っ人がいる」

マリオ「助っ人？」

糸見「あぁ・・・いずれお前にも会わせる。
　何も知らなさそうな青年だがな。

　ある霊能者が言ってたよ・・・
　彼は埋蔵金のありかをよく知る人物だ・・・ってね」

マリオ「・・・　・・・」

マリオは2～3度、頷(うなず)くしぐさを見せる。
ある霊能者が誰かと聞くことはない。マリオ自身、よく知っているからだ。

マリオ「そうか・・・　ありかを知ってる男なんだね。
　　でも彼が、埋蔵金について情報を口にするのかな？」

糸見は拳(こぶし)を握る。

糸見「青年については任せろ。そこは心配しなくていい。
　銅版の解析結果によらず、喋らせる手はずは整えている。
　どんな事があっても、必ず埋蔵金は手にするさ」

その言葉を聞いたマリオは小さく笑った。

マリオ「わかった。じゃぁ俺は、発掘に専念する・・・」

糸見「あぁ。お前の宣言通り1週間以内に埋蔵金は見つかる！
　そして10日後の収録では・・・

　否定派連中の鼻をあかす事になる！」

嬉しそうに語る糸見に対し、マリオは無表情になる。

マリオ「あぁ・・・　楽しみだね」

感情のこもらない返事を返した。マリオの素っ気ない表情を【本当に見つかるのか】という不安だと解釈した糸見。笑いながら彼の肩

を叩く。

糸見「安心しろ！　絶対見つかるから！　心配は一切無用！
次の収録のサブタイトルはこうさ・・・

【徳川埋蔵金！　親子2代で、ついに発見！！】」

そう。この2人は・・・

マリオ「タイトルは好きにするといい。父さんの長年の夢だったしね」

親子である。

糸見「何言ってる！？　元々埋蔵金発掘の企画は、お前だっただろう？」

マリオ「まぁ・・・　そうだけど・・・」

糸見「お笑い芸人になると聞いた時は、正直驚いたが・・・
1週間後には、誰もが知っている歴史の謎を解く事になる。

お前は芸能界で一躍名が知れ渡るどころか・・・
歴史に名を刻む事になるんだ！！」

マリオ「あんまり興味がないけどね・・・埋蔵金以外は」

糸見「何だと～？　うだつの上がらない芸人は・・・
親として、認めるわけにはいかないぞ！」

そういう糸見は笑顔であった。もはや埋蔵金は、我が手中といった感じである。

マリオ「ま・・・俺は発掘に専念する。それだけさ」

糸見「あぁ。私の年齢では、体力的に現場は無理だからな。頼むぞ」

マリオ「わかった。じゃぁ早速俺は行くかな・・・
まずは源治郎の井戸だ。
何かわかったらすぐに携帯に連絡して。
こちらも何か見つけたら連絡する」

糸見「もちろん！　私は解析と、例の青年からの情報を確認する」

マリオは席を立ち、楽屋の出口へ向かった。

マリオ「・・・　・・・」

出口の前で立ち止まり、ふと父親に視線をやる。

マリオ「父さんは・・・　埋蔵金を見つけた後は、どうするの？」

糸見は笑いながら応える。

糸見「まずは、次の収録に全てをかける。ゴールデンで４０は取るぞ！

その後は・・・本でも書くさ。タイトルはもう決まってる

んだ。

【ある事はわかっていた】

どうだ？　コピーライターらしいタイトルだろ？」

マリオは小さく笑って頷いた。

マリオ「そうだね・・・。じゃあ、お互いの仕事を・・・」

そう言うとマリオは父に背を向けドアノブを回す。

糸見「あぁ、またな。小太郎」

マリオ「・・・　・・・」

ドアを開けた手を一瞬止めるマリオ。そして父に背を向けたまま口を開く。

マリオ「父さん・・・。

ＴＶ局では、名前で呼ぶの・・・ヤメてくれよ」

そう言うと、マリオは楽屋を後にした。

糸見「・・・　・・・」

閉まるドアを見て、糸見は目を細めている。

糸見「ふ・・・　お前は、いつまでも俺にとっちゃ息子さ・・・

小太郎・・・」

芸名【時任マリオ】、本名【糸見小太郎】。

彼が楽屋を出てわずか3分後・・・。

黒ずくめの男が、周りを警戒した様子で、糸見の楽屋に入ってきた。

ソファーでタバコをふかす糸見の横に立ち

男「確保しました。第5スタジオ・小道具部屋です」

そう告げる。

糸見「・・・　・・・」

男の方に視線を移すことはない糸見。正面の鏡を見つめたまま「ふ～」と煙を吐き出した。

糸見「わかった。5分後に行く」

黒ずくめの男は一礼をし、また警戒しながら楽屋を出て行った。

糸見「・・・　・・・」

しばらくタバコを吹かしていた糸見。やがて、タバコを灰皿に押しつけ・・・

糸見「よし！」

と立ち上がる。その表情は目がギラギラし、これから獲物を真剣に

狩りに行くといった表情である。
楽屋を出て向かった所は・・・

・・・　・・・。

第５スタジオ。

さりげなく周りを警戒しながら、糸見はドアを開け中に入った。

３０ｍ四方の広いスタジオだ。

中に入ると・・・ドアの側に、先ほどの黒ずくめの男が立っている。

男は無言で、スタジオの右奥にある小さめの部屋を指さした。

頷いた糸見は、そこへ歩(ほ)を進める。部屋の前にはさらに２人の男がいた。

黒ずくめの男、そしてスピリチュアル・カウンセラーの江浜である。

江浜「・・・　・・・」

糸見「・・・　・・・」

視線は合わせど、言葉を交わすことはなかった。糸見は２人を一瞥した後、部屋の中に入っていく。

江浜「・・・　コホッ・・・」

1つ咳をした江浜。糸見が部屋に入るのを、ただ睨み付けるだけだった。

第5スタジオ・小道具部屋。

部屋は6畳程度の薄暗い小さな部屋。四方には棚があり、ドラマやバラエティで使う小道具がたくさん並べられている。

部屋に入ると、さらにもう一人黒ずくめの男が立っていた。
そして部屋の真ん中に、イスに縛られた一人の青年がいる。

黒ずくめの男は、糸見に小さな声で語った。

男「ちょうど今、目覚めたところです」

糸見は小さく頷き、部屋の横にあったパイプイスをその青年の前に置く。そして静かに青年と向き合うように座った。

糸見「・・・　・・・」

目の前にいる具合の悪そうな青年をしばらく見つめた後、口を開いた。

糸見「やぁ・・・　お目覚めかい？」

青年が目の前の男を確認する。

「あ・・・　あなたは・・・」

（第１６話へ続く）

第１５話　時任マリオ（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

糸見は椅子に縛られた慎吾に銃口を向けた。

糸見「「ここは小道具部屋だ。本物かどうか試してみるか？」

銃口から目を背け、歯を食いしばる事しかできない慎吾。

そして・・・慎吾の悲鳴が部屋に鳴り響いた・・・。

次回　「第１６話　撃鉄（げきてつ）　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１６話　撃鉄（げきてつ）（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・

アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は拉致された。

一方、番組収録を終えたプロデューサーの糸見は、息子である小太郎と埋蔵金発掘の打ち合わせを行う。その後・・・糸見は、慎吾の前に現れた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１６話　撃鉄（げきてつ）

第１６話　撃鉄（げきてつ）

小太郎「ふ～・・・」

ＴＶＳを出る車の中で、小太郎はタバコをふかしていた。埋蔵金発掘のクルーらと、大きめのバンの後部座席に座っている。

小太郎「・・・　・・・」

タバコを片手に、窓の外を眺めた。

小太郎「・・・　・・・」

糸見小太郎　＝　Ｉｔｏｍｉ　Ｋｏｔａｒｏｕ

このローマ字を並び替えれば・・・

時任マリオ　＝　Ｔｏｋｉｔｏｕ　Ｍａｒｉｏ

自らの芸名になる。

（小太郎「・・・　くだらん芸名だ・・・」）

ふと、車内の時計を見た。

小太郎「・・・　・・・」

短くなったタバコを、再びふかす。

（小太郎「・・・　そろそろか・・・」）

そして窓の外に、火の点いたままのタバコを投げ捨てた。

・・・　・・・。

第５スタジオ・小道具部屋。

糸見「さて・・・　何から話せばいいのやら・・・」

まだ意識が朦朧（もうろう）としている慎吾・・・黙って糸見の目を見ている。

糸見はイスの横に置かれてあったリュックを拾い上げ、チャックを開くと・・・中身をごそごそとあさり始めた。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は、自分のリュックの中身を無造作に取り出される様（さま）を静かに見守っている。

やがて糸見は財布を手にして、その中をチェックし始めた。

糸見「ふむ・・・慎吾・・・か・・・

箱根大学、１年生・・・　１８歳・・・」

慎吾の学生証を見ながら、独り言のようにつぶやく。しばらく慎吾のリュックをチェックしてた糸見は、静かにそれを置き・・・慎吾に視線を合わせた。

糸見「さて慎吾君。何故、今・・・
君がここにいるか、わかるかな?」

慎吾「・・・　・・・」

無言で小さく首を横に振る慎吾。

糸見「ふ・・・」

糸見は満面の笑みを浮かべる。そして静かに後ろに手を回し、腰の辺りからある物を取り出した。

慎吾「!?」

それを見てぎょっとする慎吾。

（慎吾「け・・・拳銃!?」）

糸見の右手には・・・銃が握られている。

糸見「・・・　・・・」

そして無言で、銃口を慎吾の顔面に向けた。

慎吾は目を閉じ、歯を食いしばる。何とか銃口の照準から逃げようとするが・・・イスに縛られた状態では、顔を背ける事しか出来ない。

糸見「ここは小道具部屋だ。本物かどうか試してみるか?」

糸見は静かに撃鉄(げきてつ)をひいた。

ガチャリ。

重苦しい音が、薄暗い小さな部屋に響き渡る。

慎吾「・・・　・・・」

かつて・・・慎吾はこの撃鉄の音を聞いた事がある。

（慎吾「おもちゃなんかじゃない・・・　本物だ・・・」）

歯を食いしばったまま、恐怖と戦う事しかできなかった。

銃口を向けられ、５秒ほど過ぎた後・・・

ヴーン　ヴーン　ヴーン・・・

何かの振動音が部屋に鳴り響く。

糸見は銃口を慎吾からそらし、その音源を探り出そうとした。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾はチラリと目を開け、銃を向けられていない事を確認すると少しほっとする。

しばらくして、糸見はリュックの中から携帯電話を取りだした。
バイブモードになっている状態で、着信は【リナ先輩】となっている。

糸見はその着信を慎吾に見せた。

糸見「彼女か？」

慎吾は無言で首を横にふる。

糸見「ふん。まぁ、こいつはどうでもいい・・・」

そう言うと糸見は【切】ボタンを押し、リナの着信を遮断した。

糸見「さて・・・」

銃口を再び慎吾に向け・・・

そして今度は、慎吾の右膝（みぎひざ）に垂直に銃口を向ける。

糸見「君は知らないだろう・・・
この角度で引き金をひくとだね・・・」

言いながら糸見は、慎吾の顔を下から覗き込んだ。

糸見「一生、君の右足は使えなくなるんだ」

慎吾「・・・　・・・」

ゴクリと唾を飲む音が、糸見にもはっきり聞こえる。

糸見「・・・　・・・」

糸見は無表情で慎吾を見つめ続けた。

慎吾「・・・　・・・」

糸見「何故、君がここに連れて来られたか・・・言ってみろ」

糸見は銃口を慎吾の右膝に押し当て、慎吾の目からけして視線をそらさない。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は糸見から顔を背け、歯を食いしばるだけだった。

しばらくその表情を見ていた糸見は・・・

ガチャリ。

銃の撃鉄を戻す。

糸見「ふん。どうやら君は・・・
　本当に何も知らないようだな・・・」

そう言うと糸見は、銃のトリガー部分に人差し指を奥までさし、銃をブラブラさせた。

糸見「ふ～・・・」

小さなため息をついた後、背後の腰の辺りに銃をしまう。そして慎吾を見つめ、口を開いた。

糸見「私が、徳川埋蔵金を追ってるのは知ってるな？」

慎吾「・・・　・・・」

無言で縦に首をふる。

糸見「ある人物から・・・
君が埋蔵金の情報を持っていると聞いてね。
だから君に来てもらった・・・んだがな」

慎吾「ぼ・・・僕が？」

ふと慎吾は前日に見た書き込みを思い出した。

【スタジオには埋蔵金のありかを知ってる人がくるんだってよ！】

（慎吾「まさか、あの書き込みは・・・　僕・・・？」）

糸見「今日の番組収録にお前が現れる。
だから収録後に、お前を捕まえろ・・・そう指示されてな。
こうして、君をここに連れてきたというわけだが・・・」

腕組みをし、糸見は少し悩んだ表情を見せる。

糸見「君は何も知らない・・・　どうしたものか・・・」

慎吾「・・・　・・・」

勇気を出して、慎吾は聞いてみた。

慎吾「だ・・・誰・・・　なんですか？　その・・・
　指示したって人は・・・？」

糸見「・・・　・・・」

慎吾を睨み付ける糸見。

糸見「君は質問できる立場ではない。
　まぁ、その男は・・・君が直接会うことはないだろう」

慎吾「・・・　・・・」

糸見は数１０秒、慎吾を見つめ・・・静かに口を開いた。

糸見「彼の言う事は・・・過去、全て正しかった。
　最近では、埋蔵金のありかを示した・・・
　あの銅板のありかも言い当てている」

（慎吾「ど、銅板のありかを・・・言い当てた？」）

糸見「すごい霊能力者さ。まぁ、霊能力とやらを・・・

信じる信じないは自由だがな」

（慎吾「れ・・・　霊能力者・・・　まさか、江浜さん？」）

糸見「その彼が・・・
埋蔵金について、君が何かのを情報を持っている・・・

そう言ったんだ」

（慎吾「ぼ、僕が・・・？　埋蔵金の情報を・・・？」）

糸見「潜在意識か、あるいは君に憑いている・・・
何かが、情報を持ってるのか・・・」

一瞬、慎吾の顔に緊張がはしる。

糸見「まぁ、こんな時のため・・・
あいつを用意しているんだがな」

糸見は、後ろに立っている黒ずくめの男に合図を出した。
男は一度部屋を出た後、すぐに戻ってくる・・・スピリチュアル・カウンセラーの江浜を連れて。

慎吾「・・・　・・・」

江浜「・・・　・・・」

2人の男は、視線を合わせる。

（慎吾「誘拐を指示したという人は・・・

僕に会う事はないと言っていた・・・

指示した人は、江浜さんじゃない。

それじゃぁ、誰が・・・？」）

糸見「この男は知ってるかな？」

江浜「彼とは会ったことすらない」

江浜が即答した。２日前、慎吾と直接会話を交わしたにも関わらず、慎吾との接触を否定した。

糸見「お前には聞いてない。彼に聞いてるんだ」

慎吾を指さした糸見は、江浜を睨み付ける。そして無表情のまま慎吾に視線を移した。

糸見「で？　知っているのかな？　この男を・・・」

慎吾は無言で１度だけ深く頷（うなず）く。

慎吾「て、テレビで・・・　見た事が・・・」

糸見「ふむ。まぁ、数字を持ってる番組だしな・・・

じゃぁよく知ってるだろう？　彼の霊能力を」

慎吾は無表情のまま。

糸見「知っての通り・・・

彼は悪霊に取り憑かれた人を、過去何度も救っている。

その救う方法とやらが、いくつかあるんだが・・・」

視線を江浜に合わせる。

糸見「憑かれた人の中から、悪霊を追い払う。
その方法が、私は一番好きなんだ」

慎吾「・・・　・・・」

彼の言う次の言葉が、慎吾には予想できた。

糸見「慎吾君。今から彼が・・・君の中に入る。
そして、必要な情報を取り出してもらおうってわけだ」

そう言うと糸見は席を立ち、入れ替わるように江浜を座らせる。

江浜「・・・　・・・」

背中を糸見につつかれた江浜。慎吾の目を見つめ、彼の両肩に手を置いた。

＊＊「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊・・・」

慎吾は一度、瞬(まばた)きをした。

＊＊「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊・・・」

慎吾は深呼吸をして・・・今一度、瞬きする。

江浜「覚悟はいいな？」

江浜は目を閉じ、精神を統一した。

糸見「・・・　・・・」

その後ろで、糸見が腕組みをして見守っている。

江浜「・・・　・・・」

カッと目を大きく見開くと・・・

江浜「？（おん）！！」

大きなかけ声をかけた。

瞬間・・・　肩に置かれた江浜の手を通じ、慎吾の中に何かが侵入する。

そして・・・

慎吾「うわぁあああああ！！！」

大きな悲鳴が、小さな部屋に鳴り響いた。

（第１７話へ続く）

第１６話　撃鉄（げきてつ）（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

慎吾から情報を得ようと、江浜に拷問を指示する糸見。
江浜の拷問に耐え続ける慎吾。

そして・・・江浜が糸見に手を貸す理由が明らかになる。

次回　「第１７話　江浜の苦悩　」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１７話　江浜の苦悩（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

番組収録後、突然慎吾がリナに暴言を吐き・・・直後、黒ずくめの男等に慎吾は拉致された。

一方、番組収録を終えたプロデューサーの糸見は、慎吾の前に現れる。さらに江浜も慎吾の前に現れ・・・埋蔵金の情報を吐かせるため、慎吾に拷問を開始した。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１７話　江浜の苦悩

第17話　江浜の苦悩

慎吾「うわぁあああああ！！！」

大きな悲鳴が、小さな部屋に鳴り響いた。

－　90分前　－

収録を終えた後・・・慎吾とリナの2人は、松浦の楽屋のある6階でエレベーターを降りる。

降りた瞬間だった・・・。

（江浜「慎吾君、私の声が聞こえるはずだ」）

慎吾「え？」

突然慎吾が右手でコメカミを押さえた。

リナ「何？」

周りに変わった様子はない。

（江浜「今から2分後、君は拉致される。
すでに局内で君は包囲された状態にある。

もう1度言う。君達に危険が迫っている！」）

慎吾「な・・・？」

（江浜「逃げようとすれば、間違いなく2人とも捕まる。
今すぐ、連れの女性だけでも逃がすんだ！　今すぐ！
でなければ彼女の命に関わる事になる！」）

慎吾「・・・・・」

慎吾の頭の中に、直接語りかける【声】。

（慎吾「こ、これは・・・？　霊の声・・・？」）

リナ「ちょっとあんた・・・大丈夫？　気分悪くなるならせめて・・・

【山嵐】メンバー、全員のサインもらってからにしてよ！！」

様子のおかしい慎吾の肩に手をおいてゆするリナ。

（慎吾「このままだと・・・リナ先輩が危険・・・？」）

突然慎吾は、真剣な目でリナを見た。

リナ「な・・・　何よ？」

慎吾「リナ先輩！　好きな言葉は！？」

唐突に慎吾はリナに変な質問をぶつける。

リナ「は！？」

慎吾「急いで！　好きな言葉ありますか！？」

リナ「う～ん・・・【イケメン】かな」

慎吾のは迫力に押され、正直に応えた。

慎吾「わかりました！　いいですか、よく聞くいてください！」

ものすごく焦った表情で喋る慎吾に、どう対応していいかわからないリナ。

慎吾「僕からのメールは、必ず最初に【イケメン】と書きますから！」

リナ「は？　何言ってんの、あんた？」

慎吾「それ以外のメールは絶対返さないでください！　いいですね！！」

リナ「言ってる意味がわらかないっつーの！！！」

突然・・・

慎吾の不自然な行動にイライラし始める。

慎吾が不愉快そうな表情を浮かべ、信じられない事を口にする。

慎吾「黙ってましたけど僕・・・
　　リナ先輩の自己中にウンザリしてたんです！」

リナ「！？」

慎吾の言葉が頭に入ってくるのに、しばしの時間を要した。

リナ「は～！？　あんた何言ったの？　マジ言ってんの！？」

思いっきり眉毛をつり上げたリナが、大声で返す。

慎吾「もちろんですよ。僕が嘘ついた事ありますか？」

慎吾は挑戦的な態度をとる。

リナ「あんた、言ってる事がしっちゃかめっちゃかよ！」

慎吾の言葉と態度に、リナの怒りの度合いが加速する。

慎吾「ホントは、松浦さんの楽屋も3階なんですよ。
　　6階まで来て騙されましたね！」

赤メガネの向こうの瞳が大きく見開いた。

プチッ。

そして何かが切れた。

瞬間、慎吾の顔面にリナからの右ストレートが炸裂していた。

もんどりうって、フロアに倒れる慎吾。
その慎吾に背を向けてエレベーターに向かうリナ。

イライラしながら、エレベーターの「←」ボタンを連打する。

リナ「ちょっと優しくしたら・・・全く、だから男ってヤツは・・・」

ようやく開いたエレベーター。

リナ「おっと・・・」

イライラしながら乗り込もうとするが、エレベーターの中から降りる人物がいた。
黒いスーツ、黒いズボン、黒いサングラス・・・黒ずくめの男が３名、降りてくる。

怒り心頭のリナは男らをかわし、すぐにエレベーターに乗ろうとした。

一人の男とすれ違った瞬間・・・

リナ「・・・　・・・」

男のスーツが一瞬めくれた際、【それ】がリナの視界に入る。

ズボンとメタボなお腹の間にある・・・

拳銃を。

（リナ「まさか・・・ドラマか何かの小道具よね？」）

そう言い聞かせ、エレベーターの中に入り【3】を押す。

ふと自分が来た道に目を見やると・・・

倒れている慎吾を、黒ずくめの男3人が囲っていた。

リナ「え・・・？」

不穏な空気を感じたリナ。閉まろうとしたエレベーターの扉を手で止め、事態を見つめる。

無様に床に倒れた慎吾は、右頬を抑えながら・・・

慎吾「・・・　・・・」

3人の男に囲まれている事を確認した。目の前に一人、後ろに2人・・・3人とも慎吾を凝視している。

慎吾「・・・　・・・」

背後の男を確認するふりをして、チラッとエレベーターの方を見た。

リナはエレベーターに乗っているものの、その扉は開いたままこち

らを見ている。

（慎吾「ま、まずい・・・」）

正面に目をやると、さらに一人の男が向こう側の廊下から現れた。

スピリチュアル・カウンセラーの江浜である。

こちらも黒ずくめ。慎吾は４人の黒ずくめの男に囲まれた事になる。

（江浜「今から君を連れ去る。だが君の安全は保証する」）

慎吾「う・・・」

慎吾はコメカミを抑える。　頭の中、直接彼の声が入ってくる。

（江浜「まずはエレベーターにいる君の連れを逃がす。
　無理してでも立つんだ！」）

慎吾「ぐ・・・」

慎吾は小さな悲鳴を上げながらゆっくりと立ち上がった。

リナのパンチで軽い脳しんとうを起こしているため、足下がおぼつかない。

エレベーターにいるリナの視界が江浜をとらえた。

（リナ「な・・・　江浜氏!?　何が・・・？」）

江浜を含めた黒ずくめの男４人に囲まれた慎吾が、無理に立ち上がろうとしている。それを見ていたリナはただならぬ事態と感じ、エレベーターを降りようとした。

その時・・・

江浜「・・・　・・・」

数ｍ離れた慎吾に向け、江浜は右の手のひらを垂直に向ける。

江浜「？！（おん）」

大きなかけ声と共に、その手のひらを数１０ｃｍ押し出した。

慎吾「！？」

瞬間、慎吾の右肩に激痛がはしり、そのまま後ろに吹っ飛ばされる。

江浜、慎吾の直線上・・・エレベーターを出ようとしたリナにも、目に見えない風圧が襲いかかった。

リナ「きゃ！」

風圧に押され、エレベーターの中で尻餅をつく。

そのままエレベーターの扉が閉まり、下へと移動を始めた。

リナ「ちょ・・・　ちょっと待って・・・」

すぐにエレベーターの【開】ボタンを連打するが、その要求を受け入れられる事はない。

エレベーターは3階→1階まで降りた後、各階で停止しながら6階まで上っていく。

再度6階に降り立ったリナだが・・・

慎吾の姿はおろか、黒ずくめの男達、江浜の姿もそこにはなかった。

・・・　・・・。

慎吾は第5スタジオの小道具部屋に連れて行かれ、そこで糸見に「お前の知ってる事を話せ」と銃で脅される。

「何も知らない」態度を貫く慎吾を見て、糸見は江浜を呼び寄せた。

糸見「慎吾君。今から彼が・・・君の中に入る。
　そして、必要な情報を取り出してもらおうってわけだ」

そう言うと糸見は席を立ち、入れ替わるように江浜を座らせる。

江浜「・・・　・・・」

背中を糸見につつかれた江浜。慎吾の目を見つめ、彼の両肩に手を

置いた。

（江浜「私の声が聞こえてるな？
【Ｙｅｓ】なら、瞬(まばた)きを一度だけしろ！」）

慎吾は一度、瞬(まばた)きをした。

（江浜「今から君を痛めつけるフリをする。
だが中途半端な演技では、目の肥えた糸見に通用しない。
少しだが痛みを感じてもらう・・・いいな？」）

慎吾は深呼吸をして・・・今一度、瞬きする。

江浜「覚悟はいいな？」

江浜は目を閉じ、精神を統一した。

糸見「・・・　・・・」

その後ろで、糸見が腕組みをして見守っている。

江浜「・・・　・・・」

カッと目を大きく見開くと・・・

江浜「？(おん)！！」

大きなかけ声をかけた。

瞬間・・・　肩に置かれた江浜の手を通じ、慎吾の中に何かが侵入する。

そして・・・

慎吾「うわぁあああああ！！！」

大きな悲鳴が、小さな部屋に鳴り響いた。

慎吾の両肩に置かれた江浜の両手。そこから何か熱いものが侵入してくる感覚に襲われる。

江浜「・・・　・・・」

慎吾「ぐぅぅぅぅう・・・」

覚悟してた以上の苦痛が、体中かけめぐった。

江浜「・・・　・・・」

１０秒ほどして、江浜は手を離す。瞬間、慎吾が大きく深呼吸をした。

慎吾「はー・・はー・・・」

目を閉じ、苦しそうにうつむく慎吾。

糸見「・・・　・・・」

後ろで腕組みをしていた糸見が、江浜に声をかける。

糸見「どうだ？」

江浜は慎吾を見つめながら応えた。

江浜「まだわからない」

糸見「そうか。ならもう一度だ」

江浜は糸見の方を振り返る。

江浜「少し間を開けた方がいい。彼の命に関わる」

その言葉を聞いた糸見は、かるく鼻息を吐いてみせた。

糸見「あぁ、そうか。じゃあ気にせずにやれ」

糸見は江浜の言う事は耳に入っていないかのように、慎吾の方をアゴでさす。

江浜「・・・　・・・」

慎吾の両肩に・・・江浜は再度、自分の両手を添えた。慎吾を見つめ・・・

江浜「覚悟はいいか？」

慎吾は瞬きを一つだけする。

江浜「？！！」

慎吾「うわぁあああああ！！！」

小さな部屋に・・再び、慎吾の悲鳴が鳴り響いた。

・・・　・・・。

慎吾が小道具部屋に閉じ込められ、1時間が過ぎた。
何度となく、江浜の拷問のような攻撃に耐えている慎吾。

慎吾「・・・　・・・」

汗びっしょりで、かなり衰弱している。

江浜は糸見を見て

江浜「これ以上はダメだ。間違いなく死ぬ」

と、強く言った。

糸見「・・・　・・・」

親指の爪を噛み、少しばかりイライラした表情を見せる糸見。

糸見「出ろ」

江浜に部屋の外へ出るよう指示した。

部屋の外で糸見は・・・江浜の胸ぐらを掴み、凄味をきかせる。

糸見「どういう事だ?」

胸ぐらを捕まれた江浜は、無表情のまま応えた。

江浜「どういう事だ・・・とは?」

糸見「お前が除霊をする時・・・
いつも30分足らずで、悪霊を追い払ってきただろう?
すでに1時間。
もうヤツから情報を得てもいいはずだ!!」

相変わらず江浜は、無表情のまま応える。

江浜「あの子は、何かに取り憑かれているわけではない。むしろ正常。
その状態で彼の体に入り込むには、大きな危険を伴う。
除霊と違って時間がかかるのは当然だ」

糸見「・・・ちっ。じゃぁどれぐらいかかる?」

糸見はさらに強い力で、江浜の胸ぐらをつかんだ。

江浜「さぁ。3日もあれば・・・」

糸見「ふざけるな!! そんなに待てるか!!

お前、自分の立場わかってるのか!?
娘の命がかかってるんだぞ!!」

江浜「・・・　・・・」

急に江浜の表情が曇り始める。

江浜「あぁ・・・わかっている」

糸見は江浜の前に人差し指を立てた。

糸見「1日だ。1日だけやる。明日の午後5時がリミットだ。
これを過ぎて、何も進展がない時は・・・わかってるな?」

そういうと江浜を放り出すように投げ飛ばす。

糸見「言っておくが・・・逃げようなんて思うなよ。
お前らを見張ってるのは、ここにいる3人だけじゃない。
この局内・・・いたるところで、組織の連中が見張っている。
逃げたようとしたら・・・容赦はしない!」

江浜「・・・　・・・」

しばらく糸見を睨んでいた江浜。静かに口を開いた。

江浜「わかった。明日の5時までに・・・」

糸見「リミットを過ぎた場合・・・
次の【ホラーの湖】のサブタイトルは・・・
【実の娘の亡骸を探せ！】となる！
その事を忘れるな！！」

大声で怒鳴った糸見は、そのままスタジオを出て行った。

江浜「・・・　コホッ・・・」

それを確認した江浜。１つ咳をした後・・・左手の拳を額にあて、かなり困った表情を浮かべる。

江浜「・・・　・・・」

そして・・・

慎吾のいる小道具部屋に戻っていった。

（第１８話へ続く）

第１７話　江浜の苦悩（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

楽屋に戻った糸見は一本の電話を受ける。この事件の鍵を握る男からだった。

男の指示で糸見は慎吾に銅板の裏を見せ、情報を得ようとする。埋蔵金のありかを示す銅板。表と裏に書かれた内容を読み取れば埋蔵金のありかは示される・・・。

一方、自宅に戻ったリナ。同じマンションに住む慎吾が、戻ってない事を確認。

危険を感じつつも・・・イチかバチか、慎吾とコンタクトを取ろうとした。

次回　「　第１８話　　銅板の裏　　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１８話　銅板の裏（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶ局へと向かった２人だが・・・

アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。バッグを盗まれたアイドル・松浦から、２人は特別番組【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として招待を受ける。

番組収録後、慎吾は黒ずくめの男等に拉致された。

一方、番組収録を終えたプロデューサーの糸見は、慎吾の前に現れる。さらに江浜も慎吾の前に現れ・・・埋蔵金の情報を吐かせるため、慎吾に拷問を開始した。

江浜は糸見に娘を誘拐され、仕方なく協力しているのだが・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１８話　銅板の裏

第１８話　銅板の裏

糸見「ふ～・・・」

楽屋に戻ってきた糸見。慎吾のリュックを逆さまにし、中身を全てテーブルの上にぶちまけた。

糸見「・・・　・・・」

何かしらの情報を得ようと、持ち物全てに目を通す。
ふと慎吾の携帯がヴーン、ヴーン・・・となり始めた。

着信【リナ先輩】

糸見「あいつの彼女か・・・」

糸見は着信を切った。

その携帯をチェックすると、ここ１ヶ月のメールや着信履歴は・・・全てこの【リナ先輩】だった。

糸見「・・・　・・・」

注意深くそのメールの内容をチェックする。

糸見「なるほど・・・２人でここに来たのか・・・」

またしても慎吾の携帯が鳴る。着信は相変わらず【リナ先輩】だ。

糸見「・・・　・・・」

再度着信を切り、メールをうつ。

【体調が悪かったので先に帰ります。心配しないで】

そのまま【リナ先輩】に送信した。

（糸見「ふん。これで・・・」）

ヴーン、ヴーン・・・

しばらくすると今度は、糸見自身の携帯が鳴る。

着信【鳳（おおとり）】

慌てて糸見は電話に出た。

糸見「あ！　巧（たくみ）さん！！　糸見です！！」

電話の向こうからは、重低音の声が聞こえてくる。

糸見「はい、はい。えぇ・・・はい。
　明日にはあの青年から情報を得てるはずです。
　任せてください！　巧さんに必ずいい情報を伝えます！」

焦りながら喋る糸見。

糸見「えぇ！？　え・・・あ・・・あいつにですか？」

突然、大声を出した。

糸見「あいつに・・・　銅板を!?
わ、わかりました。やってみます・・・
はい、急ぎます。今すぐ!」

そう言うと電話を切る。

糸見「・・・　・・・」

しばし迷った表情を見せたが、思い立ったように楽屋の奥へと歩き出す。

そしてクローゼットの奥にある金庫を取り出した。

糸見「・・・　・・・」

おもむろに金庫を開けると、あの銅板を取り出す。

糸見「・・・　・・・」

しばらくじっと銅板を見つめた。

（糸見「これを・・・あいつに・・・?」）

溜息をついた糸見は、銅板を元に戻す。金庫を閉めると、楽屋の中をウロウロ歩き回り、再び悩み始めた。

（糸見「・・・　・・・　本物は、渡せない・・・・」）

自分のデスクに置いてあった・・・番組用のレプリカを手に取ると、再び慎吾のいる第５スタジオへと向かった。

・・・　・・・。

リナ「・・・　ったくもう・・・」

リナは、ＴＶ局の外で慎吾の携帯に電話をかけていた。

おそらく・・・江浜と黒ずくめの男３人に、慎吾は拉致された。そう思ったリナは、メールではなく電話で直接慎吾の声を聞こうと試みていたのだが・・・

慎吾にかけた携帯の呼び出しは、途中で切れる。

（リナ「留守電にならないって事は・・・
　途中で切ったわね・・・」）

慎吾でない誰かが・・・慎吾の携帯を操作しているだろうと推測するリナ。

（リナ「でも・・・」）

どうする事もできない。

その後何度か電話をかけるも、全て途中で切られてしまう。

ふとリナの携帯にメールが届いた。

【受信　歴ヲタ】

リナ「・・・　・・・」

あわててメールをチェックする。

【受信　歴ヲタ】
【タイトル　なし】
【内容　体調が悪かったので先に帰ります。心配しないで】

メールを受け取ったリナだが・・・

（リナ「状況は・・・　ヤバい感じね・・・」）

慎吾の携帯を使い、誰かが偽りのメールを送信している。あるいは、慎吾に無理矢理そう送るよう、何者かが指示した。

（リナ「間違い・・・なさそうね・・・」）

推測から確信に変わる。

慎吾は黒ずくめの男達に囲まれる直前・・・確かにリナに言った。

慎吾「僕からのメールは、必ず最初に【イケメン】と書きますから！」

それ以外のメールは絶対返さないでください！　いいですね！！」

リナ「・・・　・・・・」

しばらく携帯を見ていたリナだが・・・　どうする事も出来ない。

リナ「・・・。まったくあいつ・・・何があったーつーの？
　　どうすれば・・・？」

１時間ほどＴＶ局周辺をうろうろしていたリナだが・・・。
後ろ髪ひかれながらも、自宅のマンションに戻る事にした。

万が一にも・・・あのメールの通り、慎吾が体調悪く、先に帰っていることを期待して・・・。

・・・　・・・。

糸見は再度第５スタジオを訪れる。入り口には１人、黒ずくめの男がいた。彼に視線を合わせる事無く、無造作に奥の小道具部屋へ向かう。

小道具部屋のドアを開けた瞬間、中にいた黒ずくめの男が反射的に銃を抜こうとするそぶりを見せた。

それを片手で制止し、部屋の中へと入って行く。

糸見「ふん。まだ進展はないようだな・・・」

慎吾の前に座る江浜に声をかけた。

江浜「あれからまだ２０分だ・・・　リミットはまだ先」

糸見「わかってるさ。しばらくお前は出ていろ」

江浜「・・・　・・・・」

慎吾の事を気にしながらも、言われた通り小道具部屋の外へ出る。

糸見「さて・・・」

汗びっしょりになってる慎吾の前に立つと、糸見は慎吾の目の前に銅板を静かに置いた。

糸見「見ろ」

慎吾は衰弱した様子で・・・ゆっくりと銅板に目を向けた。

慎吾「・・・　・・・・」

そこには、対称的な直線で描かれた図形と「宣言、新将軍ノ元、光明」と文字が書かれていた。

＞ｉ３４０４２―２４３０＜

糸見「意味がわかるか？」

慎吾「・・・　・・・・」

無言でそれを見つめている慎吾。

（慎吾「リ、リナ先輩が見たという・・・銅板の裏・・・・」）

糸見「これを見て、わかった事を素直にいえ！」

体の疲労はひどいものの、頭は回る。頭の中で感じた事を整理して口を開いた。

慎吾「・・・。おそらく・・・。
左の図形は、籠（かご）の目を表しているかもしれない・・・」

思った事を素直に言った。

糸見「籠の目？」

慎吾「・・・　・・・・」

糸見「続けろ」

慎吾「右の文字は・・・新将軍・・・。
１５代将軍の慶喜は・・・わずか１年で城を明け渡しているから・・

埋蔵金を隠したとするなら・・・
１６代将軍になるべき人物の元・・・という意味かも」

糸見「それぐらいは、誰でも解析できる。もっとないのか！？」

慎吾はじっと銅板を見つめる。

慎吾「・・・。開城後、将軍家から公爵家へとなった徳川家。
その16代当主・家達の、幼ない頃の名は亀之助・・・」

ゆっくりと語り始めた。

慎吾「明治2年。新政府により、6歳にして江戸を追われ・・・
駿河府中へ移住する事になった。当時6際だった家達・・・
すなわち亀之助。駕籠(かご)の中から、駿河の光景を見て・・・
はしゃいだという逸話がある・・・」

その視線は、銅板の裏から離れる事は無い。

糸見「・・・」

慎吾「埋蔵金のありかを示したと言われる【かごめかごめ】の歌。
その歌詞にある【亀】は、亀之助を暗示している可能性も。
左の図形が、何らかの【かご】を示していると考えれば・・・
・
【かごの中の鳥】が・・・あるのかも・・・」

糸見「鳥!?　鳥とは!?」

慎吾「・・・。すぐにはわからない。でも・・・何か見えそうだ・・・」

何のかけひきもなく、慎吾は銅板を見て思った事を素直に言った。

慎吾「間違いなく・・・これは埋蔵金のありかを示している・・・

ような気がする。もう少し・・・

もう少し時間があれば・・・」

糸見「・・・　・・・」

慎吾が記憶だけで、徳川家にまつわる歴史的事実を述べた事や・・・嘘をついたり、フェイクを装っているようにも見えない事から、糸見は慎吾の言葉を信じるに至ると感じ始めた。

（糸見「やっぱりこいつ・・・

巧さんの言う通り、埋蔵金に関わる情報を持っている・・・？」）

だが、慎吾は埋蔵金のありかを今のところ知らない・・・。

糸見「・・・　・・・」

結論に至らない事がイライラの原因だが、慎吾に時間を与える余地はあると判断した。

糸見「ふん。いいだろう・・・。しばらくお前に時間をやる。

何かわかったら、そこの黒服の男に言え」

糸見は黒服の男に「何かわかったらすぐ連絡しろ」と伝えて、小道具部屋を出た。

江浜「・・・　・・・」

部屋の外で壁に背をもたれ、腕組みをしている江浜。出てきた糸見

を見て、声をかける。

江浜「私はもう必要無いのかな？」

糸見が江浜を睨み付けた。

糸見「今、彼に埋蔵金のありかを示す銅板を解析させている。
　明日朝まで様子を見て、何も出なかったらお前が情報を引き出せ」

江浜「・・・　・・・」

無言で頷く江浜。スタジオを出ようとした糸見に再度声をかけた。

江浜「1つ、いいかな？」

かったるそうに振り返る糸見。

糸見「手短にな」

江浜「・・・。娘の声を聞かせろ。
　まだ生きているという保証が欲しい」

糸見「安心しろ。それは保証する」

江浜「信用できない。声を聞けないなら、私がここにいる理由がない」

江浜は強気な姿勢を崩さなかった。

糸見「・・・　・・・・」

糸見にとって江浜は、慎吾から情報を取り出す最終手段である。ここで江浜が離脱するのはまずい。糸見は頭をかきだした。

糸見「わかった。1度だけだぞ！」

そう言うと糸見は携帯を取り出し、どこかにかける。つながった電話の向こうの誰かと2，3の会話をした後、江浜に携帯を渡した。

糸見「お前の娘だ」

江浜はゆっくりと携帯を受け取り、電話口に出る。そして・・・

江浜「あんず・・・」

娘の名を呼んだ。

あんず「お父さん!?　お父さん!!」

電話の向こうから、娘の声が聞こえてきた。

江浜「あんず！　よく聞け！　必ず助けるから！　それまでの我慢だ！」

あんず「う、うん・・・何とか・・・大丈夫だから・・・私・・・」

電話の向こう・・・今にも泣き出しそうな、か細い声が聞こえてくる。

江浜「とにかく今は・・・」

会話の途中で、糸見が電話を取り上げる。

糸見「そこまでだ」

そう言うと電話を切った。

糸見「明日の5時までに、俺から連絡がない場合・・・
女を殺せと命じている・・・」

その言葉に反応した江浜は、殺気のこもった視線を糸見に送る。

糸見「娘の命が惜しいなら、部屋の中のあいつを殺してでも情報を得るんだ。
それだけだ。さぁ、部屋に戻れ。

あいつと一緒に謎解きをするもよし。
すぐにヤツの体に侵入して、情報を引き出すもよしだ」

今一度江浜を睨み付けた糸見は、スタジオを後にした。

江浜「・・・」

この先の事を悩みながら・・・江浜は小道具部屋へと戻っていった。

・・・　・・・。

自宅のマンションへ戻ってきたリナ。

同じマンションに住む慎吾・・・マンションの出入り口にある彼の郵便受けに、夕刊が見えた。真面目な慎吾は朝刊も夕刊も欠かさず毎日熟読している。

（リナ「この時間なら・・・　とっくに新聞は取っているハズ・・・」）

夕刊がまだ郵便受けにあるという事実を受け止め、リナがため息をついた。

リナ「・・・。何か・・・手はないかしら・・・」

夜、お風呂に入りながらリナは今までの事を整理する。

？　慎吾は、江浜と黒ずくめの男に拉致されたらしい。
？　男は銃を持っていた可能性がある。
？　慎吾の携帯はＯＮになっていたが、電話には出ない。
？　何者か・・・おそらく拉致した誰かが、嘘のメールを自分に送ってきた。

どうにかして慎吾とコンタクトをとらなければ・・・

（リナ「嫌な予感が・・・する・・・・」）

リナは一つ危険な案を浮かべた。もし相手が本物の銃を扱う連中であれば・・・実行するには大きな危険を伴う。慎吾どころか、ヘタ

したら自分自身にも危険がおよぶかもしれない。

かといって、慎吾を見捨てる事などできない・・それはリナ自身がよくわかっていた。

その夜、リナは悩みながら眠りにつく。

・・・　・・・。

翌朝。

あまり眠れなかったリナ。

リナ「・・・　・・・」

マンションの1階、入り口。慎吾の郵便受けには昨夜の夕刊、その上に今朝の朝刊が入っているのを確認した。

（リナ「イチか、バチかね・・・」）

リナは意を決して、慎吾の携帯アドレスに【ある内容】のメールを送った。慎吾を拉致した人間がメールを見ることを前提として。

（リナ「これで・・・あいつから、メールが返ってこなかったら・・・」）

最悪、死んでるかもしれない。

（リナ「その可能性も・・・　否定できない・・・」）

そう思うと不安でどうしようもなかった。

（リナ「頼むわよ・・・来てよ！　慎吾！！」）

リナはじっと自分の携帯の前で祈り続ける。

２０分後・・・

メールが返ってきた。

【受信　歴ヲタ】

【タイトル　イケメンには会えました？】

（リナ「き、きた！！　慎吾からだ！！」）

リナは慎吾が生きている事を確信し、安堵のため息をつく。

メール内容をよんだリナは

（リナ「第５スタジオ・・・」）

慎吾が監禁されている場所を突き止めた。

リナ「・・・　・・・」

じっと携帯を見つめながら・・・　これからの事を考える。

リナ「・・・　・・・」

そして慎吾の救出作戦を・・・わずか５分で計画した。

（第１９話へ続く）

第１８話　銅板の裏（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

銅板の裏を見つめる慎吾は・・・確実に埋蔵金に近づいていた。

リナは慎吾からのメールを受け取り、監禁場所を特定。

慎吾を救出に単独でＴＶ局に乗り込むことを決意する。

次回　「第１９話　コンタクト　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１９話　コンタクト（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

慎吾の身を心配したリナは、何とか慎吾とコンタクトを取ろうとするが・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１９話　コンタクト

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１９話　コンタクト

５月５日、土曜日。午後７時過ぎ。

第５スタジオ・・・奥にある小道具部屋。

慎吾はじっと銅板を見つめていた。

＞ｉ３４０４２―２４３０＜

慎吾の真正面には、腕組みをした江浜が座っている。そしてもう一人、見張り役の黒ずくめの男が部屋の出入り口に立っていた。

江浜はその霊能力で、慎吾に言葉を伝えられる。見張の男に気づかれず・・・テレパシーのように、直接言葉を伝える事が出来るのだ。

しかし、慎吾からの言葉を受け取ることはできない・・・一方通行の能力だった。見張り役のスキを見て、江浜は時々慎吾に言葉を送っている。

糸見は、先月からある暴力団の資金援助を受け、埋蔵金の発掘を再開した事。

その暴力団に娘を誘拐され、仕方なく慎吾の拉致に協力した事。

何とか慎吾をここから安全に出したい事。

万が一の場合、最終手段がある事。

何故、慎吾が拉致されたのか・・・その理由は2人ともわかっていた。
それは・・・　慎吾の守護霊だ。徳川埋蔵金と深く関わっている。

（江浜「黒幕がいる・・・　慎吾君の守護霊を知る者が・・・」）

しかし誰が慎吾の守護霊を見抜いたのかは・・・江浜にもわからない。

（江浜「糸見の後ろで・・・誰かが糸をひいているのは間違いない」）

その意外な黒幕の正体を江浜が知るのは・・・翌日だった。

慎吾は江浜からのメッセージを受け取る度に「わかりました」の合図である、瞬(まばた)きを1つする。

江浜には【心配するな】と言われている慎吾だが・・・正直、不安で仕方がない。

仮に徳川埋蔵金のありかにたどり着いた場合・・・果たして解放されるのだろうか？

埋蔵金にありつけなかった場合は？

この先の事を考えると、どうしても「明るい未来」が想像できない。

慎吾「・・・　・・・」

ただ、不安になっているだけでは何も進展しない。ならば、少しでも銅板が示す事実に近づきたいと思っていた。

それに銅板を見て、頭を働かせるだけでも恐怖が追い出されていく。ならば今は、銅板にある謎を解こうと・・・自分に言い聞かせた。

何度も何度も銅板を見つめる。時々深呼吸し、目を閉じては・・・また銅板を見つめる。

＞ｉ３４０４２―２４３０＜

文字の部分に関しては、いくつかの仮説が立てられた。ただ、対称図形の意味がよくわからない。

この図形の意味するものと、文字の部分とが論理的にマッチした時・・・

（慎吾「埋蔵金のありかが示される・・・」）

そう感じていた。

（慎吾「リナ先輩がいたら・・・解けるかもしれない・・・」）

携帯はおろか、全ての持ち物を糸見に取られている。リナに連絡を取る術（すべ）などない。

銅板を見つめ、江浜の声に耳を傾けるしかできない慎吾。

娘を人質に取られて、糸見の言うとおり動くしかない江浜。

誘拐されている江浜の娘・あんず。

時間が過ぎていく度・・・

この3人の運命は確実に【死】へと近づいていた。

その運命を変える人物がいる・・・

5月6日、日曜日・・・　午前8時過ぎ。

糸見は自分の楽屋で横になっている。ゴールデンウィーク期間中、第5スタジオと楽屋を借り切っている糸見は、その楽屋を生活の拠点としていた。

ヴーン、ヴーン、ヴーン・・・

携帯電話の振動音で目が覚める。テーブルの上・・・雑に置いていた慎吾の携帯だった。

糸見は無言でその携帯を開く。

糸見「・・・　・・・」

電話でなくメールだ。

【受信　リナ先輩】

【タイトル　浮気相手に告ぐ！】

【内容】

【あんた、昨日スタジオにいた金髪の子でしょ！？

あんたが彼氏の携帯使ってメールしたの、バレバレだから！

言っとくけど、私は彼と同棲してるの！

あんたの出る幕無いっつーの！！

今、あたしの彼氏といるんでしょ！？

いい！？　彼氏と話をさせて！！

１時間以内に、彼氏から連絡ない時は・・・

迷わず警察に通報する！

ＴＶＳの防犯ＶＴＲであんた探してやるから！】

メールを見て・・・糸見は眠気の中、頭を抱えた。

糸見「・・・　ったく・・・」

昨日から今日にかけ、思い通り事が進まずイライラがつのる。

適当にメールを返そうかと思ったが・・・
慎吾本人でないのがバレたら、ＴＶＳに警察を送り込まれる可能性がある。

江浜といい、慎吾の彼女といい・・・

糸見「っち！！」

舌打ちをする。５分ほど悩んだ後、慎吾の携帯を持って三度（みたび）第５スタジオへ向かった。

・・・　・・・。

第５スタジオに入り、入り口にいる見張り役の男には目もくれず奥の小道具部屋に早足で行く。

小道具部屋の前にまた１人、部屋に入ってまた１人の見張り役がいた。

そして慎吾と江浜がいる。２人とも一睡もせず、例の銅板を中心に向かい合って座っていた。

糸見は江浜を立たせ、その椅子に座る。そして、携帯を広げて見せた。

糸見「お前の彼女からだ」

慎吾「・・・　・・・」

見せられたメールを見る。

糸見「大学入学してすぐに同棲か・・・いいな～大学生は」

糸見は睨み付けたまま皮肉を言った。

慎吾「・・・　・・・」

肉体疲労はピークなれど、頭は回る慎吾。

（慎吾「リナ先輩が、僕とコンタクトを取ろうとしている・・・」）

糸見「このままだと、ＴＶＳに警察が来るかもしれなくてな。
どうすれば彼女は黙ってくれるかな？」

ちょっと考えた後、慎吾は口を開く。

慎吾「電話を・・・かけさせて下さい・・・」

糸見「それはダメだ」

糸見は即答した。

糸見「下手な事を口走られると困るんでな」

慎吾「・・・　じゃぁ・・・　メールを・・・」

糸見はしばらく悩むがそれを了承する。

糸見「いいだろう。だがお前に携帯は渡せない。メールの内容を言え」

慎吾「・・・　わかりました・・・」

慎吾の頭の中では、

「リナ先輩を巻き込みたくない」

「このままでは自分も、江浜さんも、その娘さんも危ない・・・
リナ先輩にかけるしかない」

この2つの思いが、何度も交錯していた。

慎吾が選んだのは・・・

後者だ。

慎吾「じゃぁ、僕が言う通り・・・メールをうってください・・・」

糸見「・・・　・・・」

糸見は慎吾の言葉をそのままメールにした。
特に変わった内容ではなかったので、そのまま送信する・・・。

その様子を見ていた慎吾。

（慎吾「リナ先輩ならきっと・・・」）

その頃、リナは自宅のマンションで慎吾からのメールを待っていた。

・・・　・・・。

（リナ「メールがこなかったら・・・死んでるかも・・・」）

そう思うと不安でどうしようもない。

（リナ「頼むわよ・・・来てよ！　慎吾！！」）

8時半過ぎ・・・　メールが返ってきた。

【受信　歴ヲタ】

【タイトル　イケメンには会えました?】

リナ「き、きた！！　慎吾からだ！！」

合い言葉の【イケメン】が、最初に書かれてあるのを確認。慎吾が生きている事を確信したリナは、安堵のため息をつく。

【内容】

【まだレポート仕上がってなくて・・・。

だいたいは出来ているんですけど。

今、マックで仕上げに入ってます！

誤解しないで、浮気はないです！

すぐに戻ってきますから！
多分夕方にはレポート仕上がってます。

時間は7時までに、戻ってきます。
お詫びにケーキ買っていきますね。

でもホントにホントに・・・
すいませんでした！】

リナ「・・・　・・・」

じっとメールを読んだ。

リナの脳は、慎吾の隠されたメッセージを余裕で読み取る。

（リナ「第5スタジオ・・・」）

慎吾の居場所はわかった。ならばと、次の行動を悩む。

（リナ「銃を持ってるとなれば・・・警察はまずいかも・・・」）

現時点で、慎吾を誘拐した連中の正体は不明。警察沙汰はかえってマズいかもと判断した。

（リナ「仕方ない・・・。　世話のやける歴ヲタを・・・
助けに行くか・・・　そうとなれば・・・」）

慎吾のメールに対し、返信メールを打ち始める。

（リナ「【今から行くわ】・・・送信っと！」

慎吾を救出する決意をし、早速準備を開始した。

（リナ「・・・　久々だわ、コレ使うの・・・」）

クローゼットの引き出しから、ある物を取り出す。

リナ「・・・　・・・・」

過去・・・これを使った事がある。

（リナ「今は・・・　慎吾の事に集中・・・」）

首を横に振る事で、過去も振り払う。

今回は【敵】がいる。そう思ったリナは、リュックに荷物を入れた。

（リナ「全く・・・リュックが動きやすいとはいえ・・・
私まで、ヲタク風の格好しなきゃならないとは・・・」）

メール受信からわずか１０分。リュックを背負ったリナは、慎吾救出へと向かった。

・・・　・・・。

ヴーン、ヴーン、ヴーン・・・。

小道具部屋で待機していた糸見は、【リナ先輩】からの返信メールを確認した。

バイブの音に反応した慎吾が、糸見に視線を向ける。

慎吾「リナ先輩からですか？」

糸見「あぁ・・・」

糸見がそのまま携帯を閉じるのを見て、慎吾が即座に声をかけた。

慎吾「メール見せてください！
彼女、冷静なフリして・・・
平気で、ひどい行動に出る時ありますから！！」

糸見は不満そうな表情を見せたが、返信メールを慎吾に見せる。

糸見「どうだ？」

【受信　リナ先輩】
【タイトル　イケメン、会えるわけねーだろ！】

【内容】
【マジ信じられない！！
帰らないってありえないっしょ！

来週でしょ、レポートの締め切りは！！
いいから早く帰って来い！

くだらん言い訳はするな！
わかった！？】

慎吾「・・・　・・・・」

リナからのメッセージを、しっかりと受け取った。

慎吾「大丈夫です・・・。警察に言ったりはないと思います」

糸見「あぁ、そうか。よかったよ。
じゃぁ、昨日から今までの成果を聞かせろ。

銅板について何かわかったか？」

慎吾「はい・・・」

ここで何か進展のある答えを出さないと危険かもしれないと感じた慎吾。
徹夜で出した仮説を口にした。

＞ｉ３４０４２―２４３０＜

慎吾「文字の一番上、【宣】は６代将軍【家宣】を。
一番下【光】は、３代将軍【家光】を指してる可能性があります。

新将軍が１６代将軍とすれば・・・
上から【６】【１６】【３】という数字を示している事に

なります」

糸見は銅板を見直す。確かに【宣】と【光】が、歴代将軍の名前にちなんでいる可能性はある。

糸見「なるほど・・・。他には？」

慎吾「その数字の何らかの組合せで・・・
　表の枠の１つをさしてるとか・・・」

＞ｉ３３７０３―２４３０＜

＞ｉ３３７０６―２４３０＜

慎吾「あるいは対称的な図形ですが、点が８個。
　表には魔方陣を示す枠が９つ。つまり表は裏より１つ多い」

糸見「・・・　・・・」

慎吾「ひょっとしたら数字の組合せで、８つの数を割り出し・・・
　残った１つに、埋蔵金の場所が示されているのかも・・・」

糸見「ふむ・・・　８つの数字の出し方は？」

慎吾「例えば・・・　【－６＋１６－３】とか。
　四則演算か何か・・・　あるいは割った余りとか・・・

僕は暗算は苦手です。コンピュータで計算パターンを調べれば・・・」

糸見「・・・　なるほど・・・」

予想以上に慎吾が深く考えている事に驚いた。

糸見「ふん・・・。他には？」

慎吾「あの広大な地図の範囲全てを発掘出来ない。

間違いなく、どこかの1箇所を示す何かがあると・・・」

糸見「・・・　・・・」

慎吾「今はまだわからないけど・・・
もう少し時間があれば・・・」

慎吾はさらなる時間の要求をしてきた。

糸見「・・・　・・・」

現在午前8時半過ぎ。

（糸見「確かに・・・もう少し彼に考えさせれば・・・」）

もっと何かが出るかも知れない・・・そう思った糸見は、慎吾の口車に乗る。

糸見「いいだろう。今しばらく時間をやる」

そう言うと携帯を取り出し、どこかに電話をかけた。

糸見「いいか！　【宣】を【6】、【光】を【3】として・・・
　計算パターンをいくつか試せ！
　　特定の1箇所を見つけるつもりでな！！」

銅板の解析を任せているであろう、何者かと話しているようだ。

糸見「また昼過ぎに来る。
　その前にありかがわかれば、すぐあいつに連絡しろ」

見張り役の男を指さす。そして今度は江浜に視線を移した。

糸見「お前も協力しろよ。午後5時までだぞ」

江浜「・・・　・・・」

江浜は無言のまま立っている。

糸見は部屋を出て行く際、見張り役の男に一言「とにかく何かあればすぐ伝えろ」と指示した。

糸見が黒ずくめの男に話した瞬間・・・

その隙をついて、慎吾は江浜に小声で伝える。

慎吾「今から、助けが来ます」

（第２０話へ続く）

第１９話　コンタクト（後書き）

〜〜

次回予告

江浜と黒ずくめの男に慎吾は拉致された。
その慎吾が第５スタジオにいると突きとめたリナは、救出作戦を練る。

度胸と行動力で黒ずくめの男らを翻弄するが・・・
リナは一人の男に銃口を向けられてしまった。

次回　「　第２０話　救　出　」

〜〜

第２０話　救　出（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

慎吾の身を心配したリナは、何とか慎吾とコンタクトを取る事に成功。慎吾救出に向け、ＴＶ局へと向かった。

第２０話　救　出

第２０話　救出

２０１２年５月６日、日曜日。午前９時半。

ゴールデンウィーク最終日ゆえ、乗車率１００％を越えるＪＲ新幹線【こだま６３８号】。

混み合う電車内にも関わらず、ノートパソコンを拡げるリナがいる。

リナ「・・・　・・・」

ＴＶＳのページを真剣な目で見ていた。周りを気にしつつ、そのページのあるサーバに侵入し・・・素早くキーボードを叩く。

リナ「・・・　・・・」

チラリと周りを見渡し、Ｅｎｔｅｒキーを押した。

（リナ「よし・・・　」）

さらにもう１つ、とあるページに侵入する。

リナ「・・・　・・・」

そして、とあるＤＡＴＡを勝手に書き換えた。

リナ「・・・　・・・」

しばらくＰＣの画面を見つめた後、ゆっくりと電源を切る。

（リナ「後は・・・　ヤバい状況じゃない事を祈るだけね・・・・」）

ポケットから携帯を取り出すと、慎吾からのメールを今一度確認した。

【受信　歴ヲタ】
【タイトル　イケメンには会えました？】

【内容】
【まだレポート仕上がってなくて・・・。
だいたいは出来ているんですけど。

今、マックで仕上げに入ってます！
誤解しないで、浮気はないです！

すぐに戻ってきますから！
多分夕方にはレポート仕上がってます。

時間は7時までに、戻ってきます。
お詫びにケーキ買っていきますね。

でもホントにホントに・・・
すいませんでした！】

メールを見た瞬間、すぐに慎吾からのメッセージを受け取った。

【タイトル　【イ】ケメンには会えました？】

【内容】
【【ま】だレポート仕上がってなくて・・・。

【だ】いたいは出来ているんですけど。

【い】ま、マックで仕上げに入ってます！

【ご】解しないで、浮気はないです！

【す】ぐに戻ってきますから！

【た】分夕方にはレポート仕上がってます。

【じ】間は7時までに、戻ってきます。

【お】詫びにケーキ買っていきますね。

【で】もホントにホントに・・・

【す】いませんでした！】

頭文字だけ読めば【イまだいごすたじおです】→【今、第５スタジオです】となる。慎吾が拉致された時の状況を考えると・・・そこに監禁されていると考えるのが妥当だ。

（リナ「第５スタジオ・・・　銃持ったヤツも・・・
いるんでしょうね・・・」）

不安な気持ちを抑えつつ、何とか慎吾を救出すべく・・・今一度、作戦を練り直した。

・・・　・・・。

第５スタジオ・小道具部屋。

【受信　リナ先輩】

【タイトル　イケメン、会えるわけねーだろ！】

【内容】
【マジ信じられない！！
帰らないってありえないっしょ！

来週でしょ、レポートの締め切りは！！
いいから早く帰って来い！

くだらん言い訳はするな！
わかった！？】

慎吾は確かにこのメールを確認した。

【受信　リナ先輩】
【タイトル　【イ】ケメン、会えるわけねーだろ！】

【内容】
【【マ】ジ信じられない！！
【か】えらないってありえないっしょ！

【ら】い週でしょ、レポートの締め切りは！！
【い】いから早く帰って来い！

【く】だらん言い訳はするな！
【わ】かった！？】

自分が送信したメッセージと同じ・・・頭文字だけ読めば

【イマからいくわ】↓【今から行くわ】

このメッセージを受け取った。

リナを巻き込みたくなかった慎吾だったが・・・このままでは自分だけでなく目の前の江浜、そして彼の娘も非常に危険な状況になる。

（慎吾「リナ先輩に・・・　かけるしかない・・・」）

同じ部屋にいる江浜は、慎吾の連れが来る事だけは直接聞いた。

江浜「・・・　・・・」

しかしそれ以外の会話は、見張りのいる状況では出来ない。

とにかく何らかの事態が少しでも動いた時・・・まずは目の前の慎吾、そしてその連れを無事に逃がしてやることを第一に考え、様々な状況を頭の中でシミュレートしていた。

・・・　・・・。

午前１１時前。

リナはＴＶＳの事務局で、入局許可証を受け取る。

あらかじめＴＶＳのページに侵入し、この日の局の見学予定リストに自分の名前を書き加えておいたのだ。

入局許可証を受け取ったリナは、すぐにそれをリュックに押し込む。

（リナ「さて・・・」）

ＴＶＳ１階の広いロビーの中を歩いて行き、局内の見取り図の前で立ち止まった。

リナ「・・・　・・・」

４階奥に、第５スタジオがある事を確認。
そして見取り図の上を指でなぞりながら・・・「ある場所」を探し出した。

（リナ「ここが第５スタジオ・・・。奥に小道具部屋がある・・・
そしてここが・・・あのエレベーターか・・・」）

リナは複雑な局内の見取り図を全て暗記する。

さりげなくロビー内を見渡すと・・・

リナ「・・・　・・・」

黒いサングラス、黒いスーツ、黒いズボンの男が入り口付近に２人、その他の場所にも、同様の格好の男がチラホラと歩いているのが見えた。

（リナ「黒ずくめって・・・暴力団か何かの制服？　目立つわね・・・」）

リナの脳はそれらの男を【敵】としてインプットする。

リナ「ふ～・・・」

一呼吸したリナは・・・　ＴＶＳを一度出て行った。

・・・　・・・。

１５分後。

リナは第５スタジオに向かい、局内の廊下を歩いていた。
一度入り口の前を通り過ぎ、扉の前に誰もいない事を確認する。

（リナ「この中、どうなっているのか・・・」）

全くわからない状況だ。何度も入り口の前を往復する。

（リナ「え～い！　迷ってもしょうがない！！」）

意を決して、リナは第５スタジオの扉を開いた。

・・・　・・・。

その頃。

楽屋の中で糸見は、鳳巧（おおとりみ）という男からの電話に応じていた。

糸見「えぇ。どうやら【宣】と【光】は将軍の名前を表してるようで・・・
　はい。はい、そうです。

今、早急にあらゆるパターンを解析させています」

電話の向こうから重低音の声が響き渡る。

鳳「そうか・・・。もう少し・・・と、信じていいのだな？」

糸見「もちろんです！！」

鳳「我々が莫大な発掘の資金援助し、困難な発掘許可を得た・・・
その恩義をしっかり返してくれるな？」

糸見「えぇ。息子も昼夜問わず、発掘作業にいそしんでいますので。
必ず数日以内に結果を出します！」

鳳「期待している。埋蔵金の・・・
場所がわかったら、真っ先に私に連絡するように・・・」

糸見「承知してます」

鳳「万が一、何も出なかった時は・・・」

糸見「そ、それも承知しています！
必ず埋蔵金を発掘してみせますので！」

電話を切った後、糸見は大きなため息をついた。

（糸見「絶対に・・・見つけてやる・・・
どんな手を使ってでも・・・」）

腕時計で時間を確認する。

（糸見「1時間、仮眠をとるか・・・
その後は、また第5スタジオだな・・・」）

そういうと、楽屋にある大きなソファーに横になった。

糸見「・・・　・・・」

鳳、そして慎吾と江浜の間に挟まれ・・・疲弊仕切っている糸見。

糸見「・・・　・・・」

眠りに落ちるまで、1分とかからなかった。

・・・　・・・。

バタン！！

勢いをつけて第5スタジオの扉を開け、1，2歩と中に入っていくリナ。

男「おい！！」

右手から大声が聞こえた。振り向くと・・・

リナ「・・・　・・・」

例の黒ずくめの男がサングラスの向こうから睨み付けている。　そ

れどころか、男は右手を不自然に腰の後ろに回していた。

（リナ「・・・。絶対、銃を握ってる！！」）

その様を見て、一気に緊張が全身を駆け巡る。

リナ「あ。あー・・・　えっと・・・　すいません。間違えたようです」

そう言うとリナはすぐにスタジオの外へ出て行った。

男が追っかけてくる事がないのを確認したリナは、胸をなで下ろす。

リナ「・・・　・・・」

スタジオから２０ｍ離れたところ、廊下の角を曲がり、深呼吸をするリナ。

（リナ「やっべーーって！　絶対あれ、やっべーーって！！」）

このまま何も見なかった事にして・・・

（リナ「帰りたい気持ちで、いっぱいだわ・・・」）

しかしそれが出来ない事を、リナ自身わかっている。

（リナ「あいつ・・・　まだ生きてるわよね・・・」）

左手の拳を額に打ち付けた。

リナ「・・・　・・・・」

深呼吸した後

（リナ「第５スタジオ・・・扉から入って、ちょっと見渡した限りでは・・・
　　慎吾の姿は見えなかった・・・」）

冷静に状況を振り返る。

（リナ「って事は・・・　奥の小道具部屋に・・・　いる・・・？」）

だとしたら、スタジオの奥まで入っていかなければならない。

リナ「・・・　・・・・」

しばらく深呼吸をし続けたリナは・・・

リナ「よし！！」

気合いを入れた後、意を決する。

そして再び・・・　第５スタジオへ向かった。

・・・　・・・・。

慎吾と江浜は、誰かがスタジオの扉を開ける音を聞き取った。小道

具部屋からは、誰が入ってきたのかはわからない。

2人とも前日から一睡もしていない。体の疲労は限界に近い状況だ。
それでも助けが来たかもしれないと、来るべき事態に備えて気を引き締めた。

男「おい！　お前、さっきもここに入ってきたな！
　ここはもうすぐ撮影に入る。
　関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

相変わらず黒サングラスの男は、右手を不自然に後ろに回している。

リナ「・・・　・・・」

臆(おく)せずリナは、とぼけた声を出した。

リナ「あー・・・でも、第5スタジオだって、プロデューサーが・・・
　小道具部屋から、必要な物を取って来いって・・・」

緊張を見せまいと意識すればするほど・・・声が緊張する。

男「ふん、ADか・・・。何かの間違いだ。さっさと出て行け！」

リナ「えー！！　また私【P】に怒られちゃう！
　あんたのせいって言うわよ！　責任とってよ！！」

男「・・・　・・・」

あっさり部屋を出て行くと予想していた男は、一瞬ひるんだ。

男「・・・　・・・・」

しばらくリナを見つめた後、口を開いた。

男「そのプロデューサーとやらは・・・誰だ？」

リナ「え・・・？」

まさかの返しに、今度はリナがひるむ。

リナ「あー・・　糸見！　糸見プロデューサーですよ！
　わかるでしょ！　あの埋蔵金の糸見プロデューサーです！」

緊張のあまり【糸見】を連呼するリナ。

とっさにうかんだ口から出任せでだが・・・

それが功を奏する。

男「・・・　・・・・」

糸見の名を聞いた男は、首をかしげた。

男「ちょっと待ってろ」

男は携帯を取り出し、電話をかけた。

（リナ「え・・・まさか、直接【糸見】に電話してんの!?
何で銃を持ったおっさんが・・・
彼の番号知ってんのよ?」

男はしばらく携帯を耳にあて、相手が出るのを待っている。

（リナ「私・・・ヤバくね?」）

拉致事件に糸見が関わってる事など、リナは全く知らない。

リナ「・・・　・・・」

チラリと後ろの扉に視線をとばす。嘘がバレた時、すぐ逃げるために・・・。

・・・　・・・。

糸見の携帯が鳴っている。
しかし前日から蓄積された疲労と、極度の緊張は・・・
彼を目覚めさせる事は無かった。

・・・　・・・。

男は携帯電話を耳にあてながら、糸見が出るのを待っていたが・・・

男「っち！」

電話が通じることはなかった。逡巡した後、男はリナを睨み付ける。

男「ついてこい！」

（リナ「た・・・助かった・・・」）

リナの両手は、汗でびっしょりだった。

男はスタジオ右奥の小道具部屋へ向かい、リナはその後ろを付いていく。小道具部屋の近くに、また一人別の黒ずくめの男がパイプ椅子に座っていた。

（リナ「2人か・・・　昨日は、3人プラス江浜氏だったけど・・・」）

男は小道具部屋の入り口の前で止まり、パイプイスに座る男をよぶ。

男「こいつは絶対中にいれるなよ」

と小声で伝えた後　、リナの方を振り返った。

男「おい、ＡＤ。どんな小道具だ?」

リナ「え!?」

焦りながらもリナは

リナ「あー・・・　えっと、こういうヤツです！」

両手で長方形を作るしぐさをした。

男「何だ、それは？」

男は怪訝な表情を受かべる。

リナ「あっと・・・スタ・・スタンガン！
そう！　スタンガンの小道具！

ここにあるって、糸見プロデューサーが・・・」

その場しのぎの嘘を突き通す・・・リナの心臓はバクバクで、今にも破裂しそうだ。

男「ふん。しばらく待っていろ」

そう言うと男は小道具部屋をノックし、入っていく。

リナ「・・・　・・・」

リナはもう1人の男に、背後から肩を掴まれていた。

男「ふぁ・・・」

男は眠そうにアクビをしている。

（リナ「絶対・・・　私を、ただのＡＤだと思ってる・・・」）

緊張で、心臓の鼓動が早くなっていくリナ。

（リナ「今なら男１人・・・　ここしかない！！」）

千載一遇のチャンスとみたリナ。肩を掴まれたまま、自分のリュックを手前に持ってきた。

男「・・・　・・・」

男は特に気にとめる様子もない。

リナ「・・・　・・・」

リュックの中をあさくり、【それ】を取り出した。

リナ「あら・・・スタンガン、私、持ってたわ」

男「　？　」

リナは本物のスタンガンを右手に持っている。

男「・・・　・・・」

小道具だと、信じて疑わない男に・・・リナは顔だけ男に向け、一瞬笑顔を見せた。

スタンガンのスイッチを入れると、体ごと振り返り、男の腹部にスタンガンを突き刺す。

瞬間

男「ぐ！！！」

リナ「きゃ！！」

２人に高圧電流が流れ、反射的にスタンガンのスイッチから指が離れた。２人ともその場に倒れ、全身がしびれた感覚に襲われる。

人に掴まれた状態で、その人に電流を流せば・・・　掴まれた本人にも電流が流れる。

リナ「人は伝導体だった・・・初歩的なミスを・・・」

男に視線を移すと・・・錯乱気味で後ろの腰辺りに、手を回していた。

リナ「や、ヤバ・・・」

すぐにスタンガンのスイッチを入れ、思いっきり男の腹部に突き刺す。

ジジジジ・・・

男「ぐぐぐ・・・」

高圧電流により、全身の筋肉が極度に緊張し・・・大声を出すことすら出来ない。

男「く・・・　ぐ・・・・」

数秒後、男は気を失った。

リナ「はぁ、はぁ・・・・」

倒れた男を確認し

リナ「まず一人・・・・」

予断を許さない状況で、気合いを入れ直す。

リナ「次は・・・・」

そして、小道具部屋の入り口に視線を移した。

・・・　・・・・。

この時、小道具部屋にいた男は４人。慎吾、江浜、見張りの男、そして・・・

リナに言われた小道具を探す男。

江浜「・・・　・・・・」

部屋の外の異常に気づいていたのは・・・江浜だけ。すかさず慎吾に言葉を送る。

（江浜「来たぞ・・・・」）

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は瞬きを1つした。

スタンガンの小道具を探していた男は、すぐにそれを見つける。それを持って、部屋の扉を開けた。

開けた瞬間、リナが目の前に立っていて・・・その右手にスタンガンが見える。

男「　？　」

思わずリナのスタンガンと、小道具のそれを見比べた。

リナ「・・・　・・・」

スタンガンの電源をオンにしたリナは・・・迷わず男に突き刺す。

男「ぐぐぐぐ・・・」

先ほどの男同様・・・大声を出せず、全身の筋肉が緊張を始めた。

男「・・・　っく・・・　っく・・・」

数秒後気を失い、その場で崩れ落ちる。

リナ「これでふた・・・」

男が倒れた直後・・・リナの開けた視界には、銃を向けている3人

目の男がいた。
銃口はリナの顔面を、寸分違わずとらえている。

リナ「！？」

男の右手は、今まさに引き金を引こうとしていた。

リナ「ちょ・・・」

江浜「？！！」

３人目の男が銃の引き金をひくよりも早く、江浜の大声が部屋に鳴り響く。と、同時に銃を構えていた男が、真横に吹っ飛んだ。

男「ぐぉあ！！」

男は壁に全身を強打。すかさず江浜は男に近寄り、男の胸に拳を軽く当てたあと

江浜「？！」

かけ声と共に、拳の先から何かを男に流し込む。

男「ぐく・・・！？」

そして男は・・・気を失った。

リナ「・・・　・・・」

呆然とするリナ。銃を向けられ、その男が勝手に吹っ飛び、江浜が男にとどめをさした。
リナの脳は何が起こってるかを理解出来ない。

（リナ「江浜氏・・・敵・・・　敵!?」）

【江浜＝敵】とインプットしていた脳が、リナを正気に戻させる。

リナ「・・・　・・・」

スタンガンをＯＮにすると、それを江浜に向け戦闘態勢をとった。

すかさず慎吾が声をかける。

慎吾「リナ先輩!!　江浜さんは味方です!!」

リナ「・・・　・・・」

リナの視線が・・・部屋の奥、椅子に縛られた慎吾を確認する。

慎吾「江浜さん・・・　味方なんです!」

リナ「・・・　・・・」

江浜への警戒と、慎吾が生きている安堵が交錯した。

慎吾「江浜さんは、娘さんを誘拐されて仕方なく・・・
　それに昨日、リナ先輩を逃がしたのは・・・江浜さんなんです!!」

リナ「・・・　・・・・」

リナは前日の事を思い出す。確かに見えない力でエレベーターに閉じ込められ、慎吾の拉致事件に直接巻き込まれる事はなかった・・・。

江浜「・・・　・・・・」

江浜は手のひらを見せ、戦闘意志がない事を示している。

リナ「・・・　ＯＫ・・・」

ようやくリナはスタンガンのスイッチを切った。そして椅子に縛られている慎吾にかけより・・・無言で抱きしめた。

リナ「よかった・・・」

慎吾「あ・・・」

突然の抱擁・・・疲労を忘れ、動揺する慎吾。

（慎吾「いい匂い・・・」）

女性に抱きしめられた経験など１度もない慎吾は、頬を赤らめた。

慎吾「あ・・・あの・・・リナ先輩・・・」

少しのぼせ気味で声を出す。

慎吾「あの・・・　おっぱいあたってますけど・・・？」

瞬間、リナが正気に戻った。

リナ「・・・　・・・・」

慎吾から離れ、じっと目を見つめる。

リナ「ふん・・・　相変わらず空気よめないわね。
　　まぁ、無事って事ね・・・」

そう言うとリナは、慎吾を縛っているロープを解き始めた。

江浜「リナ君・・・だね？　彼から君が助けに来ると聞いていた。
　　私からもお礼を言わせてくれ。ありがとう・・・」

リナ「・・・　・・・」

江浜が慎吾を追い詰めたシーンが頭から離れないリナ。

リナ「・・・　・・・」

江浜にどんな態度で接すればいいかわからなかった。その様子を察した慎吾が再度声をかける。

慎吾「江浜さんがいなければ・・・僕はもっと危険でした」

リナは慎吾の目を見つめた。

リナ「わかった・・・」

そう言うと、リナと江浜は握手を交わす。

江浜「改めて・・・　ありがとう」

江浜は部屋の外に倒れている男2人を部屋の中に入れる。男の胸に拳をあてると、先ほどのように拳から何かを流し込む動作をした。

江浜「これで3人とも・・・3時間は目が覚めない」

慎吾「・・・　・・・」

リナ「・・・　・・・」

江浜が何をしたのかわからないが・・・それが江浜の【霊能力】とやらなのだろうと、2人は理解する。

部屋にいる敵を小道具部屋に押し込み・・・部屋の外に出た3人は、一息ついた。

江浜「落ち着いている暇はない。まずはここを出なければ」

慎吾「でも、局内には見張りが何人もいるって・・・」

リナは不敵な笑みを浮かべる。

リナ「任せて。手はうってある」

慎吾「え・・・？」

そう言うとリナは、先頭を切って歩き出した。

（第２１話へ続く）

第２０話　救出（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

リナが用意した逃走ルート・・・
それはかつて慎吾が見つけたルートだった。

しかし、またしてもトラブルが発生する。
江浜は機転をきかせて脱出を試みるが・・・？

次回「第２１話　機転」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２１話　機　転（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

慎吾の身を心配したリナは、何とか慎吾とコンタクトを取る事に成功。慎吾救出に向け、ＴＶ局へと向かった。

男２人をスタンガンで倒し、江浜の協力も得て、何とか慎吾を解放。ＴＶ局内から脱出するため、策を練ってあるという。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２１話　機　転

第２１話　機　転

リナ「・・・　・・・・」

リナは黒ずくめの男のポケットから携帯を取り出すと、素早く操作し始めた。

江浜「何をしてる？」

リナ「いや、ちょっと・・・」

言いながらも、男の携帯を操作し続ける。

江浜「持ち出しはしないほうがいい。ＧＰＳで追跡されるぞ」

リナ「わかってます・・・」

しばらくして、携帯を男のポケットに戻した。

ついさっきまで手を縛られていた慎吾は、初めて目の前の銅板を手にする。

慎吾「・・・　・・・・」

＞ｉ３４０４２―２４３０＜

それを見たリナが反応した。

リナ「それ！　それよ！　私が見たの！！」

番組収録でチラッと見えた・・・対称図形と文字に間違いないと確信する。

慎吾「えぇ。これはレプリカですが・・・
おそらく本物も、同じだと思います。
この図形に、何か意味があると思うのですが・・・」

江浜「今は、ここを脱出するのが先だ。糸見が来る前に・・・」

リナ「ちょ・・・　糸見!?」

この時リナは、初めて慎吾の拉致に糸見が関わっていると知った。

リナ「あんた拉致したの、あの糸見プロデューサーなの!?」

慎吾「えぇ・・・」

銃を向けられた事は黙っておく。

リナ「やっべー・・・。このスタジオ入る時、そいつの名前を使ったのよ。
まさか、【敵側】の人物だったとは・・・。
じゃぁ私、めちゃめちゃヤバかったんだ・・・」

江浜「君は運がいい。だがそれも立派な能力。
君のおかげで我々は窮地を脱したのだから」

リナ「どこに【敵】がいるか・・・わからない世の中ね」

慎吾「・・・　・・・・」

慎吾は銅板をじっと見ている。

リナ「その銅板の裏も気になるけど・・・まずはここを出るわよ！」

江浜「手をうっていると言ってたが・・・？」

リナは元々、ＴＶの中の江浜は気に入っていた。だが・・・

リナ「・・・　・・・・」

江浜と黒ずくめの男らが慎吾を取り囲んだイメージが払拭できない。
それ故、江浜の目を見るのに抵抗があった。

リナ「私は・・・顔われてないから先頭を行く。
　２人は後ろからついてきて・・・」

男２人は無言で頷く。まずスタジオを出たのはリナ。長い廊下の左右を確認し・・・

リナ「大丈夫。出てきて」

慎吾と江浜が、警戒しながら廊下に出た。リナは迷路のように複雑な局内を、迷う事無く右へ左へと２人を誘導する。

リナ「ストップ！」

突如リナは2人を制止させ、柱に身を潜める。

江浜「見張りか？」

リナ「いえ・・・」

リナの視線の先には・・・大好きなイケメンアイドルグループ【山嵐】がいた。顔見知りの松浦の姿も見える。

ホントはすぐにでも握手を求めたいところだが、今は慎吾と江浜をＴＶ局から出すのが先。

リナ「・・・　・・・」

声をかけたい衝動にかられながらも、【山嵐】がスタジオに入っていくのを見届けた。

慎吾「・・・　・・・」

そんなリナの様子を見ていた慎吾。リナが私欲を捨てて、男2人を逃がそうとしている。慎吾は自然と言葉が口に出た。

慎吾「リナ先輩・・・本当にありがとうございます」

リナは廊下の先を見つめながら応える。

リナ「それは、無事局を出てから言って」

慎吾「はい・・・」

しばらくして・・・3人は周りを警戒しつつ移動を始めた。

リナ「あのゲートを通れば、外に出られる・・・」

ゲートを見た瞬間

慎吾「あ！」

慎吾が声をあげた。

江浜「どうした？」

最後尾を歩く江浜が声をかける。

慎吾「僕・・・リュックごと糸見さんに取られたから・・・
入局許可証、持ってないんです・・・」

慎吾が手にしているのは、銅板のレプリカだけだった。

リナ「しまった・・・そこまで想定してなかった・・・」

ＴＶ局内各所にゲートが設けられていて、そこを通るには入局許可証が必要である。許可証を持たずにゲートを通ると、警告音が鳴り、近くで待機している警備員がかけよってくるシステムだ。

入局許可証にはＩＣチップが埋め込まれていて、それさえ持っていれば普通にゲートを通り抜けられるのだが・・・

慎吾「どうしよう・・・」

リナ「ゲートにかかったら、警備員だけでなく・・・
黒ずくめの男までやってくる可能性あるわね・・・
う～ん・・・」

江浜が胸の内ポケットをまさぐり、自身の入局許可証を取り出した。

江浜「慎吾君、君はこれを」

それを慎吾に渡す。

慎吾「え？　でも、江浜さんは・・・？」

江浜「まずは2人でゲートを通るんだ。大丈夫、私もすぐ行くから」

そう言うと江浜はリナと慎吾を先に行かせた。
2人がゲートを通るのを確認した江浜は、１０数秒遅れてゲートに向かう。

リリリリリリリリリ・・・

江浜がゲートを通った瞬間、警告音が派手に鳴り響いた。

すぐ横にいた警備員がよってくる。まずは警告音をＳＴＯＰさせ、
それを鳴らした本人に尋問をしようとした。

警備員「あ・・・江浜さん！　どうしました？」

江浜は携帯電話を耳にあてながら、言葉を返す。

江浜「緊急事態だ。ある政治家に悪霊が取り憑いている。
早急に私が行かねばならない！

入局許可証は、マネージャが持っていて・・・」

警備の規定では・・・入局許可証を持たない者は一度事務まで連れて行き、許可証を発行してから通過させる事になっている。

江浜「名前は言えないが、大物政治家だ。一刻を争う！
済まないが早急に向かいたいのだが！」

江浜はイライラしているそぶりを見せた。警備員は逡巡した後、江浜に口を開く。

警備員「わかりました。あなたの活躍は誰もが知っています。
私の責任を持ってゲート通過を認めます」

敬礼のポーズをして江浜を通した。

警備員「是非、その政治家の方を救ってください！」

江浜は軽く笑い

江浜「あぁ、任せろ」

と、一言だけ口にしてゲートを通過。１０m先にいるリナ達と合流した。

慎吾「さすがです・・・」

江浜「たいしたことはしてないさ。先を急ごう」

リナ「ここです」

リナが先頭に立ち誘導する。たどり着いた先は・・・エレベーター。

江浜「ここは・・・　関係者専用の・・・」

慎吾「あ！　このエレベーター・・・
　松浦さんのバッグ盗んだ犯人が利用した・・・」

リナ「ご名答・・・」

3日前、松浦のバッグを盗んだ犯人は・・・この関係者専用のエレベーターを利用して、地下駐車場から逃げた。リナはそれと同じルートをたどっている。

慎吾「模倣犯ですね！　さすがリナ先輩！」

3人はエレベーターに乗り込んだ。

リナ「ちょっとあんた・・・　模倣犯はないでしょ！
　安全にあんたを逃がそうと考えたルートなのよ！」

ちょっとイラッときたリナが声を荒げる。

慎吾「あ、そんなつもりで言ったんじゃ・・・すいません」

慎吾は頭をかきながらリナに頭を下げた。

エレベーターを降りた3人は地下駐車場に出る。リナがスタスタと歩いた先に・・・レンタカーがあった。ここに来る前、新幹線の中でパソコンから車をレンタルする手続きも済ませていたリナ。

ＴＶ局の事務局で入局許可証をもらった後、レンタカー店に出向き車を借りる。そして地下駐車場に車を止めておいたのだ。

慎吾「わ・・・完璧に模倣・・・　あ、いや・・・
　完璧な作戦ですね・・・」

リナは慎吾を見て真剣な眼差しをする。

リナ「悪いけどさ・・・
　あんた、ＴＶ局の外に出るまでトランクに入ってて。
　出入り口の警備カメラ、写らないようにね」

慎吾「了解です」

文句1つ言わず、即答した。

リナ「・・・　・・・」

江浜に視線を移すリナ。

リナ「江浜さんは・・・　顔われるとマズいのよね。どうしよう・・・」

江浜「いや、どうせさっきの警備員に顔を見られている。
差し支えなければ私が運転しよう。

出口の警備員も、私を見ればすぐ通すはずだ」

リナ「・・・　・・・・」

逡巡したが・・・

リナ「わかりました」

リナは江浜に車のキーを渡した。キーを受け取った江浜は、運転席に座る。
慎吾はトランクに入れられ、リナは助手席に座った。

江浜は勢いよく車を出すが・・・車は出口の警備員に止められる。

江浜「急な仕事でね。助手と共に向かうところだ」

その警備員に、笑顔を見せた。

警備員「そうですか。活躍、期待しています」

警備員はすぐに遮断バーを上げ、車を通す。

こうして3人は・・・

黒ずくめの男に見つかる事無く、無事ＴＶ局の外へと脱出した。

・・・・・・。

江浜「あぁ。そうだ・・・
彼は先月から、暴力団の資金援助を受けている。
おかげで、例の埋蔵金発掘を再開したというわけさ」

運転しながら江浜はリナの質問に応えていた。

リナ「まさか、あの糸見プロデューサーが・・・　慎吾を拉致ったなんて。
あの黒ずくめの男に【糸見】の着信があったわけだわ。
でもどうして慎吾を・・・？」

江浜はリナを一瞥する。そして静かに首を2度横に振った。

江浜「糸見の後ろで・・・さらに糸をひいてる人物がいるのも確か」

リナ「なんだか複雑・・・埋蔵金みたいな莫大なお金が絡むと・・・
怪しい人が出てきたり・・・
人が変わったりするものなのね・・・」

リナは小さな声でつぶやいた。

・・・　・・・。

ＴＶ局から１ｋｍ近く離れたコンビニ・・・江浜はその駐車場で車を止めた。
トランクをあけ、慎吾に手を差し出す。

江浜「ありがとう。あの窮地を脱せたのは君のおかげだ」

慎吾の右手を握り、トランクから慎吾の体を持ち上げた。

慎吾「いえ・・・　どうも・・・」

慎吾を外に出した江浜、次はリナに握手を求める。

江浜「何よりも君がいなければ・・・
　今頃どうなっていたか・・・　感謝している」

リナ「・・・　・・・」

リナは目線を合わさず握手に応じた。

江浜「君たちとはここでお別れだ。私は娘を救出に向かう」

慎吾が声をかける。

慎吾「ど、どうやって・・・　娘さんを・・・？」

江浜「糸見が娘の声を聞かせてくれた時・・・
　彼の携帯電話に表示された番号を覚えた。

幸い携帯ではなく、【０３】から始まる固定電話だったからね」

慎吾「なるほど。電話番号を調べて・・・
その電話のある場所を突き止めるわけですね」

そう言うと慎吾はリナの方を向いた。

慎吾「リナ先輩、ここまでありがとうございます！」

リナに向け、深くお辞儀する。

慎吾「僕は江浜さんにも助けられました。だから今度は僕が・・・
江浜さんの娘さんを救出する、その手助けをしたいと思います」

江浜「いや、これ以上君たちに迷惑をかけるわけにはいかない。私1人で行く」

慎吾「でも、江浜さん・・・」

リナ「・・・　・・・」

男2人のやりとりをよそに、リナは自分のパソコンを取り出していた。
すぐに起動すると、とあるページを検索し始める。

リナ「江浜さん。その番号を言ってください」

江浜「え？」

リナ「０３の次、お願いします」

面食らった表情の江浜。リナの真剣な眼差しに口を開いた。

江浜「えっと・・・０３－１２＊＊　・・・」

リナは高速でキーボード上でその番号を入力する。

リナ「娘さんのいるところ、わかりましたよ」

キーボード操作から約１分の出来事だった。

慎吾「え！？」

リナはパソコンの画面を見せ、映し出された地図上・・・その１箇所を指さす。

リナ「ＮＴＴ東日本のページから情報を得ました。
ここは関東エリアの固定電話を全て扱っています。
そのＤＡＴＡベースに侵入し、江浜さんが見た番号を検索。
その電話がある所、つまり娘さんがいる所は・・・四谷です」

江浜「・・・　・・・」

しばし呆然とする江浜。

江浜「き・・君はいったい・・・？」

慎吾「リナ先輩は、すごい能力を持ってるんです。早速向かいましょう！

リナ先輩は先にうちへ帰って・・・」

リナ「ふん。私も行くわよ」

慎吾「え？」

リナ「私、家族を誘拐して脅迫するって・・・絶対に許せないの！」

何かを思い出しながら・・・リナは語っていた。

リナ「悪いけど・・・私も行かせてもらうわ」

江浜「ダメだ。相手は銃を持った暴力団だぞ。危険すぎる」

リナは江浜の目を睨み付ける。

リナ「私は・・・黒ずくめの男の携帯に入っていた番号を全て覚えています。

糸見の番号はもちろん・・・

あの中に今回の拉致事件の首謀者の番号もあるはず。

私がいれば絶対に役にたちます」

江浜も慎吾も・・・リナの迫力に気圧（けお）された。

リナ「私が1分で娘さんの居所を見つけたんです。
助けるなら早い方がいいし、私なら必ず役に立ちます！」

慎吾はずっとリナを巻き込みたくないと思っていたが・・・

慎吾「・・・　・・・」

バッグ盗難事件の犯人を即突きとめただけでなく、スタジオに閉じ込められた男2人を手際よく脱出させた。

（慎吾「リナ先輩なら・・・」）

これらの実績を考えれば、リナはかなりの戦力になると思い始める。

慎吾「江浜さん。1人より2人。2人より3人の方が・・・
娘さんを助け出す確率が高くなると思います。

ここは僕たちも・・・一緒に連れて行くべきです！」

江浜はしばらく悩んだ表情を見せた。

江浜「・・・　・・・」

電話番号を聞いてから、わずか1分で娘の居所を割り出した。

（江浜「その能力は、非常にかっている・・・　だが・・・」）

迷う時間ももったいない。

江浜「わかった・・・。ただ危険と思ったら、とにかく逃げるんだ。

相手は銃を持っている。絶対に無茶はするな！」

とりあえずだが、この2人を同行させる事を決めた。

リナ「わかりました」

慎吾「はい！」

3人は再び車に乗り込む。

江浜はそのまま運転席に、慎吾とリナは後部座席に座った。

江浜「四谷なら・・・　ここからすぐだ」

車はリナが指定した住所に向けて走り出す。

慎吾「・・・　・・・」

銅板を手にしている慎吾。

その銅板の中から・・・微弱な光が漏れていた。

定期的に点滅しているその光は・・・　電気信号を発信している。

慎吾「・・・　・・・」

この銅板に追跡装置がついている・・・

それに気づくのは、もう少し後だった。

（第２２話へ続く）

第２１話　機　転（後書き）

〜〜

次回予告

江浜の娘が監禁されている事務所に到着した一行。

慎吾が救出作戦をたてる。顔のわれている慎吾と江浜は待機。

またしてもリナが救出に向かうのだが・・・？

次回　「第２２話　作　戦　」

〜〜

第２２話　作　戦（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

何とか慎吾とコンタクトを取る事に成功したリナは、ＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。江浜は自身の娘を助けるべく、行動を別にしようとするが・・・

結局、慎吾とリナもついてくる事になった。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第２２話　作　戦

第22話　作　戦

江浜「・・・　ゴホッ・・・」

後部座席、リナの横に座っている慎吾。咳払いをした運転手の江浜に・・・

声をかけた。

慎吾「江浜さん、1つ聞いていいですか?」

江浜「何かな?」

慎吾「江浜さんの・・・
あの、かけ声と共に手から何かを流すみたいなヤツ・・・
あれって【霊能力】の1つですか?」

江浜は軽く笑う。

江浜「ふっ。あれは気功だよ、霊能力なんかじゃぁない。
修行をすれば、誰だってある程度は扱えるようになる」

慎吾「気功・・・?　って事は江浜さん・・・修行したって事ですよね?」

江浜「もちろん。私の家系は代々・・・
悪霊などのトラブルから人を救う仕事をしている。

仕事を遂行するには、心・技・体・・・全て必要だ。
修行も仕事の一環さ」

慎吾「代々この仕事を？」

江浜「あぁ。世間は我々の事を、霊媒師だとか陰陽師などと呼んだりする。
今はスピリチュアル・カウンセラーだがね。
時代によって呼び方は様々・・・」

リナ「・・・　・・・」

リナも江浜の話を聞いてはいるが・・・【霊】の存在や【霊能力】とやらには、否定的な見解を持っていた。

もっとも・・・

すぐにそれを認める事が起きるのだが・・・。

江浜「強靭な肉体に強靭な魂は宿る。私も若い頃はかなり鍛えたもんさ」

慎吾「では・・・直接僕の頭に話しかけてきたのは・・・？
あれも気功の一種・・・？」

江浜は軽く首を横に振った。

江浜「いや。あれは私の魂で語りかけたんだ。
そうだな・・・君らのいう幽体離脱に近い形かな。
【霊能力】という言い方はあまり好きではないが・・・
まぁ、そんなところだ」

慎吾「魂・・・ですか・・・」

江浜「・・・　・・・」

ふと、江浜は慎吾を見つめた。

江浜「君は霊の姿を見たり、声を聞くことが出来るだろ?」

慎吾「え?　あ・・・はい・・・」

見抜かれている。

慎吾「さすがです・・・ね・・・」

江浜「あぁ、こういう仕事してるからね。
能力のある人間はすぐにわかるものさ。
だから君は・・・私の声を、すんなり聞き取る事が出来たんだ」

慎吾「・・・　そうでしたか・・・。すいません。
頭の中が処理しきれないほど・・・
内容が多すぎて・・・」

江浜「そうだな・・・時間がある時にまた色々教えてあげよう」

そう言うと江浜は車を路肩につける。

慎吾「着いたんですか・・・？」

江浜「あぁ・・・」

車の右手・・・江浜は道路の向こう側にある建物を見つめた。

リナはパソコンをいじりながら確認する。

リナ「間違いない・・・　あの建物です。
　江浜さんが見た・・・電話番号の発信源は」

3人の視線の先には・・・

2階建ての事務所があった。外からは全く様子がわからない。

リナ「どうやって娘さんを・・・」

江浜は人差し指を一本たてて、リナの前にさしだした。

リナ「　？　」

静かにという合図である。すると江浜は建物を睨み付け、集中力を高める。

江浜「この程度の距離なら・・・　娘と直接会話できるんだ」

（慎吾「さっきの・・・　魂で語るってヤツ・・・？」）

江浜は目を閉じ、集中力をさらに高めた。

慎吾「・・・　・・・・」

リナ「・・・　・・・・」

慎吾とリナはそれを静かに見守る。

（江浜「あんず・・・　聞こえるか？」）

・・・　・・・。

江浜あんず。

スピリチュアル・カウンセラー江浜の娘は、事務所の2階にいた。

右手を手錠につながれ、手錠の反対側は部屋の隅を縦に通る水道管につながれている。

2日前。

帰宅途中、とある男に誘拐されたあんず。

あんず「・・・　・・・・」

食事や睡眠は与えられたものの、精神疲労による衰弱の色は隠せない。

部屋の中にいる見張りは2人。1人は携帯をいじり、もう1人は小さなＴＶを見ながら笑っている。

（「あんず・・・　聞こえるか？」）

ふとあんずは脳に直接語りかける声をキャッチした。男2人を一瞥した後、静かに目を閉じ集中する。

（あんず「お父さん・・・」）

誘拐から2日・・・あんずは見張りに気づかれぬよう、会話を始めた。

（江浜「居場所は突き止めた。今、事務所の外だ。道路の反対側にいる。

お前が2階にいるのはわかるが・・・

くわしい状況を教えてくれ」）

（あんず「2階の奥の部屋。男2人が見張ってる・・・」）

江浜「娘は2階の奥。見張り役は2人」

江浜は、慎吾とリナに情報を伝える。

慎吾「1階には何人いるか聞いてください」

（江浜「1階にいる人間の数はわかるか？」）

（あんず「わからない・・・でも3人以上はいると思う。
時々、声が聞こえるの」）

江浜「1階には3人以上で、くわしい数はわからないそうだ」

慎吾「ここ最近の状況で、気づいた事を聞いてください」

積極的に江浜に声をかける慎吾。リナが横から口を出す。

リナ「ちょっとあんた・・・何であんたが仕切ってんのよ？」

慎吾は真剣な表情で応えた。

慎吾「誘拐された人物を連れ戻すケースは基本3つ。
1つは身代金。
もう1つは、相手側の要求する別の人質との交換とか。
いわゆる、人質に替わるものとの取引です」

リナ「今回の場合、それはありえないわね・・・」

慎吾「だとすると3つめ。中に侵入して助ける・・・です」

リナ「・・・　簡単に出来るとは思えないわ・・・」

慎吾「強行突破は・・・武器に乏しいので却下。
だとしたら・・・
電気技師とかを装って、中に侵入ってのが妥当です・・・」

リナは怪訝な顔をして慎吾に聞く。

リナ「なんで、あんたそういうの知ってるの？」

慎吾「アガサクリスティとか、イアン・フレミングとかが好きで・・・」

リナ「アガサクリスティは聞いた事あるけど・・・
誰？　イアン何とかって？」

慎吾「００７の作者ですよ。世界一、有名なスパイ小説の」

リナ「・・・　・・・」

若干、リナの表情が曇った。

慎吾「それに、吾郎先生・・・高校の時の担任が色々教えてくれて・・・
数学の先生ですが、そういうのくわしいんです」

リナ「・・・　あんたが数学できない理由・・・
わかった気がするわ・・・」

リナのあきれ顔をよそに、慎吾は真剣に江浜を通じて中の情報を探ろうとする。

慎吾「トイレや食事など、どうするかも聞いてください」

江浜は慎吾の指示通り・・・娘から中の情報を聞き出していった。

・・・　・・・。

江浜「状況はこうだ。
娘は事務所の2階奥の部屋にいて、手錠でつながれている。
部屋の見張りは2人。
1階にの人数は定かではないが、3人以上はいる」

運転席の江浜は、2人に説明を始めた。

リナ「・・・　・・・」

半信半疑のリナ。

江浜「トイレに行くときは、手錠をはずし・・・見張りと1階のトイレへ。
食事は基本出前だそうだ。
20分ほど前にデリバリーピザを頼んでいる」

慎吾「なるほど・・・トイレの場所は?」

江浜「・・・　1階の玄関から見ると、右奥だそうだ」

慎吾「わかりました・・・」

慎吾は軽くため息をついて目を閉じ・・・車の天井に顔を向け、何かを考える。

（慎吾「吾郎先生なら・・・？　ジェームズボンドなら・・・？」）

かっと慎吾は目を見開いた。

慎吾「作戦があります・・・」

・・・　・・・。

午後1時過ぎ。

楽屋のソファーで横になっていた糸見が目を覚ました。

時間を確認しながら、小さなあくびをする。

（糸見「少しばかり、寝過ぎたか・・・」）

糸見は携帯電話を手にし、第5スタジオの見張りの男に電話をかけた。

トゥルルル・・・　トゥルルル・・・　トゥルルル・・・

糸見「　？　」

第５スタジオの小道具部屋では・・・

江浜にのされた見張り役の男３人が、気を失ったままだ。

糸見「・・・　　・・・」

誰も携帯を取らない事を不審に思い、すぐに楽屋を後にして第５スタジオへ向かった。

・・・　・・・。

リナ「・・・　・・・」

江浜の娘あんずが監禁されている事務所の前を歩いていたのは・・・リナ。慎吾のたてた作戦を実行するためだ。

慎吾「顔、われてないの・・・リナ先輩だけですから・・・」

男２人が裏方に回るのは、解せないものがあるが・・・

（リナ「確かに私が動く方が・・・
　　江浜氏の娘を助ける確率は高くなる」）

自分が先陣を切る事には納得していた。

リナ「ふん・・・　上等よ！」

ただ1つ・・・。この作戦に不安な点がある。

（リナ「本当に・・・　江浜氏は、娘と会話したのかしら・・・」）

江浜が娘と会話した事に対しては、懐疑的だった。

リナ「・・・　・・・」

でも今はそれを信じて動くしか道はないと判断し・・・　事務所の前で立ち止まる。

しばらくするとデリバリーピザの配達員がバイクでやってきた。

バイクは事務所の手前の道路で止まり、どう見てもバイトであろう若い男がピザを取り出そうとする。

慎吾「来ましたね・・・」

江浜「あぁ・・・」

2人は、事務所の横にあるビルの物陰に隠れていた。

慎吾「リナ先輩・・・　頼みます・・・」

ピザをバイクの後ろから降ろした配達員にリナは声をかける。

リナ「ちょっとー。ピザ遅いじゃない！」

さえない顔をした配達員の男は、いきなり声をかけられ、驚いた表情を見せた。

配達員「え！？　あ、あぁ・・・　すいません・・・。
　　で、でも・・・　時間通りですよ・・・？」

弱気に応える配達員を見て、リナは強気になる。

リナ「世の中タイムイズマネー！　代金、いくらだっけ？」

配達員「えっと・・２６３０円です」

リナ「はい、３０００円！　おつり３７０円！早く！！
　　タイムイズマネー！！」

配達員はリナの迫力におされて、あわてておつりを取り出した。

リナ「はい、お疲れ！　次はもう少し早く配達してね！！」

配達員の背中を力強く叩くと・・・そのまま男は、リナから逃げるように去っていく。

リナ「・・・　ふん。まずは１つクリア・・・」

ピザを手にしたリナ。事務所の方へ向きを変えると・・・入り口へ向けてて歩いて行った。

リナ「・・・　・・・」

銃を持っているであろう男が数人いる事務所に近づくにつれ、心臓の動悸が明らかに早くなっていく。

ここに来て少し後悔の念を抱き始めたが・・・

（リナ「えぇい！　迷いは禁物！　絶対助けてやる!!」）

リナは事務所の玄関に手をそえた。深く深呼吸をして・・・

リナ「・・・　・・・」

扉を開き、事務所の中へ入っていく。

その頃・・・

糸見は第５スタジオの扉のドアに手をかけていた。

（第２３話へ続く）

第２２話　作　戦（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ピザ配達員を装って、事務所の中に侵入したリナ。
監禁されていたあんずと合流する事に成功する。
その頃糸見は、第５スタジオに入り、江浜と慎吾が脱出した事を知った。
慌てて、あんずを監禁してる事務所に連絡する。
そしてリナとあんずは・・・窮地に立たされた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回　「　第２３話　　想定外　　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２３話　想定外（前書き）

〜〜〜

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〜〜〜

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。江浜は自身の娘を助けるべく、行動を別にしようとするが、慎吾とリナもついてくる。

江浜の娘・あんずが監禁された事務所に辿り着いた３人。
慎吾の立てた作戦は・・・　リナをそこへ送り込むことだった。

〜〜〜

第２３話　想定外

第２３話　想定外

リナは事務所の中に堂々と入っていった。右手には、先ほど配達員から受け取ったピザを持っている。

リナ「・・・　・・・」

中に入ると、目の前には真っ直ぐな廊下。左右に２部屋ずつあるのが見えた。

部屋の配置を記憶しながら、リナは元気な声を出す。

リナ「ちわーっす！！　ピザーリです！
　　マルゲリータ、お持ちしました－！！」

待つこと数秒・・・左奥の部屋から、いかつい黒ずくめの男が出てきた。

（リナ「絶対この暴力団、みんな黒ずくめよね・・・
　　まぁ、敵がわかりやすくていいけど・・・」）

・・・　・・・。

リナが事務所の中に入るのを確認した慎吾は、江浜に合図を出す。

慎吾「今です・・・」

江浜「了解」

江浜は神経を集中して、再び娘に声を送る。

（江浜「いいか、あんず。
トイレに行きたいと、見張り役の男に言うんだ。
その部屋を出たら、合図をくれ」）

（あんず「わかった・・」）

深呼吸したあんずは、見張りの男１人に声をかけた。

あんず「あの・・・　おトイレ・・　お願いします・・・」

恥ずかしそうに懇願する。携帯をいじっていた男がめんどくさそうにため息をつき、手錠のカギをポケットから取り出した。

あんず「・・・　・・・・」

・・・　・・・・。

リナ「３０００円です！」

男「高くないか？」

リナ「原材料の高騰ってヤツでして。ピザ業界も不況なんですよ！」

男は怪訝な顔でリナを見ながら・・・財布から取り出した３０００円をリナに渡す。

男「ところでお前・・・　さっきから気になっていたんだが・・・」

リナ「・・・　・・・」

ゴクリと唾を飲み込んだリナ。

男「なんでお前、私服なんだ？　いつもの制服はどうした？」

リナ「あ、えーっと。日曜日はノー制服ＤＡＹなんですよー」

口から出任せを言うリナ。

リナ「仕事をきっちりすれば文句ないでしょ！！」

男「ま、それもそうだな」

ピザを受け取った男は、部屋に戻ろうとした。

リナ「あ、ちょっと！！！」

男は振り返る。

男「なんだ？　ドリンクサービスでもあったか？」

リナ「いえ・・・すいませんけど・・・
　　トイレ、貸してもらえます？」

男は玄関の外に向かって指さした。

男「外出て右に３０m歩けば、コンビニがある。そこ行きな」

（リナ「ちょっと・・・トイレぐらい貸しなさいよ！！」）

このままでは、作戦が頓挫してしまう。

リナ「あーん！　漏れちゃいそうなの！　お願い！　１分だけ！！」

必死に「らしからぬ」セリフを言った。

（リナ「あとで慎吾・・・　どついてやる！！」）

男は頭をかきながら、

男「っち！」

廊下の奥を親指で指さす。

男「廊下の右奥だ。さっさと済ませて帰れよ」

リナ「は～い！」

リナはさっと廊下の右奥に消えていった。

江浜の情報通り、１階右奥にトイレがある。

（リナ「・・・。ホントにあの親子、会話してた・・・？」）

霊能力に懐疑的だったリナだが、少しずつ・・・全否定から、半信

半疑になりつつあった。

リナ「・・・　・・・」

トイレの扉を開け、中に入ると・・・

（リナ「誰も・・・　いないわね・・・」）

トイレの中が無人である事を確認する。男性用の白長の縦置き便器が3つ。奥に個室が3つ見えた。

リナ「・・・　・・・」

そしてさらに奥には・・・

（リナ「よかった。あったわ・・・」）

リナはこの作戦に必要な【ある物】を確認し、一番奥の個室に入り込む。カギをかけ、心臓の鼓動をおさえつつ・・・その時を待った。

・・・　・・・。

糸見「・・・　・・・」

第5スタジオに到着した糸見は、違和感を覚えた。

入り口に見張りの男がいない。あわてて小道具部屋に走っていく。

部屋の前にいるはずの見張りもいない・・・。

糸見「・・・　な、何が・・・」

小道具部屋に入ると愕然とした。３人の見張り全てが気絶し、横になっている。

糸見「あいつら・・・」

糸見はすぐに携帯電話を取りだし、電話をかけた。

・・・・・・。

リナ「・・・・　・・・」

個室の中で待機するリナ。

ガチャッ

トイレの扉を開く音が聞こえた。

（リナ「きた・・・」）

足音が個室へと向かっていき、リナの隣の個室へと入っていく。そして・・・

トントン

リナの個室に【合図】が伝えられた。

あんずはトイレに向かう途中、父から【声】の指示を受けている。
指示された通り、奥から2番目の個室へ入り・・・隣の個室へ合図をしたのだ。

（リナ「さて・・・　こっから勝負！　行くわよ！！」）

バタン！！

リナは思い切って個室の扉を開けた。

リナ「！？」

瞬間ギョッとする。隣の個室の前に、黒ずくめの男が立っていて・・・目が合った。

リナ「あ・・・　トイレ借りてます。許可はとってます・・・」

黒ずくめの男はサングラスの奥からリナを凝視する。

男「・・・　・・・・」

言葉を発することはない。

（リナ「ちょっと・・・なんで、男がいるのよ！」）

予定では、見張りはトイレの中までは来ないはずだった。

リナ「・・・　・・・」

出鼻をくじかれたリナ。とりあえず男の前を通り・・・入り口近く

の手洗い場で、水を出す。

（リナ「女性のいる個室の前に立つなんて・・・最低な男ね・・・」）

手を洗いながら、リナは次の一手を考えた。

リナ「ちょっとー・・・！」

見張りの男に声をかけると・・・　男は無言でリナの方に顔を向ける。

リナ「ちょっと、この手ぇ乾かすヤツ・・・
　温風器？　変な音すんだけど？」

男「・・・　・・・」

男はリナを無視して、個室に視線を戻す。しかしリナも負けない。

リナ「ちょっとあんた・・・
　この機械、何とかしてくんない！？
　絶対、壊れてるって！」

男はリナの方を向くことなく、完全無視を続けている。

（リナ「・・・　あの野郎・・・」）

バン！！　ガコン！！！　バンバン！！

突然リナは、温風器を力いっぱいたたき始めた。

リナ「絶対この温風器、おかしいって・・・」

ガシャン！　バキッ！！

力任せに温風器を叩くリナを見て、さすがに男も黙っていない。リナの所に近寄ってきた。

男「おい、こら！　ここをどこだと思って・・・」

男がリナの肩に手をかけようとした瞬間、リナはそれをかわし・・・すでに電源をＯＮにしてたスタンガンを、男の腹部に容赦無しに押しつけた。

男「ぐ！！？　ぐぐ・・・　ぐぐぐ・・・」

男は全身の筋肉が緊張して、大きな声を出せない。しばらくして男は・・・気絶した。

・・・　・・・。

糸見「江浜の娘は！？」

糸見は大きな声で、事務所にいる男に声をかけた。

男「あー・・・1分ほど前、トイレに行きましたが・・・」

糸見「急いで確保しろ！！　江浜が近くにいるかもしれん！

必要なら、そこにいる連中全てで対応しろ！！」

携帯に向かって、大声で怒鳴る。

男「え？　あ！　はい！　すぐに！！」

携帯を切った糸見は・・・

糸見「絶対、許さん・・・」

すぐに地下駐車場へと向かった。

・・・　・・・。

カチャリ。

トイレの入り口のドアに鍵をかけたリナ。奥から2番目の個室に向かい、静かにノックした。個室からおそるおそる出てきた女性を見て・・・

リナ「・・・　・・・」

ハッとする。

胸元まで伸びた黒くサラサラのストレートヘア。大きな黒い瞳に、小さな唇。化粧はしてないのに、自然と美しいオーラがにじみ出ている。

清楚な雰囲気とは対照的に、白いブラウスと赤いスカートは汚れが

目立つ。2日間の監禁生活でのつらさが伝わってきた。
固まっていたリナが我に戻る。
（リナ「いけね・・・　女に見とれるなんて・・・
さすがイケメン江浜氏の娘ね」）
あんずを見つめた後・・・
リナ「私、リナ。ここを脱出するわよ」
目の前の美少女に、手を差し出した。
あんず「は、はい・・・」
あんずはか細い声で、リナの右手を握る。
リナはその小刻みに震える冷たい手を握り・・・　トイレの一番奥に連れて行った。
リナ「さ・・・　この窓から逃げるわよ」
自分の頭より、若干高い位置にある窓を開ける。
リナ「な・・・」
瞬間、リナの目が大きく見開いた。
リナ「て・・・　鉄格子！？」
視線の先、窓のすぐ外には・・・わずか１０ｃｍ間隔の鉄格子が縦

に並んでいる。両手で鉄格子を握り、前後に力強く動かそうとするがびくともしない。

その時・・・

ガチャガチャ!!

トイレの扉を何者かが、ぶっきらぼうに開けようとしていた。

男「おい、こら!!　カギかけやがって!!　ここを開けろ!!」

ドアの向こうから大声で叫ぶ男の声が聞こえてくる。

リナ「・・・　や・・・　ヤバい・・・」

あんず「・・・　・・・・」

2人の少女は・・・

トイレの奥で、窮地に立たされた。

（第24話へ続く）

第２３話　想定外（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

トイレの窓から逃げる作戦は失敗。
そしてトイレの扉の向こうには男が・・・。

絶体絶命の中、リナは銃を持った男らに応戦する。
リナ達のピンチを察した江浜と慎吾。トイレの窓の反対側に駆けつけるが・・・

江浜の気功技を持ってしても、壁を打ち破る事は出来ない。
窮地の中、脱出するために・・・！？

次回　「第２４話　銃　撃　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２４話　銃　撃（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。江浜は自身の娘を助けるべく、行動を別にしようとするが、慎吾とリナもついてくる。

江浜の娘・あんずが監禁された事務所に辿り着いた３人。慎吾の立てた作戦で、リナが事務所に侵入。あんずを連れ、トイレの窓から脱出を試みようとするが・・・その窓には鉄格子がかかっていた。

第２４話　銃　撃

第２４話　銃　撃

慎吾「ちょっと遅いですね・・・」

江浜「あぁ・・・」

事務所の隣のビルで身を隠している慎吾と江浜。リナとあんずの２人が出てくるのを待っていた。

慎吾の作戦はこうだ。

あんずの監禁されている事務所にデリバリーされるピザを、リナが横取りする。そして配達員を装ったリナが事務所に入り、トイレを借りる。

江浜は娘とコンタクトを取り、トイレに向かわせる。

小さな建物のトイレは、その構造上、外へ通じる窓がある。トイレでリナとあんずが合流し、トイレの窓から外へ脱出する。

だが・・・

リナ「・・・　や・・・　ヤバい・・・」

第１の誤算は・・・あんずの見張り役の男がトイレの中、個室の前にまで来てしまった事。これは、リナがその男をスタンガンで撃退

する事で突破。

第２の誤算は、逃げる予定の窓に鉄格子がかかっていた事。両手で鉄格子を前後に揺さぶるも微動だにしない。

そしてリナ達が気づいていない第３の誤算は・・・糸見から事務所へ連絡が入ってしまった事。連絡を受けた黒ずくめの男達は、トイレに向かっていた。

リナ「ど・・・　どうする・・・？」

あんずは個室の前で足をガクガクし、ただ立ち尽くしている。それを横目で見たリナ。

リナ「・・・　アテにならないってわけね・・・」

リナは一直線にトイレの出入り口に向かう。スタンガンのスイッチをＯＮにすると、迷わずドアノブに押しつけた。

男「ぐぁ！？」

反対側からトイレのドアを開けようとした男が、ドアノブを通して感電する。

ドアノブを必死に離そうとするが・・・筋肉が硬直して意志とは反対にドアノブを強く握ってしまう。

男「ぐぐぐぐ・・・」

数秒後、男は失神した。この日リナが倒した４人目の男である。

しかしすぐに・・・事務所の奥から、糸見の連絡を受けた数名の男達がかけよってくる。

リナ「ちょっと、あんた！！」

ドアの向こうの足音を確認したリナは、大きな声であんずに声をかけた。

あんず「は・・・はぃ・・」

小さな声で応えるあんず。だがその両手足は、恐怖で小刻みに震えている。

リナ「そこに掃除用具があるでしょ！
洗浄剤とかあるはずだから取って！　渡して！」

言いながらリナは、目の前にあったバケツを手にした。それを持って、手洗い場まで走っていき・・・蛇口をひねると、バケツに水を入れる。

あんず「あ・・・」

リナ「早く！！　マジやばい状況だから！！」

あんず「は、はい・・・」

リナにせかされたあんず。奥にあるトイレの清掃用具入れから、ボ

トルに入った洗浄剤を見つけた。すぐにリナの元へ走っていき、それを渡す。

リナ「・・・　・・・」

ボトルを渡されたリナはラベルを確認した。

リナ「ナトリウム・・・よし！！」

容器のキャップを開けると、リナはバケツの水に洗浄剤を混ぜる。手早く作業しながらも、あんずに声をかけた。

リナ「あんたお父さんと話せるんでしょ！
早く【外に出られない！】って伝えて！！
【すぐに助けにこい】って！！」

あんず「あ・・・は、はい」

小さな声で返事をすると、あんずは目を閉じ・・・意識を集中する。

（あんず「お父さん・・・　お父さん！！」）

・・・　・・・。

娘の声を受け取った江浜はすぐに言葉を返す。

（江浜「どうした！？」）

（あんず「窓から出られない・・・鉄格子があって・・・」）

（江浜「わかった！　すぐに行く！」）

慎吾「どうかしました！？」

江浜の様子に気づいた慎吾が声をかける。

江浜「トラブルだ・・・　事務所の裏に行くぞ！
　　見つからないよう気をつけろ！」

慎吾「わ、わかりました！！」

・・・　・・・。

リナは洗浄剤を混ぜたバケツの水を、入り口の扉の下から反対側へとぶちまける。

リナ「・・・　・・・」

扉の向こうから複数の足音が聞こえてきた。リナはスタンガンをＯＮにして、ドアノブにそれを押しつける。

・・・　・・・。

事務所の１階にいた４人の男。糸見の指示を受け、トイレに駆けつけると・・・トイレのドアの前で、一人の男が倒れていた。江浜の

娘を見張っていた男だ。

男「やろう・・・。さっきのピザ屋だな!!!」

先頭の男がトイレの中にいる人物の正体を突き止め、真っ先にドアノブに手をかける。

バチバチッ！

瞬間、冬場の静電気とは比較にならない程強烈な電気が流れた。

男「ぐぉ!?」

男は反射的に手をひっこめ、尻餅をつく。

・・・　・・・。

バチバチッ!!

ドアノブの音を確認したリナ。すぐさま地面にスタンガンを突き刺した。

電気はさきほどぶちまけたバケツの水を伝わり、反対側にいる男を感電させる。

男「ぐぁあああ!!!」

扉の向こう側から、悲鳴が聞こえた。

リナ「まだ何人かいる・・・　1分も持つか・・・」

この時、扉の向こうの男が・・・　銃を取り出している事に、リナは気づかない。

・・・　・・・。

慎吾と江浜は事務所の裏にたどり着いた。壁1枚を隔てて、向こう側にはリナとあんずのいるトイレだ。

慎吾「鉄格子・・・」

（江浜「あんず！　中の状況は!?」）

（あんず「リナさんが、扉の向こうの相手をせき止めているところ・・・

でも、もうす・・・」）

パーン！　パーン!!!

トイレの内外にいる全てに、銃声が聞こえる。

リナ「ちょ・・・」

2発の銃弾が、扉を突き抜けリナの横の壁にめり込んだ。

リナ「いよいよヤバいわね・・・」

リナはすぐにヘアピンをはずし、ポニーテールを止めているシュシュもはずす。

スタンガンのスイッチをヘアピンで固定し、常にＯＮ状態にすると・・・　横にあったモップの先にスタンガンをシュシュでくくりつけた。

そして扉の横に身を隠し、銃弾を避けつつドアノブと地面の水に電気を流す。扉を死守しながら、あんずに大声をかけた。

リナ「こっちはもう限界！！　お父さんに何とかしてもらって！！」

（慎吾「残るは強行突破しかない・・・」）

横を見ると、江浜が壁に向けて拳を垂直にあてている。

（慎吾「気功・・・？」）

江浜「・・・　ふ～　・・・　」

呼吸を整え、壁に添えた拳に意識を集中する。

江浜「？！！」

かけ声と共に、手のひらからエネルギーを流し込んだ。

しかし・・・

江浜「・・・　・・・」

壁の表面が少しくぼんだ程度。

江浜「この壁の厚さでは・・・
うち破るには１０分かかる・・・」

パーン、パーン！！！

さらに銃声が聞こえた。

（あんず「もうすぐ侵入されそう！！」）

江浜は一瞬悩んだ後、娘に言葉を送る。

（江浜「あんず、壁に胸の高さで手のひらをあてろ！　急げ！！」）

あんずは言われた通り、壁に手のひらをあてた。

江浜は意識を集中し、娘と反対側から壁に拳をあてる。
そして調節するように・・・左下へと拳を移動させた。

慎吾「な、何を・・・？」

江浜「娘も鍛えてある！」

（江浜「あんず、1，2の3で発勁（はっけい）だ！」）

（あんず「わ、わかった・・・」）

江浜親子は静かに目を閉じる。

（江浜「1、2の・・・　3！！」）

江浜「？！！！」

あんず「？！！！」

2人は同時に気合いのこもった声をあげた。体内で練った氣（き）を、あんずは手のひらを通し・・・江浜は拳を通し、エネルギーとして一気に放出する。

ビキビキビキ・・・

瞬間、壁に無数のヒビがはしった。

慎吾「な！？」

江浜「慎吾君、目を閉じておけ。次で壁が砕け散る！」

慎吾に指示すると、江浜はすぐまた娘に言葉を送る。

（江浜「あと1回！　いくぞ！　1，2の・・・3！！」）

江浜「？！！！！」

あんず「？！！！！」

ドッッッッゴン！！！　ガラガラガラ・・・

瞬間、鈍い音と同時に・・・2人を隔てた壁が一気に粉砕した。
あたりを多くの粉塵が舞い散る。

慎吾「す・・・すごい・・・」

左腕で顔をかばいながら、慎吾が砕けた壁を見た。
そこには人一人が余裕で通れる壁穴が開いていた。

・・・　・・・。

リナ「・・・　・・・」

抜け穴を確認したリナ。すぐにあんずに声をかける。

リナ「あんた先行って！　すぐ私も行くから！」

言われたあんずは、壁穴を通り抜け・・・　外で待機していた父と
抱き合った。

あんず「お父さん！！」

江浜「あんず！！」

強い抱擁をかわした後、江浜はすぐに娘の両肩を握る。

江浜「まずはここを逃げてからだ」

あんずが無言で頷(うなず)いた直後、リナも壁穴を通ってきた。

慎吾「・・・　・・・」

リナの後ろに、銃を持った数人の男も見える。

リナ「車どっち!?」

再会を味わう余裕もなく、慎吾に声をかけた。

慎吾「こ・・・　こっちです!」

いつものポニーテールとは違うリナの髪型・・・とまどいながらも、慎吾が応える。

江浜「急げ!!」

合流した4人はすぐに事務所から離れるべく、走っていった。

リナ「・・・　・・・」

去り際にリナは、ON状態のスタンガンをトイレに投げ入れる。

男「ぐわぁあ!!」

男「ぐぅう！！」

数名の男の悲鳴が聞こえた。

慎吾「な、何が！？」

走りながら慎吾がリナに聞く。

リナ「壁抜ける前に、洗浄剤混ぜた水を床にも壁にもぶちまけてきたのよ！

あのヌルヌル状態、靴以外に体が触れたら高圧電流の餌食よ！」

慎吾「あ！　水は電気を通すってヤツ！？」

リナ「バカ！！　水は電気通さないわよ！！」

慎吾「え！？　じゃぁ・・・」

パーン、パーーン！！

慎吾「わ！！」

トイレを抜け出した1人の男が発砲してきた。

江浜「こっちだ！」

ビルの裏に隠れるように止めておいた車・・・すでにエンジンはかかっている。

駆け込むように４人が乗り込むと・・・運転席に座った江浜は、迷わず車のアクセルを踏み込み急発進した。

数発の銃弾を逃れた車は、大通りに出る。

リナ「はぁ、はぁ・・・　何とか・・・」

慎吾「はぁ・・・　はぁ・・・」

あんず「・・・　・・・」

江浜「・・・　・・・」

安堵のため息をつく４人。

しかし・・・

銅板の追跡装置が作動している事に・・・

気づく者はいなかった。

（第２５話へ続く）

第２４話　銃　撃（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

あんずの救出に成功した一行は、江浜の仕事場に移動し態勢を整える。

しかし、銅板に仕組まれた追跡装置により追っ手の影が迫っていた。

再び追っ手から逃げるため、動き出す４人だが・・・

その時、江浜は慎吾に・・・慎吾の運命を変える物を手渡す。

次回　「第２５話　パワーストーン　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２５話　パワーストーン（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出した。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第２５話　パワーストーン

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第25話　パワーストーン

慎吾「え!?　水って電気を通すんじゃないんですか!?」

江浜の娘・あんずの救出に成功した一行は、江浜の運転する車で高速道路を走っていた。

リナ「バカね・・・正確には水に含まれている不純物が電気を通すのよ。

ナトリウムは水に溶けるとイオンが発生する電解質。

それが電気を通しやすくするの。高校の化学で習ったでしょ!?」

慎吾「あ・・・　僕、文系だし、地学しか・・・」

リナ「でも、江浜さんとあんずちゃんの気功・・・?

あれがなかったら、正直ヤバかったわ・・・」

運転手の江浜が口を開く。

江浜「あれは発勁（はっけい）と言ってね。

昔から中国武術で使われる気功技の1つなんだ」

慎吾「娘さんも気功使えるなんてすごいです。

壁の表裏から同時に衝撃を与える・・・

力2倍で壁を破壊するなんて、素晴らしい発想です!」

横にいたリナがため息をついた。

リナ「2倍じゃなくて4倍だけどね。どうせ物理も知らないわよね・・・」

軽く笑った江浜が声をかける。

江浜「とにかくリナ君のおかげで、私も娘も助かった。ありがとう」

リナ「いえ・・・　たいした事は・・・」

そういうリナは少しニヤニヤしていた。

江浜「ほら、あんずも・・・」

助手席に座っている娘の肩をポンと叩く。

脱出直後、銃声を聞いて震えていたあんずだが・・・ようやく落ち着きを取り戻し始めていた。リナの方を向いて小さな声で

あんず「ありがとう」

と、照れた声を出す。

リナ「どういたしまして！　でも、あなた・・・
　江浜さんの娘なら、もっと堂々としなきゃね！」

慎吾「ちょっと・・・お父さんの前ですよ・・・」

慎吾がリナの腕を軽くつついた。

江浜「リナ君の言うとおり。まだ修行中の身とはいえ・・・
もっと鍛えなければと思ってる」

慎吾はあんずに笑顔を見せ、声をかける。

慎吾「えっと・・初めまして！
慎吾っていいます。よろしく」

この時慎吾は、初めてあんずと目を合わせた。

あんず「あ・・・はぃ・・・　よろしく・・・・」

あんずは恥ずかしそうに目線をそらし・・・小さな返事を返すと、
すぐに前を向く。

慎吾「わ・・・」

初めてあんずの顔を直視した慎吾は、一瞬小さな声をあげた。

胸元まで伸びた綺麗な黒髪に大きな瞳、うす紅色の頬と小さな唇。
ついつい助手席に座るあんずの黒髪に見とれてしまう。

江浜「娘は、人見知りが激しくてね」

軽く笑う江浜。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾は心ここにあらずといった表情を浮かべている。その不審な表情に気づいたリナが声をかけた。

リナ「ちょっとあんた・・・　どうしたの？」

慎吾「あ・・・江浜さんの娘さん・・・可愛い・・・」

小さな声で・・・素直に思っている事を口にする。

リナ「・・・　・・・」

あきれた表情を浮かべるリナ。

リナ「まぁでも・・・　確かにね。
女の私でも・・・初めて見た時、一瞬見とれたし。
イケメンの娘イコール美少女。ありうる方程式だわ」

慎吾「リナ先輩・・・」

リナ「　？　」

慎吾「僕、ああいう可愛いすぎる女の人・・・
どう接していいかわからないんです・・・
どうすればいいんですかね？」

リナ「はぁ！？　なにそれ？　あたしに失礼じゃない！？
そんなの、私も知らないっつーの！！」

慎吾「ふぁ～・・・」

緊張の場面を脱した安堵感は、あんずの美しさをさらに引き立てる。
見とれる慎吾は抜け殻のようになっていた。

リナ「ふん！！」

窓の外の景色に視線を移すリナ。

（リナ「死ねばいいのに・・・」）

そう、心の中で呟いていた。

・・・　・・・。

しばらく高速を走っていた車は一般道路へ降りる。

リナ「どこへ？」

リナが運転手に声をかけた。

江浜「あぁ・・・行く場所は決まっている」

言いながらハンドルをきる。その表情には、やや緊張した様子がうかがえた。

・・・　・・・。

３０分後、江浜はとある一軒家の車庫に車を止めた。

小さな庭がある古ぼけた民家。江浜は慎吾達に、家の中に入るよう促す。

慎吾「自宅・・・ですか？」

江浜「いや、ここは仕事場みたいな所さ。
　風水的に、悪い【気の流れ】はよってこない場所だ。
　それに周辺にも結界をはってある。悪い霊がよりつく事もない」

慎吾「へぇ～・・・」

慎吾が関心を寄せる。

リナ「風水ね・・・」

リナは特に興味がないようだ。

家の中に入ると・・・リナと慎吾は、綺麗なリビングに招かれる。

リナ「あの・・・　この後は？」

江浜「あぁ・・・　今は、お互い自宅に戻るのはマズい。
　組織の人間が貼り付いてる可能性がある」

慎吾「確かに・・・」

江浜「私と娘で・・・　糸見の裏にいる人物を調べてこようと思う」

リナ「ならば私も！　絶対役に立ちます！」

江浜はリナにＳＴＯＰのしぐさをする。

江浜「悪いが今回はダメだ。君には非常に感謝しているが・・・
糸見の後ろには、ある危険な霊能者がいる。
霊関係は我々の専門。君は部外者だ」

江浜は毅然と言い放ち、リビングの奥へと姿を消した。

リナ「・・・　・・・」

リナはへの字口をして、おもしろくない表情を浮かべる。江浜と慎吾に加え、あんずまで救出したのは間違いなくリナのおかげだ。

リナには結果を出したという自負がある。今なら糸見だろうがその裏にいる霊能者だろうが、負ける気はしない。

慎吾「・・・　・・・」

察した慎吾が声をかける。

慎吾「今は・・・江浜さんに任せましょう・・・」

リナは慎吾を睨み付けた。

リナ「あんたさぁ・・男のくせに何よ！
ただ捕まって、私に助けられて・・・
あんずちゃんの救出でも、あんた・・・
作戦たてただけで、何も動いてないでしょ！」

途中で言いすぎたと思ったリナだが、慎吾への不満は止まらない。

リナ「挙げ句、あんずちゃんに見とれて・・・
もうちょっと男らしくできないの！？　情けないわ！！」

慎吾「・・・　・・・」

リナの言葉は深く慎吾の心を突き刺す。

慎吾「・・・」

何も言い返せなまま、暗い顔をした。

慎吾「すいません。僕が情けないばかりに・・・」

リナ「全くよ！！」

意地を張り通したリナは、腕組みをしたまま慎吾に背を向ける。

慎吾「・・・　・・・」

２人の間に、重たい空気が流れた。

・・・　・・・。

しばらくすると江浜が現れる。黒のレーシングスーツのような物を身にまとっていた。

慎吾「・・・　・・・」

慎吾の視線に気づいた江浜が声をかける。

江浜「仕事着さ。動きやすくてね」

慎吾「・・・　・・・」

慎吾の視線は、江浜の後ろから現れたあんずに移った。彼女もまた、父親と同じ仕事着を着ている。体にぴったりまとわりつくその出で立ちは、あんずの美しいボディラインを際だたせていた。

見とれていた慎吾だが、あんずが振り向いた際反射的に顔をそらし顔を赤らめる。

リナ「・・・　・・・」

その様子を見ていたリナは、さらにへの字口をとがらせた。

親子2人はリュックを背負い襟を整える。

その時だった。

江浜「・・・　・・」

江浜が何かに反応するように窓の外を見た。

あんず「・・・　・・・」

あんずもすぐに窓の外を見る。

江浜「・・・　・・・」

あんず「・・・　・・・」

親子は緊張の表情を見せた。

慎吾「ど、どうかしました？」

親子の視線の先を見ながら、慎吾が質問する。

江浜「・・・　囲まれている・・・　」

そう言うと部屋中のカーテンを閉め始めた。

リナ「え！？　悪霊は入ってこれないんでしょ！？」

あんず「霊じゃなく・・・　人間に・・・囲まれている・・・」

あんずが小さな声で応える。

リナ「じゃ、じゃぁ・・・

銃を持った連中が、追いかけてきたっての!?」

江浜「この場所は悟られてないはず・・・何故!?」

慎吾「・・・　・・・」

今日を振り返る慎吾。

（慎吾「確か・・・　あんずさんは手ぶらだったし、僕は・・・」）

はっと何かに気づいた表情をする。

（慎吾「あのレプリカの銅板・・・？」）

スタジオから手にしていた銅板を見返す慎吾。

慎吾「・・・　・・・」

銅板の真横に小さな穴を発見した。

その小さな穴を覗くと・・・穴の向こうで、赤い小さなランプらしきものが点滅している。

慎吾「ど、銅板に・・・　多分、追跡装置らしきものが・・・」

真っ先にリナが反応した。

リナ「全く!!　あんたどこまでドジなの!?
　ホントあんた・・・」

リナの言葉を制し、江浜が割ってはいる。

江浜「言い争う暇はない！　地下に抜け道がある！
　銅板は置いて逃げるぞ！」

慎吾「でも、この銅板には埋蔵金のありかが・・・」

リナ「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！！
　もう！　世話がやけるったらありゃしない！！」

携帯を取り出したリナは、銅板の表と裏を素早く携帯写メで撮った。

リナ「ほら！これで満足！？　銅板置いて、すぐ逃げるわよ！」

イライラの絶頂に達しているリナ。それでも銅板の写メを撮ったのは・・・少なからず慎吾の事を思っての行動だった。

ズキューン、ズキューン！！

玄関先から銃声が聞こえた。

江浜「ここだ！　急げ！」

江浜は地下へと通じる階段に皆を誘導する。

（リナ「また・・・　逃げるの・・・？」）

ＴＶ局から逃げ、あんずのいた事務所から逃げ・・・そして今また、逃げようとしている。

リナ「・・・　・・・」

不満を感じながら、階段を降りるリナ。

慎吾が江浜の横を通り過ぎようとした時だった。

江浜「慎吾君、これを」

江浜は、拳大（こぶしだい）の丸い石を慎吾に渡す。

慎吾「これは？」

江浜「パワーストーン。だが、説明は後。まずは逃げてから」

４人は地下へと降りていくと、そこはガレージに通じていた。すでに外への扉が開いており、光が差し込んでいる。

江浜「よし。ここに追っ手はいないな・・・」

ガレージ中央、年代物の車が１台あった。リナはそれに乗り込もうとする。

それを見た江浜がすぐに声をかけた。

江浜「それじゃない！　ここだ！」

江浜は車の横に置いてある、2台のバイクを指さす。

リナ「バ・・・・バイク？」

江浜「リナ君は私の後ろ、慎吾君はあんずの後ろだ！」

リナ「な・・・？」

江浜「ここは二手（ふたて）に分かれるのがセオリー。さぁ乗って！！」

そう言うと江浜は慎吾とリナにヘルメットを渡した。
江浜は左のバイク、あんずは右のバイクに乗り込む。

言われた通りリナは江浜の後ろに乗り、メットをかぶった。

リナ「・・・　・・・」

ふと横を見ると・・・申し訳なさそうに、あんずの後ろに乗る慎吾が視界に入る。
あんずの腰におそるおそる手を回す慎吾の表情は、ヘルメットのせいでわからない。

リナ「・・・　・・・」

モヤモヤした感情を抑えつつ、リナは江浜の腰に手を回す。

江浜「先にいくぞ！」

江浜とリナを乗せたバイクは、ガレージの扉を勢いよく駆け抜けた。

あんず「もう少し強く握ってください」

小さな声であんずが慎吾に声をかける。

慎吾「う、うん・・・」

慎吾はあんずの後ろから腰に手を回し、お腹の方でぎゅっと手を握った。

瞬間、あんずはアクセルを全開で踏み込み・・・父のバイクに追いつかんと急発進する。

パン！　パーン！！

直後、数発の銃声が鳴り響いた・・・。

（第２６話へ続く）

第２５話　パワーストーン（後書き）

～～

次回予告

またしても銃を持った連中から逃げる事になる４人。
リナは持っていた防犯道具で追っ手に応戦。
あんずと慎吾のバイクには、糸見が迫る。
追っ手を振り切ったと思った２つのバイクだが・・・
今回の黒幕である、霊能者が立ちはだかる。
次回　「　第２６話　　黒　　幕　　」

～～

第２６話　黒　幕（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。ところが、慎吾の持っていた銅板に追跡装置がついており、銃を持った連中がまたしても追ってきた。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第２６話　黒　幕

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第２６話　黒　幕

リナを後ろに乗せた江浜のバイクは、家を出た直後・・・急ハンドルを切って左に曲がる。

パン！　パーン！！

付近にいた黒ずくめの男らの銃弾をかわし、２人を乗せたバイクは大通りに出た。

黒ずくめの男らはすぐに車に乗り、バイクの追跡を開始する。

江浜「しっかり捕まってろ。バイクの方が逃げるには有利だ」

そう言うと、江浜は大型バイクのアクセルをさらに握りこんだ。

リナ「・・・　・・・」

バイクに振り落とされまいと、リナは江浜の腰に回した手をさらに強く握りしめる。

一方、慎吾を後ろに乗せたあんずのバイク。父親のバイクから、遅れること１０数秒・・・

あんず「・・・　・・・」

アクセルを一気にふかし、父親とは反対方向に走る。おとりになった父のおかげで、視界に敵の姿は見えない。

あんずはバイクを操りながらも、フルフェイスメットの右横についてる小さなボタンを押した。

あんず「お父さん、聞こえる!?」

ヘルメットに内蔵された通信装置は、江浜のそれへと電波を送る。

江浜「聞こえる。こちらは逃走中。そちらは!?」

父の声を聞いて一息ついたあんずはすぐに応えた。

あんず「こちらは追っ手はいません・・・」

ふと後ろに乗ってる慎吾が大きな声を上げる。

慎吾「来ました!!!　黒い車が2台!
　窓の外から銃をこちらに向けています!　」

かすかに慎吾の声を聞き取った江浜。

江浜「訓練とは違って実戦だ。今はとにかく逃げる!
　神楽坂教会で落ち合おう」

あんず「了解!」

慎吾はあんずの腰に手を回しつつ、背後の車を確認する。

そして・・

慎吾「い・・・　糸見さんだ！！」

慎吾の両目は、小道具部屋で自分に銃を向けた・・・そして今も銃を向けている糸見を捉えた。

糸見「・・・　・・・」

助手席に座っていた糸見。左手に銃を持ち、バイクに狙いを定めているが引き金をひく事は無い。

糸見「・・・っち！」

小回りの利くバイクに、なかなか追いつけないもどかしさもあるが・・・

鳳「あの青年だけは殺すな。それ以外は構わん。
後の処理は我々がする。

あの青年だけは・・・生け捕りにしろ！」

糸見は鳳（おおとり）という人物から、直接指示を受けていた。バイクの後ろに慎吾が乗っているのが見えるため、簡単には発砲できない。

あんず「・・・　・・・」

あんずと慎吾は、何故発砲しないのか不思議に思いつつ・・・車が通り抜けできない小道を走り抜けて行く。しばらく走ると追っ手は

完全に見えなくなった。

あんず「・・・。こちらは追っ手を振り切ったみたい。
先に教会に行きます」

江浜「了解」

江浜を追う車は最初４台いた。２台を振り切ったものの、残りの２台がしつこく追ってくる。

あんずらの追っ手と違って、こちらは隙(すき)あらば・・・

パン！！　パーン！！！

閑静な住宅街だろうと容赦なく発砲してきた。

リナ「・・・　・・・」

ただ江浜の腰にしがみついていたリナだが、防戦一方の状況に業を煮やし始める。

リナ「・・・　・・・」

そして反撃に出る決意をした。江浜の仕事着であるスーツの背中を、突然思いっきり噛む。

そして腰に回していた両手を外して、歯だけで振り落とされないよう江浜にしがみつく・・・いや、噛みつく。

自由になった両手で、自分のリュックを背中から手前に持ってきた。
中身をあさくり、何かを取り出す。

（リナ「・・・　よし・・・」）

リナの両手には直径７ｃｍ程度のオレンジ色のボールが、１個ずつ
握られていた。

江浜のバイクは追っ手を振り切るため、左右に激しく傾き、加速し、
時には急ブレーキから旋回する。

その激しいバイクの後ろでリナは江浜の背中に噛みつきながらも、
追ってくる車のブレーキ音や、発砲音に意識を集中した。

（リナ「1，2・・・3・・・・・4・・・・・」）

リナの頭の中では、追ってくるバイクの追跡パターンを高速で解析
する。

（リナ「カラーボールは2個・・・　車は2台。はずせない・・・」
）

タイミングを見計らってリナは・・・

（リナ「3　2　1　・・・　今!」）

右手のボールを軽く上に投げた。

オレンジボールはわずか1秒ほど上に上がり、直後重力に従って落

ち始める。

そしてボールは・・・追っ手の車の1台、そのフロントガラスに直撃した。と同時にボールは破裂し、オレンジ色の液体塗料がフロントガラスの隅々まで埋め尽くす。

突如視界が遮られた車は、急ブレーキと右への急ハンドルの結果・・・

横転。

そのタイヤは空を仰ぎ、むなしく空回りしながら車は横滑りし・・・やがて上下逆さまの状態で止まった。

（リナ「よし！　1台!!」）

リナはもう1個のボールを利き腕の右手に持ち替えると、左手で江浜の腰にしがみつく。

もう1台、しつこく追ってくる車に向け・・・そのオレンジボールを投げつけた。

2個目のオレンジボールも車のフロントガラスに命中・・・しかし、その液体塗料はフロントガラスを埋め尽くすには至らない。運転手側の視界が開けているため、車はまだ追ってきた。

江浜「・・・　・・・」

江浜はバックミラーで1台の車が横転、もう1台の車のフロントガ

ラスの半分の視界が閉ざされたのを確認する。

急停止から、バイクを１８０度旋回。そして急発進して、まだ追ってくる車に一直線に向かって走り出した。

リナ「な・・・」

江浜「１台なら、大丈夫！」

助手席の男が窓から顔を出し、銃口を向ける。

江浜「・・・　・・・」

左手でハンドルを握り、右手を垂直に差しだした江浜。

江浜「？！！！」

気功によるエネルギー波で、１０数ｍ離れた男の銃をはじき飛ばす。

江浜「・・・　・・・」

バイクは、そのまま車の正面に向かって行った。スピードを落とすことはない。

リナ「ぶ、ぶつか・・・」

江浜「しっかり捕まっていろ」

言うと同時に江浜は右ポケットから、慎吾に渡したものと同じ拳大（こぶしだい）の石を取り出した。

江浜「？！！」

かけ声と共に、右手の石を強く握る。

直後、石の前後から・・・

リナ「な！？」

青白い光が棒状に伸び出した。

（リナ「な・・・何！？　これも気功？」）

江浜「・・・　・・・」

江浜のバイクは正面衝突直前に切り返し、車の横をすり抜ける。

と、同時に江浜は青白い光を剣を扱うがごとく操り・・・車の後輪タイヤに突き刺した。

ズッパーン！！

タイヤは大きな破裂音と共にパンク。

江浜「よし！」

そのまま江浜とリナのバイクは、車を置き去りにして走り抜けていった。

・・・　・・・。

先に待ち合わせ場所の教会に到着したあんずと慎吾。

あんず「うん。わかった！」

ヘルメットにつながるイヤホンを通して、父親と通信しているあんず。

あんず「今、お父さんから連絡あったわ。追っ手を振り切ったって」

慎吾は大きな安堵のため息をついた。

慎吾「は～、よかった。でも、何故・・・
　こんなにしつこく追ってくるんだろう・・・？」

突然、あんずの表情が曇り始めた。

あんず「・・・　・・・」

イヤホンを強く耳にあてる。

あんず「え！？　はい・・・　はい、わかりました」

あんずの様子が変わったのを察した慎吾が声をかける。

慎吾「ど、どうかしました？」

一瞬迷ったしぐさを見せたあと、慎吾に口を開く。

あんず「慎吾さんは・・・　しばらく待っていてください」

そう言うとあんずは、すぐにまたヘルメットをかぶりバイクに乗り込んだ。アクセルをふかすと、バイクを急発進。

慎吾「あ・・・」

バイクが走り去っていくのを、ただ見届けているだけの慎吾。

慎吾「な、何か・・・　何か悪い事が・・・？」

・・・　・・・。

防衛省の大きな敷地の手前。その小道で江浜とリナのバイクは、立ち往生をしていた。

リナ「ど、どうかしました・・・？」

江浜「・・・・・まさか・・・　あいつが・・・」

江浜は呆然とした表情で、独り言のようにつぶやく。

小道を真っ直ぐ行くと大通りに出る・・・しかしその手前に・・・太陽を背にした大柄な男が立っていた。

江浜「・・・　・・・」

江浜は今回の事件の真の黒幕の正体を知る。

目の前にいる大男ではない。黒幕は・・・大男の背後にいた。

（江浜「なるほど・・・　黒幕は、あの男・・・」）

江浜の視線は、大男の後ろに立つ霊の姿を捉えている。

リナには見る事が出来ないその霊は・・・こちらを殺気だって凝視していた。

江浜「・・・はぁ、はぁ・・・」

呼吸が乱れ、ゴクリと息をのむ。

リナは江浜の背中の横から、２０m程先に立つ大男を確認した。

リナ「・・・　・・・」

太陽を背にしているため、その風貌はわからないが・・・２m近い体格の男だという事だけはわかる。

ピンときた。

（リナ「おそらく・・・黒幕ってヤツね・・・」）

リナは自分のリュックから、ある物を取り出す。銃の形をしたワイヤー型スタンガンだ。

そのスタンガンを手にするとバイクを降り、男に向かって歩いて行った。

江浜がすぐに声をかける。

江浜「ダメだ!!　君のかなう相手ではない!!」

リナ「・・・　・・・・」

江浜の声は聞こえているが、頭には入ってこない。

リナ「・・・　・・・・」

リナには自信があった。今日の朝は慎吾と江浜を助け、さらに江浜の娘のあんずも助け出した。

防犯グッズのカラーボールにより、さきほどまでの追っ手も撃退している。

銃を持った連中を相手に、全て事を成功に収めてきた。

おそらくあと1人。

（リナ「あの大男さえ倒せば・・・
今回の件に、終止符を打てる・・・」）

そう思っていたリナ。

（リナ「ここまで来たら・・・
私の手で決着をつける・・・」）

江浜「待て!　戻るんだ!!」

江浜の声を無視し前に進んでいく。

リナ「・・・　・・・・」

大男の７ｍ程手前で止まったリナ。そして銃の形をしたワイヤー型スタンガン、その銃口を男に向ける。

リナ「・・・　・・・・」

男が刀の鞘（さや）らしき物を握ってるのが確認できた。

リナ「こちらは射程距離５ｍ。
　少しでも近づけば確実に撃つ自信はある。
　刀ではこの距離・・・どうしようもないっしょ？」

自信満々で声を上げるリナに対し、低い重低音の声が返ってくる。

男「ふふ・・・威勢がいいのは認めるが・・・
　戦場では真っ先に死ぬタイプだな」

右手で握った刀を、鞘からゆっくりと抜き出す。

リナ「・・・　・・・」

予想では銀色に輝いているはずだった刀だが・・・リナの目に映るそれは、やや黒みがかかり、怪しげなオーラを放っていた。

男は全く動かず、勢いよく上から一振りする。

リナ「だからこの距離では・・・」

江浜「危ない！！」

すでにバイクを降りて、リナを追いかけていた江浜。
後ろからリナを両手で抱きしめ、１８０度リナの向きを変えた。

結果、男に背を向ける事になった江浜が

江浜「ぐぁあああああ！！！」

悲鳴をあげる。

瞬間、大量の血が・・・江浜の背中から鮮やかに噴き出した。

リナ「な・・・？」

（第２７話に続く）

第２６話　黒　幕（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

大男と江浜の壮絶なバトルが始まった。

リナをかばいつつ、大男の相手をする江浜は次第に押されていく。

絶体絶命の状況・・・その圧倒的な戦闘力にどうする事もできなかった。

そして・・・

次回「第２７話　霊能バトル　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２７話　霊能バトル（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。ところが、慎吾の持っていた銅板に追跡装置がついており、銃を持った連中がまたしても追ってきた。

リナと江浜の前に、謎の大男が立ちはだかり・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２７話　霊能バトル

第27話　霊能バトル

リナはただ、江浜の背中から吹き出す大量の出血を・・・

リナ「・・・　・・・」

呆然と見ている事しかできなかった。

江浜「・・・　・・・」

江浜は青白い表情を浮かべながらリナを抱きしめている。脂汗を流しながら、必死に口を開いた。

江浜「君は・・・早く逃げるんだ。ここは私に任せろ・・・」

そう言うと江浜はリナを突き放した。そして歯を食いしばり、男に相対（あいたい）する。

江浜「？！！」

両拳を力の限り握りしめ、気合いの声を発した。すると背中の出血が少しずつ止まり始める。

江浜「・・・　・・・」

そして目の前の男を睨み付けた。

男「・・・　・・・」

睨まれた男は右手に持った日本刀をポンと肩におき、瀕死の江浜に声をかける。

男「死を覚悟したか？」

江浜はニヤリと笑い応えた。

江浜「ふ・・・。日本最高の霊能力者と言われている。
普段の除霊では、もの足りなかったところさ・・・」

そう言うと江浜は・・・ポケットから拳大の石を取り出し、前に突き出す。

江浜「？！！」

気合いのかけ声を入れると、石の左右から青白い光が棒状に伸び出した。そしてその光は剣の形をなす。

リナ「・・・　・・・」

江浜が何をしたのか理解できないが、リナには光の剣が見えていた。

江浜「・・・　・・・」

光の剣を自分の前に水平にして構えをとった江浜は、小さな声で後ろにいるリナに声をかける。

江浜「君の手におえる相手ではない。早く逃げるんだ・・・」

リナ「・・・　・・・・」

リナは江浜の後ろでただ立ち尽くしていた。江浜が身を挺して、男と自分の間に入ってくれなければ・・・

（リナ「死んでいたかも・・・・」）

リナはここまでＴＶ局、あんずの監禁されていた事務所、そして今と・・・逃げてきた。

また逃げなければいけないかと思うと、腹がたってくる。

リナ「・・・　・・・・」

ただ男の得体の知れない攻撃には、どう対応すればいいのか全くわからない。相手の攻撃を受ければ、死ぬ可能性も十分ある。

逃げたくない・・・　でも死ぬかも知れない・・・

葛藤の中で動けないまま、ただ立ち尽くしていた。

リナの気配を背後に感じた江浜が言う。

江浜「君は足手まといだ。君がいると、２人とも死ぬ事になる」

リナ「く・・・」

江浜の言葉は自分を逃がすためというのはわかる。でも、江浜だけ残して逃げる事など出来ない。

リナは腹をくくり、ワイヤー型スタンガンの銃口を男に向けた。

それを見た男は小さく笑う。

男「ほう・・・　今度は本気で行くぞ？」

リナへの視界を遮るように、江浜が割って入った。

江浜「上等・・・結界の外で待ってた事、後悔させてやるさ」

江浜の額から、脂汗が流れる。

男は2，3歩進んだかと思うと突然・・・上空3m近い跳躍を見せた。

リナ「な・・・！？」

もはや人間業ではない男の所業に、驚く事しかできないリナ。

太陽を背にした男は5m先の江浜とリナに向け、届くはずのない日本刀を勢いよく振る。

江浜「ふん！！」

江浜は後ろにジャンプしつつ、リナを抱きしめた。

直後2人が立っていた地面は大きな衝撃を受け止め、アスファルトにヒビが入る。江浜とリナが、小さな揺れを感じる程の衝撃だった。

江浜「言ったろ・・君は逃げろ」

江浜はリナをかばうようにして、背中越しにリナに声をかける。

リナ「で、でも一人で太刀打ち出来る相手では・・・」

男「無駄話はそこまでだ！」

男はさらに刀を振った。

江浜「？！！」

ガキィーィィン！！

江浜は光の剣は、見えない衝撃を受け止める。しかし完全に受け止められず・・・

江浜「くぅ・・・」

リナ「・・・　・・・」

２人は３m後方に吹っ飛ばされた。

男「ほう。よく受けたものだ。一瞬でも遅れたら・・・
　２人とも死んでたぞ」

地面にひれ伏した江浜とリナに、男はゆっくりと歩みを進めていく。

江浜「はぁ・・・はぁ・・・」

先ほど激しい出血をした江浜の呼吸が乱れている。

リナ「・・・　・・・」

江浜がかばってくれたおかげでリナは無傷だが、これ以上の攻撃を受け止める事が出来るとは到底思えない。

（リナ「ど・・・どうすれば・・・？」）

倒れた2人に、さらにゆっくりと歩を進める男。

男「ふ・・・　ここまでだ。その体では、後ろに飛べまい」

そういうと大きく日本刀を振りかぶった。

リナ「し・・・」

リナの顔が恐怖の表情を見せる。

ヒュン・・・

突然リナの背後から、金属の物体が飛んできた。その物体は高速で男の太ももに向かっているが・・・

男は振り上げた刀をすぐに降ろして、その物体をはじく。

キン！　キン！！

刀と物体が高音を響かせた。

男「もう1人いたか・・・」

男の視線の先・・・

リナ「・・・　・・・・」

江浜「はぁ・・・　はぁ・・・・」

江浜とリナのさらに背後に・・・

あんずがいた。

あんず「・・・　・・・・」

父親同様、拳大の石を握りしめている。

男「ふん・・・」

あんずを睨み付けた男が、口を開いた。

男「性懲りもなく・・・今度は、生け捕りではすまないぞ？」

あんず「・・・　・・・・」

2日前、自分を拉致した男の姿を確認する。不意を突かれたとはいえ、圧倒的な力の前に反撃すら出来ず捕まった相手だ。

あんず「・・・　・・・・」

緊張した表情で男への視線を外さず・・・手に握った石に力が入る。

男「なるほど・・・」

男は、はじいた金属の物体を拾った。それは直径１０ｃｍ程度の円盤状の金属板。ギザギザの金属歯がついている。

男「この私に手裏剣など、笑止千万！」

言うが早いか、男は２枚の金属手裏剣をあんずに投げ返した。反射的に横によけたあんず。

あんず「っく・・・」

左頬と左太ももに手裏剣がかすり、一閃の血がほとばしる。

江浜「あんず！！」

あんず「大丈夫！　かすっただけ！！」

親子は態勢を立て直し、男に向け石を向けた。江浜のそれは、すでに光の剣が現れている。

男「・・・　・・・」

しばらく辺りを見渡した男は

男「肝心な男がいないな・・・」

ぼそっとつぶやいた。そして３人との間合いを詰めてゆく。

男「まぁ・・・　楽しみは後にとっておくか・・・」

手にした日本刀を、肩にぽんと置いた。

リナ「く・・・くる・・・」

男のさらなる日本刀の攻撃を察知したリナ。

男「3人まとめて・・・・　死ねい！！」

手にした日本刀を思いっきり振り下ろそうとした。

江浜「隙あり！」

タイミングを見計らっていた江浜が、刀を振り落とす直前・・・手にした光の剣を投げつけた。

男「こざかしい！！」

男は振り下ろそうとした日本刀を止め、光の剣をはじき返す。

江浜「？！！」

はじき返された光の剣に、江浜は手の平からエネルギーのようなものを送るしぐさをした。するとはじき返されたはずの光の剣は、意志を持ったかごとく反転し・・・

男の太ももを突き刺す。

男「ぬ！？」

物理に反する剣の動きを目の当たりにした直後、江浜の声が聞こえてきた。

江浜「どこを見ている！？」

太ももから正面に視線を移すと、江浜が飛びかかってきている。

その左手には2個目の石が握られ、2本目の光の剣が男を襲おうとしていた。

男「っく！」

反射的に刀で、江浜の光の剣を受け止める。

男「ぬぅ・・・」

男の額から、初めて汗が流れた。江浜は左手1本で、光の剣を押し込み・・・男の太ももに刺さった光の剣を右手で握った。

男「ぐぉ！！」

太ももから剣を引き抜くと・・・

男「っく・・・」

2本の光の剣をクロスして男の日本刀をさらに押し込む。

江浜「・・・　・・・・」

力の限り剣を押し込もうとする江浜だが・・・

男「ふむ・・・現世でお主のような男と出会えるとはな・・・」

江浜の目を見つめながら、男は力で江浜の2本の光の剣を振り払う。

キィン・・・

甲高い音が鳴り響くと・・・2人は間合いを取りつつ、にらみ合った。

江浜は男に意識を集中しつつも、あんずに言葉を送る。

（江浜「リナ君を連れ、この場を去るんだ」）

頬の傷を抑えながらあんずが応えた。

（あんず「でも1人では・・・」）

（江浜「師の命令は絶対だ・・・」）

（あんず「・・・はい・・」）

男「戦場で集中力を欠くと死ぬぞ!!」

突然男が壁際に飛んだかと思うと、三角飛びで江浜に襲ってきた。

二刀流の江浜は、男の日本刀を十字受けするが・・・

江浜「くはぁ！！」

力で差し込まれる。

江浜「・・・　くぅ・・・」

渾身の力を絞り出し・・・日本刀は、江浜の眼前で止まった。

男「よく受け止めた。だが・・・」

男は、力に任せて日本刀を振り下ろそうとする。

江浜「・・・　っく・・・　ぐくっ・・・」

日本刀と、光の剣による力比べが始まった。

・・・　・・・。

あんず「お願い！　お父さんだけなら何とかなるの！
私たちがいると、かえって危険なの！！」

あんずは必死にリナを説得している。

リナ「でも・・・　私たちが加勢しないと・・・」

なかなかその場を動こうとしないリナ。

あんず「お父さんのために!!　お願い!!」

リナ「・・・・　・・・・」

・・・　・・・。

江浜「・・・　・・・」

ブロロロロ・・・

江浜は、背後でバイクが過ぎ去る音を確認する。

男が日本刀越しに声をかけた。

男「女2人は去った。満足か?」

魂胆を見抜いていた男に対し、江浜はニヤリと笑う。

江浜「あぁ・・・。これでお互い・・・」

キィィィン!!

日本刀と光の剣が激しく音を立てた。

江浜「遠慮無く仕合(しあ)えるというもの・・・」

そして2人の男は対峙する。

江浜「・・・　・・・」

大量の出血により、意識が薄れてかけている江浜。

男「ふ・・・　体調が悪いようだ。
　万全の時に、戦いたかったぞ・・・」

大きく刀を振りかぶった男は・・・

男「ふん!!」

江浜「!?」

大きな跳躍の後、日本刀を振り下ろした。

（第２８話に続く）

第27話　霊能バトル（後書き）

次回予告

あんずとリナは、江浜を置き去りにして逃げ去った。慎吾も含め、3人は遠くへと逃げる。途方に暮れるあんずに対し、慎吾は状況を整理した。

そして・・・鳳（おおとり）という名の人物に辿り着く。

次回「第28話　交　渉　」

第２８話　交　渉（前書き）

〜〜〜

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〜〜〜

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。逃走するリナと江浜の前に、謎の大男が立ちはだかり、攻撃してきた。

リナをかばった江浜が重傷をおう。あんずは父親の命令で、リナを連れてその場を逃げ出した。

〜〜〜

第２８話　　交　　渉

第２８話　交　渉

ギキィ・・・

神楽坂教会に、あんずのバイクが到着した。後ろには曇った表情のリナが乗っている。

慎吾「お、お帰りなさい・・・」

出迎えた慎吾が声をかけた。

慎吾「え、江浜さんは・・・？」

リナ「・・・　・・・」

リナは無言で下を向いている。

あんずはヘルメットを取り、慎吾に静かに声をかけた。

あんず「今は・・・　逃げましょう・・・　ここより遠くへ・・・」

・・・　・・・。

２時間後。

３人は箱根大学の近く、とあるビジネスホテルに身を潜めていた。

慎吾「じゃぁ、江浜さんは・・・」

あんず「えぇ・・・　私たちを逃がすために・・・」

リナは無言で部屋の片隅に座り、窓の外を眺めている。

あんず「父もいないし・・・　この後どうしたら・・・」

あんずは涙を浮かべた。

慎吾「・・・　・・・」

徹夜にも関わらず、慎吾は頭をフルに回転させる。

慎吾「整理しましょう・・・」

部屋にあった紙と鉛筆を持ってくると・・・慎吾は拉致された時の事からこれまでの出来事を時系列で整理し、書き始めた。

慎吾「あんずさんが誘拐された時の状況も聞かせてください」

あんず「は、はい・・・」

あんずからの情報も重ねて書き上げる。

慎吾「・・・　・・・」

そして、特に気にすべき人物をピックアップした。

慎吾の拉致を指示した糸見。

慎吾「この糸見さんは、暴力団と関わっている・・・」

あんずを拉致し、江浜の前に立ちはだかった大男。そして、糸見の後ろで糸をひいているであろう霊能力者。

慎吾「おそらく江浜さんが戦った、この大男が・・・
　糸見さんの後ろにいるという霊能力者・・・」

あんず「間違いないと思います。父があれだけ苦戦するなんて・・・」

リナ「・・・　・・・」

2人の会話を聞いているリナだが、視線は窓の外のまま。

あんず「確かその男・・・鳳（おおとり）って名前でした。
　見張りの男が電話してた時、そうよんでたわ・・・」

慎吾は紙の上に

大男＝糸見の後ろで糸をひく霊能力者　↓　鳳

と記した。

（リナ「おおとり・・・？」）

名前を聞いたリナが初めて話に加わる。

リナ「その名前・・・スタジオで倒した男の携帯着信にあった・・・」

慎吾「・・・　・・・・」

リナは一瞬見た数字を、驚異的な記憶力で覚える能力があるのを思い出した。

慎吾「リナ先輩、番号覚えてます!?」

リナ「覚えてる・・・」

しばらくの沈黙の後、慎吾が口を開く。

慎吾「かけてみましょう。鳳という男に・・・」

リナ「・・・　・・・・」

あんず「・・・　・・・・」

さらに沈黙の時が流れた。

日本最高の霊能力者といわれる江浜を・・・あれだけ苦しめた鳳という男。彼にコンタクトを取ることがどれだけ危険か・・・その場にいる全員が認知している。

現状でこの先・・・彼とコンタクトを取る以外、何らかの道が開けるとは思えない。前に進むには、何かのリスクを抱える必要がある・・・。

３人の意見は一致した。

リナ「それしか・・・　ないか・・・」

あんず「でも、かなり危険だと思います。
　何らかの策を講じてからでないと・・・」

慎吾「僕がかけます」

慎吾が毅然と言い放つ。

リナ「・・・　・・・」

慎吾「とりあえず電話をかけてみましょう。
　相手の出方次第で・・・　どうなるかわかりませんが」

そう言うと慎吾は、部屋の電話の方へ歩いて行った。

リナ「ちょっと待って！」

慎吾「　？　」

リナはリュックに入れていたノートパソコンを開いて、操作を始める。

リナ「そんな固定電話使ったら、一瞬でこの場所特定されるから！
　今からＩＰ電話で、鳳の携帯に電話をかける。
ＩＰで携帯に電話出来るってのは、割と最新の技術なの」

慎吾もあんずも、リナが何を言ってるかわからない。

慎吾「あ、あの・・・　ＩＰ電話ってのは？」

パソコンを操作しつつリナは応える。

リナ「パケットデータがネット上を行き来するの。
　メールの電話版だと思えばいいわ」

リナの簡単な説明でも、慎吾とあんずは全く理解できなかった。構わずリナは説明を続ける。

リナ「カナダとオーストラリアのサーバを経由して・・・
　相手の携帯に電話をかける。
　つまり地球を半周以上する距離からかけるって事ね」

慎吾「・・・　・・・」

よくわかってないが、頷く慎吾。

リナ「ＩＰ電話の逆探知は、通話中しか出来ない。
　通信速度を逆算すると・・・
　ジャスト2分以内なら、どんな逆探知もここを特定できないわ」

リナはマイク付きのヘッドセットを慎吾に渡した。

慎吾「つまり・・・　電話が繋がってから、2分以内に切れば・・・

」

あんず「こちらの場所は、相手に特定できない・・・？」

リナ「その通り。絶対2分超えて会話しちゃダメよ。
　また逃げるハメになるんだから・・・」

慎吾「わ、わかりました・・・」

頷きながら、渡されたヘッドセットを装着する。

リナ「あちらの音声は、スピーカーを通してみんな聞けるようにしてある。
　こちらの音声は、このマイクを通してのみ。
　つまり話せるのはあんただけ・・・」

慎吾は頷いた。リナは2分という意味のVサインを慎吾に見せ、再び念を押す。

リナ「いい？　絶対2分以内よ！」

慎吾「わかりました・・・」

IP電話の説明は理解できないが、2分以内に電話を切らなければいけない事だけは肝に銘じた。

リナ「・・・　いくわよ・・・」

倒した男の携帯にあった、【鳳】の着信番号・・・リナはパソコン

のキーボードで入力する。

リナ「・・・　・・・・」

慎吾「・・・　・・・・」

慎吾と目を合わせた後、リナは【Ｅｎｔｅｒ】を押した。

トゥルルル・・・　トゥルルル・・・　トゥルルル・・・

パソコンの画面には、音声に呼応するように波形が映っている。

慎吾「・・・　ハァ・・・　ハァ・・・」

否が応でも緊張する慎吾のノドが、カラカラになっていく。

カチャ

間違いなく電話を取ったであろう音が鳴り響く。

慎吾「もしもし・・・？」

２秒ほどの間（ま）の後・・・　反応があった。

鳳「その声は・・・　慎吾・・・　だな？」

重低音の声が、パソコンを通して3人の耳に入る。

慎吾「な、何故、僕だと!?」

鳳「さぁ?」

（リナ「バカ・・・　こっちの素性を認める必要ないのに・・・」）

以前のバッグ盗難事件の時も、慎吾は警察に対して自分の素性を伝えていた。

（リナ「ある意味、素直すぎるんだけど・・・
こういう状況ではマイナスだわ・・・」）

溜息をついたリナが小さな声で慎吾に声をかける。

リナ「あちらは時間稼ぎをしようとしている。
要点を抑えて喋って!」

慎吾は無言で2度頷いた。

慎吾「え、江浜さんは!?」

鳳「ふ・・・　はっはっは・・・」

男の不適な笑い声が部屋に響く。

鳳「彼は・・・死んだよ」

慎吾「え！？」

その言葉は慎吾とリナの胸を深くえぐった。

しかし慎吾の腕をあんずが強く握って声をかける。

あんず「彼は嘘をついてます。万が一父が死んだ場合・・・
私には、すぐわかります」

慎吾「・・・　・・・」

魂の抜けた表情であんずを見つめ返す慎吾。

あんず「本当です。私を信じて。父は生きています！」

本来、一番取り乱すはずの娘が一番冷静でいる。うろたえる様子は一切ない。

慎吾「・・・　・・・」

リナ「・・・　・・・」

慎吾とリナはあんずの言葉を信じ始めた。深呼吸した慎吾は

慎吾「そんな嘘にはのらない！！」

大きな声で返す。

鳳「ふ・・・さすがだな。お見通しってわけか。はっはっは。

彼はここにいる・・・」

慎吾とリナは胸をなで下ろした。あんずだけは表情を変えずにいる。

鳳「まだ生きているさ。なかなかしぶとい相手でね・・・」

パソコンの時計を見たリナが、慌てて慎吾に声をかける。

リナ「あと３５秒！」

江浜の生存を確認し、安心していた慎吾は再び焦り始めた。

慎吾「江浜さんを返して欲しい！」

鳳「ふふ。ここで【はい、わかりました】と言うとでも？」

リナとあんずは思う。ただ江浜を返せでは相手にとって何のメリットもない。しかし女性陣の予想に反して、慎吾は意外な言葉を口にした。

慎吾「言うさ・・・」

鳳「ほう・・・　何故？　お前自身でも差し出すか？
　それでも答えはＮｏだ。

　お前らを見つけ出すのは造作もない事だからな」

慎吾はマイクを握り、鳳に声をかける。

慎吾「江浜さんと引き替えに、差し出すと言ったら？

徳川埋蔵金を・・・」

鳳「・・・　・・・」

リナの示したリミットまで・・・

残り１０秒を切っていた。

（第２９話へ続く）

第２８話　交　渉（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

徳川埋蔵金をひき替えに、拉致された江浜の身柄を要求した慎吾。
そのためには、銅板に隠された埋蔵金の場所を特定しなければならない。

３人は知恵を振り絞って、銅板の謎に挑む。
そして・・・

次回「第２９話　銅板の謎　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第29話　銅板の謎（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。逃走するリナと江浜の前に、謎の大男が立ちはだかった。

江浜はリナ達を逃す代わり、身代わりに捕まってしまう。リナが記憶していた鳳（おおとり）という人物の電話番号に電話をかけ、コンタクトをとった慎吾。江浜とひき替えに、徳川埋蔵金を差し出すと言った。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２９話　銅板の謎

第２９話　銅板の謎

鳳（おおとり）「・・・・・・」

電話の向こうの声は、沈黙を保っている。

リナ「あと１０秒！」

逆探知されるタイムリミットを、リナが口にした。

慎吾「交渉成立ですね？」

鳳「本気か？」

パソコンの前の３人は、相手がくいついてきた事を確信する。

慎吾「もちろん。４８時間以内に、また連絡します！」

そう言うと慎吾はリナに合図を送る。リナはすぐにＩＰ電話の回線を切断した。

リナ「・・・　ふ～　・・・」

額の汗をぬぐったリナが口を開く。

リナ「ギリギリよ、ギリギリ！　２秒切ってたし・・・
　ヤバかったわ・・・」

3人は安堵のため息をついた。

あんず「でも・・・」

あんずの言いたいことをリナが奪う。

リナ「でもあんた・・・ホントに埋蔵金を差し出すっての!?」

慎吾は2度頷いた。

慎吾「えぇ。相手は執拗なまでに埋蔵金にこだわってます。
江浜さんを助けるには、それしかないと思って・・・」

あんず「・・・・・・」

不安そうなあんずの表情を察した慎吾が声をかける。

慎吾「必ず・・・　必ず江浜さんは助けます!」

あんず「・・・　・・・」

あんずは黙って深く頷いた。

リナ「でも、４８時間以内って・・・　結構すぐよ?
せめて1週間とか、１０日って言えばよかったのに・・・」

慎吾「逆算です」

リナ「逆算?」

慎吾「えぇ。今日は6日の日曜日。
確か【徳川埋蔵金を追え！】の次の収録が、12日の土曜日。
連中はそれまでには埋蔵金を見つけたいと思っているはずです」

あんず「・・・　・・・」

慎吾「発掘後の映像編集を考えると・・・
その2~3日前までに発掘は終えたいでしょう。
仮に埋蔵金の眠る場所を特定したとしても・・・
発掘にはさらに時間がかかりますからね」

リナ「・・・　・・・」

慎吾「だとしたら、8日の火曜日あたりがリミット。
すなわち今から・・・
48時間以内がセーフティラインだと思ったんです」

リナ「ふむ・・・。何も考えてないかと思ったけど・・・
相手の立場も踏まえて、結構考えてるわね。あんた・・・」

慎吾「まぁ・・・推理小説の名探偵なら・・・
こう考えるかなって・・・」

リナ「・・・　・・・・」

あんず「・・・　・・・・」

女性2人は言葉に詰まった。

リナ「ま、まぁ・・・　ひっかかるものはあるけど・・・
　今回は結果オーライね。
　そうとなれば・・・」

リナはパソコンのウィンドウを開き、慎吾とあんずに見せる。

＞i337703―2430＜

リナ「これが例の銅板を写メったヤツ。
　とにかく表の地図上のどこかに・・・
　埋蔵金があるってわけでしょ？」

慎吾「それで間違いないと思います・・・」

慎吾は深く頷いた。

リナ「で、この銅板の裏・・・そう！　これよ、私が見たの！！」

＞i340042―2430＜

リナは銅板の裏の写メもパソコンの画面上に映し出す。

慎吾「おそらく裏の情報を元にして・・・
　表にある地図のどこかを指してるかと思います。
　表の・・・9分割されたうちのどこか1箇所を・・・」

あんず「・・・　・・・」

あんずも、じっとパソコンの画面を見ている。

慎吾「あんずさん・・・何か気づいた事でも?」

眉をひそめるあんずに、慎吾は質問した。

あんず「あ・・・いえ・・・」

リナ「何か気づいた事や、気になる事あるならすぐに言って!
　今は少しでも情報を集めたいところなの。
　あなたのお父さんを救う・・・最後のカギなんだから!」

あんずはちょっと迷った後、口を開く。

あんず「思ったんですが、慎吾さん・・・
　9分割のどこかを指してるって・・・言いましたよね?」

慎吾「うん」

あんず「この表の地図・・・
　縦・横は、実際はどれぐらいの長さなのでしょう？」

慎吾「えっと・・・」

慎吾が迷う間に、リナはネット地図を開いて銅板の地図と照合した。

リナ「地図は・・・　全体で、およそ４ｋｍ四方ね」

あんず「例えばもし・・・
　埋蔵金が９分割のうち、左上の四角の中にあるとした場合・・・
　それでも１．３ｋｍ四方ですよね？」

慎吾「えぇ、そうなります」

リナ「あ！　そうか！！」

リナは慎吾の言う仮説の矛盾に気づく。

慎吾「な、何か？」

リナ「だってさ・・・
　１．３ｋｍ四方のどこかに埋蔵金があるとして・・・
　広すぎるでしょ！？
　どこを掘れば出てくるの？　埋蔵金？」

慎吾「あ・・・　そうか・・・」

慎吾は右手の平を、おでこあてた。リナの言う通り、例え9分割のどこか1つを特定できたとしても・・・

いざ発掘しようとしたらあまりにも広すぎる。

慎吾「振り出しに戻った・・・」

大きな溜息をつく慎吾。

リナ「諦めちゃダメよ。時間はまだある！
この銅板が埋蔵金のありかを示してるなら・・・
その場所を見つけるだけよ！」

慎吾「そうだ・・・　江浜さんの命もかかってる・・・
諦めるわけにはいかない・・・」

それから・・・

3人はパソコンの画面とにらめっこを始める。

・・・　・・・。

鳳への電話を切って、5時間が経過した。

慎吾「・・・　・・・・」

あんず「・・・　・・・・」

リナ「・・・　・・・・」

しかし、3人は全く手がかりをつかめない。

リナ「・・・　・・・・」

リナは銅板の裏の対称的な図形に・・・何かが見えそうで見えない状況だった。

＞i340042―2430＜

リナ「慎吾。あんたの知ってる事、もう1度最初から話してみて」

慎吾「えぇ、まず表の地図の図形は八卦で使われる記号。
この配列は歸藏(きぞう)図と呼ばれています」

＞i337703―2430＜

リナ「この記号が数字に対応してるのよね?」

慎吾「えぇ。特に歸藏図に出てくる数字の配列は・・・
3×3の魔方陣になる事で有名です」

＞i337062430＜

あんず「魔方陣？」

リナ「縦、横、斜め、どの3つの数字を足しても同じになるって事」

あんずは対応した数字を頭の中で足してみる。

あんず「ホントだ・・・」

どのラインの和も15になる事を確認した。

慎吾「表の地図でわかるのは、それぐらいです」

リナ「じゃぁ裏に書かれてる事を・・・もう1度」

慎吾「【宣言】の【宣】は・・・
6代将軍の家宣を表してる可能性があるかなと・・・思いました。

彼は、前代の5代将軍綱吉が作った【生類憐れみの令】という・・・
悪法を真っ先に廃止した事で知られます」

あんず「生類憐れみの令・・・歴史で聞いた事あります」

リナ「私は聞いた事すらないけど・・・」

慎吾「【光明】の【光】は、3代将軍家光を表してるかなと。
彼の祖父は、初代徳川将軍の家康・・・
そして父は2代将軍秀忠。家光は、純粋な将軍の血筋です。
幼名は竹千代で、これは家康・秀忠の幼名とも同じ・・・」

リナ「・・・　・・・」

歴史に興味のないリナは、頭をポリポリとかく。

リナ「ふ～ん・・・　とにかく6と3ね・・・大事なのは」

慎吾「15代将軍の慶喜が埋蔵金を隠したのなら・・・
新将軍は16代将軍の事。
新将軍ノ元というなら・・・16にちなんだどこか・・・
かなと」

あんず「でも、銅板の表には1から9までの対応しかない・・・」

リナ「6と3と・・・16か・・・」

しばし3人に沈黙の時が流れる。

リナ「表には地図と魔方陣・・・　裏には対称図形と文字。
そして6，3，16・・・

何か見えそうなんだけど・・・」

あんず「あの・・・」

何かに気づいたような声をあげたあんず。

あんず「あの・・・今まで図形と文字を別べつに考えてましたが・・・

ひょっとして、同時に考えるのではないでしょうか？」

慎吾「と、言うと？」

あんず「はい。この【宣】の横に、図形の点がありますよね。

この点は６代将軍の６を表しているんじゃないかなと・・・

だから【光】の横の点は・・・

３代将軍の３を表していると思ったのですが・・・」

慎吾「文字の横の点がその数字に対応してる・・・って事ですね？」

あんず「えぇ・・・」

＞ｉ３４８１８―２４３０＜

慎吾「そうか・・・だとしたら残り６点にも・・・数字が？」

リナ「8個の点に8個の数字・・・右上が6で右下が3・・・」

リナの脳に、あらゆる数字のパターンが入ってくる。

慎吾「残り6つの点に・・・　何かの数字が・・・？
　　でも16は・・・？」

パニック気味になりつつある慎吾。

リナ「あと1つ・・・あと1つ何かあれば・・・
　全て見えそうなのに・・・」

慎吾「3人よれば文殊（もんじゅ）の知恵！
　もう少しです。頑張りましょう！」

3人はさらに知恵を振り絞った。

・・・・・・。

・・・・・・。

ふと慎吾は目を覚ました。

慎吾「あ、あれ？　僕、寝てた・・・？」

ベッドの横の床下。慎吾は体を起こし、部屋の時計を確認する。

慎吾「え!?　8時!?　いつの間にか・・・
　1時間寝てしまったんだ・・・」

リナ「バカね・・・」

ふとリナの声が聞こえた。ベッドの上にリナとあんずがいる。あんずはスヤスヤと寝ていた。

リナ「あんたさぁ・・・　13時間寝てたのよ。
　まぁ徹夜であれだけ動き回ったんだから、仕方ないかもね」

あんずの横で座りながら、リナはパソコンをじっと見つめている。

慎吾「え!?　じゃ、じゃぁ今は月曜日の午前8時!?」

リナ「そうよ・・・」

慎吾「ヤバい！　13時間も無駄にするなんて!!!
　早く埋蔵金のありかを特定しないと!!!」

リナは慎吾に視線を移し、小さくほほえんだ。

リナ「わかったわよ」

慎吾「え?」

リナ「だから埋蔵金がある場所・・・
　この銅板が、どこを示したいのか・・・
　わかったってば」

慎吾「えぇぇ!?　本当に!?」

裏返った声をあげる慎吾。

リナ「私を誰だと思ってるの?」

そう言うと、リナは慎吾にパソコンに移っている銅板の地図を見せた。

＞i337032430＜

リナ「いい?　徳川埋蔵金が眠っている場所は・・・
　間違いなくココよ!」

リナは地図上の1点を人差し指でさした。

（第30話へ続く）

第２９話　銅板の謎（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

銅板の謎を解こうと頑張っていた慎吾とあんずは・・・いつの間にか眠りに落ちていた。リナは１人で銅板の謎の解読に挑むが、あと１つ何かが足りない。

ふとこの日１日の出来事を思い浮かべてみた・・・その時！

リナの脳裏に最後のカギが浮かんだ。

次回　「　第３０話　解　読　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第30話　解　読（前書き）

〰〰〰

慎吾のスピリチュアル事件簿　First　season

「徳川埋蔵金の謎」

〰〰〰

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。逃走するリナと江浜の前に、謎の大男が立ちはだかった。

江浜はリナ達を逃す代わり、身代わりに捕まってしまう。リナが記憶していた鳳（おおとり）という人物の電話番号に電話をかけ、コンタクトをとった慎吾。江浜とひき替えに、徳川埋蔵金を差し出すと言った。

埋蔵金のありかを示したという銅板の謎に挑むのだが・・・？

第30話　解　読

第３０話　解　読

５月７日月曜日、午前４時。箱根大学近く、とあるビジネスホテルの一室。

リナ「・・・　・・・」

ベッドの上であぐらをかいているリナは、パソコンの画面とにらめっこしていた。

リナの横には、あんずがスースーと寝息をたてて寝ている。
そしてベッドの下では、慎吾も深い眠りについていた。

（リナ「まぁ、２人とも・・・長い間、監禁されていたからね・・・」）

赤い眼鏡の奥、優しい目で２人を見つめる。視線をパソコンの画面に移すと、また真剣な表情を浮かべた。

＞ｉ３３７０３―２４３０＜

＞ｉ３４０４２―２４３０＜

リナ「・・・　・・・」

リナ自身、どうしてもこの銅板の謎を解き明かす必要を感じている。

この日リナは・・・朝、ＴＶ局から慎吾と江浜を監禁場所から救いだし、昼過ぎにはあんずをも助けた。なのに、ずっと逃げ回るだけの自分が嫌で・・・あの大男に立ち向かおうとした。

（リナ「・・・　あんなの・・・　ありえない・・・・」）

しかしその男は圧倒的な戦闘能力を有（ゆう）していて、これまでリナが撃退した連中とは全く異質な存在だった。

そして江浜はリナをかばって大けがを負う。

（リナ「・・・　私の・・・　せい・・・・」）

今は鳳（おおとり）という人物に拉致されている。

慎吾、リナ、あんず、江浜・・・年齢だけでなく、精神面やその特殊能力の高さから考えても間違いなく江浜は頼れる存在だ。

しかし今は・・・

未成年の３人で対処しなければならない。

あの時、江浜の言う通り逃げる事だけに集中していれば・・・４人ともここまで追い込まれる事はなかったのかもしれない。

強い責任感を感じているリナ。

（リナ「何とか・・・　銅板の謎を解き明かしたい・・・」）

それが江浜を救い出す事につながると信じて・・・

リナ「・・・　・・・」

なのに・・・

銅板の表と裏を何度見ても糸口が見つからない。

長時間パソコンの画面を見つめていたリナの目は、疲労でかすみ始める。

リナ「ふ～・・・」

大きなため息をついたリナは、トレードマークの赤いメガネをとってベッドの上に横になった。横を見ると、かわいらしい寝顔のあんずがいる。ふとリナの目から、意識とは裏腹に涙がこぼれた。

（リナ「あれ・・・？」）

何故、涙がこぼれたのかわからない。

リナ「・・・　・・・」

右手で涙を拭う。

（リナ「私も・・・　疲れてるかな・・・？」）

目を閉じて大きく深呼吸した。

（リナ「このまま眠ったら・・・　気持ちいいだろうな～・・・」）

目を開くと、天井を見つめ・・・1日を振り返る。

ＴＶＳの第5スタジオに監禁されている慎吾を見事に救出した。

（リナ「スタンガン・・・　使ったの、何年ぶりかしら・・・」）

スタンガンで2人の男を倒し、敵と思っていた江浜と合流する。

そして江浜の娘・あんずをも救出した。

（リナ「まさかトイレの窓に鉄格子があるとはね・・・」）

慎吾の立てた作戦では・・・すんなりトイレの窓から脱出するはずだったが・・・

（リナ「あれは、マジヤバだったわ・・・」）

その時のピンチを振り返る。

リナ「・・・　あれ・・・？」

その時、リナの脳裏に何かがひっかかった。

リナ「・・・　・・・」

今一度、トイレの状況を思い出す。

リナ「・・・　鉄・・・格子・・・？」

ふと視線の先、ベッドの上の天井を注意深く見つめた。天井は縦と横に線が入った、素っ気ないデザインである。

リナ「・・・　・・・」

そのまま1分弱天井を見つめた後、リナは赤いメガネを再びかける。そしてパソコンの画面を見つめながら、画像編集ソフトを立ち上げた。

（リナ「そうか・・今まで表と裏を別々に見てたから・・・
重ねてみれば・・・」）

素早いキータッチで、写メった銅板の表と裏の画像を重ねる。

（リナ「やっぱり・・・」）

表の縦線と横線の交わる点。そして裏に書かれた8つの点。これらはぴったりと重なった。
点をはっきりと強調させるため、ペイントソフトで加工する。

＞i34820―2430＜

（リナ「・・・　見えてきた・・・」）

この新発見は、リナの眠気を吹き飛ばした。表と裏の情報は、別々の情報ではない。

（リナ「同時に考えなきゃいけなかったんだ・・・」）

銅板の表には・・・正方形が９個あるが、大事なのはそこではない。

（リナ「埋蔵金のありかを示しているのは・・・正方形じゃない！
　点が示してるんだわ！

　これならあんずちゃんの言ってた疑問も・・・
問題無し！　後は・・・」）

あんずは言っていた。仮に正方形の１つが、埋蔵金のありかを示していたとしても・・・その正方形のどこに埋蔵金があるのかはわからない。

しかし正方形ではなく、点が埋蔵金のありかを示しているなら・・・ピンポイントで埋蔵金の場所を特定できる。

点は・・・全部で１６個。

（リナ「慎吾の仮説によれば右上の点が【６】・・・
　右下の点は【３】を表している・・・」）

＞ｉ３４８２１―２４３０＜

（リナ「ならば１６個の点は、１から１６の数字が対応するはず・・・」）

雑然としていた情報が、リナの脳裏で1つ1つ有効な情報へと結びつけられる。

（リナ「えっと・・・徳川家って15代将軍までよね。
16個の点に、1から15まで対応させる事が出来れば・・・

必然的に、残った1点が16・・・そこが埋蔵金のある場所ね!!」）

さらに図形を見ると、【3】の点から【6】の点の間に2つの点がある。そこで、その間の2点に【4】と【5】を対応させてみた。

さらに線で結ばれている点を一筆書きを描く要領で【1】から【8】まで対応させてみる。

＞i3518４―2430＜

（リナ「1から8までの対応点はわかった・・・
あとは、9から15・・・。

この対応さえわかれば・・・
埋蔵金のありかがわかる!!」）

対称図形の謎は解けた。何てことはない、表の正方形の頂点を結ぶ図形だった。各点には数字が対応してる事までつきとめた。

残ったのは数字の謎だけ。

（リナ「ここは私の専門分野・・・
ランダムだと８の階乗で４万３２０通り・・・
絶対・・・　何かこの数字の配列に法則があるはず・・・」）

もう少しで全ての謎が解けると確信したリナはじっとパソコンの画面を見つめる。

・・・　・・・

時計が午前７時を示した頃・・・

（リナ「歸藏（きぞう）図は魔方陣・・・・」）

慎吾が言ってた情報が、頭の中をかけめぐる。

（リナ「・・・　待ってよ・・・　そうか・・・
そうか！！！」）

何かに気づいた。

（リナ「魔方陣だ・・・　しかもただの魔方陣じゃない・・・
この魔方陣は・・・・」）

リナの頭脳が高速で数値の計算を始める。

リナ「・・・　・・・・」

そして、とうとう・・・

（リナ「見えた！！！」）

答にたどり着いた。

大きなため息と共に・・・　達成感からか笑顔がこぼれる。

リナ「これで・・・　江浜さんを助けられる・・・」

リナは横で眠っているあんずの笑顔を、優しい目で見つめた。

・・・　・・・。

ふと慎吾は目を覚ました。

慎吾「あ、あれ？　僕、寝てた・・・？」

ベッドの横の床下。慎吾は体を起こし、部屋の時計を確認する。

慎吾「え！？　8時！？　いつの間にか・・・
　1時間寝てしまったんだ・・・」

リナ「バカね・・・」

ふとリナの声が聞こえた。ベッドの上にリナとあんずがいる。あんずはスヤスヤと寝ていた。

リナ「あんたさぁ・・・　１３時間寝てたのよ。
　まぁ徹夜であれだけ動き回ったんだから、仕方ないかもね」

あんずの横で座りながら、リナはパソコンをじっと見つめている。

慎吾「え!?　じゃ、じゃぁ今は月曜日の午前８時!?」

リナ「そうよ・・・」

慎吾「ヤバい！　１３時間も無駄にするなんて!!
　早く埋蔵金のありかを特定しないと!!!!」

リナは慎吾に視線を移し、小さくほほえんだ。

リナ「わかったわよ」

慎吾「え?」

リナ「だから埋蔵金がある場所・・・
　この銅板が、どこを示したいのか・・・

　わかったってば」

慎吾「えぇぇ!?　本当に!?」

裏返った声をあげる慎吾。

リナ「私を誰だと思ってるの?」

そう言うと、リナは慎吾にパソコンに移っている銅板の地図を見せた。

＞ｉ３３７０３―２４３０＜

リナ「いい？　徳川埋蔵金が眠っている場所は・・・
　間違いなくココよ！」

リナは地図上の１点を人差し指でさした。

（第３１話へ続く）

第３０話　解　読（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

銅板の表と裏を同時に見た時・・・
そこには、３×３ではなく４×４の魔方陣が浮かび上がった。
そしてとうとう銅板に書かれた地図の１点、埋蔵金が眠っているであろう場所を・・・

リナは突きとめた！

次回　「第３１話　完全魔方陣　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３１話　完全魔方陣（前書き）

〜〜

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〜〜

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。逃走するリナと江浜の前に、謎の大男が立ちはだかった。

江浜はリナ達を逃す代わり、身代わりに捕まってしまう。敵とコンタクトをとった慎吾は、江浜とひき替えに徳川埋蔵金を差し出すと言った。

埋蔵金のありかを示したという銅板の謎に挑む３人。とうとうリナが・・・

第３１話　完全魔方陣

第３１話　完全魔方陣

＞ｉ３３７０３―２４３０＜

リナ「いい？　この銅板の表は３×３で見るんじゃなくて、４×４で見るの」

慎吾「４かける４？」

あんず「３かける３しか見えないのですが・・・」

５月７日月曜日、午前９時過ぎ。

目を覚ました慎吾とあんずに、リナは埋蔵金が眠っているであろう場所の説明をしていた。

リナ「表に書かれた縦線と横線。

この交わる点を【格子点】（こうしてん）と言うの。

この格子点だけ注目したら、実は４×４になってるのよね」

慎吾とあんずは改めて銅板の表を見る。

＞ｉ３３７０３―２４３０＜

慎吾「確かに・・・」

あんず「ほんとだ・・・」

リナはパソコンの画面で、銅板の表の地図と裏の図形を重ねて見せた。

リナ「ほら、表の格子点と裏の図形の点が重なるでしょ」

＞ｉ３４８２０―２４３０＜

慎吾とあんずは、目を丸くして首を縦にふった。

リナ「だから、この１６個の点のどこかに埋蔵金があるとよんだわけよ。

そうすればあんずちゃんの言ってた・・・

９分割の正方形の１つだと、広すぎて特定できないってのも・・・

解決するでしょ？」

あんず「確かに・・・１点なら、ほぼ正確に特定できます」

慎吾「で、では・・・埋蔵金のある１点ってのは！？」

リナ「落ち着いて、ちゃんと説明するから」

そういうとリナは、パソコンの画面に銅板の裏の写メを大きく映し出した。

＞ｉ３４０４２―２４３０＜

リナ「まず一番右上の点。これはあんずちゃんが言ってたように・・・

・

隣に【宣】、すなわち6代将軍を表す言葉があるから【6】を表す。

そして右下の点は隣に【光】、つまり3代将軍の表す言葉があるから【3】」

＞ｉ３４８１８―２４３０＜

リナは1点1点を指さし、丁寧に解説する。

リナ「3から6へ行く間に2つの点があるので・・・

これらを順に【4】【5】とする。

そうすれば、残った点にも全て【1】から【8】と対応させる事ができる」

慎吾「・・・　・・・」

数字の苦手な慎吾は、少しずつ話についていけなくなる。リナは銅板の表と裏を重ねたものを2人に見せた。

リナ「数字や線は、見やすいように色をつけてあるわ」

＞i351184－2430＜

リナ「ならば残りの8点・・・【9】から【16】で対応するはず」

あんず「じゃぁ、【16】の対応する点に埋蔵金が？」

リナ「その通り！」

リナは笑顔で返す。

慎吾「で・・・では・・・その【16】の表す点は！？」

リナは人差し指を慎吾の前に差し出した。

リナ「この表の歸藏(きぞう)図が魔方陣表すって・・・
あんた、言ってたわよね？」

慎吾「はい」

リナ「そして宝を隠すのに魔方陣が使われるってのも・・・
珍しくないと言ったわよね？」

慎吾「言いました」

リナ「だから１６個の点は、４×４の魔方陣を表すとよんだのよ。
８個も数字があるから、すぐに残りは計算できたわ」

そう言うとリナは、地図の格子点に【１】から【１６】まで対応させた画像ファイルを見せた。

＞ｉ３５２３６―２４３０＜

リナ「ほら、数字だけ見て」

１２　７　９　６
１　１４　４　１５
８　１１　５　１０
１３　２　１６　３

リナ「縦、横、斜め、４つの数字の和は全て３４になるでしょ？」

あんず「ホントだ」

慎吾は暗算が苦手なので、とりあえず無言で頷く。

リナ「しかもこの魔方陣。
普通の魔方陣と違って変則的な斜めの和も３４になるの。
７＋１＋１０＋１６とか、７＋４＋１０＋１３とかね」

あんずは数字に強いようで、すぐに暗算を始めた。

あんず「角の４つとか、中央の４つとか・・・
　　たくさん３４になる組合せがありますね」

リナ「えぇ。この魔方陣は特に・・・完全魔方陣と呼ばれるもの」

慎吾「な、何かわからないですけど・・・
　とにかく、この【１６】の位置に・・・」

リナは赤いメガネを軽くかけ直し、自信満々で言い放つ。

リナ「えぇ・・・　ここに埋蔵金があるわ！」

＞ｉ３５２３６―２４３０＜

３人は地図上の１点・・・【１６】の対応する点を見つめた。

慎吾「でも・・・」

ふと慎吾が口を開く。

慎吾「この１点・・・民家のようですが・・・？」

リナの自信に揺らぎはなかった。

リナ「例え民家だろうと、この銅板がさしてるのはここで間違いない。

色んな可能性を考慮し、パターンを論理的に解析したけど・・・

ここ以外考えられない！」

慎吾もあんずも、リナの自信に感化される。

慎吾「わかりました。銅板の謎は解けたわけですね」

あんず「・・・。またあの鳳（おおとり）という人に・・・電話を？」

リナは首を横にふる。

リナ「まずは私たちで確認しないと」

慎吾「そうですね・・・　すぐ行きましょう。

あ、でもリナ先輩徹夜でしょ？」

リナは再度首を横にふった。

リナ「全然眠くない。今すぐ出ましょう！」

あんずの肩に手を置いたリナが力強く声をかける。

リナ「必ずお父さんは助けるわよ！」

あんず「は・・・　はい・・・」

リナの真剣な眼差しに、あんずは涙目で深く頷いた。

3人はすぐに支度をして、ホテルをチェックアウトした。

そして・・・　赤城山に向けて出発した。

（第32話へ続く）

第３１話　完全魔方陣（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

銅板の示す１点に向かって３人は出発。

銅板のさす１点、半径１００ｍ以内の地点までたどりつくが・・・

ふと慎吾は何かに導かれるように【とある場所】に向かって歩いて行く。

そしてたどり着いた先には・・・

次回　「　第３２話　　行くべき場所　　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３２話　行くべき場所（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。

逃走するリナと江浜の前に、謎の大男が立ちはだかった。江浜はリナ達を逃す代わり、身代わりに捕まってしまう。

敵とコンタクトをとった慎吾は、江浜とひき替えに徳川埋蔵金を差し出すと言った。

リナは埋蔵金のありかを示したという銅板の謎を解き明かす。３人

は銅板の示す場所へ向かった。

第32話　行くべき場所

第３２話　行くべき場所

５月７日。午後４時・・・

３人は上野駅から東武線に乗り換え、赤城駅に降り立つ。

ベンチに座ったリナは、パソコンの画面を見ながら慎吾とあんずに言った。

リナ「ここから近いわよ、埋蔵金がある場所。
　３５３号線を東に行けばすぐ着く」

慎吾は駅にある周辺地図を見ながら、行き方を模索する。

慎吾「えっと・・・」

リナ「時間が気になる。タクシーで行きましょう」

慎吾「そうですね。タイムリミットを考えると・・・
　稼げる時間は稼いでいた方がいいですし」

あんずに気を遣って、リナと慎吾は目的地まで最速で行く方法をとった。あんずは黙って２人についていく。

この時江浜が鳳（おおとり）に拉致されて２４時間が経過。人質と埋蔵金を交換するという２度目の交渉まで、セーフティラインは４８時間と設定した慎吾。

（慎吾「あと２４時間以内に・・・埋蔵金をみつけないと・・・・」）

数１０分後。

３人はタクシーを降りる。見渡すと木々が生いしげる雑木林の区画と、綺麗に刈り入れられた整地とがあり、民家がまばらに見えた。

リナ「えっと・・・あっちの方角ね」

ある方向を指さす。

リナ「ここから北に１５分ほど歩けば、目的地周辺だわ」

慎吾「・・・　行きましょう・・・」

一行は目的地に向かって歩いて行った。

ふと一番後ろを歩いていたあんずが、リュックの中から例の拳大（こぶしだい）の石を取り出した。

それに気づいたリナが声をかける。

リナ「あんずちゃん・・・　何か悪いものがいるの？」

あんずは首を横にふった。

あんず「ここらへんには、たくさんの霊がいます。
　けして悪い霊ではないのですが・・・

万が一何かあった時、すぐに対応できるようにと思って」

あんずは右手の石を握りしめる。

慎吾「・・・　・・・」

それを見た慎吾は、江浜にもらった石をポケットから取り出した。
そしてあんずに石を見せる。

慎吾「これ、君のお父さんからもらったんだけど・・・
何故、僕に渡したんだろう？」

あんず「これはパワーストーンです。
霊力を持った人間は、この石を媒介して・・・
そのエネルギーを具現化する事が出来るんです」

慎吾は首を横にかしげる。

リナ「あー・・・私、見た。あんずちゃんのお父さんが・・・
その石から、光の剣のようなもの出しているのを・・・」

あんず「強い霊力を持ってる人間は・・・」

あんずは目の前の高さで石を握って見せた。

慎吾「　？　」

あんず「パワーストーンに意識を集中させるだけで・・・
武器や防具を作り出せるんです・・・

？！！！」

かけ声と共に・・・あんずのパワーストーンから左右に光の棒が伸びた。

慎吾「わ！？」

リナ「・・・　・・・」

長さ５０ｃｍ程度の光の棒を軽く振り回すあんず。

あんず「・・・　・・・」

意識を落ち着けると、その光は消えた。

慎吾「す・・・　すごい・・・」

リナ「お父さんはもっとすごかったわよ・・・」

慎吾「え、江浜さん・・・もっとすごい武器を？」

あんず「私の師匠ですから・・・」

寂しそうに笑うあんず。

リナ「し、しかし・・・　う～ん・・・　理解しがたい・・・
いったい、どういう理屈なんだろう・・・？

エネルギーをどこから持ってきてるのかしら・・・？」

あんず「この自然界、果ては宇宙にまで・・・
エネルギーで満ちあふれています。それを利用しているだけです」

リナ「そうは言っても・・・　わっからないな～」

あんず「父が言うには・・・
量子力学を学べば、霊魂や霊力の正体にも近づけるって・・・」

リナ「へ～・・・霊だの霊魂だのって話も、現代科学で説明できるの？」

（慎吾「りょうし・・・りきがく？」）

あんず「らしいです。だから私・・・
今、大学の物理を専攻して基本的な勉強を・・・」

リナ「え！？」

慎吾「え！？」

リナと慎吾は同時に驚きの声をあげた。

リナ「あ、あんずちゃんって・・・大学生だったの！？」

２人の驚く表情に対して驚くあんず。

あんず「え？　えぇ・・・そうです。今年からですが・・・」

慎吾「と、飛び級ってヤツですか？」

あんずは首を横にふる。

あんず「いえ・・・普通にです・・・けど？」

リナ「じゃ、じゃあ・・・あんずちゃんって年、いくつなの！？」

目を丸くしたあんずは応える。

あんず「え？　じゅ、１８です・・・？」

慎吾「えーー！！」

リナ「えーーー！！」

またしても驚く２人。

慎吾「最初は中学生かなと。でもバイク乗ってたから高校生かと・・・」

リナ「私も・・・絶対３つは年下だと思ってた・・・」

あんずはニコッと笑った。

あんず「よく言われます。

私、背も低いし・・・よく中学生に間違えられるんです」

慎吾「まさか僕と同級生とは・・・」

リナ「まさか私の1個下とは・・・」

今まで【年上目線】で語っていた慎吾、そして【かなり年上目線】で語っていたリナ。2人とも、後頭部をポリポリとかいた。

あんず「・・・　っぷ・・・」

その2人のシンクロした様子を見て、あんずが小さく笑う。

リナ「そっかぁ・・・私は19歳だから、あんずちゃんの1個上。
改めてよろしくね」

リナは右手を差し出した。握手に応えたあんずは笑顔を見せる。

あんず「えぇ、リナ先輩。よろしくです」

リナ「ちょっと、先輩はヤメて。そう呼ぶのは1人で十分だからさ」

あんず「じゃぁ、リナさん」

笑顔で応えるあんずの表情の美しさに、再び後頭部をかくリナ。

リナ「こんなに可愛い笑顔で言われたら・・・まいっちゃうわね」

2人の女性の後ろを歩く慎吾。

（慎吾「こんな可愛い・・・同い年の女の子・・・
どう接すればいいんだろう・・・？」）

パワーストーンを握りながら、勝手に一人で悩んでいた。

（慎吾「あ、後でこの石の使い方を聞こう・・・かな・・・？」）

あんず「よろしく。慎吾さん・・・」

笑顔のあんずが、慎吾に握手を求める。

慎吾「え？　あ・・・　よ、よろしく・・・　あんずさん・・・」

白い右手を握る慎吾。

あんず「そんな・・・さんづけなんて・・・　あんずでよろしいです・・・」

慎吾「は、はい・・・　あんずさん・・・」

そんな慎吾を見て、あんずは三度（みたび）小さく笑った。

・・・　・・・。

しばらく歩いていると、先頭のリナが立ち止まる。そして３６０度あたりをぐるっと見回した。

リナ「着いたわ・・・　ここよ」

あんずも慎吾も周りを見渡す。雑木林と畑、そしてまばらに民家が見える平地に３人は立っている。

リナ「へ～、山周辺なのに携帯の電波も通ってるんだ」

携帯を見ながら、電波が通っている事を確認する。

慎吾「ここの近くに・・・　埋蔵金が・・・？」

リナ「銅板の格子点の大きさから言えば・・・
今いる所の半径１００ｍ以内に埋蔵金がある・・・
って事になるんだけど・・・？」

３人とも辺りを見渡し、埋蔵金のありそうな場所を探そうとする。

慎吾「・・・　・・・」

ふと慎吾が雑木林の向こうに視線を移した。

リナ「・・・？」

リナが見る限り、視線の先に何かがある様子はない。しかし慎吾は、そこに向かって歩き出した。

慎吾「・・・　・・・」

リナ「ちょっと・・・」

慎吾の肩に手をかけるリナ。

リナ「ちょっとあんた、どこ行くつもり!?」

慎吾は振り返って自信に満ちた笑顔を見せた。

慎吾「行くべき場所です」

リナ「・・・　・・・」

あまりにも自信満々で言ってのけたので、リナの方が面食らう。

リナ「・・・　・・・」

リナはあんずの方を見やる。

あんず「慎吾さんの後に・・・　付いていきましょう」

・・・　・・・。

何故かはわからないが、慎吾には自信があった。

（慎吾「今、僕達が行くべき所は・・・　この方向だ・・・」）

５０ｍほど歩いて林を抜けるとまた平地に出る。さらに３０ｍほど歩くと、倉庫というか民家の物置小屋のような建物がポツンと１つ建っていた。

慎吾「・・・　・・・」

入り口の前で慎吾は立ち止まり、その建物を見る。その後ろに続くリナとあんず。

リナ「ま、まさか・・・　ここなの!?　ここに埋蔵金があるの!?」

慎吾は首を横にふった。

リナ「そ、そうよね。こんな誰にでも・・・
　簡単に行けそうな場所に、あるわけないわよね・・・」

リナに対し、慎吾が笑顔を見せる。

慎吾「でもここは・・・多分入り口です・・・」

リナ「え!?　入り口?」

慎吾は無言で頷いた。

リナ「埋蔵金に通じる入り口って事!?　なんでわかんのよ?」

慎吾「えー・・・あー、何となく?」

リナ「は~!?　そんな【何となく】が根拠!?　ありえない!!」

あんずが割って入る。

あんず「リナさん。とりあえず確かめてみましょう。

ダメならまた次探せばいいですし・・・」

リナは小さなため息をついた。

リナ「ま、まぁ・・・
確かめるぐらいならいいけど、どうせ何も・・・」

ギィィイーーー・・・

突然、建物の扉が・・・

ガタン！

内側から開いた。

（第３３話へ続く）

第３２話　行くべき場所（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

３人は建物の中に入っていく。
その地下からは、鍾乳洞に通じる道があった。

そして歩いて行った先で・・・

慎吾達は・・・？

次回「第３３話　鍾乳洞　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３３話　鍾乳洞（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。江浜はリナ達を逃がすため、身代わりに捕まってしまう。

敵とコンタクトをとった慎吾は、江浜とひき替えに徳川埋蔵金を差し出すと交渉。リナは埋蔵金のありかを示した銅板の謎を解き明かし、３人は銅板の示す場所へ向かった。

慎吾は何かに導かれるように・・・とある建物の前まで来た。

第３３話　鍾乳洞

第３３話　鍾乳洞

開いた扉から・・・

男が２人出てきた。

いや・・・　２人の武士らしき男が出てきた。そういう方が正しい。

小さめの茶褐色の鎧をつけ、腰には日本刀を収めているであろう長めの鞘（さや）が見える。

兜は着けていないので、慎吾・リナ・あんずはその端正な顔立ちを確認出来た。

まるで戦国時代からやってきたような出で立ちの男が２人・・・

リナ「・・・　・・・」

リナはあからさまに変な物を見る目で、男２人に視線を向ける。

そして慎吾に、小さな声で語りかけた。

リナ「こいつら・・・　何？　コスプレ男２人・・・。
　　秋葉原でもないのに、イケてると思ってるのかしら・・・？」

慎吾は驚いた表情をリナに見せる。

慎吾「彼らは・・・　ここを守ってる人達ですよ」

リナ「は？　意味わかんないんだけど・・・」

リナの後ろにいたあんずが声をかけた。

あんず「ここは・・・　慎吾さんに任せましょう」

慎吾は武士2人の前に立ち、彼らをじっと見つめる。

慎吾「・・・　・・・」

2人の男は数秒ほど慎吾と目を合わせた後、片手を屋内の方に拡げて「どうぞ」と言うしぐさをした。慎吾は、リナとあんずの方を向き言葉をかける。

慎吾「入っていいみたいです。奥へ行きましょう」

そう言うと慎吾は、真っ先に中へ入っていった。リナとあんずは続いて入っていく。3人が屋内に入ったのを確認した男2人は・・・

ギィイイ・・・　ガタン！

無言のまま、内側から扉を閉めた。

リナ「ちょ、ちょっと・・・　閉じ込める気！？」

慎吾はリナの方を振り返って、笑顔を見せる。

慎吾「大丈夫ですよ」

リナ「で、でも・・・」

眉をひそめるリナ。

リナ「・・・　・・・・」

背を向け、先頭を歩く慎吾を見て・・・

（リナ「いつものあいつじゃ・・・　ないみたい・・・・」）

違和感を感じた。怪訝な表情を浮かべ、あんずに小さな声で話しかける。

リナ「ねぇ・・・　あいつ・・・

何つーか・・・いつもと違う感じなんだけどさ。

あんずちゃんから見ても、何か変だな～とか感じない？」

あんずも笑顔で応えた。

あんず「慎吾さんは・・・わかってるんですよ」

リナ「わかってる？」

あんず「えぇ。ここは慎吾さんに任せて大丈夫だと思います。

もうすぐ私達にも・・・　それをわかる時がくると思います」

リナ「それ・・・？」

あんずもまた、何かをわかってるような口ぶりだった。

（リナ「どれ・・・？」）

何がどういう状況なのかを把握できないリナ。ただ、慎吾とあんずの何かを確信しいる事だけは感じる。

（リナ「ま・・・　信じて、ついていくだけか・・・」）

ひっかかるものを感じながら、リナは慎吾の後ろを歩いて行った。

・・・　・・・。

薄暗い建物の中・・・中に入ると意外と奥行きがある。数１０ｍ歩くと、慎吾の目の前に地下へと続く階段があった。

慎吾「・・・　・・・」

トン　トン　トン・・・

迷わず階段を下りていく。

リナ「ちょ・・・」

一瞬ためらったリナも慎吾の後を続き、最後尾をあんずが続いた。

階段を下りていくと・・・

慎吾「・・・　・・・」

全長３ｍの真っ赤な鳥居が壁にくっつくように現れる。そして鳥居の入り口には・・・さらに扉があった。

慎吾「ここ・・・」

リナ「なんで、地下に鳥居があんの？　てか、また扉があるし・・・」

慎吾「この扉の先・・・　その奥に・・・」

リナ「え!?　埋蔵金があるとか!?」

慎吾はリナを無視して、ゆっくりと扉に向かい・・・扉に手を当てた。

リナ「ちょ・・・　何、する気・・・？」

見た所、頑丈そうな扉だ。

慎吾「・・・　・・・」

押してもびくともしない。

リナ「いや・・・　どう見ても無理っしょ・・・
　簡単に開くようには見えな・・・　」

あんず「リナさん・・・」

リナの言葉をあんずが止める。

あんず「慎吾さんに任せて・・・」

さっきから同じセリフを言っているあんず。リナはあんずの方を振り返った。

リナ「あんずちゃん。あなたも何か・・・
　　知ってるみたいだけど？」

あんずは笑って応える。

あんず「いえ・・・よくはわかりませんが・・・
　　慎吾さんの行動が正しい・・・という事はわかります」

リナ「・・・　・・・」

リナには今、何が起こってるかわからない。ただ慎吾とあんずが、何らかの確信めいたものを持っている事だけは伝わった。

ならばと、武士の格好をした男2人に話を聞こうと思うリナ。

リナ「ねぇ、武士のコスプレさん・・・　あ、あれ？」

鳥居に着く前は、確かにいた。なのに今、リナの視線の先には誰もいない。地下の狭い空間を見渡しても、ついさっきまでいた武士2人は見あたらない。

あんず「役目を終えたので・・・消えたんですよ」

ますます混乱するリナは、眉間にしわをよせる。

リナ「あの・・・　もうちょっとわかるように言ってくれる？」

あんずはニコッと笑った。

あんず「彼らはここを守護している霊なんです。
　リナさんにも見えてたから、私も慎吾さんもちょっと驚きました。

　よっぽど強い霊って事ですね」

リナ「・・・　・・・」

あんずはわかりやすく説明したつもりだったが・・・リナの混乱は絶頂を極めた。しばらく頭を抱えたリナは小さなため息をついて声を出す。

リナ「ま・・・　埋蔵金さえ見つかればなんでもいいわ・・・」

瞬間、リナとあんずは冷気を感じた。

リナ「さむ！　な、何？」

冷気の出所を探ると・・・　鳥居の扉、その小さな隙間からだった。

慎吾「・・・　・・・」

深呼吸した後、慎吾は両手で力を入れて再び扉を押す。

慎吾「・・・　・・・」

すると音も立てず・・・

リナ「ひ・・　開いた！」

扉が開いた。全く音を立てずに、ゆっくりと扉は開いていく。

開いた扉の先は薄暗く・・・岩場が細長く先へと続いて広がっていた。

リナ「トンネル？　地下道かしら？」

慎吾は2人の方を向き、声をかける。

慎吾「この先・・・　埋蔵金があるはずです！」

リナ「マ・・・　マジっ・・・？」

にわかに信じがたい表情を浮かべるリナを背に、慎吾は先陣を切って扉をくぐった。そして迷わず奥へと歩いて行く。

あんず「私達も行きましょう」

リナに声をかけたあんずが続いた。

リナ「はいはい。彼を信じろってんでしょう？」

あんず「えぇ」

笑顔で応えるあんずを見て、リナは扉をくぐった。

リナ「暗（くら）・・・」

3人は、薄暗い地下道の奥へと進んで行く・・・

・・・　・・・・。

扉をくぐってしばらく・・・入り口である鳥居の扉は自然と閉まっていた。

リナ「地下道って言うか、洞窟ね・・・
　周り岩場だし、転んだからヤバいわね」

どこからか漏れている光のおかげで、薄暗いではあるがごつごつした岩場が見える。

しばらく進むと、上が大きく開け始めた。見上げると岩場のすきまから太陽の光がいくらか差し込んでいる。

リナ「・・・　・・・」

その太陽光は、周辺の岩達を妖しく照らしていた。

慎吾「ひ、光苔（ひかりごけ）だ・・・」

リナ「何、それ？」

慎吾「ほら、岩の表面についた苔（こけ）が緑色に光ってるの・・・
　わかります？」

リナとあんずは、岩々をよく見てみる。すると確かに緑色に光る苔が確認出来た。

あんず「確かに・・・　発光してますね」

慎吾「天然記念物にも指定されている、希少な苔ですよ。
群馬県では、浅間山近くに生息してるのですが・・・
赤城山周辺にも生息してるとは」

リナ「へ～、初めて見た。ホタルみたいな感じかしら?」

慎吾「いえ。ホタルは自発光ですが・・・
光苔はわずかな光を吸収して、細胞に反射してるんです。
葉緑体のせいで、緑色に発光しているように見えるんですよ」

リナは頭をかきながら慎吾に声をかける。

リナ「あんた、時々変な事くわしいわよね・・・」

慎吾「こういう神秘的な植物とか、生物・・・大好きなんです!」

笑って答える慎吾。

あんず「でもホント・・・　ステキなエメラルドグリーンの光ですわ」

あんずは光苔の美しい発光を見つめながら歩いていった。

・・・　・・・・。

足下に注意しながら歩く3人は、しばらくして高さが５m程のドーム状の岩の広場へと出た。

リナ「つ・・・つらら!?」

天井を見上げたリナが真っ先に声をあげる。そこには無数のつららのようなものが下へと向かって伸びていた。

慎吾「・・・　・・・・」

続いて慎吾が天井に目線をやる。

慎吾「あれは・・・　鍾乳石(しょうにゅうせき)です・・・　」

あんず「じゃぁ、ここは鍾乳洞(しょうにゅうどう)って事ですね」

リナ「な、何よ?　鍾乳石って!?　鍾乳洞って!?」

慎吾「つらら石とも呼ばれます。
　炭酸カルシウムを含んだ地下水が天井を伝って・・・
　落下していく時、長い年月をかけてつららのように結晶化するんです」

リナ「あんた・・・　鍾乳なんたらもくわしいの？」

慎吾「いえ。沖縄にも有名な鍾乳洞があって・・・・
　小学生にとって、定番の遠足地なんです。
　鍾乳洞を調べる事も、学校教育の一環でやらされるんです」

リナ「ふ～ん・・・・　あれ？」

歩きながらリナの視線は、また異物をとらえた。

リナ「地面から、つららのようなものが・・・生えてる？」

リナの視線の先、ドーム状の広場の奥には・・・太めのつららを立てたような、棒状の石が無数に見える。

慎吾「あれは・・・　鍾乳石からしたって落ちた炭酸カルシウムの水滴が・・・
　地面に落ちた後、結晶化したものです。
　石の筍（たけのこ）と書いて、石筍（せきじゅん）って言うものです」

リナ「へー・・まさか、民家が散在してたトコから・・・
　こんな不思議なトコへたどり着くなんて。
　埋蔵金に近づいているって感じがするわね！」

慎吾「とりあえず、移動できるトコまで行ってみましょう。
　周りに何かないか、気を配りながら」

リナ「もちろん！」

あんず「はい・・・」

元気よく声をかけるリナに対し、静かに頷くあんず。３人は埋蔵金、もしくはそれにつながるものがないか目配せをしながら歩を進めていった。

・・・　・・・。

ゴツゴツした岩場に気をつけながら歩く３人は、少しずつ体力を奪われていく。

リナ「もう１時間歩いてるわよ・・・　何も出ないわね。
　ホントにここら辺にあんの？　埋蔵金？」

特に変化のない景色が続く場所を歩いて疲れたリナは、埋蔵金があるのか半信半疑になってきていた。

慎吾「鳥居をくぐって・・・だいたい２ｋｍぐらいは歩いたかな・・・？」

あんず「方向からすると・・・赤城山の近くですね」

少々疲れが出始めたが・・・３人はさらに奥へと進んでいく。

・・・　・・・。

鳥居をくぐって９０分程が経過した。たくさんの鍾乳石や石筍を避けつつ歩いて行くと、横幅が１０m程のトンネル状の道となっている。

さらに歩くと・・・　広間のような場所に出た。その先に道は見えないが・・・ちょうど１０個のアーチ型の穴があった。人一人は余裕で通れるほどの大きさだ。

その１つに慎吾は歩み寄る。

慎吾「わ！　これ以上は先に行けないですね・・・」

アーチの前で立ち止まった慎吾の先には・・・ダストシュートの出口のように前は開けているものの、足場がない。

リナ「こ、ここは・・・・？」

あんず「山の内部・・・火口・・・ですね？」

３人は足下に気をつけながら、アーチの先を見る。

慎吾「下は・・・３０mぐらいあるでしょうか？」

あんず「それぐらいありそうですね・・・
　　１０階建てのビルぐらい・・・」

おそるおそる途切れた道の先を見ると、３０m下に岩場が見えた。何かを伝って降りていけるような場所ではないし、足を滑らせたら岩に直撃して即死であろう。

高い所が苦手なリナは、怖々と覗いている。

リナ「わ・・・　あの石筍ってヤツがいくつかあるわね。
　　何か今まで見た石筍より、かなり細いけど・・・」

リナは近くに落ちてた石ころを拾って投げ入れた。重力に従って落ちていく石ころは

カラーンコローン

洞窟内に小さな音を響かせ、細い石筍の間へと転がり落ちていく。

リナ「うん・・・人が落ちたら串刺しにされるわ・・・」

横にいたあんず。

あんず「ひょっとしてここは・・・
　　埋蔵金を隠すためのトラップのような場所でしょうか？
　　トレジャーハンターを追い詰める・・・」

慎吾はすぐに否定する。

慎吾「いや・・・　単に自然で出来た地形だと思います。
　　石筍は何１００年もかけて作られるものだし、人為的には出来ません。
　　でも、こんな所に埋蔵金を隠した・・・？」

３０ｍ先の下の空間は約５０ｍ四方。いたる所に視線を突き刺すが広い岩場の空間と、一部石筍の群が見えるだけで、埋蔵金のようなものは見あたらない。

慎吾「・・・　・・・」

上の方へ視線を移すと、その天井は高い高い位置にあった。天井の岩の隙間からは、青い空が見える。

慎吾「間違いなく・・・　ここは赤城山の火口ですね。
下は３０ｍ、上は５０ｍ以上ありそうだ・・・
これ以上、先には進めない・・・」

リナは別のアーチ型の穴を見ていた。

リナ「どうやら、どの穴も・・・先に進めば、落ちて死ぬだけのようね」

慎吾「・・・　・・・」

悩む慎吾。

（慎吾「間違いなく・・・　近くに埋蔵金がありそうなんだけど・・・」）

しかし、視界にそれは確認出来ない。

慎吾「何か・・・　何かあるはずなんですが・・・」

リナ「お得意の霊感ってヤツ？」

慎吾は無言で頭をフル回転させる。

慎吾「何かを見落としている・・・」

ふと、あんずが声をかけた。

あんず「あの・・・このお地蔵様みたいな岩に・・・
　　意味はあるのでしょうか？」

あんずは２つのアーチ型の穴の間にある、高さ５０ｃｍほどの岩をなでている。

慎吾「・・・　・・・」

リナ「・・・　・・・」

よく見ると・・・全てのアーチ型の穴と穴との間に、それらの岩はあった。

リナ「何かそれ、犬みたいな形の岩ね」

犬と言われればそうも見えなくないが、はっきりとしない形である。

慎吾は近寄って、その岩をじっくり見る。

慎吾「・・・　削られた跡が、ある・・・」

あんず「人が手を加えた・・・って事ですね」

リナ「じゃ、じゃぁ誰かがここに来たって事でしょ！
　　埋蔵金隠したヤツが、何か目印残したとか！？」

慎吾「その可能性は十分あると思います・・・」

リナ「って事は・・・　埋蔵金が近くに？」

慎吾「・・・　・・・」

じっと削られた岩を見る慎吾。

慎吾「う～ん・・・。何だろう？　どうして岩に手を加えたんだろう？」

携帯を取り出したリナは、何かの役に立てばと岩の写真を撮り始めた。

リナ「あら・・・？」

リナの言葉に慎吾が即座に反応する。

慎吾「な、何かわかりました？」

リナ「あ、いや・・・　携帯に電波たってるから、驚いただけ。
　　まぁ、近くに送電線もあったし・・・」

アーチの先から、恐る恐る天井を見上げるリナ。

リナ「あの隙間から・・・電波が通ってるみたいね」

慎吾「電波が・・・？」

穴と穴の間にある５０ｃｍ程度の岩は、全て人の手が加えられた痕跡がある。こんな場所に人が来るだけでもおかしいことなのに、全ての岩には何かしらの細工が施されているようだ・・・。

アーチ型の穴の先・・・火口へ行く事は出来ない。穴を通れば、ただ落ちるだけ。３０ｍ下の岩場に直撃するか、一部生えている石筍に串刺しにされるか・・・いずれにせよ「即死」の選択肢しかないように思える。

火口を見ていた慎吾は、ふと眉をひそめた。

慎吾「あれ・・・？　何か・・・　おかしいぞ・・・？」

・・・　・・・。

数時間後。

その男の携帯電話が、非通知表示で着信音を鳴り響かせた。

鳳（おおとり）「私だが？」

電話の向こう側から慎吾の声が聞こえる。

慎吾「江浜さんと、埋蔵金・・・　交換です」

（第３４話へ続く）

第３３話　鍾乳洞（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

鳳に拉致された江浜は、鳳の真の目的を知ることになる。

徳川埋蔵金とひき替えに、江浜の身柄をひきとる約束を迫る慎吾だが・・・

慎吾達は、ギリギリの事態に追い込まれていた。

次回　「第３４話　真の目的　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３４話　真の目的（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

慎吾のスピリチュアル事件簿　Ｆｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ

「徳川埋蔵金の謎」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

２０１２年４月。大学生となった慎吾は、大学の講義で１つ上の先輩リナと出会う。課題のため、ＴＶＳへ訪れた２人は【徳川埋蔵金の謎を追え！】の観客として番組収録に参加した。

収録後、慎吾は黒ずくめの男等に誘拐される。誘拐を指示したのは、番組プロデューサーの糸見。さらに娘を人質に取られた霊能力者・江浜も糸見側につき、慎吾の前に現れた。

リナはＴＶ局に侵入し、慎吾を救出。さらにリナが中心になり、誘拐された江浜の娘・あんずも救出する。江浜はリナ達を逃がすため、身代わりに捕まってしまう。

敵とコンタクトをとった慎吾は、江浜とひき替えに徳川埋蔵金を差し出すと交渉。リナは埋蔵金のありかを示した銅板の謎を解き明かし、３人は銅板の示す場所へ向かった。

慎吾達は赤城山近くの洞窟で・・・？

第３４話　真の目的

第３４話　真の目的

５月８日、火曜日。午前零時過ぎ。

都内某所・・・某事務所。

江浜「・・・　ケホッ」

江浜は両手に手錠をかけられ、部屋の一室で監禁されていた。銃を持った男が２人、見張り役としてついている。

大男と一戦交えた際、背中におった傷。

（江浜「致命傷ではない・・・」）

ひどく痛むものの、意識ははっきりしている。ただ１つ、娘・あんずの身が心配だ。

（江浜「あんずさえ無事ならば・・・」）

ふと部屋に入ってくる男がいた。

男は江浜の前に椅子を置き、ゆっくりと腰掛け・・・江浜に声をかけた。

男「あれだけの傷をおって・・・　意識があるとはな。
　日本一の霊能力者も、伊達ではないって事か」

目の前の男に視線を合わせる江浜。あの大男だ。

江浜「私を・・・殺しに来たのか？　鳳巧（おおとりたくみ）。
　　いや・・・」

江浜の目の前にいる男は、糸見を裏で操っている鳳巧という男であり・・・

江浜「時任（ときとう）マリオ・・・」

そして糸見の息子である時任マリオだった。

時任「ふ。貴様の命などいつでも殺（と）れる。
　それに貴様を徳川埋蔵金と交換してくれる・・・

　酔狂なヤツがいてな」

江浜「・・・」

慎吾達が自分を助けようとしている・・・江浜はそれを不安に感じていた。

（江浜「ヘタに動けば・・・　ヤツは容赦しないだろう・・・。
　迷わず私を殺しに来たのだから・・・」）

時任「さて・・・　本当に彼らは・・・
　埋蔵金を見つけてくれるのだろうか・・・？

　長年誰も発見できなかった物だ。

まぁ、貴様の命は・・・彼らにかかってるってわけだ」

江浜「お前の父は・・　鳳という男の指示を受けている。
だがその正体が・・・
息子とは知らない・・・ようだな・・・」

時任「当然さ。父は埋蔵金を探すための道具に過ぎない。
ＴＶ関係者は・・・
大きなコネとして堂々と発掘出来るしな」

江浜「よく今日まで、騙せたものだ・・・」

時任「ふ・・・。どんな事をしても埋蔵金を探すのが・・・
我が使命でな」

江浜「埋蔵金を見つけてどうする？
まさかそれで・・・名を上げようというわけではあるまい」

時任は江浜を睨み付ける。

時任「俺を見ろ！！」

突如重低音の低い大声が鳴り響いた。

時任「貴様には・・・私が見えるんだろう？
時任マリオという肉体ではなく、霊魂である私の姿が！！」

江浜「・・・　・・・・」

江浜には見えていた。時任マリオの背後に憑いている霊の姿・・・２ｍはゆうに越える体つきの大男。白装束で身を固め、鋭い眼光を放っている。

時任「私の真の正体が・・・　わかるんだろ？」

江浜「・・・　・・・・」

無言で男の目を見ている江浜。

時任「私は・・・埋蔵金をどうすると思う？」

江浜「・・・・・・」

時任「察しはつくだろう？　あぁ、徳川の埋蔵金は全て・・・誰にも見つからぬ海の底へ沈めてやるさ。

未来永劫、誰の目にも触れぬ所へな・・・」

江浜には時任の背後にいる霊が見えるだけでなく、その正体も知っていた。

（江浜「一族の・・・　恨みつらみか・・・」）

今回の一連の事件の本当の黒幕。糸見を影で操り・・・慎吾やあんず、そして今は江浜を拉致し、命すら奪いかねない男・・・

真の黒幕の正体を見ながら江浜は口を開く。

江浜「この１０数年・・・　そのためだけに？」

時任はニヤリと笑った。

時任「もちろんそれだけじゃない。わかるだろう？
　埋蔵金の後は・・・

　慎吾という男を殺す。それもまた我が使命・・・」

江浜「・・・　・・・」

時任「徳川に関わる者は・・・皆殺しさ。ふふふ」

腰にさしていた日本刀をスラリと抜く。

江浜「・・・　・・・」

江浜に傷を負わせた、あの刀だ。

時任「村正（むらまさ）という名前を？」

江浜「・・・　・・・」

しばらくその怪しい刀を見つめた後、口を開く。

江浜「あぁ。妖刀（ようとう）村正・・・　私の祖先も・・・
　そいつを相手にした事がある・・・」

時任「ふ・・・　それはそれは・・・。

徳川家康の祖父・清康（きよやす）はこの刀で殺された。

家康の父・広忠（ひろただ）もこの刀で暗殺された。

それだけではない、村正は多くの徳川家の命を奪ってきた」

江浜「・・・　・・・・」

時任「家康は家臣に村正を使うことを禁じた。

どれほど恐れていた事か・・・

徳川家にとって、村正は呪われし刀。

それゆえ、妖刀として歴史にその名が出てくるってわけさ」

ザシュッ！

時任は日本刀の先を江浜の顔面に向けた。

時任「この刀で、ヤツを斬る」

江浜の頬を冷や汗がつたう。

時任「もう一度味わってみるか？　村正を・・・？」

江浜「・・・　・・・・」

時任「もっとも次は・・・　死、あるのみだがな・・・」

ふと時任の携帯電話が鳴った。

時任「・・・　・・・・」

ポケットから携帯を取りだし、着信を確認する。

（時任「非通知・・・・」）

その着信を見て時任は笑った。

時任「ふふ。噂をすれば、何とやらだな・・・」

ボタンを押し、携帯を耳にあてる。

時任「私だが？」

電話の向こう側から慎吾の声が聞こえる。

慎吾「江浜さんと、埋蔵金・・・　交換です」

時任は薄ら笑いを浮かべた。

時任「よかろう・・・埋蔵金はどこかな？」

慎吾「その前に、江浜さんの声を聞かせてください！」

時任は目の前の江浜に携帯を向け、アゴで合図をする。

江浜「慎吾君か・・・？」

慎吾「江浜さん！　無事ですか！？」

電話を通し、慎吾は1日半ぶりに江浜の声を聞き取った。

江浜「あぁ・・・娘は？」

慎吾「元気です。今そばにいます」

江浜「私の事はいいから・・・君たちは逃げるんだ！！」

時任は携帯電話をピクリとも動さない。

慎吾「いえ。みんなで・・・それぞれのうちへ戻りましょう。
　　埋蔵金と引き替えに・・・」

時任はニヤリと笑って江浜に声をかける。

時任「泣けるねぇ・・・戦国時代なら見捨てたろうに・・・」

そう言うと時任は携帯を自分の耳に戻した。

時任「で？　どこへ行けば埋蔵金にありつけるのかね？」

慎吾「・・・。　わかりました。説明します・・・」

慎吾はリナが発見した魔方陣の説明を始める。

江浜「・・・　・・・」

目の前の男をじっと見つめるだけの江浜。

慎吾「だから・・・正方形の頂点・・・一番下の右から2番目。

ここに埋蔵金があるんです」

時任「なるほどな・・・　よくわかったよ。
そして今、君たちはその場所にいるわけだな？」

慎吾「・・・・・・・　はい」

時任「では、埋蔵金を見つけたのだな？」

慎吾「・・・・・・・・　えぇ」

時任「よし！　交渉成立だ！　今からそちらに向かおう」

慎吾「え！？　今からですか！？」

時任「なんだ・・・都合悪い事でも？」

慎吾「い、いえ・・・　今はもう午前1時。電車もないし・・・」

時任「心配無用。赤城山ならよく知っている。
車で向かえば、2時間もあれば着くさ」

慎吾「わかりました・・・　必ず・・・
江浜さんも連れてきてください・・・」

時任「いいだろう。では、2時間後に」

直後、電話を切った。そして目の前の江浜を睨み、小さく笑う。

時任「さて・・・　旅に出ようか」

そういうと時任は右手を差しだし、気合いのようなものを注入する。

時任「・・・　・・・」

そして江浜の顔面を力いっぱい殴った。

江浜「ぐふっ！！」

脳しんとうを起こした江浜は気を失う。

時任「死出の旅にな・・・」

・・・　・・・。

リナ「どうだった？」

慎吾「2時間後に・・・ここに到着するそうです」

慎吾はリナに携帯電話を返した。

あんず「え！？　夜が明けてからじゃないんですか？
今から・・・こちらに来るんですか？」

3人はあの建物の前にいた。2人の武士の霊が守っている、あの建物の前に。

送電線が通っており、携帯はもちろんリナのパソコンも使える状態だった。

リナ「2時間後!?　ちょっと待ってよ・・・
　たった2時間で・・・　どうすんのよ!?」

慎吾「あの場面では・・・　あぁ言うしかなかったです・・・
　その・・・江浜さんも、危険な状況だったし・・・」

あんず「・・・」

しばらく3人に沈黙の時が流れる。

慎吾「何とか・・・　するしかないですね」

慎吾が重い口を開いた。

リナ「そりゃそうよ!　だって・・・

　埋蔵金なんて、なかったんだから!!」

（第35話へ続く）

第３４話　真の目的（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

鳳＝時任が江浜を連れて赤城山に来る。
しかし、慎吾らは交渉の要となる埋蔵金を見つける事は出来なかった。

慎吾はパワーストーンの使い方をあんずに指導してもらい、リナは今までの事件の情報を整理する。
リナは情報を整理しているうちに複数の人間が同一人物だという事に気づいた。
そして過去のニュースから、慎吾はとうとう黒幕に憑いている霊を突き止める。

そして事態は悪い方向へと進んで・・・

次回　「　第３５話　　５人の同一人物　　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5975x/

徳川埋蔵金の謎

2011年11月22日04時03分発行